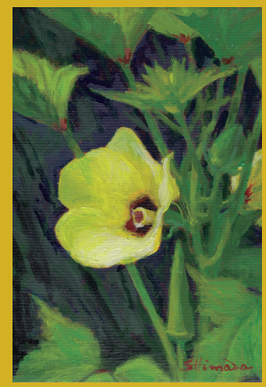


冬雷 二〇二三 作品年鑑・合同歌集

冬雷 二〇二三

作品年鑑・合同歌集

冬雷短歌会



冬雷二〇二三　作品年鑑・合同歌集

目次

冬雷二〇二三　作品年鑑・合同歌集

■年間全作品合同歌集

青木　初子……8
赤羽　佳年……12
赤間　洋子……17
天野　克彦……22
有泉　泰子……27
飯嶋　久子……31
飯塚　澄子……36
伊澤　直子……41
石渡　静夫……45
糸賀　浩子……50
稲津　孝子……55
稲田　正康……59
乾　義江……64
井上　菅子……68
井上　鈴子……73
井上　槇子……77
岩渕　綾子……81
植松千恵子……85
卯嶋　貴子……89
江波戸愛子……93
樗木　紀子……98
大塚　照美……102
大塚　亮子……107
大野　茜……111
大山　敏夫……115
奥山　清子……120
小嶋　知葉……124
小田原禮子……129
笠岡　文子……133
梶尾　栄子……137
片桐美穂子……142
加藤　富子……146
川上美智子……150
川俣美治子……154
倉浪　ゆみ……158
黒田江美子……162
兼目　久……167
児玉　孝子……172
小林　貞子……176
小林　芳枝……181
後藤　恭介……186
齊鹿ミヤコ……190
斉藤トミ子……195
早乙女イチ……200
櫻井　一江……204
桜井美保子……209
酒向　陸江……214
佐々木政子……218
佐藤　靖子……222
佐藤　幸子……227
嶋田　正之……232
正田フミヱ……237
鈴木　計子……242
鈴木やよい……247
須藤　紀子……271
髙橋　説子……275
高橋　燿子……280

髙藤朱美……285
高松美智子……289
橘　美千代……294
立石　節子……299
田中　祐子……303
谷田　律子……307
田端五百子……311
塚本　節子……316
津田美知子……320
戸部田とくえ……324
豊田　伸一……328
永井　享子……332
長尾　弘子……335
中島千加子……339
永野　雅子……343
永光　徳子……347
中村　哲也……351
中村　晴美……356
西村　邦子……360
野村　灑子……364
橋本　文子……368
羽田　孝輝……372
浜田はるみ……377
林　美智子……381
藤田　英輔……385
藤田　夏見……389
ブレイクあずさ……394
本郷　歌子……398
本間志津子……403
益坂　順子……408

松居　光子……413
松﨑みき子……417
松中　賀代……421
松本　英夫……426
町田　勝男……431
三村　幸男……436
三好　規子……438
村上　美江……443
森藤　ふみ……448
安川　敏子……453
山口　嵩……457
山崎　猛……461
山﨑　英子……465
山本　述子……470
吉田　綾子……474
吉村　昌子……478
■特別作品・今月の30首他……483
■作品展望1　桜井美保子……252
■作品展望2　大山敏夫……257
■作品展望3　小林芳枝……262
■作品展望・今月の30首・
スマホの写真一葉・短歌二首
橘　美千代……267
あとがき……大山敏夫
〈表紙絵／オクラの花・嶋田正之〉

冬雷 2023　年間全作品合同歌集

青木初子（あおきはつこ）　（神奈川県）

庭のつれづれ

花の季の長雨高温常ならず千両に今年赤実のあらず
ご近所の千両にも赤黄の実なし三十余年住みて初めて
発芽より葉を喰はれざる菠薐草育ちの早し他を寄せ付けず
プランターに葉の数を増す菠薐草ひと株に足る饂飩の色どり
育ちたるひと株抜けば両隣の菠薐草は日日に勢ふ
夏の間に自由に伸びたる葉を結はくクジャクサボテン冬の姿に
春までを部屋内に置くクジャクサボテン棘の硬きは隅に置きたり
葉の若きブロッコリーと菠薐草鴨の目の向く先ざきに
金柑のまだ緑なる実の数の日にち減れどネットは掛けず
金柑の熟れるまで枝に有るや無しや食べ時確かな鳥には負ける
発表の感染者数日び減れど夫と面会自由にあらず
三月に四月五月の気温と云ふ芍薬牡丹花の芽育つ
育て来て幾年なるかカナダゲシ八重の白花一つひらきぬ
大輪の白花咲かす牡丹に茎二本出で蕾は一つ
牡丹の二十五センチ越す花を支へて掲ぐ茎撓めつつ

強き風に去年は折れたる牡丹に蕾の育ち支柱を立てぬ
職員の許可をもらひてアイスクリーム介護施設の夫の口に
唇の力の弱くスプーンのアイスクリーム零す夫は
両隣に貰ひし「貝母」と「二人静」逸早く庭に春を知らせる
解熱剤飲み込む力あらずして座薬を使ふと知らせのありぬ
飲み込みの力弱まり朝昼夜高カロリー剤に体力保つと
延命の措置はせざると決めをれど印押すこと重き選択
数年前植ゑたる苗に一度のみ花を見たりき鯛釣り草の
何処より運ばれ来たるか石と石の間に咲きをり鯛釣り草は
気難しく育つ処を選ぶといふ鯛釣り草のわが庭に増ゆ
数年をミニトマトしか植ゑざるに零れ種の苗に大き実育つ
四十分手をさすれども問ひかけに反応あらず寝息の聞こゆ
体調の今日は悪しきか面会の四十分の間瞼を開けず
アガバンサスの花毬に残る花いくつ黒揚羽蝶は長く留まる
暑き日に勢ひを増す庭の草を見ぬふり出来ず今朝早く抜く

幹太き黄楊木斛はこの庭に五十年余根の張り強し
土止めの大きな石の間より黄楊の根出でてひこばえ育つ
黄楊の根より水道管を守るため太くなりたる木を剪ると決む
金柑の枝白くして二回目の花ひらきたり水やり励む
この年の暑さに金柑白き花咲かせ青き実ぽつぽつ結ぶ
向ひ家の石垣の下の側溝に伸びたる草の根深くしぶとし
草ぬきて二、三日はや側溝に芽の見ゆわれの腕の痛むに
黄楊の木の根際に剪りて残りゐる株に密なる年輪くつきり
黄楊切りて明るくなりたる空間に輝き増せり根方の千両
花の後すぐ刈り込めど新しく芽の吹くはやしツツジの緑

術後五年目を迎え体調に良し悪しありますが、少しずつ体力がついて来ているのを実感しています。介護施設で世話になっている夫の面会も二週間に一度ですが、今のところ安定している様子が見てとれるので、私も落ちついて生活ができています。歌の提出が暮らしの中のアクセントになり、日々があっという間に過ぎていますが充実しています。例会にも出席致したいと思いつつ、施設より呼び出しがあるかもと思うと不安になり、なかなか遠出の決心がつきません。近ごろマンネリ化した歌を何とかしたいと思いつつ現実は？

ダブルスの四人揃はず練習の中止なる午後締め鯖造る
水温く解けるの早し鯖下ろす多めの塩を傍に置きつつ
三枚に下ろしたる鯖の解け始むまづ身の薄き尾の近くより
抱つこされつつ幼の見るはカンガルー親はスマホの画面操作す
留守宅の庭のたわわなミニトマト赤き実すべて朝見られず
食べ頃を知りゐる鴉は日毎来て隣の庭の柿の実減らす
辛きことばかりにあらず金木犀の花は二度咲く秋まで暑し
軽便な刃物磨ぎ器は役立たぬ太枝剪りし剪定鋏に
二ヶ月に一度は来るとふ出張研ぎ屋車に積みあり研磨の機械
柄の重き剪定鋏二本積む自転車を曳く生協横まで
捨てるには惜しき二本の剪定鋏出張研ぎ屋の人柄に任す
次に出さむ切れ味悪き鋏鎌研ぎ値確かむ一覧表に
歳晩に剪定したる見通し良き枝えだ突く四十雀らは
作風の我とは違ふ短歌届き鑑賞すれど返事は書かず
短歌の中の熟語の注釈添へあれど深き思ひの伝はり難し
深夜便の川柳寝床に聴かむとしラジオをつけれど直ぐに寝てをり
鳴つてゐるラジオの音に目を覚ます深夜便の川柳今夜は聴けず
育たざる蕾の先を喰はれたる白木蓮の歪にひらく
バドミントンの友訪ね来て「老けたね」と十数年振り吾病む知らず
そこそこの近さに住めど十数年顔見ぬ友に「生きてゐたのね」
この家の電気工事を気前よく請け負ひ呉れし友も若かり
体力のまだ大丈夫吾の寝間の畳表の交換頼む
埃積む筆筒の上の衣装箱に覚えのあらぬ服の数かず
カナダゲシと記しある札挿す鉢の雑多の草のなかに花もつ
貰ひたる苗に漸く花ひらく十数年を水やり欠かさず
実生苗花水木かもと呉れし人覚えてゐるか花咲くこの木
何処にでも芽を出し増える「二人静」友の庭にはなぜか育たず
現金をＡＴＭに下ろししかと郵貯を名乗る男より電話
我の持つカードの偽造疑ひしと電話長引かせ不安を煽る
使ひしこと思ひ当たらず警察に行くと言へども相手は退かず
詐欺電話掛かりてくれば危険ぞと玄関ドアのチェーン忘るなと
抗体の出来の悪しきかワクチンを打ちたる腕に痛みあるのみ
ワクチンの種類に係りあらずなり六回打ちて寝込む事なし
撒かぬのに芽を出すトマトの実を見むと五本を選び鉢に移しぬ
体内より抗癌剤の消ゆるらし右手の爪の先厚くなる
巣立ちして間なしかちさき四十雀震へる足に瓦を掴む
四十雀屋根の瓦をおぼつかぬ足に掴みてなかなか飛べず
ギラギラと朝早くより暑くなりトマトの花に寄る虫少なし
黄の花の次つぎ咲けどトマトの実なかなか実らず気温の高し
年一度庭師に剪定したる庭四十年経て近ごろ負となる
土の色赤くなりたる真中にさらに際立つ木斛の切り株
この夏の暑さに負けず枝伸ばすツツジに花の芽数多を期待す
庭隔て顔知らざりしベランダに蒲団干しゐる白き手動く
生活のリズムの違ひに十二軒の班なれど顔合はすことなし

赤羽佳年（あかばねよしとし）　（東京都）

四季其其

降りそそぐ秋の日差しは二の腕にやさしくなりて夕暮れんとす
来し方を思ひ起こせば身の熱くなることばかり恥のことごと
令和四年の年暮れむとし身に残す糖の値が数値に残る
老年の気分味はふ余裕などなく日日おくる通院の道
冬の風つづく日和の夕つときあからさまなり鉄塔の根が
雨のつゆカヘデの枯枝にひかりをりこの寒空に飛べる鳥あり
ゆふぐるる空を群れ飛ぶ黒き鳥寒のカラスは二声三声
春を待つ木々は枝に葉に力ため漲る様に身を広げをり
足弱くなりたる日日に買物の人の歩みに遅れつつゆく
アマリリス二鉢培ひ幾年か咲かせる前の置き肥を二つ
放埒に枝を伸ばしゐし楓は剪定されて細枝のびのび
わが坐る椅子より見えて楽します四季の楓の様子さまざま
うぐひすのこゑは籠らずきはやかに朝のガラスに響かせてゐる
時来れば写真でもよし壁に掛く百合の樹の花春は黄の色
新聞受けに新聞入るる音のしてのち駆けのぼる足音響く

連翹の開花に春を実感すガラス戸の前の目隠しの垣
スーパーの前の広場に引き入れて馬車を曳かせる仔馬穏やか
暖房の音が途絶えて暫くの間があり冷気が首筋にくる
うたた寝を覚まして電話のベルが鳴り耳に当つれば墓地を勧める
全きに小枝落とされ並び立つ街路の公孫樹に五月雨降る
孫持たぬ八十二歳はリモコンを手繰り寄すのに孫の手遣ふ
背掻きてくるる孫なく竹製の孫の手は艶もちわが手に馴染む
老人の証のカード常に持ち移動手段にバスを利用す
梅雨のあひうぐひすの声頻りなる薄日の下に竿竹屋ゆく
ベランダに射せる日差しの強くして何時ともなしに梅雨あけてゐる
梅雨明けて久久照りに開くる窓音轟かせてジェット機のゆく
雨降りて夏をうるほふ森の木木朝は鳥寄せ賑やかにあり
おとろふる体いたはり生きてゐる今日いちじつの暑さ乗り切る
梅雨明けの雷響かせて夜の雨音立てて降り寝端起さる
この暑さ乗り切る先になにあらむマイナス思考に出口は見えず

働けぬ老い受け入れてしばしばも金に拘り電気を消しぬ
己が身を持ち上げるにさへ負担にて朝の目覚めもおだやかならず
足腰の弱りを嘆きいちにちの労苦を思ひ寝床に伸ばす
酒飲まぬ夜も今あり哀れあはれ食事終ればすることもなし
住人も古り老いぬれば踊りの輪広がりゆかぬ団地盆踊り
眠り足らぬ朝の目覚めのわが前の楓のみどり色濃くなりぬ
楓の徒長枝揺れず夏の朝熱暑はじまる気配を見せて
真昼間の風の絶えたる一時に間があり日照りの雨が打ちくる
朝昼晩いつも見てゐる楓の木変化少なし夏のこの時期
藤の花あはむらさきに垂りつつ夕ぐるる砂場の棚に細き雨

十月二十九日は誕生日八十二歳の朝のみそ汁
納豆と水雲扱き交ぜ流し食ふ朝の習ひは何時からならむ
台風の前触れの風湿りもち朝の空気は肘にまつはる
日の暮れて楓の朱がなほあかし外灯の灯にゆらぎてゐたり
秋風は網戸をぬけてわれにくる日の暮れたれば二の腕さむし
八十ふたつ越えて特別の感慨はなし十月尽の夕暮れむとす
ひさびさに街に向ひて佇めりひとりにあればこころは侘し
日の暮れて楓のもみぢの明るみが部屋までとどき朱がきはまる
野の花を鉢植ゑにしてベランダに置きて屡サンダルを履く
冬の蚊が部屋を飛ぶ音煩くて灯り点せば遠のきにけり
この年もをはらむとしてコロナ禍もすでに三年を過ぎんとしつつ
歳末の商店街は電飾の装ひも無く早早暮るる
西風にいたぶられつつ徐に赤らめる葉をもみぢと言へる
ひと本のカヘデのこずゑは裸にて徒長枝数本風に揺れゐつ
木枯しの一吹きの夜の明けの朝カヘデの空は開けてゐたり
夜更けて飛べる蚊のあり耳元を行き来してをり眠り来らず
自が部屋を出で来て食卓にむかひ来る車椅子の子の力入れるこゑ
難病に苦しむ娘になにもなさむ我がなきのちも生きねばならず
つぎつぎに丸き子株を噴き出せるサボテンは冬の日に身を晒しゐる
冬が来た寒い寒いと言ひけるに腕まくりする春がはや来る
手帳には通院日ばかりが記されて味気なき日が送られてゐる

立春の庭にははとり鬼打ちの豆拾ひゐし祖父均す庭
人逝きてひと日寂しむ夕ぐれに日は沈みゆく悲しみ連れて
剪定をされたる楓寒の風先枝細枝に受けつつ揺るる
ウグヒスのこゑ聴きながら三月の朝の飯摂る贅りと思ひ
バス待ちの人は手を擦り肩窄む彼岸数日の寒の戻りに
諏訪に呼ぶクヮリンは袋を掛けられて見えねど湖畔に育まれゐき
マルメロとクヮリンが一(いっ)と知らざりき文明短歌に見いで愉しき
うつぶせに腰を揉まれてゐる姿勢リズミカルなるマッサージ受く
リハビリの二単位の四十分横たはり眠りが来たる今の姿か
汚れたる手を洗はんと昼過ぎてベランダより立つ昼飯が待つ
雨戸無き部屋に長住み繰るなどの言葉使はず半世紀過ぐ
土の道踏まなくなりて幾年かあの感触をひそかに恋す
嘗て子が学び遊びし小学校毀される様バスに見て過ぐ
風に散る桜の花びら追ひかける幼き者の動きを追ひぬ
夢のなかに右に左に傾ける己が歩みは見たくはあらず
孫の手は我が椅子の背に下げられて日に幾たびも働かさるる
背の痒きところどこでもタッチして鎮めてくるる孫の手といふもの
歯の疼き夜半に覚めてどれほどか気づかぬままに眠りに戻る
隣る人の扇子の風を頬に受けバスに運ばる梅雨の最中を
かへるでの嫩葉ゆらして降れる雨細細として夕までつづく
雨の露溜めて枝垂るるあぢさゐの丸花いくつ今朝の門口

黴止めを噴霧し臭き風呂場にてシャワーを浴びる昼の日中を
久しぶりに大円の月あふぎみて散歩に出づる夜風涼しく
色彩語利休鼠は言ひ得てる霧雨の雨そぼそぼと降る
朝朝に楓の嫩葉に吹く風のやはらかくしてわがまへ過る
花の苗やはらかくして雨の粒葉先にためて震へてゐたり
庭鳥は二三歩あゆみ考へる風にもみえて首を傾げし
わが窓にすがた見せねど老鶯の地鳴きが聞ゆる七月朝明
吐き捨つるスイカの種を拾ひつつわが前をゆく鶏のゐき
眠り足らぬ朝の目覚めのわが前に楓のみどりが光を放つ
初夏の葛の大葉が裏返り白きがゆれて日をはじきをり
昼の雨の上がり日差せば不快指数高まり街は明るきを増す
夜の灯を層に連ぬる団地群久に見つれば点らぬもあり

赤間洋子（あかまようこ）　（東京都）

最後の同期会

脳の老化医師は歳相応と言ふけれど漢字思ひ出せずイライラとする
人名や植物の名がすぐに出ずしばらく経ちてふと思ひ出す
老いに負けじと気負ふつもりはなけれどもウォークの会に参加して歩く
展覧会のチケットなどが貼つてあり五年も経つと分厚き日記帳
書いた時の気持が文字に現れて丁寧な時あり一行の時もある
こんなにも飲む必要があるのかと思ひつつ食後の薬を見つむ
新しき一年も自立生活できるやう昨日四千今日九千歩
月に一度墓参続けて十七年コロナ禍故に行けなくなりぬ
夫逝きて忽ち経たる二十年息子娘と墓参りする
蕎麦好きの夫と行きしを思ひ出し息子の提案神田の藪蕎麦へ
墓参より戻りて立ち寄る藪蕎麦は一時間待ち辛抱強く
三年間転居もありて果たせざる墓参叶ひて心満ち足る
一ヶ月長き会期のグループ展絞り染めの街有松に行く
ギャラリーの入り口に置かれた案内板に我が藍染の写真が貼らる
有松の古き街並み保存され店には絞りの暖簾がゆれる

午後九時過ぎ友の電話の着信音男性の声で母死すと言ふ
二週間前知人の個展見に行きてランチを食べて別れたばかり
焼香の順番が来て式場に入れば遺影は微笑みかける
香に指を触れれば俄にこみあげて零れる涙抑へかねたり
クラクションひとつ鳴らして霊柩車桜吹雪の中を去りゆく
久々にクラス会あり教へ子より米寿を祝ふ花籠を受く
教へ子も疾うに還暦過ぎてをり在校時代の思ひ出語る
七十歳まで働きますと宣言しタイ語の通訳続ける女子をり
クラス会の幹事がLINE立ち上げてたちまち同級生の輪が広がりてゆく
誕生日の当日となれば「おめでとう！」「バースデイケーキの画像」も届く
ご飯少なめと注文の時に言ひ忘れ残してしまつたチャーハンごめん
日曜日ひとり手作りケーキ食ぶくるみの苦味口にひろがる
午前九時の病院の予約に早出して久々に乗る満員電車
車中にてスマホ見る人多き中読書してゐる女性が一人
グループ展と公募展の予定あり久々に藍を建て試し染めする

小さき布を少し絞りて染めてみる元気良き藍の発色は良し
ハート型の顔持つ土偶を藍染で表現せむと心に決める
作品の成否は糸を解くまで判別できず悩ましきもの
絞り縫ひの針すすめつつ推敲す短歌も染めも我の生甲斐
グループ展の次に控へる公募展二日かかりてデザインを決む
単調なる日々の暮らしに展覧会は活力の元刺激にもなる
考へて手先動かす行動が老化防止になるとも思ふ
ネットにて公募展入選を確認し今年の目標ひとつ達成
米寿を祝ふ最後の高校同期会母校に近き錦糸町にて
入学時四百名なるも参加者は男子十五名女子は三名

令和三年十二月に住み馴れた亀戸から国分寺に転居した。酒向陸江さんの紹介で体操クラブに入会し毎週月曜日に通う他は、近くにある武蔵国分寺公園や武蔵国分寺跡を歩く事が多い。そこに行くにはいろいろな道があり、姿見の池を経由することもある。春には鶯の囀りが聞こえたこともあった。帰路はその時の気分で道を変えて戻り、買物をして帰宅する習慣となっている。市内の道路には起伏があり、曲線が多いので知らない道を進んだら元に戻ったことがあった。亀戸も良かったが、国分寺も魅力的な町だ。

転居して早十一ヶ月過ぎたれど段ボールの山の中探し物続く
歩き方の説明は理論的なり一直線上を歩く気持で進む
秋晴れの公園にてするウォーキング若者に混じりてマイペースで行く
句集の主は書道に料理編み物と園芸の趣味もあり文章もうまい
応募して当選したる初めての文楽を見る義妹と共に
演目は本朝廿四孝とて聞き慣れぬ浄瑠璃に合はせ人形動く
初めて聞く浄瑠璃は理解し難くて投影される文字追ひながら見る
浄瑠璃の独特の語り難しく人形の動きに目を奪はれる
いつの間にか人形操る人眼に入らず人形のみが動く気のする
八重垣姫に取り憑く白狐が駆け巡りパッと消え去る緊張の時
日が暮れて帰宅の車中に居る時も蘇り来る舞台の興奮
書きながら去年の欄に目をやれば失敗もあり嬉しきことも
家計簿のメモ欄に書く夕飯の献立これも続けるボケ防止のため
リビングの灯りを消して窓際で新聞を読む我の節電
ベランダに冬の陽が射す部屋に居て雪国の人の難儀を思ふ
墓掃除花と線香墓石屋に頼みてあれば荒れてはをらず
持参したる掃除用具にて墓を清め親子三人で焼香をする
隣接の墓は払はれ新しく小さき墓石二基が立ち居り
蕎麦の次は近江屋のケーキ買ひに寄る店の構へも変はらずにあり
十名の参加者の作品それぞれが個性豊かに会場を占める
会長の作品は赤と黒テクニックは不思議で存在感あり
唯一人若き男性の作品は黒く奇妙な立体が二個
海外の展覧会にて受賞した友の藍染絞りが映える
三月のイベントの一つ雛人形が客を招きて窓から覗く
度々の電話に応答無き故に来てみれば玄関で息絶えてゐたと
告別式は親族のみの少人数友人知人は別室で待つ
世話好きの友はグループの会長で展覧会を盛り上げて来ぬ
マンションの入り口まで花籠持ちてくれ再会を約し帰りゆきたり
集合写真スナップ写真名簿など次々 LINE に送られてくる
来年は参加するとて LINE では語れぬ女子の手紙が届く
重要書類無くさぬやうに仕舞ひたるが場所を忘れて慌ててをりぬ
外食は量が多くて困る時シニアメニューがあればと思ふ
レシピより砂糖減らして焼くケーキ紅玉りんごの甘煮がポイント
姿見の池といふありその辺り歩めば聞ゆ鶯の声
グループ展のテーマは BODY その意味を如何に表現するか悩みぬ
目標が決まれば次は丁寧に図を布に写し絞りゆくのみ
青花ペンの線をなぞりて絞りゆき全て終れば藍液に浸す
麻布を規則正しく折りたたみ縫ひしめて染める独特の技法
連日の猛暑の故に外出は極力減らし制作にあてる
月曜の健康体操休まずに帰ればシャワーで生きかへる心地
一日三食規則正しき生活を守りてをるも老化する脳

我ら皆米寿を迎へることとなり高校の同期会を皆に呼びかく
返信は驚くほどに少なくて病む人がをり死亡もありぬ
恩師への報告のメールすぐに打つ教へ子四名入選せると
入選をグループ LINE にて知らせれば我が教へ子が見に来るといふ
ひとつ終ればまた来年への意欲湧き次のデザイン考へてゐる
デザインの組立かたは無限なり折り紙使ひて脳トレーニング
いろいろの展覧会を見ることは学ぶことコロナ禍故に機会が減りぬ
夏の陽に焼かれた次は叩かれて布団は悲鳴あげてゐるやう
幾たびもメールと ZOOM で打合せ我も四人の幹事のひとり
物価高は当初の予算をオーバーし会場変更已む無く決める
変更の連絡四人で分担し手紙とメール電話でも確認
直前に急遽欠席の知らせありこれも幹事の予期したること
乾杯と物故者に捧ぐ黙祷の後一人三分の近況報告
現職の医師一人居て驚きぬ余暇にはガーデニング楽しむといふ

天野克彦（あまのかつひこ）（大阪府）

令和五年

見下ろしのみどりの公園それぞれに木々色づきて子らのこゑ高し
てらてらと木の葉は黄いろに照り映えて吾の巡りは秋の深まり
ひさびさの奈良の鹿どもに手を触れて頭さげさせ煎餅与ふ
日の透ける楓紅葉の下に坐し大和の粥をすすりてゐたり
あをによし奈良のみやこへ行く雲か茜に染まり山越えんとす
遠山の嶺の濃闇（こやみ）に流れ星ひとすぢふたすぢ落ちゆくが見ゆ
我が住まふ香里（こおり）丘陵霧こめてあやめもわかず朝明けんとす
みちのくの安達ヶ原の鬼婆が毗つりあげ迫りてきたる
ばうばうと逆立つ白髪の鬼婆の形相どこやら母に似てをり
子規も見つ芭蕉も見たる黒塚の鬼の岩屋のなつかしきかな
阿武隈川流るるほとりの黒塚は巨大な杉に守られゐたり
鬼女埋葬の一本杉の黒塚は雪にうづまり静まりをらん
子規居士の「はて知らずの記」に導かれみちのく歩きを幾たびもせし
朝焼けの雲に向かひてひとりごつ人生たつたの百年（ももとせ）あまり
安穏のくらしに飽きて旅おもふ「野ざらし紀行」読み返しゐて

みちのくと言葉にきけば懐かしやラジオ聴きつつ旅を想へり
遠山はうすむらさきに染まりゆきかつて登りし筑波嶺のごと
夜のさくら寒さ戻りて紺青の空に星くづ冷ややかに見ゆ
ほうほうと声あげるごと日日に若葉の萌えのこの勢ひよ
たちまちに青葉となりたる公園に子供のこゑのほがらに聞こゆ
光源氏の「嵯峨の御堂」と目される嵯峨釈迦堂にけふ詣で来ぬ
「松風」の明石の君の物語想ひうかべて釈迦堂にゐつ
廬山寺（ろさんじ）の「源氏の庭」を見んと来つ桔梗花咲くむらさきの庭（紫式部邸宅址）
淀川の堤を来れば草いきれこの香かなしと懐かしみゐつ
欲望の鎖いつしか解かれゐて老年こその悦びに入る
過去はすぎ未来はいまだこぬゆゑに確かな今を愉しくあらな
その時がきたればそれはそれで良し旅の宿より立ち去りゆかん
見えるもの見るものすべて美しと齢の老けて見えるこのごろ
快楽を求むる毒気うすらぎてただ美しと舞妓見てゐつ
白川の柳通りをわが来れば白き輝き川砂の見ゆ

打ち水のされたる夕べひとりゆく柳わかばに肩なぶらせて

炎天の影ことごとく印画され路ゆくわれも地に染むごとし

炎暑このしづけき広場にすずめども枝移りして鳴くこゑきこゆ

八月十五日正午の蝉が鳴きはじむ鴉はクワクワ空高くゆく

公園の夾竹桃の裏通りもれくる子等のあそびのこゑす

公園の花期を終へたる夾竹桃ところどころに朱の花のこる

幼らの遊びの跡らし公園のベンチに山なす松ぼつくりは

秋づける今朝見る山の静けさや庭木のこずゑ色づきにけり

雨霧の空晴れゆけば音のなき遠山うかぶ夢のごとくに

肌寒き秋の夕べとなりにけりあひ向かふ山あかねに染まり

机上に平成十二年五月号の「冬雷」誌がある。私の歌が初めて掲載された記念すべき一冊だ。平成十二年五月号の投稿者の人数を数えて見ると、ざっと二百六十人。現在はと見ると、ざっと百二十人の歌が掲載されている。当時と比べると、百四十人ほどの会員が減っていることになる。令和六年三月号を見ると、平成十二年に在籍されていた方々の内、三十人ほどしか残っておられない。

世代交代とはいえばそれまでだが、改めて二十三年間という時の流れの長さをしみじみと噛み締めずには折れない。嗚呼！

慰もる事もありやと銀杏散る並木路ゆけば何やら愉し

わが窓のまぢかに揺るる柿もみぢ鴨このごろ見えなくなりぬ

近く住む長のむすめは突如来て「生存確認」笑ひて言へり

春日なる万葉神苑経巡りて草花愛でつ秋の七草

昇る日に真向ひ今日も手を合はす未だ眠れる遙か山並み

秋なれば切り子細工の灰皿を陶器に替へぬ青き灰皿

散りしける公孫樹黄葉に降りたちて暇もてあます一羽のカラス

さし昇る日の影いよよ濃くなれば霧晴れゆきて俗世に戻る

朝日差すさくら紅葉の濃き赤は萎れたる吾を蘇らせる

街路樹の桜もみぢの散り落葉ひと葉拾ひぬ栞にせんと

老い人となりたる今はせんなしやみちのく旅は夢となりたり

起ぬけにまづ飲む白湯のうまきこと生(いき)の鼓動が駆け巡るなり

孤独とは喩へて云へばはぐれ雲とらはれの無き自在の身なり

面白き雲の形と見てゐしがいつしか消えて青空ばかり

冬の日の今日も暮れんと入りつ日へ向かひてからす飛びゆくが見ゆ

枯芝のなだりに残るはだれ雪からす降りたち朋よびて鳴く

樹の上に巣作りせんと鴉二羽たがひに励み藁くづ運ぶ

パン咥へ地をすれすれにゆくからす嬬なる鴉に餌を運ぶらし

行動を共にしてゐる鴉二羽樹の上に寄り添ひ羽づくろひせり

咲きゐても落ちてもなほも美しと暫しみてゐつ椿の花

とりどりに木の上(へ)にあそぶはイカルとふ小鳥なるらし黄の嘴(はし)のとり

日あしのび没日の位置の移ろひてあかねのひかりわが寝屋に差す

久々に髪を刈らんと春の日のかがよふ町に出で来つわれは

蟻が曳く羽を些事とは思へずにこの公園を去り難くをり

夕闇の灯は遠きほどきらめきて足もと暗く帰りてきたる

春の夜のさくらの坂のその先はわが家なりけり灯りなき窓

林中に見えはじめたる花こぶし青ぞら指して歓びをうたふ

のびるだけのびたる草に花が咲きかはるがはるに蝶の寄りくる

暇なればハーモニカなど吹いてみる童謡唱歌想ひ出すまま

子規左千夫節に茂吉の墓どころ胸さわがせて詣でし日あり

わが窓に真向かふ山の重なりに木々のみどりの膨らみが見ゆ

吹く風に木洩れ日の影さだまらず窓いつぱいのみどり美し

月すでに雲を離れて澄みゐたり洗濯物を取り込みをれば

さやさやと降りくる雨は音もなく窓さきの木に吸はれてゆけり

つゆ雲の吹き払はれて忽然と山あらはれぬ窓の向かうに

雨雲はひくく垂れゐて雨降らず柿の若葉にでで虫うごく

白川の石畳道ふたりしてあゆみし記憶よみがへりくる

日差し避け日陰につどふ烏どもながながしき日を持てあますらし

「足のツボ」なる本を求めきてひとり按摩を試してゐたり

「ツマラナイカラヤメロ」と言つても聞かぬらしチェーホフ生みたるああオロシア

雲の峰装ひて立てる生駒山いにしへ人の越えしかの山

暑き日のなごりの空の大夕焼こども去にたるしづけき広場

つくづくとわが手の指をみてゐたり共にありきたる無骨なるゆ

び

ペンだこのある人このごろ見ずなりぬ昭和懐かし遙かとなりて

八月の月光さし込む畳間につつしみゐたり今日原爆忌

ヘリ空を叩きて飛ぶはなにごとぞ一巡りして遠ざかりゆく

鉄塔のしろきを縫ひて夏山はみどり濃くしてしづまりてゐる

夕風に枝先の花吹かれをりこの百日紅は咲き初めにけり

たたきつけるやうなる雨が止みてのち九月の庭にこほろぎのこゑ

山見ゆる部屋に棲みゐて日々かはる山の姿に言問ふわれは

遠山をふたわけに射す陽のひかりかたはう暗くかたはう明し

躁の日と鬱なる日とがあるやうに今朝みる山は霧に包まる

有泉泰子（ありいずみやすこ）　（山梨県）

染まる山やま

朝焼けの空に広がるいわし雲朱色に染まり山々をも染む

今朝冷えてコートを纏ひ散歩する甲斐駒富士も白きを纏へり

黄金色に染まる公孫樹の木の下で調理場の草取り終へて清しき

三十年続けてきたる食事サービス活動の様取材受けたり

配食の様子を撮ると吾が後を大きなカメラを肩にカメラマン

楽しみに待ちたる今日は放映日夕食とりつつテレビに見入る

弁当を手渡す吾と利用者のなにやら話す笑顔あふれて

いろいろな兎に祝はる新年のうさぎの如く跳ね飛び生きたし

凧上げの親子で賑はふ河川敷青空広がり山々の美し

成長を見守り二十年ラグビーに鍛へたる体父母祖父母越ゆ

逞しき体なるとも話す面幼のままに恥ぢらふ優し

水道管凍らぬやうにと古布の色を楽しみ巻きていきたり

沈丁花椿の蕾ふくらみて子等の卒業思ひ出さるる

お祖母ちやんと同じ大学に合格と朗報ありて驚き走る

曽祖父祖父母と学びたる一高卒業絢野巣立ちぬ

紙袋両手に下げてホワイトデー「今日行く今日用」ある夫をよろこぶ
お祖母ちやんのみそ汁美味しい教へてと来たる孫とでキッチンに立つ
わが庭のをちこちに咲くカモミール友の庭にも咲きてゐるらむ
カモミールの咲けるを見れば今年こそ会ひに行きたし施設の友に
迷子になるやもしれずと止められし墓参りへと内緒で行きぬ
中央線乗るは嬉しやときめきぬ車窓の景色心に留める
桜葉の下に眠れる父母に草取りしつつ近況伝ふ
さはやかな風に誘はれ夫誘ふ連休前の昇仙峡へ
釣り客もみえず静まる千代田湖に車を停めて一周歩きぬ
満開のウコン桜に弾みゐておみくじひけば「身をひきしめよ」
受診日に変りはないかと問ふ医師に忘るることの多しと答ふ
名前出ぬこと増す日々の中にゐて富士に甲斐駒ケ岳忘れることなし
庭隅に育つ無花果塀を越え葉陰に二つ実のなりてをり
車椅子押して散歩の院庭に無花果みつけ喜びし母思ふ
「冬雷」に誘ひてくれし約束の「欠詠するな」破りて哀し

二十年役立ちくれし冷蔵庫故障し直らず謝しつつ別れる
「冬雷」を待ちて読みくるる妹の在るは嬉しき父母の香のして
雷雨去り明けたる朝の清々し猛暑はいづこや高原にゐるごと
庭掃けば柿の木陰に一つ二つセミの脱け殻転がりてあり
母のごと姉のごと慈しみくるる叔母臥せると聞きぬ一人金沢に
まあ泰ちやん受話器ゆ伝はる叔母の声弱くゆつくりたどたどしくて
すぐにでも会ひに行きたし金沢への道のり想ひ床に臥しをり
三人で列席予定がかなはずに娘一人の上京となる
早朝に窓をあければ心地よき風入り来る虫の音と共に
草むらとなりたる空地にトンボ飛び虫も鳴きだし秋を告げゐる

最近相次いで身近な人が、転んで骨折、入院をするという事故を起しました。腰、膝、背と様々でしたが、皆一ヶ月を越える入院後、リハビリのために専門の施設に転院して訓練を続けています。
私たちもいつ、どこで転倒するかもしれません。転んでも骨折しないですむように、日頃から食事をきちんとして栄養をとり、骨、筋肉を丈夫に鍛えておこうと思うこの頃です。桜の花のなんと美しいこと！　山々を眺めながら楽しく歩いてきます！

去年こぼれ落ちたる芙蓉の芽を出して空地のをちこち緑の葉伸ぶ
Ｊ３落ち目前のヴアンフォーレ甲府サッカー天皇杯優勝したり
この力どこより沸くや堂々とＰＫ戦にて優勝決めたり
三年ぶりの祭りは人人の流れとなり解放されたる喜びに満つ
利用者に調理配食ボランティアに一日をかけて取材続きぬ
放映の字幕と共に映される媼と吾の楽しげな笑顔
三十年続けてきたる褒美やも映る笑顔を大切にせむ
元旦に娘二人の笑顔あり佳き年とならむそんな気のする
卒業後六十年の集ひすると賀状に添へ書き心浮きたつ
家近くすべての買物頼りをるデパート閉店とニュースの流る
水道管零下八度に凍りたり破裂まぬがれ良しとせむ
台所トイレ洗面所いつせいに水出る音す午後二時近く
休暇とり大学受験に付き添ふと娘と孫は上京したり
安心し送り出したる受験生故郷ありて父母のみて
入学するかはまだ未定と言ひつつほつとしたるや安堵感伝ふ
韮崎ゆ共に移住の椿咲く四人の子供の成長みつめて
卒業式終へたる絢野とアルバムを見つつ成長よろこびゐたり
職を持ち三人の子ども育てたる娘の苦労に思ひをはせる
新しきデパート成りて楽しみの出来たる夫は自転車こぎいく
雨止みて高校球児行進す山梨代表第一試合とぞ
煮干味噌だしの素をも一袋ばあばのはなむけの野菜たつぷりと
帰り行く孫との慣はしハイタッチ力強きよ温もり残る
家族総出で上京の孫を送るとぞ一人で送りしわが子らを思ふ
新装の校舎の前で礼服着て笑みのあふれる写真に安堵す
先輩の明るき声に励まされ雲の晴れゆき笑顔にて出づ
買物の途に眺むる一本の大樹緑葉鳥の声する
旧姓の吾と同じ名の相撲取りがんばれがんばれ応援楽しむ
崖崩れ案じて眠るその朝(あした)無事なるも休業すと箱根の娘より
案じたる線状降水帯無事去りて空に大きな満月のぼりぬ
真白なる背高き細身の冷蔵庫慣るるに梃摺るなかよく暮らさむ
猛暑なり自転車こぎ行く気力なくタクシー依頼す初めての贅沢
四年間眠り続けし義姉の逝くコロナで会へずコロナで行かれず
朝日浴び赤銅色に染まりたる甲斐駒ケ岳凛と聳え立ちをり
早朝に聳え立ちゐる甲斐駒ケ岳に力いただき足取り軽し
暑き日もいよよ終りや彼岸花緑鮮らか茎の伸びをり
コロナまた勢ひ増すや子と孫と共に発熱しばらく行けぬと

飯嶋久子(いいじまひさこ)☆　（茨城県）

帰らぬ日々を

人去りて廃屋となる荒庭に真紅の薔薇の凛として咲く
若き日に訪ねし異国の街並みを映像に見る平和なる日々
旅先の失敗談の数々を懐かしみつつ友と語れり
来る年も健やかなれと願いつつ小さき畑にえんどう豆蒔く
この三年の日々返してと叫びたき思いにぱたんと手帳を閉じる
常なれば闇に沈む我が街も対クロアチア戦明るき窓多し
ドブロブニクの広場に求めしペンダント青き瞳の少女の作品
沖合に我が乗る白き船うかぶ共に旅せし友今は亡く
戦いもコロナも知らぬあの日々は遙けき夏の日海碧くして
知らぬ間に名優たちは旅立ちて私の昭和遠くになれり
サハラ砂漠駱駝に行きし旅友の消息絶えて三年過ぎる
楽しかりし旅の思い出一つずつ宝物のごと取り出している
あれそれで会話成り立つ母たちをあきれ顔にて娘見ている
雪だから今宵は鍋とつぶやきて大き白菜ざくざくと切る
八十余年歳重ねても知らぬこと多々ありぬ例えば狗尾草など

若き日の父母のなりわい精米所ひねもす水車こっとんことんと
米狙う鼠退治に我が家では猫を大事に養いたりと
幼き日ネコジャラシとて遊びたる思い出ふんわり甦りくる
速水御舟緻密なる絵に引き込まれバスの時間やり過ごしたり
春の陽に煌めく千波湖眺めつつ駅までの道五千歩歩む
麗らかな陽に誘われて野に出れば田の縁染めて蒲公英の咲く
踊子草おおいぬのふぐりも時過ぎて蒲公英の黄独壇場なり
深夜までサムライジャパンに酔う母を娘は横目で寝室に消ゆ
敵味方力尽くして戦えば感動を呼ぶその清々しさに
夜の田に蛙の声の満ち満ちて田の面に月は揺れつつ映る
漣を立てて風は過ぎてゆく植えて間もなき苗を揺らして
早苗田に青鷺一羽舞い降りて抜き足差し足餌をあさりおり
喜寿傘寿寿米寿とわれらそろい踏みアルコール抜きの乾杯をする
予約せるランチの席にそれぞれの祝いのプレート用意されおり
屈託のある日向かいし海なりき今平らかに過ぎし日々思う

湊線夜の水田にさかしまに姿映して走り過ぎ行く
磯遊び児らの声渡りいる白亜紀層の岩礁の浜
ごく稀にアンモナイト見つかるとその幸運に我も会いたし
朝あさに採る胡瓜茄子トマト二人の食卓産地直送
起き抜けに冷たい麦茶塩飴一つ酷暑の夏の私のルーティン
摘果時期誘われていくブルーベリー畑鈴なりの枝風が抜ける
娘への弁当作り過保護よと言われつつ励む楽しみ一つ
野分過ぎ今朝はからりと高き空飛行機過ぎるをしばし見送る
円き月海より生まれ海上に金砂の道広げつつ昇る
企業戦士と言われし人ら多く住む今高齢者団地と化して

B&Bに泊りながら英国の田舎町をレンタカーで廻りたい、との願いが叶い二十世紀も終わろうとする平成十年夫と二人旅に出た。レンタカーで廻る小さな村、町は花にあふれ蜜蜂色に暮れる村々はため息が出るほど美しくどこかなつかしかった。旅を詠む楽しさを知ったのはこの旅からだった。

コロナ禍の数年、遠出することもなく家にこもる日々が続き、知力、体力のおとろえを感じる今、何をどう詠むか四苦八苦の日々が続いている。

三年越しの遠出自粛の日々なれば足腰弱りふるさと遠し
ふるさとの友の消息絶えしまま月日流れる訪ね行かんか
寒暖差激しき日々に戸惑いて今年の木犀二度咲きとなる
奥久慈に林檎求めて帰るさに樹々の紅葉夕日に映える
新しき手帳届きて今年こそ満たされる日々でありますように
監督に抱きしめられて泣く選手思わず我ももらい泣きする
冬枯れの庭にまずは水仙のいち早く咲き香り漂う
越前岬訪ね行かんの約束も三年越しなり足腰弱る
フレイルを予防せんがの体操に送迎付きにて参加を決める
あと何年着られるかとの危惧あれど姉の紬をコートにリフォーム
今年こそこのコート来て故郷へあの人この人訪ね行かん
街も老い人も老いたるこの巡り鬼遣らいの声聞かずなりぬ
豆まきに残る豆入れ炊き上げししもつかれの味しみじみと恋う
下野のソウルフードなるしもつかれ大釜で炊く母懐かしき
道の駅にしもつかれありとの情報に同郷の友と勇み出かける
庭にまく飯粒による雀数羽尾の美しきが一羽混じる
北関東の凍るが如き寒き朝湯たんぽの湯に顔を洗いき
初雪の凍りたるに転倒し友救急車にて搬送さるる
大山氏の歌にある狗尾草エノコログサと初めて知りぬ
彼岸には草餅なりと思いつつ田の縁歩めど摘むに堪えず
草餅を作らんと不意に思い立ち手持ちの袋にヨモギ摘むなり
疎開地に姉と二人で摘みしこと不意に浮かびて亡き人を恋う
朝に昼にネモフィラ満開のニュースあり自転車でゆきしこと今は昔
大陸より黄砂飛び来るミサイルも青き地球は今何色なりや
夜更けて海浜電車過ぎてゆく車窓に映る人影まばら
地方紙に二科展入選と娘の名見出しに載って少し大袈裟
たゆまずに精進したるご褒美と赤飯炊いて帰りをば待つ
おめでとうとグループライン次々とその返信に半日かかる
団地内の古墳の杜に猿棲むかいまだに被害の報告のあり
少し早い米寿祝いは寿司屋にて今宵の鮨はことさら美味よ
田の中を一直線なる海浜鉄道終電近く乗客まばら
ボランティア過ごせる縁の友人は涙も笑いも分かち合う仲
今は亡き人とフェリーに渡りしよ台風の余波海は荒れたり
海なし県に育ちたる我なれど半世紀超え海辺に生きる
梅雨明けの宣言なきまま立葵てっぺんまでも咲きそろいたり
二日見ぬ間に胡瓜は育ちすぎ娘はへちまかと玄関を出る
夜来の雨に凌霄花散り敷きて門までの道オレンジに染める
隣家との境の塀は猫の抜け道白黒きじとら様々通る
半刻の間に籠一杯ジャムに仕上げて娘らに贈る
地球は今沸騰中と人の言う山火事遠近自然発火と
濁流に飲まれ消えゆく家も森も映像に見るなすすべもなく
親が子を子が親を殺めるとこの惨状を天も嘆くか
会いたしとあの人この人偲ぶれど足腰弱り欠席決める
玉音放送聞きしあの日も暑かった十歳の私意味も分からず
暑さ未だ残れる庭にこおろぎの鳴き始めたり続きてきりぎりす
文月に入り鈴虫の加わりて三重奏を湯に漬かりつつ聴く

茄子の花百に一つの無駄もない母の言思い三つ採るなり
若き友に送迎付きにて誘われて海辺の店に三人そろう
水平線を白き大きな船が行くいずこの港に辿り着くや
ＣＴスキャンに異常なしと告げられて戻る門口百日紅散る
香り来て見あぐる枝に咲きそめる木犀の花遠慮がちなり
家を建て子を育てきし良き日々よ思い返すも笑顔が浮かぶ
資源ごみ当番に立つ殿方多し何処のどなたか分らぬままに
三年ぶりの敬老会の開かれて思いがけなし殿方多し
市長より米寿の祝い頂きぬ夫逝きし日前世紀となり

飯塚澄子（いいづかすみこ）　（東京都）

卒寿プラス三

秋の日を浴びて紫木蓮黄葉の色取り映えて庭中彩る
都美の作上野に見えし先生がインターネットで紹介くださる
七五三祝ひの曽孫のちぎり絵がスマホに載るを友ら驚く
五十号ちぎり絵毎年出展す師範を採りし退職後の趣味
出展の作品の脇先生の記念写真のありがたきかな
年末に律詩の会の催さる西新井なるギャラクシティに
ステッキで舞台に立ちし我なりき吟詠なせば案じ寄り来る
立たんとし瞬時に膝がくづほれて畳の上に腰を落としぬ
息子をば呼ばんと欲し腰すりて廊下を過ぎてスマホを手にす
嫁と二人驚き来たり抱き上げて椅子に上げたり我の体を
二十余年休みたるなき詩吟指導福祉会館に休み連絡す
幾種かの大輪の椿亡き夫の好みし庭を眺むる幸慶
春休みスキー体験軽井沢二人の孫に嫁の試み
送りくるスキーの画面嬉しけれ教室にての一日体験
オルゴール付きの小箱を欲しいとて小一の曽孫我に近寄る

棚にある手帳も欲し気な曽孫なり小さきペンを添へて渡しぬ
君の名を手帳に書いてと言ふ我に何と見せたるはその姉の氏名
にぎやかな声庭にあり吊られたるハンモックのなか曽孫ら遊ぶ
紫木蓮と泰山木の幹に結ぶ嫁の計らひ見上げたるなり
連休の最後の一日ゆつくりと実家で過ごさんと孫夫婦くる
ショパン好き幻想即興曲を弾く眼とぢ聞く母の姿よ
夫の弾くピアノの脇に立てる妻いとしかりけり我が眼には
庭に立つと良き香りすと嫁の言ふ泰山木の花咲く水無月
朝顔の蔓の伸び出しからみつく文月の日々や今年も楽し
吟詠会主催の任を果たし終へ記録写真を楽しむ文月
靖国の奉納吟詠文月の九日なりき舞楽殿にて
尺八の伴奏ありて吟友ら能楽堂で吟詠発表
全国の奉納吟者多勢なり記念写真の四日で届く
亀戸の福祉会館演芸会吟友師弟一番に出る
この文月詩吟の会の重なれどステッキ伴ひ励める幸せ

八月末地区祭りなる土日の夜祭囃子の聞こえぬ寂しさ
光る玉落とすと更に光り出す翌朝曽孫我に見せをり
区展への出品せんと調和体子規の句真似て書に励みをり
崩し過ぎ一字指摘の師の言に我流に直し清書出したり
五時過ぎに目覚めて眺むる朝顔よ三色十八の花いとしかり
毎月の短歌提出あらばこそ月初めには心正しぬ
九首載る作品一の十月号心正しく読み返すなり
接種の書区から届きて毎月の通院の日にすみやかに受く
彼岸花に庭の華やぐ朝顔も十月初めに色を見せたり
孫連れて墓参りなす写真見る彼岸花添へ額衝く曽孫

あら、似た封筒、全くの偶然、『冬雷　自選合同歌集』として刊行して下さる。今年二〇二二　作品年鑑』の入った封筒が、眼に　もその時が来たのだ。
入った。思わず読み返す。校正依頼「自選　ありがとう、大山敏夫先生、小林芳枝先生、
四十五首の作品」と。　桜井美保子先生、その他携われた他の方々よ。
ありがたい。一年間の作品をこんな風に　姉の友人に紹介された「冬雷」、毎月短歌
まとめて下さる、『冬雷二〇二二　作品年鑑　を詠じられる幸せな三十年の月々です。

バス乗車後ろの人に援助頼む我となりをり不調の今は
頼まれたる彼女は我と共に乗り背部持ち上げ乗車助ける
終点で降りなんとした我が前に乗車助けてくれたる人待つ
降車口に我を迎へる人あると思ひもせずに驚き下りる
バスに乗る時は援助を頼みしが降りる時まで気が及ぶとは
書道展の会場準備に区役所までタクシーに乗る近距離なれど
「鎌倉に実朝忌ありー」我が額を掲げる展示職人のあり
積もりたる落葉の中に眼を引きぬ水仙の花屹立なすを
霜月の末になりたる紫木蓮花芽小さく細き枝先
フィギュアの選手の動き見守るに心静まる我のひと時
新しき顔のふえたる選手らよフィギュアの未来輝けるかな
絶句より倍の長さの律詩をば暗記をなして吟ずる参加者
一人ごとマイク消毒舞台には透明板も置かれて吟詠
和服にて吟詠会に臨む人会の雰囲気盛り上がらせる
ステッキを二本になして家の中歩き過ごしつこの朝からは
詩吟学び我に付き添ふ教へ子に今日の指導を電話で頼む
会館で吟詠学ぶ卒寿びと帰りに転倒救急車呼ぶと
我も友も転倒したる怖さかな「転ばぬやうに」言はれてをれど
文京区根津の「ふれあい会館」の三年ぶりの祭りにぎはふ
キッズバレエ二十分なる舞台なり幼児の動きに観客熟視
ヨドバシで写真拡大自らの姿見つめる小学二年
終始笑顔フラダンス踊る女性たち我は素足の美しさ見る
台東と文京区との境界に住みて初めてこの祭見る
茶室では投扇興の体験もできる二日間催し多彩
如月の十八・十九日の祭りプラン陶芸・ペン画・消防に落語
弥生初の小指の蕾紫木蓮陽気続きて半ばに満開
紫木蓮花の小脇に新緑を二つ見せをり営み早し
白まじる椿好める卒寿我ステッキ脇にカメラを持ちて
野球戦ＷＢＣ毎夜見る準決勝はリハビリ仲間と
決勝もリハビリの場で応援す世界一とて賑はふ仲間
冬雷の作品三の友の名の載らぬを案じ電話かけみる
ドア開くれば柏餅をば手渡さる嫁の土産に心慰む
ピアノ弾く孫の背幅の広きかな三十路半ばの今の姿は
小卒より吟詠の道に好み入る友に聞かせたきピアノの音色
会食時ワインを好む父の勧めに嫁も好むか飲みかた見事
注文のピザ来る遅し連休時店繁盛の日々なるゆゑか
テレビで見るチーズ溢れるピザと違ひかけ離れたる焼きかたなるか
ドル紙幣手渡し進むゲームして大騒ぎなす我は見学
高き木の上近く咲く白き花泰山木の花に魅せらる
オレンジの花色目を引く今の庭孫の調べし花の名長し
冬雷の二〇二二合同の歌集頂く文月の初め
年鑑の作品を読み前年の歌集も読みて我が生思ふ
切り抜きを毎日為す我やうやくに数独に挑む心起こりぬ
数独のからくり判り高校の野球観戦しつつ楽しむ
演芸会終へて教育会館へ受講に急ぐ遅刻の我は
バス停の脇に祭りの寄付示す主治医二箇所名を連ねをり
右膝の痛みに寝しなテープ貼る一夜の眠りに朝を期待して

昼前に俄に一雨降り出してすぐに止みをり水滴光る
出かけると母屋に声をかけたるに応答の無き嫁を訝る
帰り来て嫁宛の郵便声かけて置くに何の返答も無し
帰宅後の挨拶受けて尋ぬるに風邪熱で伏すと息子語りぬ

伊澤直子（いざわなおこ）☆　（東京都）

ゆるゆると

大田黒公園入り口に続きたるいちょう並木は黄一色
足元にふわり重なるいちょうの葉踏みて秋の心地よきかな
ふわふわとすすきの白き穂やわらかき初冬の陽を受けやさしく揺れる
隣庭の梢の間より紅き光あたりを染めて初日昇り来
早咲きの紅梅白梅続く道漂う香りに肩のほぐれる
葉の落ちた冬の木立も揺らすほど北風の吹くバス停に立つ
暖かき日差しに窓を開けたれば東風に乗り来る隣家の臘梅
栃の実の灰汁抜きしたるを貰ったと娘は栃餅作り持ち来る
夫の郷里に栃餅を売る店ありて娘とひととき話に花咲く
冬雷を入れたる棚に目に止まる川又幸子歌集『歳月』
手に取りてその場で一気に読みつくす川又先生の響きなつかし
病院の訪問リハビリ終りたればケアマネすぐに通所を決めぬ
通いたるリハビリデイサービスは和やかなりて居心地のよし
ジョヴァンニソッリマの無伴奏チェロリサイタル音艶やかにして迫り来るなり
民謡に時折見せる即興は遊び心の見えて楽しき

贈られたるカーネーションの鉢植えの深き桃色娘の気持
青紫陽花今夏は早く咲き始め終りの気配に入梅の報
額紫陽花「隅田の花火」の名のごとくぱっと広がり華やかに咲く
雨続き頬杖ついて庭を見る緑は輝きピンとしている
同級生の日本画入選記念展横浜仲通りギャラリーに行く
静かなる気力感じる風景画同い年なる友の作品
隣り駅みなとみらいのホテルにて娘とランチ嬉しいひととき
観覧車童心にかえり乗りたれば視界開けて心も澄みゆく
病院の帰りにおしゃれなカフェありてウッドデッキにそよ風通る
日曜日カフェに立寄りランチする手作りパンにサラダがいっぱい
早朝にラジオは七月七日の声短冊つるすこともなく七夕
日フィルの夏休みコンサートに孫と行く威風堂々バレエシンデレラ
演奏の最後はラデッキー行進曲手拍子に乗りホールは一体
鉢植えのカーネーションの花終りあとにふっくら蕾の三つ
愛らしきピンクのカーネーション開きたり蕾育ちて楽しみ再び

池袋芸術劇場の音楽祭アトランティスコード子供向けオペラ
金管楽器まろやかに響く五重奏音の魅力を新たにしたり
盆過ぎてなお猛暑は続けどもつくつくぼうしは晩夏を告げる
艶やかに赤味おびたるすすきの穂御岳（みたけ）の山の涼風にゆれる
御岳山れんげしょうまの群生地細き茎伸びうす紫五つ
くま笹の広がる中より細き茎あちこち伸ばすれんげしょうまは
御岳山ケーブルで登る展望台スカイツリーの光るが見える
展望台遠くに都心のビル群あり涼風受けて立ち去りがたし
十五夜の赤く大きな満月は向うの屋根より昇り始める
満月の昇り始めの大きくて赤味おびるを見るが楽しみ

静かなる住宅街のレストラン娘の生日にランチを共にす
受付は手荷物飲み物検査にて警備厳しく案内される
朝日の間天井画とシャンデリアウイーンの城を思い出すなり
迎賓館の歴史をたどれば我が生涯重ねて思う出来事いろいろ
小学生の二人の孫に声かけて日フィル夏休みコンサートに行く
オーケストラの生の音を聴かせたく「運命」の響き共に楽しむ
三カ月留守の間に我が庭のあたり一面ヤブカラシ覆う
剪定のボランティアする娘来て枝ごと剪りてヤブカラシ引く
草引きてあせび雪柳らの低木も姿現わし我が庭もどる
まわりには色とりどりの和服姿琴三味線を奏でる人らし
水の面に広がる落葉を長い柄の網にてすくう公園スタッフ
三宝寺池のほとりの飯桐は赤き実いくつも房なし垂らす
一面に紅葉広がる公園に緑の梢は引き立て役か
前見ても振り返っても紅葉のあふれおりたり立ち去り難し
日常に少し変化をつけたいと新宿中村屋に連れ立ちて行く
コロナ禍より新宿の街は避けていて駅の改造終るも知らず
若き頃父に連れられしふぐ料理思い出抱き料理屋に行く
賑いし築地市場は更地にて競りの聞こえる鉄骨残る
勝鬨橋開閉の境に立ちおれば車の震動直に伝わる
昭和三十三年東京タワーの建つニュース忘れもしない三百三十三メートル
築地場外市場はあちこち寿司屋ありみな十数人の行列をなす
瓔珞木（ようらくぼく）咲いたとニュースの植物園行けば朝五時落下とスタッフ（神代植物公園）
倒れたる古幹くねらせ紅梅は再び立ちて枝広げたり
ベゴニアは軒下なればと油断して寒波に凍り風で飛ばさる
ベゴニアの鉢にうす紅数輪の開けばほほえみかけてくるよう
隣家の空地に立ちたる大欅日ごとに緑は色変えてゆく
花見どき雨の続けど出かければ緑生き生き花色映えたり
青空に枝垂れ桜の輝けりこの春初めて晴天となる
ゆるゆると流れる水面に花びらは付きつ離れつ形を作る
桜花散り積りたるチューリップ畑白き地面に花色とりどり
モーツァルトのクラリネット協奏曲作風あふれてうきうきと聴く
ＰＴＡコーラス仲間と久し振り女子会ランチに和食の並ぶ
黄菖蒲は五月五日に庭に咲く数本切りて仏壇に供う
カーネーション萎れてくる花摘みとりぬはさみ持つ手に切なさよぎる
庭の梅娘一家で採りに来る大きく太りて近年にない実
じわじわと体重増えてこのところ腹八分目を忘れておりぬ
大根と胡瓜の千切り酢づけには庭の青じそ香りよきかな
こんもりと繁れる庭の雑草に取りましょうかと娘婿言う
若き人体力ありて瞬く間に庭土現るごみ袋三つ
薄紅を広げて咲ける百日紅猛暑の日射しに花落としゆく
梅雨明けて三日三晩の天日干し梅干しの香暑気にやさしき
青き実をたくさん付けたる紫式部塩辛トンボのあたり飛び交う
バス降りてケーブル乗り場までの道足元かばいて歩く急坂（御岳山）
牧野記念庭園めぐれば足元の身近な野草に名札のつきおり
牧野氏の経歴朝ドラと重なれば情景浮かび興味深し

石渡静夫（いしわたりしずお）☆　（茨城県）

ミモザの風

夕食が「うまくて何もしゃべれねえ」頬張る父の箸は止まらず
卵焼きを一口で食う父を見て世話する我等驚き笑う
静けさの中に聞き入る冬の音空をおおう雲ものいわぬ木々
葉を落とし赤い実を付け花水木の冬の陽浴びて柔らかく立つ
北風のなすにまかせて葉を揺らすニセアカシアのさびしき黄色
室温は十度に満たぬ冷たき日厚着と運動きょうも節電
元日に帰りくる子を待ちながらお屠蘇いただくまだかまだかと
「賽銭を賽銭箱にぶん投げて」子に教えいる若き母あり
神様は腹も立てずに見守るか手水の中で手を洗う子を
コマーシャルが余りに多くテレビ消しラジオで応援箱根駅伝
宛名書き百七十通の通知状一人一人を想い浮かべて
「印刷で済ませば速く楽なのに」傍らの妻呆れ顔する
眠れたら必ず元気になれるはず信じて祈る眠れぬ一夜
猫柳の花穂は黄金色に衣替え優しく揺れる暖かな昼
脳トレのように手足を動かして真似して踊るもうすぐ一年

踊りなど軟派な者がするものと興味持たざりし二十代の頃
海底のような家並み押し黙る朝霧の中に太陽あらわる
突風が黄砂を運び濁る空洗濯物は逆上がりする
三か月開脚続け吾が顎は床に着きたり目標達成
下総の植田に浮かぶ筑波嶺は神のごとくにどっかと座る
人間がうるさく思うか思わぬか蛙は気にせず歌い続ける
利根川へ続く植田は大雨の水を集めて太古の海に
朝朝の散歩の道は岸のごと小さな波が打ち寄せている
大雨の水が残れる田の中に鯉十一匹の背びれが動く
そよそよとニセアカシアの葉は揺れて風を捌けり梅雨の晴れ間を
淡淡と歌うあいみょん「愛の花」吾も前見て今日のひと日を
心地良きミモザの風は頬を撫で雑木林の蝉は休まず
ミサイルの発射のニュース霞むほど最高気温は三十九度に
大好きな夏を嫌いにさせるほど災害級の暑さが今日も
熱中症警戒アラート響きおり言われなくても外出はせぬ

ささやかな風が生まれて日の出後のニセアカシアは葉を揺らしたり
雨の無い畑の野菜辛かろう水を掛けたし夕方を待つ
大雨に水底となる稲は今夏日を浴びて穂を実らせる
雨風に打たれて枝葉ちぎれ飛ぶニセアカシアはなされるままに
名乗らずに用件だけを聞き出して電話受け付ける国の役人
朝焼けは何色が好きどれも好き今日はピンクの雲が広がる
沼岸に英美子（はなぶさよしこ）の詩碑ありて嘗ての川を見守っている
旧河川の川幅らしき段丘をたどれば嘗ての流路見えたり
小貝川の流路変えられ境界も変わり村まで分断されき
QRコード読み取りアンケート感謝を込めて「満足」にポン

定年退職後、龍ケ崎市の図書館講座の俳句入門と川柳入門を受講した。短歌は無かった。川柳講座受講生から短歌のサークルがあることを教えられ見学して入会した。俳句に十四文字を加えればいいくらいの甘い考えだった。サークル（龍ケ崎短歌会）の糸賀浩子さんに冬雷入会を熱心に勧められて入会しました。

万葉集から始めた歌集の走り読みは現在、斎藤茂吉と吉井勇です。好きな歌人はまだ見つかっていません。学び続ける中で見つかれば良いと思っています。

日は沈み平野は赤く照らされて今日のひと日の無事を感謝す
何食わぬ顔でちらりと吾を見て丸くなる猫椅子を動かず
立冬の朝の冷気は肌を刺し雲はピンクに明るさを増す
廃線の跡を訪ねる歩く会草木に埋もれるホームに歓喜す
案内の講師は語る大津波かつての低き防波堤指して
冬の日の斜めに射してトネリコの葉はキラキラと輝き見せる
椋鳥の群れて柿の木襲いたり飛び去る後に実一つ残る
柿の木に残る一つの実をめぐり二羽の椋鳥交替で食う
大音量響かせ走る選挙カーどうでもいいと月は微笑む
右側の脚だけで立つ冬の虹見る間に雲の中へと消える
右の手に続いて左の親指もあかぎれできる今年の冬は
セルフレジのタッチパネルを指で触れあかぎれあるを今更気づく
入場を待つ二十歳の人溜り振袖眩しそれぞれの色
長文の賀状をいつもくれる友今年は何故か五行で終わる
明日使う書類捜すも見つからずファイル抽斗くまなく捜す
二日間捜しまくった書類出るバッグの中に確と在りたり
「あなたでも具合が悪くなるんだね。安心した」と妻は微笑む
朝朝の三十分の風呂掃除済ませて伸び伸びラジオ体操
開脚の柔軟体操二か月後床まで顎はあと八センチ
民踊の発表会の曲決まる師匠の視線さらに鋭く
検定に挑戦しろと師匠言う指名されたるは新人四人
ウォーキング終えて飲み干す一杯の水の旨さよ春は嬉しく
みんなから一人踊りの指導受け今日は舞台へ「淀の舟唄」
スタートは二呼間聞いて歩き出す敢えて四呼間落ち着いて出る
休憩の時間を惜しみ司会者は舞台の袖でギターをつま弾く
役員の立候補無く議事止まる役員改選次回に持ち越し
それぞれの役で働く人がいて組織は動く感謝を忘れず
会長の指名で役員次々と決められていく拍手と共に
二拍子で歌い続ける蛙達響く低音しみじみと聞く
柏餅小豆煮てから作ろうと夜明けとともに豆を浸しぬ
あくを取り蒸らして再度鍋で煮る根負けしそうな小豆の行程
砂糖入れ水気を飛ばし練り続け半日かけて餡はできたり
こどもの日の高校野球の決勝戦内野スタンド八割埋まる
あと一つアウトを取れば勝てた筈ボールを逸らせ延長戦へ
大雨で打ち上げられた鯉一匹動かずじっと天を見つめる
突然に鯉は飛び跳ね水のある田圃へ向かう力の限り
梅林の主はバイクで下草を刈りに来たるや雨上がりの朝
梅林の手入れは苦労多けれど家は建てぬと主言い切る
人住まぬ五軒の貸家所有者の手入れ無きまま草に覆わる
お祭りの寄付を班長集めよと町内会は一方的に
お祭りの寄付は獅子舞練り歩き集めたことを思い出したり
民踊の講習会に集いたる百五十名の受講者並ぶ
講師でも緊張するか説明はたどたどしくも華麗に踊る
梅雨明けの宣言は無く今日もまた関東平野を酷暑が襲う
連日の猛暑に耐えてミモザの葉わずかに青み抜けた気がする
三点差九回表の逆転に球場騒然歓喜に包まる
（高校野球茨城大会決勝）

緩急を付けて好投してきたる投手茫然とマウンドに立つ
入盆の昼過ぎてなお待ち侘びる棚経の僧を今か今かと
台風は関東地方に迫り来る稲刈前の田の多き中
ポケットに手を入れ歩く農相に「処理水放出」問いかける記者
農相は「口を滑らす性格」と自己を弁護し言い訳をする
一月の昇格考試挑戦と旧友訪ね来日曜の朝（少林寺）
記憶力衰え学科が心配と友は明るく隠さずに言う
集合の三十分前会場にスタッフ一人参加者を待つ
三人のスタッフせわしく受付す吾も資料の配付手伝う
二十名の参加者揃い開会の歴史講座は男性多し
大正の時代に流路変えられて今は釣り人集う沼なり

糸賀浩子（いとがひろこ）☆　（茨城県）

終の白足袋

紫蘇の実を扱き落したるを塩漬しその冷凍を一年食す
「樫（かし）」と「槙楾（かりん）」の庭木に残しし長塚節貸し借りに係る心の痛み
散り続く紅葉が元の石蕗に木洩れ日淡く黄花移ろう
ブロッコリー・ジャガイモ・人参ポトフにし冬の一人の膳を彩る
聞くに堪えぬ戦なき世は来ぬものかアメジストセージの花散り敷く日
オリオンの近く耀く一つ星夫か娘か車窓に見つむ
花びらを濃くしなお咲く庭菊に真冬の訪い滑らかに来る
白鳥ら牛久沼に飼育され水をかく足見せて寄りくる
揺らさずに愛する者を背に負いてバッタの生は冬に入り行く
「命より大切な仕事はありません」こう言いし人この世には無く
寒の朝八ツ手の広葉凍みとおりしたたかに垂れて新聞の音
嫁ぎし娘「正月帰るはマラソンを見てからにする」と言いしを偲ぶ
初めてのセルフレジにてどぎまぎす買いたる数を確かめて出る
襟巻に老いを埋めて上野駅師の絵画展見る約束の日に
持て成しの生牡蠣食す喉元に磯の匂いてつるりと通る

たこ焼きがくるんくるんと回されてパックに並び「ハイ」と渡さる
夜の卓に落ちたる椿を手につつむ我の心に似てひえびえす
散る梅の下クリーニングを積み込みぬ来年着らるることを願いつつ
国会のラジオ中継大きくし厨仕事の手をはずませる
ぬくき朝「ケチョ」とだけ鳴く鶯とハナニラ紫庭一面に
少年も少女も老いたるクラス会とぎれ途切れの記憶を語る
「自由に」と言われてマスクを外せない何と律儀な吾かと思う
ブロックに囲う裏口淡々とヒトリシズカは群れて咲きおり
庭隅に深く埋めたる菊芋の初めて見る葉よ六株育つ
祝日の国旗掲げる宅の前通りて思う戦時の幼日
吹く風の様変りして今日立夏植田広がる郷土茨城
クローバーの花を輪に編みまず母の髪にのせたる幼日想う
大内宿の軒端で買いたる駒下駄をコトコト鳴らし近くのポストへ
化花（ばけばな）と万葉集にうたわれし紫陽花の庭ぬれて艶ます
毎日のニュースとなりて爽快な藤井聡太と大谷翔平

ステントをまた入れ替えるしんどさを担当医に伝え寿命問いたり
陽子線当てて温熱と化学療法三本立てに闘いおりぬ
街なかのにぎわい遠き夜の農道ひとりぼっちの自販機灯る
母を待つ園児思わすホームの窓媼ら寄り来る夏の夕暮
今宵見るスーパームーンにくらべたら私の癌は小さな事件
看護師の名前の漢字書きためて脳のおとろえ防止対策
童話読む口調で老ら八歳にB 29 を語る八月
病院の車椅子に添う介助犬あるじを見上げる眼いとおし
秋風の駅に立ち食い鴨うどん「やわらかめに」と通院の夜
すべも無く難病と闘い痩せた足に履かせた終の白足袋思う

思い返すに、川又先生時代から送り始めた「冬雷」で、故、神取さんが谷田部と龍ヶ崎で活躍されていた。当時は、茨城の支部にも川又先生や大山編集長さんが見えられた思い出が多い。

県北の皆さんと共々に大会に参加し、大久保氏が連絡係でした。今は佐野支部から参加された方々と、髙橋さんを通して近況をラインに送り合っています。

抗がん剤二週呑んで一週休む。有難い自宅生活に戻り「冬雷」と「龍ヶ崎短歌会」が残されています。編集長、諸先生方へ感謝の日々。

次郎柿の下に広がる秋明菊柿落ちる度倒されており
我が街の芸術祭典復活成り短歌と俳句の色紙づくりす
本部役員若手にゆずり今年迎う文化協会六十周年
立冬を暦の上と昨夜寝て今朝は季節を感じて起きる
桜もみじ落して騒がし椋鳥らベンチの我らを意識しておるか
八十を過ぎたる我ら講座にて痴呆家族の支援を学ぶ
凍りたる白と滝つぼの濃き碧をスマホ撮りする寒中四度
（袋田の滝）
歌友から菊芋とどき深く埋め枯葉をかぶせ芽出し待ちおり
プーチン氏の元気な映像流れ来る人は病気の説待ち居るか
正月に必ず和服の初出勤続け来たる二女総絞り晴れ
青空を見た眼に白梅焼きつける日の丸立つる家二軒あり
リウマチの実母（ははは）を介護し子を育て共稼ぎせし日日振り返る
電動の加湿器より出づる水蒸気乾ける部屋にかそけき音す
さくら草鉢の白、ピンク今盛りビニール囲いより出す二十度の日
春寒に咳を気遣う歌会のマスク要らぬ日願いて別る
二刀流の大谷先発いざ侍東京ドームを湧かすWBC
節電し可能な範囲で甘えない生き方できる戦児の我は
商店街シャッター通りと言われつつ商店婦人部コロッケ一位
東北の侍「佐々木」WBCのドームを湧かす震災十二年の日
亡き叔母の庭より移しし紫木蓮ことしはことさら大き六弁
削り立ての六B鉛筆残し逝く病める娘は筆圧失くして
彼岸会に供えし丸餅つきたてに黄粉と餡を添えて有りたり
迷惑は百も承知の夜の電話長女の居ない寂しさ次女に
我が街の「健康サポート」女子ばかり百歳越すも女性六倍
趣味に集う小さな歌会波立てる参加者のあり五人減る五月
残生はあと幾許（いくばく）かと思いつつ食断ち逝きし娘へ香物
娘側のタブレット戻り来開かれず充電されず宅配のまま
逝きし娘ひとり不自由して居るか膵臓検査の医大のロビー
G7ゼレンスキー氏広島へ頼られる国かこの日本も
梅漬け季「梅は完熟・減塩ね」頼られし娘いま黄泉に在り
冷やっこ青じそ刻み生姜擦り柚子を搾りてひとり味わう
少し早めのノースリーブをほめられて「すぐ終ります」とコロナワクチン
雨続き黒ずむ幹に対かい吹く少女のトランペット音色清しく
僅かなれ戦の国へ寄附を終え七月の空に聴く風の音
つくば市へ車走らす検査日の病院囲むラベンダーの花
血液に糖が交ると言われすぐに膵臓の管に詰まり発見
死の宣告自分に来たかと覚悟せり「物言わぬ膵臓」三ヶ月かと
入院の翌日施術の始まれり胆管口に補強の管入る
看護師が覚えくれたる茨城弁「ハイヨ待って」に笑えるひととき
緋のカンナをスマホに写しグーグルに明治の渡来と知りて親しも
長女への新盆見舞「ぼんぼり」は朱塗り提灯も朱塗りに統一
水戸の寺の施餓鬼に集い墓に詣で我の身体を気遣う身内
難病に果てたる娘なればわがかたえに常に在（いま）せと念ず
リサイクルショップに置かるる黒電話大き音して今にも鳴りそう
毎日を治療に筑波路通いつめ頬に賜わる秋らしき雨
陽子線二十二回目膚（はだ）焼けて海水浴から帰りたるよう

台風の線状降水帯の雨のなか筑波路行き来す癌の治療に
再改造内閣に五人の女性あり食品物価高の対策望む
大いなるスーパーブルームーンなりパワーをください患う我に
友からの黒舞茸を煎じつつ免疫力の高まり期待す
筑波まで陽子線と温熱に治療し真夜は年鑑の選
梨の出荷全国二位の我が茨城「恵水（けいすい）」の甘さ大きさ楽しむ
掛かり付けの医師にこれまでの礼を述べ再入院する吾れの強かり

稲津孝子（いなづたかこ）　（福岡県）

昭和新山

屁屎葛といふ名の花がこの年も蔓をからめて生垣に咲く
日のさせる庭に舞ひゐる蜆蝶止まりて広ぐる紫の紋
庭の草かき分け秋明菊さがす薔薇に帽子をとられたりして
暑き夏過ぎて漸く涼しくて息子と野球の話などせり
植木屋に頼みて草の無き庭に何か大切なもの失くせる如し
為事を辞めて後は本読み三昧と言ひゐし夫病を得たり
窓のそと燈油売りゆく聲の過ぐ暦はけふを小雪といふ
庭のトマトに今日も動かぬ青蟲にしばし屈みぬ出掛くる前に
昭和十九年六月我の生まれし日に噴火始めし昭和新山
三回忌過ぎなばと幾度も言ひてゐし母を思へり夫の逝きて
まだ暗き日の出の前の道を行く己の影に怯えたりして
震災のとき孫と我が家に来し水戸の白梅今年もともる如月
要る事もなくてある時本棚の後にありき夫の学位記
駅に着きたれば読みゐる本を閉ぢどつこいしよと言ひ立ち上がる
老人の会に供する蕗の薹出でてをらずやと友言ひてきぬ

彼岸にてぼた餅作るいつもより少し大きいねと言ふ人も無し
店先の等身大の広告に竝びて見上ぐる大谷翔平
昨日より庭のトマトに青蟲のをりて独りにあらずと思ふ
部屋の中にまた鉢入れつ八十八夜の別れ霜といふを思ひて
勿忘草に似て残す可愛き紫の蝦夷紫がふえて困りぬ
後より目隠しされたる心地して振り返りたれば垂れゐる若葉
通学の児童が旗ふる我に来て掌に包む小さき葉くれつ
雨ふりて池の水ふえ風ふけば細波が立つ岸に向かひて
世の中に遅るるまいぞ朝刊のチャットＧＰＴを切り抜く
力なく飛びゐる庭の蝶蝶が色付く梅の木に寄りてゆく
夕べの夢夫が横になりてゐて我に向かひて何か言ひゐき
これだけは残してほしきものに竹立てて頼みぬ庭の草取り
木の下に種落ちて咲く捩摺が石蕗の葉の下より顔を出す
水道の蛇口ひねれば下にゐる蜘蛛が手を取り合ひ逃げ惑ふ
梅雨の晴れ間は決まり文句と言ひし師を思ひ出だせり梅雨に入る

生きてゐるうちに櫻を伐りおかむとある時夫の言ひし事あり
行つてきますと触れて出掛けて只今と触るる玄関の含羞草
手術うけて帰りきたりぬお帰りと言ふ人をらず一人の家に
我の名を言ひて案じてくるる人またひとり無し七十九歳
ストロングボーイといふもの我にあり開け難き瓶の蓋あくる為
穂の長き紫蘇の実摘みてこの年も佃煮つくる母の味にて
紫木蓮の高き梢に烏瓜さがりてをりぬ僥倖のごと
電気髭剃夫の使ひてゐる如き音のしてをり家のどこかで
御守りとして玄関に竝べゐる夫の靴を今日は磨きぬ
鳴きてゐるフェンスの上の鵲太鴉のみどの下の毛の震へたり

明治天皇の皇后、昭憲皇太后は聡明で学問を好まれ玉詠は三万餘首にのぼる。華族女学校（後の学習院女子部）を創設された。明治十九年御茶の水に高等師範学校が開校、華族女学校にこの「金剛石のうた」を賜はつた。私は附属の中学校に進学、二年からは女子だけのクラス編成になつた。朝の会にいつとはなしにこの歌を歌ふやうになつた。習字の先生にお願ひした所大きな横長の立派な額縁に入つた「金剛石のうた」が出来上がつてきた。これを黒板の上に揚げ毎朝歌つてゐる中学生の女の子たちであつた。

鍋の火を忘れぬための指のゴムはめてゐる事忘れてをりぬ
病の夫とふたり一人前と言ひてきて夫の逝きて二年となりつ
安倍前首相亡くなられ二週間餘の夫人挨拶に来られ給ふ国会に
肥後のくに友のくれたる竿の柿に日の差してきぬ高瀬といへり
通勤に娘の通ふ天神さまの蕊長きうめ月影と言ふとぞ
食べたくもあらず食べたきものの無し夫を思ふ今日三回忌
カメラ屋の前を通ればショーケースに寄りてレンズを見てゐき
夫は
義弟のくれたる近江の手作りの蝋燭灯す萩の絵のあり
自立せる女性とふ夢われに託しし母の夢に応へざりにき
花終はり伸びくる日本水仙の葉を結びおく球根のため
女学校で籠球してゐし母が茄子の蒂で魚の目除きゐきといふ
小学校入学の姉に母作りし白のデニムの鞄の花の絵
庭に実るその実思ひて植ゑたれど始末に負へず抜きにし木通
あらたしき年の初めの歌会に短歌の手帳賜ひにき師は
この年の天道蟲が日の当たる水仙の茎を下りてゆけり
王選手に七五六号打たれにし鈴木康二郎逝く朝刊に
願ひつつ病の夫と筥崎の社の茅の輪をくぐりにき
房みじかく紫の濃き山の藤を友もちくれつ筍と共に
伝ひつつ歩く夫の右手置く厠の手摺の右の字残る
中西太九十で逝くファンにて我も付けゐし背番号6
庭の菖蒲蓬を摘みて粽まく藺草で結びて入る菖蒲の湯
母編みし姉の大切なスウェターを借りて出掛けし事ある写真
雨ふりて池に初めて鳴くひとつ耳をすませば牛蛙にて
さざなみや滋賀の土産のゼリー菓子標野といへりしののめの色
庭の梅ジャムに作りて遅くなり今日の日めくりめくりて寝ねつ
十年ぶりの同窓会に会ふ友が低くなつたねと横に竝びぬ
いつの頃よりや柱に凭れつつズボンをはける我になりけり
歌ひ手の歌の外れて聞こえゐしはいつ頃の事よりやわが耳
病院にひとり迎ふる誕生日誕生日の音符の来娘より
画用紙に孫の画きにし顔ふたつ小さな夫と大きな我と
玉雲の作とふ大内の行燈を出しきて組み立て燈す盂蘭盆
溝端に実る数珠玉お手玉を作りて遊びしお手玉の音
針に糸通して釦つけ終はる頼まずできる事まだ我にあり
入院せし母の着てゐしパジャマ着て寝みぬ母の名を書くパジャマ
どうしても思ひ出だせぬ人の名を思ひ出だして書くノートあり
魚の目の歩けば痛む茄子の蒂を当てゐきといふ母を思へり
カメラ屋のガラスケースを通るたび夫覗きゐきカメラ好きにて
彼岸花ひらき始めてそのうへの赤き蜻蛉の胴の紅
おぶり紐に姉さま被りせる小芥子を父の買ひ来てくれし事あり

稲田正康（いなだまさやす）　（東京都）

アンダンテ・カンタービレ

観客喚声あらずともよく選手らのピークを競ふ四年一度に
巧緻さばかりいはるる場面多くなり競技中継見なくなりたり
ぶつけること倒すことなど本旨ならず車椅子ラグビーといふをほめない
バッグなど置きたるままに遊びをり日本はいいね誰もとらない
ひらひらのスカートに兎の耳つけてこれからダンスのおけいこですか
首里城を復元の木遣ゆくを見きあの材も焼け落ちたのだらう
二十万の一人となれるコロナのかぜ熱の二日となにがしの咳
鉢のむくげに遅きつぼみの一つ見ゆ葉のいろ変はりはじむといふに
園のバスに子を置き去りにせぬやうに監視システム備へよといふ
母親に虐待されて亡くなりし女の子あり真愛（まお）といふなり
拍子木と火の用心の声がゆき事多き年をはらむとする
新年となれるリハビリ室のかべ松ひと枝と寫樂の凧と
左肩やや冷たきを感じつつ朝の床のアンダンテカンタービレ
イラクなる無人機アメリカより操作して攻撃なすといづこ敵基地
自衛力にて戦力にあらず憲法に背かずと世に長くいひ来つ

共にあらば同じ八十八なるを君のをらざる十年が過ぐ
指先にＡＴＭが応じないこの冷たさのつづくいつまで
旗日とふ言葉ありにきカレンダーの文字赤けれど街に旗なく
青空に紅梅二本ひらきたる公園にだれも足を止めない
揺れゆれるあせびの房に降りかかる花びらありてしばらくを立つ
月には兎をればよしあちこちのロケットなんぞ来なくてもいい
日本の改良ロケット上がらずと勿体ないがいくらかたぬし
雛に置く五人囃子はイタリアのマーブル小像汝が持ち来にし
花の場に花絶やさざる人をりて今日はチューリップ真直ぐに立つ
梢まで白き花もつ高き樹の名を知らぬままたびたび通る
たんぽぽの綿毛とびたるあとの茎いくつ立ちをる草むらのあり
白きつつじ咲きならびたる道の上おほふ枝えだみな若緑
つつじの白さかりを過ぎてその赤の満ちたる道に立ちどまりたり
拾つた時は開きてゐたる松ぼつくり翌朝つぼみゐるを怖れき
候補者のポスターはみな笑顔なり六十餘枚そこに並びて

「共有」とふ言葉しばしば使はれて多くはことを知るにとどまる
この年はなぜか近くに鳴かぬ蟬とほくにひとつみんみん聞こゆ
歯ぐきの麻酔ながれをるらし舌下よりのどにひろがる粘膜の違和
見おろしにある街いつも明るくてきは立ちてあり黄の壁ひとつ
お姉ちやんに抱かれてすべるをさなごが何度目かから一人で滑る
すべり台まだのぼれないをさなごがほんの少しをのぼつてすべる
活発に暴れゐる子が母親に来ると突然をさなごとなる
壁飾り紅葉すすきを置く九月夏の日つづく半ばを過ぎて
いはれゐる雨の来ぬ午後洗ひたるものの乾きをまた確かめる
嵯峨は京都ではないと「京都ぎらい」いふさうだ新宿は江戸の郊外

「短歌を作るといふことは、報告、常識、蛇足、通俗とのたたかひである」。歌誌「高嶺」を永く導き、太田行蔵氏の「四斗樽」にも登場する二宮冬鳥のことば。「報告」とは作者の眼の入っていない「事柄の單なる記述」をいう。短歌も創作の一つであるからには「たたかい」であるに違いない。また冬鳥が尊重した芭蕉の言葉「いひおほせてなにかある」、この省略、餘情、「すべてを言わず餘白は読む人に任せる」は、まことに難しい。すべて言ってしまってはいないかと、はらはらしながら、毎月送稿している。

オリンピック一年を経と遺産いふ敢て掲げずともよいだらう
団体競技は大国有利小国にそれのみ強き競技のなきか
車つく椅子四十二キロ手に走らすそも何のためその器具はある
造りたる壁のぼること競ふとふ世界選手権あるがをかしさ
何度でも滑りたき子はしり階段へ父はそのたび抱へてのぼる
草の坂やつとくだつたをさなごがすぐ母親の裾につかまる
パパの手を払ひてママにしがみつくをさなごが手をひかれてゆけり
お姉ちやんの遊ぶトラックとり上げてでも転がして見せたきをさな
百円玉十円玉を置いたままあそびにゆけり誰もさはらず
にこにことこちら向きゐる女の子大きな水筒かかへ開けられず
首里城を建て直さむとゆくを報ず此度はトレーラーと木遣唄行列
間引かざりしプランターなる水引草花茎長く數無くも伸ぶ
「原爆小景」指揮する人のその母の髪脱けていま資料館にあり
雑煮らしき椀を為立ててその二つ置きて迎へぬこの年もまた
ソウルには人なだれ起きインドでは吊り橋が落つウクライナにミサイル
七十年前なる言葉「専守防衛」爆撃機しか世にはなかつた
岡本太郎搏たれしかたち縄文の火焔型土器に奔放はあり
里程標四十四番隅田川より二十一キロと立つわが川辺
わが街の川に居つける鴨の二羽こごれる水に浮きていねをり
達磨とふウイスキーにて久に買ふ今に保てる四十三度
隠れたる者がすべての争ひを仕組む説あり陰謀論といふ
太き幹に小く芽のあり桜ばな二つ三つ咲くつぼみも持ちて
さくら木の枝えだ花の遅速あり満開のえだ若芽もつ枝
雪積めるあとの公園ぬれてゐる土に子どもら坐りてあそぶ
あづまやの外にて靴の土はらふ一人をりたり三人のうち
遊具より遊具へ走るをさなごを母親が追ふコートなびかせ
風つよく人のすくなきすべり台かけのぼり滑る今日は女の子ばかり
月の極に氷あるゆゑ住めるといふどれ程あるか判らないのに
説明のつかぬ事件を新聞に多く読みたるこの月をはる
内裏さまへ五人囃子は西洋の古い楽器の五重奏です
たんぽぽの丸き綿毛のひとところ道に連らなり春闌けむとす
北の岸は日の当たるゆゑ南より早く花咲く護岸の川に
おほかたは新しき葉のひろがれる枝に桜の花ひとつあり
熊ならぬ鯉の頭に金太郎やはりまさかり担ぎまたがる
六月の壁かざるべきもののなく年の半ばを過ぎむ日にち
泣かなかつたと褒めて呉れたる扁桃腺だんだんしぼみゆきにし記憶
笹竹の貼らるる七月の壁に向かひてけふのリハビリのこと
ヘリコプターの航路ならむか一機ゆきまた行く白き半月の下
担任を変はるが不服と給食に異物を入るる教諭わからぬ
儀礼とふうちにあらむか大統領トランプいへるヤマノウエノオクラ
七夕をいひ飾らるる商店街せまき通りにサンバを招く
みんみんの遠くに鳴ける雨の朝けふの手順を考へてをり

機械とは傷むものにて車検には直さるること必ずあるを
「原爆と比較できる残虐行為はない」国境なき医師団会長いふ
広島の爆心地は病院なりきと昭和二十年その時
時刻はやき公園に年かさの子らをらずひときは幼き子らがころべる
夕ぐるる滑り台幾度も走り登りをるは少しく年かさの子ら
公園にあそべる子らに数多く父親がつく土曜日けふは
あづまやに鳩の一羽が迷ひ込み子どもに追はれ慌てて飛べり
公園に遊ぶ子のみな愛らしく家に帰ればさまざまあらむ
号令され体操するわれに壁の猫二匹が並び笑ひて招く
リハビリに会ひたる女性高校の同級生の妻女なるを知る
年上の義弟亡くなりにいさんと呼びくれたりしことの思はる
ハロウィンのポスターにゐる木菟は梟が本来だつたのではないか

乾（いぬい）　義江（よしえ）☆（茨城県）

活力の源

病癒え禁を解くぞとハイボールを作りて今宵一人嗜む
認知症の夫君の声の入り込みて故郷高知（たかち）から電話の知らせ
連れ合いを追うが如くに患いの快癒むなしく友代逝きたり
町なかを彩る菊やコスモスが晩秋の空に映えて明るむ
すっかりと葉を落としたる鈴生りの渋柿立ちて青空に映ゆ
クリアする権田のパンチング見応えあり燃え上がらせるサッカーW杯
念ずれどベストエイトを取り逃がすPK戦は運のいたずらか
重たげに木蓮の葉の日毎落ち風ある日には嵩高く積む
マフラー首にアシスト自転車漕ぎゆけば寒さ吹っ飛ぶ師走の町に
我が夫婦の二十七人もの甥や姪が古稀喜寿傘寿と賑わす賀状
特訓受けペイペイ払いに切り替えれば何と便利に支払い済みぬ
マイナンバー健保に通帳など持ちて我が内さらすごと市役所に行く
八王子が揺れて間を置き茨城揺る会話取られたる小さな地震
朝まだき甲高き雉の一声に夢見心地の我は目覚める
自転車で小道をゆけば吹く風に刺される如く頬耳朶痛し

シャンシャンが五年八ヶ月で中国へ別れを惜しみ人寄り集う
風に靡く弔旗の小旗の弥増してウクライナの国見る影も無し
見て見てと三品添えたる丼の写真送り来孫はスマホに
案ずる我に孫は手作り見せむとて思い付きたる気遣いうれし
アメリカとの決勝戦に久々の感動味わいエキサイトする（WBC）
「勝ったね」とライン送れば「やったね」と息子のライン日本優勝
何も彼も値上げ値上げと聞こえくる憂いに沈み夜風身にしむ
薔薇科にて何故か木瓜（ボケ）と名付けられ華やかに咲く庭の片隅
八重桜の並木を仰ぎ思い出す造幣局の彼の通り抜け
曇天にそこはかとなく雲雀の声囀り聞けば心浮き立つ
家裏に回れば射干の花盛り鋏を入れて仏壇に供華す
今将に千紫万紅の脇道に知る花のある知らぬ花ある
最近の買い物すればレジスターにまず聞かれくる支払方法
ゴルフ場の森の小道を水無月に自転車漕げば鶯の鳴く
瑞々しい紀州南高梅を梅干しに嫁御に頼まれ四キロ仕込む

誕生日に退院し早や一年過ぐ嫁御より届く寿ぎと河豚
赤々と金魚草の咲く曲り角垣根の外に食み出しており
出来るなら新鮮な生姜をと求め来て孫らの好みし紅生姜作る
一言のメールの遣り取りを嫁御から請われて始める「今朝も元気」と
何時の間にか息子も孫も参加する言葉で来たり絵文字で来たり
可愛らしい装飾文字に事足りる「体調はＯＫ？」に「はーい」の絵文字
石垣を越えて土竜の来る穴に薬を埋めれば場所違えくる
植えおけと貰いしトマトと胡瓜苗プランターの中に実を生らしおり
公園の林に蟬のかまびすし触れたきような綿雲浮かぶ
戦争とは言うも愚かなりウクライナの惨禍を見れば心いたいたし

赤彦が晩年の述作で長い間苦しんで鍛えあげ悟入した歌の道を簡単明快に説いたものとして、茂吉が赤彦を評している言葉があります。それは「赤彦第一歌論集」です。「自己の歌をなすは全身の集中から出ねばなりません。これは歌を作すの第一義でありまして、この一義を過って出発したら終生歌らしい歌を得ることは出来ません」と赤彦が説かれているのです。茂吉もまた、「歌はこれ将棋の如しこつこつと永き年月つとめよと言ふ」と歌っています。奥深い意味があるものと思いん。右ご紹介しました。

さつま芋の収穫終われば鶺鴒が留まることなく畑中突く
昨年は夫君の他界電話にて語り合えしが最後となりにき
帰郷すれば歓迎しくれしグループの皆八十歳になりなんとする
丁寧なる米寿の祝い市役所から金一封と褒状給う
一鉢に三花咲かせて持ちくるる菊の盆栽去年を凌ぐ
秋めけばやがて聞こゆる虫の音の浴槽の窓に今年は聞かず
明治時代の黒壁銀行が工房にカラフルに並ぶガラス製品
暮れ方の雲無き空に目を遣れば眉のようなる月の明るし
ビルマにて戦死せし母の末弟の連れ合い百二歳で天命尽きる
寝室の我が視野に入る満月を暫し立ち見しスマホに写す
黒と白の猫が戯れるを黙視する帰りその場の黒に異変が
血を吐きて黒猫すでに事切れる通る車にぶつかりたるか
道の真中に生々しくも黒倒る付かず離れず白猫の鳴く
激震のなかに　嬰児（みどりご）生を受け瓦礫のなかより救われ出で来
（トルコ）
生を受くれど母も家族も落命とふ嬰児の悲運に胸が塞がる
つくつくと水仙の芽の庭先に待ち焦がれたる春の気配が
隣家より梅花ほころび吹く風に放たるる芳香漂い来たる
満開の土佐水木の花じわじわと枝一面に垂れ下がりゆく
厨にて米研ぎおれば眩暈かと何と上下に家揺れ動く
（三月二十四日　震度4）
家失い況んや息子の命まで老女の悲嘆に貰い泣きする
（ウクライナ）
障子繰れば日向ぼっこの黒猫が逃げる道中確と振りむく
芥当番収集場から目を離せば隙を突きくる大きな鴉
昼の銀座に仮面強盗三人と対峙している女性の映像
義妹に似ず父似の姪が昼時に寿司を購い我にたなぼた
昨秋に紫蘇種を扱きてそこかしこに撒きておきたる無数の二葉
嫁御から横浜中華の品届く母の日と知る独り居の我
病みてすぐ階下へ閨を移せども早朝に車の音の騒がし
間食をしない私を知る姪が二個のケーキと刺身を持ち来る
早朝の窓の明かりにもしかして日干し出来るか紫蘇漬けの梅
二玉で三百五十万円と言う北海道の夕張メロン笑うしかない
雨多く日和を選び干す梅の上手く仕上がり一安心す
電柱の天辺に鳩の鳴き頻る茹だるがごとき暑さのなかに
美容院のプランターの側に油蟬拾えばひ弱き声に鳴きくる
見上ぐれば鶯飛び立ち瞬く間に枝移りをし姿消したり
暮れ残る西日何時までも窓を射し戸締まりするも思い惑えり
見過したるスーパームーンの観賞を嫁御の気遣いラインに送り来
ベネズエラと日本の戦い映像にバスケの楽しさ新ためて知る
生い茂る雑草のなかに真昼時蟋蟀の声涼やかに聞く
台風に戸を締め籠もるひねもすを眠剤飲みて一夜を眠る
小川に沿う道路の大方は水浸しと民生委員の訪いて言う
病葉の随所に見える土佐水木の暑さの所為か精気なくなる
リーグ戦阪神タイガースの岡田監督十八年ぶりに優勝なせり
敬老の日に強面の男の立ち入り来る嫁御が依頼のウーバーイーツ

井上菅子（いのうえすがこ）　（山形県）

馬よ友にならぬか

かつて兄が間引菜洗ひ持ちくれき今はその子が呉るる間引菜
己が名を記号のやうに淡々と告げて人間ドックに入る
産廃の大型トラック丁寧に磨かれ明日は何積むらむか
徒長して茎長くなるエケベリア芸術的だとわが独り言
掌に愛情込めて撫でやれば逆らはぬ猫大あくびする
鴉にも飽食の世か枝々の熟柿ひとつも減らぬ冬の日
一枚の田に寄り合ひて啄ばめる白鳥の護身涙ぐましも
冬の畑に降り立つ青鷺思案げに佇みゐるよ人になりたいか
いつの年の骨折なりしかそれすらも忘るる手首寒さに痛む
秘め事も無ければ多くの欲もなし雪しんしんと身を浄めゆく
過ぎゆきを顧みること徒労なり小雪混じりの風の言伝て
車庫前に出し置く古紙類軽々と回収車来て過去を持ち去る
さくらの花盛りの頃の一周忌夫会ひたからむ人選びをり
儲けより生き方ですといささかの手焼きのクッキー日向に並べ
移住して不便楽しむ人たちと不便を嘆く先住民と

廃業の後の数年看板の褪せたる文字にまた冬の風
「さとふる」の毛がにの小き甲羅剥ぐ納税額に見合ふ甲羅を
誰もゐぬ家に一人の誕生日春めく服に着替へて家事す
立候補の挨拶のあとちり紙の交換車くる春の街頭
外国人向けのテーブル背に合はず座布団足して宿の朝食
桜の幹夕日に照らされ一匹のくちなは上る血が青くなる
肌理粗きジャムパン旧き友人に会ひたるやうな懐しき味
気難しきらしきが一位優勝す競馬の馬よ友にならぬか
雉子鳴けど相棒は来ず休耕の荒草の中再びを鳴く
九十一年働き続けて余剰なき小さな体いま茶毘に付す
「笑点」の録画を見つつ朝食を終へてはかなき元気をもらふ
縁ありて娘の婿となる人の生家を訪ひぬ初夏の盛岡
クラシック聞きつつ鯖の塩焼きの朝食を食ぶ北ホテルに雨
盛岡城の石垣われの庭のごと誇りて語る盛岡市民
郭公鳴きうぐひすの啼く盛岡は緑豊かに朝が来る

車庫のシャッター閉め忘れゐる数時間誰も責めぬが一人落ち込む
雄二頭雌も二頭に子ども達二つの家族か蝦夷鹿の群れ
握手をと言へば応へてくれさうな蝦夷鹿の目の丸くやさしき
腹まろく太る鷗の飛ぶ海を見下ろして稚内公園の夏
車道脇の狭き空地に昆布干す利尻は朝も午後もまた干す
殺風景な腰高の窓汐香る宗谷岬のほつけの煮付け
丈低く水楢なびく丘陵に宗谷の風の厳しさを見る
盆灯の秋草の母衣畳みをり二度目の盆の霊も帰りぬ
夏雲を背負ひて迫りくる山の襞々暗む立秋すぎて
荒川に鮎釣る人をり期待の鮎宿の夕餉の膳に上らず

ＮＨＫ大河ドラマ、「光る君へ」がおもしろい。主軸は史実に基づいているが、肉付けは作者の豊かな想像力による物語である。紫式部の名前もまひろであったかどうかわからない。
女性の呼び名には、娘、おなご、お嬢様と幾通りもあるが、ドラマの中では「姫様」と呼ぶ。現代の「お嬢様」に身分が加わったものか。姫様という清音の響きには、爽やかさ清らかさ品の良さがあり心地よい。
道長とまひろの恋の行方も気になるが、清音の美しさに魅了され、一週間が待ち遠しい。

杜鵑草のわづかな花に群がれる蜂よ残りの命を惜しめ
いくばくも着ずに古着の回収に出す服無駄は白日の下
コロナ緩和の久しぶりなる旅に出で機上に一片のクッキーうまし
神有り月の出雲大社の人混みに願ひ事無き身を揉まれゐる
紅ずわい軒並みに売る市場内客無き午後の通路が広し
山形も島根も同じ裏日本慰むるなき枯生の景
四十六年共に暮してだれよりもわれの自由を許しし人よ
アスファルトの上に動かぬ赤とんぼ拾ひて石の温みに置きぬ
町道を渡るは狸か白鼻心日暮の話題に聞きて帰りぬ
雪の県境越えて夫に会ひに行く娘見送る週末金曜
健やかに実るアダンの写真載せ奄美への旅誘ふカタログ
野良着からスーツに替へて軽トラで議会に向かふ町会議員
テレビ局どこも触れずに十二月十四日今日討入りの日を
気楽なる一人がよいか孤独なる独りがよいか娘と暮らすいにしへの建築物の土台石窪みにうまく柱乗す
堅き蕾に霧吹きかけて真冬日に開花促す啓翁桜の
信号を待つ間にいつも吠えをりし犬も犬小屋もいづこゆきしや
凍傷に消えゆきしありバランスの崩るる多肉植物もよし
促成に咲かせられゐる啓翁桜意志にあらずと開かぬもあり
猫に野心なけれど人が意図的に盛り上げてゐる猫ブーム
技能五輪世界大会に銅メダル獲りし青春自らは語らず
名も金も遺さず人を遺すと言ひ後輩幾人慈しみし人
仏間より野鳥の見張りする猫が線香臭くなりて戻りぬ
石積みの上に吹かれて熊笹が寒風に鳴る乾きたる音
薄暗き棚にわづかなパン並べ買つても買はなくてもよいといふ店
コロナ禍に資格を取りて高校の教師になるとふ新聞社退め
畑の縁より摘みてきたると初物のふきのたう持ち君が現る
外反母趾の力加はるところよりソックスカバーの穴は広がる
Ａ４に車の型式細々と記して五百十円の領収書
教壇も児らの机もそのままに二十四の瞳偲ぶ映画村
現実と虚構の構成いつ観ても泣かされてゐる二十四の瞳
高松空港の待合時間に「相棒」の犯人いまだ逃走中
轢かれたる路傍の狐獣医師の君は山まで運び葬る
昨日より今日華やかに咲く桜八幡様の杜を見上ぐる
仏壇の掃除に線香臭くなるセーターのまま花買ひにゆく
広き庭土筆一面群生す廃業したる社長の屋敷
朝七時投票済ませ義務果すあとは無限の庭の草取り
従業員は若者ばかり取り揃へ仲居はすでに死語となるらし
呼び捨てにする人この世に三人ゐる娘と姪と六十の甥
あでやかな花苗植ゑて夫亡き後趣向が変はるどこかが狂ひ
艶やかな花ばかり植ゑ夫亡き後心にはなき色の花々
貧しかりし兄の幾年支へつつその子ら素直に育てし義姉(あね)は
九十一の旅立ち送る縁類の似る顔もあり似ぬ顔もあり
大西民子の歌に憧れゐし日々を鮮やかにして歌碑にまみえる
新婚の啄木住みし借家の庭青き豊後梅が落ちゐて
望郷の念深かりし「病のごと」の歌碑静かなり天満公園に

一室のみ明りの消えぬ県庁の向ひに宿る盛岡に来て
在りし日の夫と行きにしカンボジアの夜市思はす盛岡「よ市」
ゆすら梅赤く実らせ微風だになき初夏の庭われは客(まらうど)
軒下に雌鹿くつろぐノシャップの民家の景に癒されて
岩の上に羽を広げてくつろげる海鵜も礼文の島民か
天命が尽くれば苦労の人生も終焉となる盛夏の葬り
夜はスナック昼工場で働きし若かりし日のあなたを思ふ
紫斑病に二男失ひし悲しみも語ることなき己れのことは
化粧品のセールスをして自転車で日焼けせし日の彼女を偲ぶ
父親は鮒など売りて暮しをりき母なき娘時代を知れば
人生に褒美はなきか後年は脳梗塞に不自由な身ぞ
山裾の施設勤務の娘(こ)が帰り熊に唐黍喰はるる話
手垢つき表紙摩り切れ相棒の飯塚書店『短歌の文法』
亜彦が読めずに問へば「つぐひこ」と笑ひて言ひき清水亜彦
東北大会懇親会に隣り合ふ清水亜彦五十代なりしか
享年六十一歳「日月」を知ってゐるかとかの日の彼は
土の香のほのかに匂ふ天然の茸買ひたし出で湯の旅に
土蔵の屋根越えて真赤き百日紅見下ろす宿に他の客無し
豪農の館にもらふ倹約の標語は皺を伸ばして掲ぐ
たわい無き会話がもつとも大切な思ひ出として夫在りし日々

井上鈴子(いのうえすずこ)　（山形県）

兄の車

大房の一粒づつがハート形の子らの頬張るシャインマスカット
シャインマスカットを薄く包める緑色の菓子が好みと兄は笑みをり
旧校舎をカフェになしたる大き窓の雪吊りの松はや雪催ひ
校庭の落ち葉を夫と踏み歩き忘れてゐたるときめく心
帰省子を待つ一人居の兄に送る餅と節料理また雪となる
熊野大社の三羽の兎見たる子は八幡神社の後ろも探す
寒鱈の兄より届き離れ住む子を誘ひをりどんがら汁に
コロナ禍の収まり蔵王のスキー教室寒波は児らの楽しみ奪ふ
竹笊に干したる茄子は日の匂ひ残りて冬の朝餉の煮物
根雪早く寒波の三つ過ぎたれば花屋に買ひぬ黄のチューリップ
箪笥より姉の縫ひくれし服出して普段着にする数年を経て
友は手に啓翁桜持ちきたり花見の約束果たさずに逝く
流れゆく杉の雄花の黄土色風の形を眼(まなこ)に追ひぬ
折折の兄のメールの途切れたりわれのメールに既読はつけど
やうやくに電話繋がりたる兄は体調崩し検査の途中

家に来ても本を離さぬ兄なれど臥して見てゐる相撲中継
入院日玄関前に立ち兄は家を久しく眺めてゐたと
木々の葉の緑極まる今日聞きぬ兄の病の治らぬことを
四つ葉のクローバー探して届けきたる孫の顔見て涙する兄は
北枕に横になりたる兄の庭小雨にぬれゐる白菖蒲　紫蘭
玄関の兄の作りし人形を日々撫でてゐる兄の背のやうに
七十四歳の兄に贈りし甥からの『80歳の壁』われに託さる
駆けつくる甥もわれらも待たずして一人逝く兄何急ぎしか
納骨の終はりて兄の畑隅に蕺草の白き八重咲きのこる
縁側に庭を眺むる兄なりき格子のシャツで座つてゐさう
生温き今宵蛍が田のうへに月命日の兄よ見に来よ
ちちははと並びて兄の遺影ありまだまだ先と思ひゐたるに
還暦に兄に貰ひしスニーカー元気で歩けと花と笑顔と
子らの背を越ゆる向日葵咲きさかる兄の植ゑたる畑の二列
炎天の熊野大社の風鈴の音は涼やか一斉に揺る

熊野大社の境内のなかに残りゐる空蟬いくつ命をつなぐ
牛に乗り父は帰つたと盆棚を片付ける甥提灯仕舞ふ
手離すと決めたる兄の車のそばに立ちゐる甥は夕影のなか
大根の種蒔きせむと向かひあふ熱き大地に暑き大気に
大根の双葉の伸びてぎざぎざになれば地中も伸びてゆかむか
薔薇の葉の丸くなりたるこの暑さ雨の続けばやうやく開く
三月前の兄の名義のものなべて変へて寂しむ甥に声かく
灯台へ白波見つつ行く道に白き浜茄子咲きのこりたり
酒田灯台に子らと上れば遠く見ゆ兄の釣りせし粟島の影
旅先に兄の求めし蓮肥えて村の北沼に貰はれてゆく

小さい頃から本が好きで読むのみの生活でしたが、井上菅子先生との出会いで詠むということを知りました。草花のことなど詠むことで暮らしが細やかになりました。この前は「クリスマス近き昨夜の夢のなか孫に贈物したいと兄は」と兄の孫にプレゼントと短歌を送ったところ、我が家に来たときこの短歌を諳んじていたので兄にも通じていたと思いました。これからも嬉しいとき悲しいとき、何もないときもその時々を詠みたいと思っております。

三島池の片葉の葦に止まりゐる赤蜻蛉にあまた秋の陽注ぐ
高畠石は切れ味瓜が割れるほど瓜割石と聞けば親しも
わが村の文殊堂の礎も石段も瓜割石と聞けば親しも
大立洞窟は急な山道つづく先縄文人の住みし空間
イヤホンしスマホに見入る中二の子唇かすかに英文字を追ふ
草引きの合間に腰かけ鱗雲のうろこをひとつづつ数へをり
美しき散居村なるわが町の成立ち聞けば水不足なり
水不足を克服したる先人なれど容量越えて今雨は降る
幹からの水分貰へぬ木々の葉は紅く色づき秋すすみゆく
首青くまるまる太り種の絵とそつくりに育ちたる大根を抜く
旧校舎の長き廊下も階段も黒光りして児らの浮かび来
タスビルの山辺ニットの展示会に夫買ひくるるセーターひとつ
初雪の下になりたるアスパラ菜の黄花を挿しぬ流し台の上
最上川を上りてきたる陸鹿尾菜（をかひじき）南陽の地に根付き産地に
酒米のCMに見る大平はスキーの回転覚えしところ
裏畑の雪嵩増して穴を掘り林檎を入れる傷まぬやうに
天然の冷蔵庫のやう雪穴の林檎を食めばさくつと春の香
いつか孫と行けたらいいと取り置きたるスキーウェアを処分すと決む
いつか子の結納用にと姉のくれし服は一度も着ずに過ぎたり
病の子と知らずにゐたる入学のスーツにいまだ縋りてをりぬ
入学式の笑顔の写真あればよしスーツ処分し今を生きなむ
バレンタインに夫に送るは古里の辛口酒と菜の花二本
耳も目も悪いと嘆く甥の子よ生きてるだけでわれはうれしい
日の差して桜の枝の影の伸ぶ子らの通ひし校庭の雪
一面の雪消え初めて黒き畔一枚づつの田圃現る
二、三箇所混み合ふほどに集まりて餌を啄む白鳥の群れ
稲刈りの農機具からの穂のこぼれ啄む白鳥を業者見てをり
腹満たし長（をさ）らしき白鳥高く鳴きつぎつぎ飛び立ち空のぼりゆく
春彼岸の住職を待つ仏間には暖房に揺るる供花のストック
蓬・三つ葉・犬のふぐりも出てきたり温き日を背に歩む農道
去年の夏の豪雨の故か東一華土手の中程に咲く二、三株
出発し一時間のち七ヶ宿の道に枝垂るる山吹の花
七ヶ宿の街道沿ひのダム広く水満々と春の日に照る
白石の城の廻りのシャガの花生家に咲きゐし素朴なる白
「おくりびと」の地吹雪のロケの道に見る黄砂のなかの鳥海山おぼろ
外壁の修理の足場の苧環を守りて兄は小石を除く
食べられず横になりゐる兄と聞き三時間半車走らせて行く
応援に行くはずの孫の運動会ケータイの動画臥して見る兄
文殊堂の村の掃除したる夫の言ふ兄の回復祈りてきたと
マルチかけ茄子胡瓜など植うるときに畝のままなり兄の畑は
がんといふ言葉の重し漢字ならやまひだれのなか石が三つも
4南病棟のティールームよりカントリーが見ゆ兄尽力の
小鳥鳴き草刈機の音をちこちに真夏の早き朝は賑やか
兄が星になると思へず雲の間のブルームーンに吸はるる心地
天気予報に雨マーク出て肥やし撒く地温下がらぬ畑の段取り
真夏日の昼下がり飛ぶ黒揚羽残り少なの木槿に止まる

井上槇子（いのうえまきこ）　（新潟県）

気候変動

わがバイクを試乗せる夫暴走し木々薙ぎ倒しシャツを破りぬ
紅葉せる裏山になく小鳥らに間（あひ）の手入るる啄木鳥の声
植木屋の畑に囲はるる木々の花綻び初むれば赤札貼らる
心中を柔軟にするとふ曼珠沙華細き花びら絡むごと咲く
茎細く葉のなき形の曼珠沙華濃き朱の花時をり震ふ
年の暮れ極まりゆきて空青く晴れたる真上に鶴渡りゆく
日の匂ひたたむごとくに洗濯物重ねてをれば落葉の香りす
押し並べて今年茗荷の苞のなか緋の鮮やかな穂花を抱く
大振りの茗荷と書かれ緋のわけは気候変動と新聞にあり
降り初むる雪片大きぼた雪ぞ八手の緑の広葉動かす
大雪に融雪装置の止まりゐて三日遅れの新聞届く
ゆるやかに除夜の鐘つく僧なれど体すみずみ気迫みなぎる
ひとかたまりの高校生とすれ違ひ吹雪に紛る強き体臭
時をりに語彙忘れたる友とゐて短縮さるる会話寂しむ
年の瀬の高きに吊しし飾り松降ろせば綿虫八方に散る

寒風の通る軒端に吊るしゐる色取り取りのかたもちのすだれ
飼猫の緊急要する尿路結石に夜半対応の県都に走る
精密の機器の検査に結石の数多みつかり手術となりぬ
高速道初めてと言ふ娘(こ)の運転に猫抱きつつ吹雪に震ふ
筋肉の下に水の溜まるとふ猫の術後の腫れはテニスボールほど
面会に猫の名呼べど丸まりて虐待されたるごとき目差し
立春の早や雪原のはだれゆき二度のどか雪に油断はならず
嵐去り桜名所の駐車場車こぞりてピンクをまとふ
桜花すでに散りたる春祭り気象嘆かず人ら宴す
雨のなか畔草を刈る老夫婦顔あぐるなくひたすら進む
方言を気楽に遣ひ整形医老いに触れつつ痛き箇所聞く
痛めたる首を牽引する時に顔歪めつつ媼と向き合ふ
立春の市に出前の湯気立たぬラーメン食みつつ女は商ふ
ささやきに似るか憂ひにさまよふか風に桜の花びらは散る
母の日にカーネーション供へ墓参せる青年われに花束くれぬ

コロナ禍の咳込み多き医院でて肺腑に深く春の気を吸ふ
忽ちに葉のおほひたる雪柳五弁の小花は影に咲きつぐ
うら年とふ今年不作の筍を出荷の人らの嘆き耳にす
山竹の子ほそきを夕餉の味噌汁にこのしこしこ感をわれはいとほし
盂蘭盆の近づく日々に気負ひたれど客観にして足の痛みに萎ゆ
み骨となりて行ふ葬儀初めてぞ安らぎそそぐごと通り雨降る
夏の夜に夫の取り次ぐ電話機に大蒜食みたるにほひが残る
連日の酷暑に逝きたる人多くみ骨に弔(とぶら)ひ本葬待ち有り
手に余る期末の荷物軽やかに下校する子ら休みに浮き立つ
庭隅の暑き光に時季過ぎて咲く向日葵は枯葉をまとふ

昨秋の終り頃から玄関の前の雪見燈籠の中に雀が巣をかけたので、わが家は「雀の宿」になった。巣箱を下げても巣をかけないのに、と思うと嬉しさに声を上げた。私は毎日朝晩見る事を楽しみの一つとした、そして色んな事を思った。北原白秋の「雀の卵」の随筆集には、白秋が雀にかけた愛情の温もりが書かれ、また「人間どもの煩さに比べたら雀の囀りは優れた音楽の様だ」と。花や若葉青葉の季節になっている庭を眺めながら自分の命の移ろいと儚さ、また雀の雛がえりを見つつふと焦燥感に駆られたのである。

筍の育つは霜月色付ける葉群に竹の青々戦ぐ
おくてなる地這ひ胡瓜の霜しらず葉陰に潜りて友捥ぎくるる
物入りの多き年の瀬スーパーの太き数の子甚く気に掛く
手伝ひの人の病に派遣の人頼めど慣れず互ひに疲る
料亭の澄みたる池に泳ぐ鯉見ればひなびた我が池想ふ
銅板に変へたる御堂の屋根雪は暖気につれてザラザラと落つ
販売機ひとつ据ゑられだしぬけにわが駅舎は無人となりぬ
正月の忙しき日々は寒くして夫の渋面いたく気に掛く
結石の持病の発作の猫乗せて雪の悪路に医院に行き着く
雪晴れの機会逃さずノーマルのタイヤで通ふ動物病院
法要の終へて持ち来る道具箱焼香の煙隙間より出づ
雪晴れの日暮れの屋根に止まりゐる鴉の声の徹る寂しさ
本堂の飾りやうやく終り来て年越しそばの長芋をする
風やみて大晦（おほつごもり）の夜の卓に子の焼きくれたる鮭の身ほぐす
雪消えの暑き日続く杉木立花粉アレルギーの早も兆しつ
笑ひつつわが欠点を言ふ夫機嫌良きとぞ子らは話すも
予定表記す法会の続きゐて連休近くの雲の輝き
人混みのなかに喪服の団体のひときは大き笑ひ声響く
竹群の葉の絶え間なく散る日ありて筍最盛期みじかく終る
長き年先祖の供養をせぬと言ふ若きが五人の法要決めに来る
日盛りの納骨式に箱二つ抱へる老人時によろける
晴天の庭園めぐれば連翹の黄の濃き花の輝きまぶし
切り岸の筍掘りに痛めたか足の激痛だしぬけなりて
原因を探りて医師は日常の動作の変化を幾度も尋ぬ
足庇ひコールで応答せる後に玄関に行けど客は帰りぬ
佐渡ヶ島時雨れて見えず出雲崎海辺のつはぶき光り際立つ
宿の猫自動ドアの開閉にしなひて出入りの様に見飽きず
満月に誘はれ出づれば丸き目を光らす隣屋の猫と出くはす
初物の西瓜に包丁入れたれば厨に瞬時夏の香の満つ
車庫入れの操作違へて傷跡にマジック塗るを夫は呆れる
磨ぎ汁の殊更白き新米を珍しく誉む味音痴の夫は
宵空の黄に濁りたる満月に兎の形があると孫言ふ
庭隅に重ね枯れたる花束の朱の実めがけ小鳥ら飛び来る
献立と相撲の勝敗思ひつつ日暮の道をスーパーに急ぐ
梅雨明けの酷熱にして樹木葬開眼供養の明日を憂へぬ
戦ひのごとき酷暑に裏庭の紫陽花にいくばく心明るし
梅雨に入り暗き部屋にて亡骸の義姉に品良き紅を引きたり
巡業の街中歩む力士らを追ひて見れども知る顔のなし
噴水の装置壊れて石橋を打てるしぶきに鯉は群れをり
水浴びをせるごと老は古池に入りて噴水の泥除き呉る
タイル張りの玄関などに寛げる猫は涼しき場所に腹這ふ
鬱葱と夏の荒草はびこりて終戦日の暑き草いきれ呼ぶ
棚経の手伝ひ終へて都に戻る男孫らホームに爪立ち手を振る
姥桜と呼びたる寺の老木を伐ればその木を惜しむ人あまた
常に人疎らな駅の構内は明り節約せるか小暗し
生れ来る子の性別の分かる世ぞ若き夫婦は御雛様予約す
夫を長く看取りたる友柔らかき布団に眠るを落着かぬと言ふ
葉や土の付きたるままの枝豆をどさどさ貰へど対処の出来ず

岩渕綾子（いわぶちあやこ）　（岩手県）

旅のつれづれ

奥つ城の夫の片方（かた）へに行く日まで離り住む子とスマホで交はる
山やまの囲める大船渡湾台風を避け錨を下ろす
幾星霜支へくれたるともがらに名残は尽きず歌友らに感謝
老いたる吾覆水盆に返らずを心にとどめ歩みてゆかむ
皆既月食を運よく見たり東（ひんがし）に同じ夜空を見上ぐる人等
久しぶり短歌の集ひに出でたるにコロナが邪魔し会へぬが悲し
ミレニアムわれを誘ひし短歌（みじかうた）心身ともに支へくれたり
コロナ禍に日毎悩みは深まりぬ吾がデイケアも疎らなりける
佐々木朗希わが仮設のころに在校せしや完成間近の四階建校舎
日本丸歓迎受けて入港す「御祝ひ」ありて太鼓の乱舞
冬の使者オホワシ飛来の大船渡さもありなむか雪が舞ひくる
正月の一週間の介護終へ長子帰りて暮らし始まる
都会つ子高田移住の若漁師かき養殖に奮闘中なり
内陸より予定早めて息子来ぬ十年来の寒波恐れて
息子言ふ「ヒートショックに気を付けよ」即脱衣所にストーブを置く

冬ざれに紅き山茶花ながめつつ老健にゆく送迎の群れ
福寿草リハビリ前の庭園に日毎にふくらみ春の訪れ
己がため辛きリハビリ励みゐる褒美はボッチャ幼にかへる
二月十九日雨水に入りてこぶし咲く待ちたる春が日毎近づく
3・11後倒(こ)けつ転(まろ)びつ人びとは未来めざして歩みてゆかむ
十三回忌こぞりて市民手を合はす気仙の祈り折鶴流し
流さるる直前の吾が家テレビに映り息子ラインに動画送り呉る
お彼岸に3・11の魔の映像ひとり居のわれあの日に還る
終戦は開墾畑の帰途に聞く学びを鍬に持ち替へたるに
昭和二十年学制改革に学徒らはあまたの道に分かれ行きけり
夫逝きて還暦祝にゆけぬ吾を南三陸町に招きし友ら逝く
結婚に父がくれたる職業ミシン二度の津波に跡形もなし
父曰く手にある職は誰も捕らぬと明治生れの頑固者なり
障害を持つ子らは皆健気なり老いたるわれは教訓を受く
ユーターン足が不自由で手で漕げり物ともせずに一回転す

仏壇に花供へたく杖を突き野の花摘みて心が和む
うつせみの油断なくあれ何時の世も今日は他人(ひと)の身明日はわが身ぞ
3・11の津波に流されたる実習船クレセントシティに漂着したり
アメリカの現地高校生の呼びかけに実習船「かもめ」里帰りしぬ
戻りたる実習船「かもめ」に感動すどこどこまでも生き抜くことに
君子蘭初に花咲き胸をどる自然の風の偉大さ知れり
セミナーに出席のため息子来ぬ僅かの刻が至福の時間
彼岸花デイケアに見る行き帰り季節たがはず傾りに咲きをり
地方紙にコロナ情報目に入りて感染減に心やはらぐ
故人曰く「つなみてんでんこ」この教へ園児が歌ふ坂を登つて

私は旅人。生まれは大船渡で父の都合で小学校入学直前に、母の故郷の宮城県本吉郡大谷村に転居して、小学校に入学。大谷国民学校初等科六年卒業し、県立気仙沼高等女学校に入学。終戦に依り学制改革があり、四年間のバス通学の末退学。その後、気仙沼高等服装学院の本科研究科を卒業して、三十一年墓守りとして結婚し、大船渡に戻りました。チリ地震津波、東日本大震災、そして千葉での避難生活八ヶ月の後、大船渡に帰って来ました。川又先生始め、大山先生、小林先生、桜井先生、そして冬雷の友等に深く感謝申し上げます。

言の葉に短歌に非ず繰り言と言ふ人ありて心が痛む
小春日に恵まれ長閑けき大船渡日中は日日エアコン要らず
デイケアの職員さんもリハビリの人も日毎に少なくなりぬ
震災後十一年と十ヶ月住民は知恵集め数多の事業す
大船渡「アクアポニックス」を始めたり空地に蝶鮫・レタスを飼育
高田市は少子高齢化にかんがみて自動運転車の試験を始む
都会つ子就職内定辞退していばらの道に進みゆくやも
親身なる親方若漁師に配慮せり養殖棚に漁船のことまで
コロナ禍にデイケア人も職員も言葉少なに平静装ふ
コロナ禍に落着きが見ゆボッチャにもリハビリ人の明るき声す
デイケアの送迎バスの乗り下りに「よいしよ」と声かけ呉るるドライバー
Z世代暗きニュースに心が痛む親子で語らふ時間が欲しき
春を待つ三寒四温身に染みてトルコ・シリアの人々悲し
3・11後わが住みたりし浜町はまぼろしとなり危険地帯に
職員さんスマホ苦手な人びとに教へくれたり嬉しかりける
デイケアのボードに貼れる「佐々木朗希」老いたる人らの活力となる
3・11に被災の人らを支援する大本となりしグループ気仙苑
テレビにて外国人の花見客津々浦々に景観あまたしだれ桜ベランダ前に眺めつつ卒寿のわれはあまたに感謝
週一度三十分のマッサージに知人来たりて活路を見つく
テレビ映画「ほたる」に思ふ卒寿われいかなる時代も戦争は駄目
マグロ漁大大漁の二六五本フォークリフトの往来いかに
マグロ漁圧巻の光景におどろけど漁獲枠を危ぶむ人等あり
盛岡に夫の墓参す車椅子を子ら交ごもに押してくれたり
入院中に日毎眺めしレストラン子らと集へる度に満席
大船渡より三時間弱を今日もゆくこれが最後か逢瀬を惜しむ
震災前おもへば吾も二刀流そは洋裁と和服の仕立て
農道は鬱葱として重苦し節ぶし痛み老いには辛し
宮沢賢治のSL銀河ラストラン沿線住民に惜しまれつつ消ゆ
その昔機関車の煙に悩みたりき時はうつりて懐かしきかな
ホーホケキョ声はすれども姿なく梅雨入りなれどのどかなりけり
デイケアの職員さんはみな優し温もり求め心のままに
リハビリに花を愛でつつ励みゐて痛みを忘れ穏やかになる
天候に惑はさるる身となりてデイケアに行くをためらふ人出づ
運悪しく線状降水帯に被災したる人らを思ふわが身の如く
プールには体のハンデ乗り越えて懸命に水を掻く女の子
ホテルニューグランドに一泊夢のごとし横浜中区の招待うけて
バスローブ記憶に残る旅路なりマッカーサーのゆかりと聞きし
震災後に飛鳥の縁で浜町・須崎・横浜中区の招きを受けし
新設の博物館に子らとゆく帰省の息子が車椅子押す
陸前高田・クレセントシティは姉妹都市となりて交流に心が弾む
かき氷ボランティアの学徒らよ気温37度に唯に見送れり
博物館に実習船「かもめ」見てその綺麗さに違和感おぼゆ
クレセントシティに「かもめ」辿りつきし二年七ヶ月の跡形もなし
避難先の苦しさ思へば眠られずあまたの優しさ深く身に沁む
名月に北の友よりメール来ぬありがたきかな冬雷の縁

植松千恵子（静岡県）

一日を大切に

これまでに経験しない台風と予報の度に言はるる不安
炎天下にマスクヘルメットして来る人に麦茶を出して詐欺の注意受く
注文のラーメン運ぶロボットに競つてタッチする孫二人
秋日和稲刈り終へた黒土に群なして鳩と雀下りくる
救急車が信号待つてると幼な言ふお仕事終へた帰りだからね
菊祭り今年は鶴ヶ岡八幡宮模る会場は菊で被はる
国境など誰が決めたか戦争はそこから始まる世界は一つ
赤ちやんをあやすつもりが突然に老人顔の我を見て泣く
お砂糖とおを付けただけで丁寧に優しくなれる日本語の力
大切にサクマ式ドロップなめてゐた貧しき昭和を如何に伝へむ
人住まず錆びたる門扉に蔦からみ主居た頃の交流思ふ
幼かりし孫らと入りたる風呂は四人で鮨詰め百まで数へて
寒卵滋養になると友持ち来る何よりの御馳走卵かけ御飯
銭湯が更地となりて早二年ここを愛した爺達も亡く
叔父亡くなり通夜も葬式もせぬと言ふ線香一本の寂しき別れ

ＰＫ戦はキーパーを試す心地して見守る我の胃が痛むなり
補虜となりたるロシアの将校戦争の意義がわからぬと取材に答ふ
出先から風呂のスイッチ入れるとふＣＭあり顔認証あり暮しの進歩
伊豆巡礼御朱印集めに付き合ひて来たる山寺みごとな天井絵
床下の物入れにある数多の茶碗捨てるに惜しい義母の遺品なり
葬式も法事も家で取り仕切る義母は食器を揃へてゐたり
春闘は大企業アップで決まりたり大手支へる中小厳し
ＡＩの知識も大事根幹は生産すること食料得ること
大谷さん素適な球宴ありがたう野球も態度も申し分なく
執念の舘野泉のコンサート左手の為のピアノ作品
その権力戦禍となつても取りたいか犠牲になるは平和望む民
草餅と桜餅並べ友が言ふお好きな方をと両方食べたし
暑い日にマスクはづして電車に乗り緩和されたが視線を感ず
のけぞつて全力で泣く赤ん坊しつかり抱へる落とさぬやうに
孫の為開いた童話に息子の文字このいたづらは君のパパだよ

子を産めと言ひて三人目から手当て増しそれでもお手上げ少子化対策
聞いててねと九九諳んじる二年生間違へたと言つて又初めから
早朝に畑に鹿が二匹ゐるどこから来たのか凛とした姿
川べりにパッと広がり音は後花火に泣いた子は三児の父に
あちこちと畑をつついてゐた鳥が太蚯蚓くはへる戦果のごとく
草むしりすれば蟻だんご虫腕に登る隠れ家無くして逃げ惑ふ果て
まだ暗き早朝ウォーク蟬は止み虫の音がして秋忍び寄る
飛蚊症風呂掃除中にあらはれて虫飛ぶやうな悩ましき日々
笑顔にてお陰様でと礼言はるそのひと言が我の喜び
秋場所の大一番の熱海富士地元は挙つて声援送る

短歌との出会いは十三年前。たまたま見た短歌雑誌に「添削します」という結社がありそれが冬雷でした。川又先生には手取り足取り短歌の作り方を御指導いただきました。初めての冬雷大会で隣りあった方が岩手の村上美江さんです。震災にあったこと、御主人を亡くされたばかりと言うことなどいっぱいお話を伺い住所電話番号など交換しました。その彼女が歌集を出すまでに飛躍し、すごいと賞賛します。私も歌を詠むことを生活の張り合いとして、言葉を大切に人を大事に、奢らず生きていきたいと思います。

明々と何の光か顔出せば東の夜空に十六夜の月
十三夜芒の先に穂がついて紫苑と鶏頭里芋供ふ
青芒新道用地で猫たちがもらひ餌食べ背伸びしてゐる
新蕎麦の貼り紙につられ一人入る香りと色愛で筈を味はふ
テーブルに林檎の香る昼下がり絵本読む子の声に転た寝
捨ててと嫁の持ち来る靴数多壊れてをらず誰か履かぬか
散歩道小さな神社に注連飾り夏は荒野で冬には枯野
寒いだろ百日耐へれば春が来るさう言ひて見るキーウの人々
汚染され人住まぬ家のカレンダーは前の卵の年月日は早し
欧米の軍事援助のある限り戦争止まぬとロシアの捕虜言ふ
伊豆遍路修善寺で終はる御朱印は一年かけてバスで集めたり
遠目には黄色の固まり近寄ればタンポポ数多地に低く咲く
遠き日に雛段前に孫を抱き親子四代写真を撮りき
写真の孫は大学義母は逝き吾は白髪雛の日の過ぐ
タンポポの綿毛一本吹いてみる種を運びて飛べ思ひ切り
さつま芋は種を蒔くかと思つてゐたといふ子に驚き暗澹とする
風強く花びらひらひら舞ひ落ちて透明傘にいつぱいの桜
苗箱に種籾蒔いて安堵する気を抜くことなし収穫までは
箱苗の種籾突きに来る小鳥囀るこゑにかはいげもなく
百均の広い店内見て回るペンキも下着も何でも揃ふ
若者が日常使ふ「やばい・めちや」語源の方向ずれてゆきさう
青い実が紫になり李たわわ近所に言へばバケツ持ち来る
伸び伸びとパセリの群の育ちゐて摘めども減らず緑こんもり
父の日に甘味控へてゐる夫はあんこ二倍のドラ焼き贈らる

四年ぶりの花火大会待ち来たる街中は店と客ごつた返して
初物の西瓜を前に包丁を入れむとしつつ我緊張す
店先に冷やし中華とかき氷このたれ幕と貼り紙待ちゐし
柿若葉所々に夏陽さす見上げれば青き実すき間なくあり
ヴィヴァルディの「四季」が流れるラジオから何かうきうきバロックの調べ
叔母は言ふ「扇風機で良いクーラー寒い」汗だくの吾には信じられず
この猛暑自然が成せるだけでなく便利さ求める我らも一因
松林に草刈り機の音響きをり町民総出の下草刈りに
この頃は曲がりの多い瓜と茄子夏の終はりで力尽きたか
上空にどこから来るかトンボ舞ふ地上は暑くても秋は来る
どしや降りと日照りを足して均せぬか天気予報は進化したるに
孫達のスマホ返信の速さ見て我の入力鈍く恥づかし

卯嶋貴子（うじまたかこ）☆　（東京都）

四季の生活

突然に青梅から立川へ来る友と十年振りに会う約束す
ランチのあと友と公園を散歩する木々に陽が照り黄の葉の光る
子育ての頃から四十年過ぎてこころをゆるせる大切な友
動物が苦手だった五十年カラスの雛が今はかわいい
甘えてくるカラスの雛は家のアイドルいつも誰かに声をかけらる
陽のあたる部屋に移したカラス小屋夕方は毛布をかけて暗くする
新しい水に替えれば水浴びていつもつやつやしているカラス
正月に一年ぶりの孫に会う大人びて背を越されたり
草加から遊びに来たる孫三人ゲームをやめて将棋と百人一首す
中学の女孫がピアノを練習す何時間も倦きずに弾いて
大きな鉢に植えかえたシャコバサボテン今年は多く花咲かせたり
今年の渋柿は豊作にて家族総出で干柿作る
深夜便のトークが楽しいテナー歌手錦織健のコンサートに行く
中央にピアノが一台幕もなく音響の素晴らしいオペラシティホール
久しぶりのコンサート森麻季のコロラチュラソプラノに幸のひととき

イタリアのオペラの言葉は解らねどテナーとソプラノの美しい声
平日の昼間のコンサート観客は若い人より高齢者多し
雨の日が増えて二月は寒けれど春の兆しかロウバイが咲く
若い男二人がチャイムを鳴らしおり強盗事件思い恐怖をおぼゆ
地球はたえず変化する地震が起きウイルスが飛び戦争止まず
気持ちよい南風うけて木が芽吹きサクラ花散る中をドライブす
劣化する身体と戦い毎日をわがままに生きる八十歳の吾は
風が吹き空気の中にたくさんの花粉や草の実飛び交う四月
五日市の日帰り温泉瀬音の湯帰り道には満月のぼる
なつかしい友と四十年ぶりに会う海外で暮しいて帰国せり
冷房の次の日には暖房で今年の五月は何かおかしい
八十歳になりたる四人六月の新宿御苑でランチ楽しむ
さわやかな緑の風を受けながら走る並木は緑のトンネル
一年前拾いて来たる足折れたるカラスの雛は家族となりぬ
ジリジリと肌に陽の差す猛暑日にコロナワクチン六回目打つ

むせかえる勢いのある深みどり盛夏の中のいのちの輝き
生い繁る柿の木の葉は猛暑日のベランダに差す朝陽を遮る
立川の花火大会四年ぶりドーンと重し光の後の音
記録的あつさが続き昼の間は家居して夕方買物に行く
猛暑日は今日が最後であってほしい九月五日の三十六度
冷房の部屋に一日中引きこもり退屈はせず一日を過ごす
家に居るハエトリグモとヤモリ一匹害虫食べる大切な生物
朝夕は涼しくなりて酔芙蓉白い花を数多咲かせる
植物はいちはやく秋を知るらしく涼しくなりて葉の色変わる
もう一回免許更新に臨むため新しくメガネを作りに出かける

友人に冬雷をすすめられて、短歌を書くようになり、十七年、先生方に添削をして頂き、又、多摩の短歌会の先輩方に御指導をしてもらい、少しずつ短歌の楽しさが解り始めました。短歌が出来ずに悩みますが出来るだけ続けていきたいと思います。

スーパーの入口にある暖かい焼いもの前通過できず買う
足の悪いカラスを庭に放したれば飛ばずに猫と睨めっこする
義父も義母も六十歳前後に亡くなりて夫は八十三歳長寿を生きる
雉鳩一羽わが庭に来てガラス戸を開けても逃げず餌を啄む
マスクとれてゴールデンウィークに人集まり日帰り温泉行列となる
コロナ禍で窓を開けたる待合室コートを羽織り順番を待つ
食欲のなくなりたる夫は足元がおぼつかなくて杖ついて歩く
腰痛は骨滑り症と医者の言う歩かなければ寝たきりになると
母の日のカーネーションは莟多く七月までも咲き続ける
母の日に贈られたるカーネーション八月になりても花三つ咲く
衰える夫を見るのは辛いけど生きるものすべてのことわりならん
彼岸近くなりたる九月日照の時間が短く朝夕涼し
目の治療健康診断で指摘され眼科医院を探しはじめる

江波戸愛子（えばとあいこ）☆（埼玉県）

朝焼け

三枚におろした真鯖に味噌を入れ煮ておりあなたの顔うかべつつ
ラジオ体操おわりたるらし男らの声が聞こゆる家の前にて
入院をしていたらしと夫いうラジオ体操より帰りきて
白内障レンズに種類のあることを識りたり娘の初診日その日
もうすぐに九十二歳と言いながらプールへ通う楽しさをいう
通勤の人に混じりて電車待つまだまだ明けぬ空を見上げて
黙々と歩む人らに合わせ行く乗り換え電車のホームめざして
早朝のホームに二本を見送りて有明行きの電車まちおり
乗り換えのホームに見上げる空と雲たちまち朱に染まりてゆきぬ
良いことのあるかもしれぬと思いつつあなたと見ている朝焼けの空
鉢なかに伸びたる椎の木の根もといつしか苔に覆われており
苔寺の苔のようだと言いながら鉢おおいたる苔に触れたり
鉢の苔おせばその指おし返すような感覚ありてまた押す
鉢の苔見おれば蘇る京の寺二人の友と巡りしあの日
身欠き鰊ゆっくりもどして甘辛煮嫁いで知りたるおかずのひとつ

甲子園球場をいで京の寺めぐりて泊りき娘と女孫と
二軒目の資材館にて求めたり充電式のドライバーひとつ
資材館入れば何でも作れそう飽かずに歩くときに止まりて
開き戸の中に収納棚ふたつ作るひとつにキャスター付けて
浴衣地の服を作りて持ちくるる友あり友はありがたきかな
わが母の着物の生地に作りたる手提げを持ちて夫に付き添う
月二回点滴うけてきたりしが夫の通院一回となる
わるいなあ Suica に入れよと吾の手に夫は紙幣一枚をおく
困ったねこまったよね困ったわ肉屋の閉店惜しむその声
肉店の味噌漬け肉を手土産にゆきたり姉と妹の家
あなたをね探しに来たよ何回もかの日のははを店主の言えり
三人の家族なれども其其の場所にてそれぞれアイパッド見る
頑なに拒みてきたる夫なり納豆あるかと起きしなにいう
夕食を早めに調えやわらかな緑のゆるる庭をみている
髪の毛を切ろうかそれとも伸ばそうか鏡に映る私に質す

覚めてまだ床に臥しおり隣室に夫の血圧測りいるらし
作ることもう叶わない物置に溜めたる板をごみと決めたり
桐のげた雪駄の入りたる箱のあり履きたるちちの姿を知らず
十二指腸潰瘍の痕ありと言われて還るあの頃のこと
内視鏡検査を終えて歩みゆく夏のきらめく日をあびながら
戦争はだめだとつねに言いしちち思いて赤山地下壕あるく
ヘルメットつけて入りたる壕のなかときに冷たき風の触れゆく
イルカショー入れず下の階に観る立ち泳ぎするイルカの背中
食べ放題うたう梨狩り棚の下ようやく二個目を食べ終わりたり
下校時にあわせて歩くパトロール会いたる子らに声かけながら

ある日携帯のラインに一枚の写真が送られて来た。写真には木島先生ご夫妻と大山先生、小林先生、四名の会員の方と私が写っていたのでとても驚き、少し怖いなと思いながらこの昔の写真を誰がどこから探して来たのだろうかと送ってきた娘に聞くと、高校生の娘が私を検索していたらこの写真が出て来たとのこと、あらためて写真を見てみると「これは越生駅前商店街で撮影した昭和四十年代の写真です」とあり全員の名前が記されていた。探してくれた孫娘に感謝しながらしばらく写真に見入り昔にかえった。

となり組五人の主婦の食事会つづけて幾年ことしは四人

カードにて支払い済ませている娘てのひらほどの財布を使う

現金に支払う娘の小銭入れ大きくひらく長財布もつ

冬雷誌ネット歌会に会うことのもう叶わない高田氏の歌

三色の庭の小菊を切りとりて仏様へと友のくれたり

京都にて初めて食べたる鰊蕎麦すこし違和感あれど残さず

余り布あわせて作るコースター友の色彩感覚ともし

友つくり呉れたる程よい大きさのバッグを使い五年目に入る

夏服を作らむとして買い置きたる生地の色合いもう似合わない

持ちゆきし味噌漬け肉を食べながら姉との会話やむことのなし

肉漬けるその味噌わけてくれると言う大きなタッパーふたつを洗う

ピーナッツ多くのりたるクッキーをまた買いにゆくオランダの菓子

ひとつだけ一つだけよと自らに言いてまたとるアーモンドチョコ

めくりたる暦に予定を記しゆく初めにあなたの通院の日を

日の光あびて耀くクレマチスその下陰にひらく花あり

ひとつずつあなたの楽しみ消えてゆく今日は大きな水槽ひとつ

ちち使い夫の使いし釣り竿を束ねて捨てる二本残して

小学の孫らとゆきたる伊豆の海うかべてビーチパラソル捨てる

芍薬の莟ふえたと嬉しげな声を聞きおり菜きざみつつ

金柑の木に寄りきたる四十雀すぐに去りたり五月のなかば

うちの人の育てた牡丹が満開と独りになりたる妹の言う

残されては困ると言われ物置の片付けをする娘と吾と

角材に大小の板ガラス板物置の棚隠すほどあり

開封をせず仕舞われしバーベキューコンロを寄付す子供会へと

物置に入れたるままのオーディオアンプ来たる業者の買い取りてゆく

ディズニーのコップ一箱物置にありて逝きたるおとうと想う

前回は十年前と子に言われ胃の内視鏡検査を受ける

一枚の用紙に大きく胃の内部写りてきれいと医師の添え書き

二週間のちにまた来るクリニック腸の検査の説明うける

妹の黒にんにくの届きたりおとうと逝きてもうすぐ一年

車にて塚越陸橋のぼるとき空に向かいてゆく心地せり

冬雷誌よみいる部屋に娘きて扇風機を弱くまわしてゆけり

アクアラインまでの首都高まかせてと言いたる娘を運転席へ

房総の千倉の帰りに館山の赤山地下壕はじめて入る

壕のなか幾つも横穴あるけれど鉄柵ありて鍵かかりおり

茄子の牛胡瓜の馬を両端に置きて今年の盆棚ととのう

ちちとはは迎える盆棚つくり終えこれからふたりをむかえに行きます

入り盆に行きますという電話ありははの生家の跡継ぎのひと

町会の日帰り旅行四年ぶり大洗水族館と梨狩りにゆく

記念写真とりて入りたる水族館イルカのショーの始まりており

昼食をとりて着きたる農園は食べ放題の梨畑なり

梨棚の梨の捥ぎかた食べごろの色を聞きおりナイフを持ちて

手に掴み少しまわして持ち上げて取れたる梨にナイフをあてる

梨狩りを終えて向かうはめんたいぱーく何があるのか初めての

場所

大トロも真鯵もいらぬ明太子のみ欲しと言うふたりの娘

町会の年間行事に祭礼のありて小さき祠を祀る

大人神輿かつぐ人なくこの年は他所の舁き手に頼りていたり

法被まとい捩り鉢巻きの若き女みこしの台に声を張り上ぐ

法被まとい捩り鉢巻きの女の子団扇を持ちて神輿の台に

盆踊り旅行に祭礼その後に運動会ありそれにかかわる

町会の役員多くは現役で年金暮らしの役員動く

夜の部のパトロールに参加して自転車無灯の人に声かく

樗木紀子（おうてきのりこ）☆　（東京都）

ゼラニウムの花

整骨院へ通う道行けば民家の取り壊しありわが目の前で
民家の角に春先連翹咲きおりき毎年の花の楽しみ失せる
隣庭の大公孫樹は朝の日に輝き真っ黄色銀杏落とす
大公孫樹風雨に散りて黄一色に神社境内参道埋める
サッカーのワールドカップ一戦から四戦まで子と観戦したり
負け残念ベストエイトにならずとも強い国に見事に勝った
大晦日三町会の人達がゴミ焼却場へ落葉を運ぶ
神社に立派な門松二個置かれ注連縄はられ旗二本立つ
公孫樹のはだか木の下陽を受けて山茶花が咲き夏みかん実る
境内に日が燦々と降り注ぎ棕櫚の緑に冬の感じなく
墨田区は三月十日の大空襲で焼野原になりしと聞きぬ
隣庭の神社の境内にある社かつて防空壕が作られし場所
町内の友は空襲に子を抱え防空壕に命拾いせし
三町会の人々の寄付に神社建ちその参道も出来上がりたり
寄進者の名を刻みたる石並べ神社の区画の囲いと成せり

毎月一日に三町会の代表が神主さんの祈祷を受ける
ワールドベースボールドームでの四試合を子と観戦す
準決勝メキシコ戦を整骨院で放映を見るメキシコに勝つ
決勝戦大谷選手と米国のホームラン王と一点取り合う
米国に決勝で勝ち世界一に日本国民喜びに湧く
隣庭の大公孫樹は八階建てマンションを越し晴天に立つ
みかんの花咲けど香りの届かずに風で散りゆき路面を白くす
真夜中に世界卓球大会を観戦したり優勝祈りて
中国と日本の戦い早田選手三回同点にジュースで争う
両選手ことさら強くジュース二十一回に早田選手勝つ
中川の家系図作るに資料集め兄は一冊の本を成したり
家系図の頁をめくれば新京でのわれ五歳の写真一葉（新京は満州の首都）
幸いに杖をつきて十分で行けるスーパー三軒もある
片方の腕に買物袋かけヨイショヨイショと家まで帰る
土曜日はなりひらホームの麻雀でヨイショと言いて牌を取るなり

仲良しの四人で楽しく麻雀す私のヨイショにドッコイショの声
次つぎによく咲いていたゼラニウム異常気候で枯れかけてくる
ゼラニウムに日除の網を張りたれど効果のあらず白茶に変わる葉
近隣の人らに株分けしてみれば花は咲かずに枯れかけている
六十年ゼラニウムとわれ共に存り枯葉除けば小さき緑葉
枯れるかと心配したるゼラニウム小さき緑の葉をつけ始む
わが住める業五町会四年ぶりに色んな行事開催となる
天祖神社の大祭ありて町内の路両側に提灯並ぶ
子供神輿山車に続いて大人神輿掛け声大きく町内を行く
神輿は一日二回町内巡行す掛け声大きくそのたび賑わう

今は亡き大豆生田静江先輩とはプールの会　よ」と。歌作りは苦手ですが、漢字を正確に
「水泳」で一緒でした。団体でバス旅行の時「勉　書く事が大へん勉強になっております。
強しなさい」と短歌を勧められました。
「言葉を五、七、五、七、七と並べたらいいの

外出に五分間の化粧する眉を描いたらアンバランスに
麻雀とカルタ取りに大失敗呆け防止なのに自信を失くす
近所の道の両側に花並ぶマリーゴールド無料奉仕に
杖をつき下ばかり見て歩道ゆけば停めある車に体が当たる
区から米寿の祝い金を頂いて買物に使うカートを買いたり

ペンタスは色とりどりの小さき花押上の各店前に並ぶ
歯の治療激しい音に目を閉じて百人一首思い出しおり
コロナ禍で近所の医院へ通うため診察券が四枚増える
隣庭の公孫樹の一本は一ヶ月遅れ銀杏鈴生りとなる
自宅の窓東側にあり皆既月食子と見ておれど満月は見えず
元旦に晴天見上げ氏神の天祖神社に子と参拝す
断れど子から花届く誕生日七草粥を一人で食す
境内に国民小学校の碑（いしぶみ）あり空地一角を三町会が得る
夕食の支度中に電話鳴る孫娘から一階に居ると
この四月大学卒業就職も決まりて友と東京見物
就職でこられなくなるから顔を見せに来たという孫夜行のバスで
杖を持ちバスに乗って久々に人で賑わう錦糸町に来る
駅ビルに入れば華やかな装飾品色々並び人々で混む
美しき生花で埋まる店のなか暫したたずみ花を愛でいる
シクラメン三年前に頂きぬ常に陽に当て今年も咲かす
シクラメンの鉢に植物活力剤差せば十九の花が咲きたり
隣庭の木々が茂りて南側の窓三ヶ所は緑一色
目にも良し木々の緑を眺めては両手を拡げ深呼吸する
見事なる花房脳裏に残りおり四百年たつ藤の大木
隣庭の大公孫樹にカラス五羽来りて今日は「ワハハアー」と鳴く
集会所の体操に参加し下腹に手を当て声を「ワハハアー」と出す

大塚照美（おおつかてるみ）　（兵庫県）

生涯一度の

仰向けの大き昆虫ひきてゆく蟻の助太刀やうやく来たり
助太刀の蟻はいささか慌てるもおほき獲物の後ろに廻る
九分九厘みづからのもの整理してみまかり給ひき姑様は
故関口氏の街上写真を見入るなり亡夫と馴染みし浅草あたり
表紙絵の柿を月づき眺めきてこの年の柿を剥く従妹の庭の
玄関の扉の下にてもう動かぬちさき蟷螂鎌をたたみて
温度計湿度計など揃へて呉れあと水分よと帰る娘は
水族館よりジンベエザメが海洋に首尾よく戻るを見つ映像に
「をばさんの趣味は何」と聞く中学生短歌といへば「ほう」と真顔に
森閑とめぐりもみ寺の大屋根も思ひがけざるけさの初雪
誕生日むすめとわれは同日にて卓に料理と花とをんな孫と
赤ぐろきこの夜の月蝕ながく見つ次は待てざる更なる年月
怪我のあと右の手袋みあたらず思ひ知りたり老いの転倒
朝食の前に歌稿をポストまで万歳の空に雲ひとつなく
幾たびか処分を思ひし金の成る木ピンクの小花は今盛りなり

箱車の保育園児らけふ街に車道へだてて手を振る幾たり
夫の喪に早ばや届きしお悔み状友が書写なる般若心経
雀らもこの麗らかさうれしかろ朝より騒ぐいつもの立木に
公園の桜の人ごみ抜け出して園の外れの満開のした
菜園にて友のつくれる菠薐草ふぞろひなれど露地の味なり
母の歳はるかに超ゆるもなほ生きてははより優るるひとつだになく
岳父殿に土が大事と教はりてトマトに係はる退職の子は
自転車の怪我にあらねど処分きめけさ運ばれて行く廃棄車に
食器棚箪笥のうへの突つかひ棒ときに確かむおのが弛みも
コロナ禍の挙式のみなる長男の面目果たすけふのお披露目
暮れてなほ日長となれる隣り家の父と子のこゑ庭に遊べる
思ひ煩ふことに疲るる転寝は睡眠たらぬ躰を助く
紅さして久びさマスクせぬ街の風に吹かるる歩道橋のうへ
骨折ののち敗血症にて逝きし母の守りのあらむわれの転倒
欲しければどうぞと貰ひし万年筆夫は手づからわが手の平に

近隣に文士の住むよな家がまへ杉板の外郭杉板の塀
病む姉はふるさと明石が懐かしと電話の声の呂律みだれて
梅雨あけてけふより軽きワンピースはだへに優し久留米絣は
わが庭の動かぬ蟬を見過ごすも引き返し埋む日かげの土に
夕風に揺るるま白きさるすべりの花房美しそこはかとなき
テニスへの挫折感ある中三の孫に咄嗟の助言も心許なし
部活にて拳闘と言ふ彼回転してTシャツの背を見すグローブの絵柄
回忌をへ盆のま近き夢に出づ亡夫は久しきスーツ姿に
朝の茶を夫に置きていちにちのわれを願へり時に敬礼
転勤の日のあさ家に来て呉れし父の涙を見き生涯一度の

極めて珍しい御会葬御礼を戴いた。わが次男の岳父殿は、実父のお茶作りへの情熱、家族愛などを縷縷つづられてゐて、当時、私もいたく感動した。次男は、五十歳にして食道摘出、もはや職場の第一線にて働けぬ現状に早期退職を希望、岳父殿の為事であるトマトのハウス栽培に専念させて頂く選択をした。農作業は土への拘り、天候気温に左右されて難儀な作業であるが、三人の息子の父親として、岳父殿を範として、思ひがけぬ次の人生に賭けて欲しい、と願ふばかりである。

南に向く朝の日差しを少し浴び厚きカーテンを寄す眼を病みて
蟻二匹がおほき昆虫はこびゆく巣はいづれにとしばし見守る
近づけば尾を振り屈めば甘噛みを止めぬ近隣の犬も老いたり
暮れゆけば早や中天に輝きて神神しかり秋の半月
黄の帽子の園児らの列みるごとし隣の花壇に咲けるつはぶき
霜月の半ばにいざとクリスマスの飾り付け終ふ生きてゐる証
声変はりの中学生との立ち話帰り来て何このハミングは
みすずかる信濃の旅の戸隠にていち夜泊りき宿坊躰験
表紙絵のオクラの花の黄に映えて一瞬よぎるウクライナの国旗
震災後の仮のすまひの十箇月も思ひ出話となりつ二十八年
両耳に補聴器とふ友さいごまで互ひの通話スムーズならず
長椅子にベッドに足の筋力をつけむと励む術後のむすめは
ハウス育ちの冬のあぢさゐ黄みどりの誇らしげなり食卓の上
水槽にてひたすら巡るジンベエザメ再び海に戻る日あらむ
正月の壺の葉ぼたん捨て難し花芯の黄みどり春を待つ色
岩に根を這はせる小菊の盆栽展妻より大事と笑ふ出品者は
「元気なるうちに来よ」とふ友の住む横浜磯子も遠くなりたり
庭の椿の葉ごとに積もる雪とけて緑うつくし日の差しくれば
塀ぎはに未だ残れるなごりのゆき歌ひとつ書くペンの冷たし
み社に納めたる雛おもふ春これも役目ぞ米寿迎へて
長き手術を廊下に待ちてやうやくに医師とま向かふ顔面打撲
顔面の怪我ゆゑ外出ひかへゐて少しは捌ける防災食品
春彼岸まだ遠けれどきさらぎのひかりはたしか怪我の顔にも
吹奏楽きこえて寄りゆくコンコース学童はみな黄のシャツを着つ
歌つくる合間にひと息いるる午後ふきよせ旨し到来の菓子
一日二個たぶる卵を買ひに出でいつもの棚にまよふ値上り
若き日の街並かはれる神戸のそら仰げば豊けし六甲連山
窓ぎはを擦過しゆける鳥の見ゆ目に追ひたるは燕にやあらむ
早期退職きむる息子の決断にて祈るほかなし術後の人生
隣りの花壇に色付くさくらんぼう鳥よけならし風船の揺る
赤味ますさくらんぼうが目当てにて並ぶ雀は電線のうへ
緑の葉の白きふちどり珍しと人が覗きぬ庭のあぢさゐ
朝より眼に棲める蚊の見えず探すことなしひと日の安らぎ
丁寧に仏具を磨く六月の十三回忌の夫を想ひて
カーテンに透ける夕陽は部屋ぬちの額のガラスに輝き放つ
頬骨の痛み残るも転倒の治癒力あるらし老いの気概と
コロナ禍の店にてうたふ機会なく居間にて歌ふ「サン・トワ・マミー」
玄関に活けたる庭の草のはな檜扇（ひあふぎ）ならし人づてに知る
一合の米のとぎ水さざんくわに注ぎつつ託ぶ肥料の過ぎて
梅雨どきの帯状疱疹神経痛あすから雨とふ夜半の痛み
うす雲にかかるも輝く夏の月さしづめこの夜は朗月ならむ
日の落ちて暮色ひといろ中天に茜の濃淡ひろがりやまず
置き薬「もう一回」とふ外交員われも最後の粘りを見せつ
倉敷にて亡夫の買ひて呉れたりし因州箋にこだはる今も
待ちゐたる仲秋の月きは立ちて白光の冴ゆ雲なき涯に
ひとしきり大降りしたる道に聞く溝蓋のしたの水の勢ひ

ふるさとに住むありがたさ交差点に眉をあぐれば見ゆる淡路島
病む姉をも一度ふるさと明石まで連れてきたかり願ひてをらむ
扇風機の風がうれしと宅配の人に竜胆もらふ敬老の日
通院のタクシーの待つ通りまで先導して呉る赤の蜻蛉は

大塚亮子（おおつかりょうこ）　（東京都）

千鳥ヶ淵の桜

通学途中の児童が「おはやう」道路掃くわれに声かく元気いつぱい
梅むくげ葉の色づきて強き風ひと日吹き荒れ残るはわづか
千両の枝に青き実びつしりと付きをり赤くなりゆくを待つ
二年の歳月思ひて出会ふ友たちの噂に聞きぬ逝きし幾人
過ぎ去りし時間の無常思ひつつ本堂に長く手を合せをり
長き石段下りて見上ぐる山門に礼して帰る茶会終はりて
家に待つ夫に替はりお祓ひを祝詞聞きつつわが受けてをり
境内に焼きゐる鯛焼き二つ買ひ急ぎて帰る静もる街を
若き日に書道学びし先生に偶さか出会ふ三十年経て
昔のままに笑顔変はらぬ先生は大きく手を振る別るる時に
一畳ほどの紙に蝶の字ひらがなに幾つ書きをり蝶舞ふごとし
習字の概念変へてくれたる先生に学びし歳月楽しかりにき
仕舞ひおきたる習字の手本捲りゐて共に学びし友の思はる
滑り止めに縄巻き付けたる長靴に登下校せし雪積もる日は
吹雪く日は上級生につかまりて飛ばされぬやう田んぼ道行く

雪明かりに遊び惚けて夕飯を知らせる母の声遠く聞く
父植ゑくれて三十年は経つならむ白梅の幹二階に届く
掃除しつつ思ひつきたる一言を暦の隅に走り書きする
来ぬバスを諦め乗りたるタクシーの運転手はわが古里訛り
墓参りに今年は帰らうコロナ禍に行けず過ぎたる三年早し
家守りくれたる兄の施設に入り空き家に変はる生家を思ふ
桐箱に入りたる私の臍の緒を母見せくれし思ひ出ひとつ
千鳥ヶ淵の桜を共に見し友を思ひ出しをり逝きて幾年
千鳥ヶ淵の桜はひとりで見る慣ひ人の流れに逆らはず行く
桜吹雪といふ他はなし散るさくら花びら水面に更に美し
赤彦研究会の総会ありて十年余り旧盆の頃諏訪を訪ひたり
会員は地元の人の多かりき赤彦の墓ある丘を登りき
花と線香持ちくるる地元の会員の後ろにつきて山道を行く
汗をかき登りて来たる丘の上諏訪湖を渡る風心地よし
大会の昼は笊そばと決まりゐてのびたる蕎麦を汁にてほぐす

現場仕事の好きな夫は事務所には坐ることなく機械の操作す
足腰の痛むと言ひつつ作業服着たる夫は生き生きとして
厳しき暑さ来ぬ間に庭の草取りをせむと屈みぬ雨上がる庭
「おかはり」と言ひたる子らの賑やかな声思ひ出す二人の夕餉
友と来たるは何年前かと思ひつつ木下に一人弁当開く
袖通すこと稀となる着物を広げ針持つ母を思ひ出しをり
古き家建て替へられてわが生家年々遠し墓参に帰りて
床のキズ柱のキズの思ひ出も見つかるは無し建て替へられて
吹く風の昔と変らぬ境内に友と語りぬ傘寿となりて
車の運転六十六年続け来てさしたる事故なく夫八十四歳

一年を振り返りつつ四十首を拾い上げました。歌を作ることに精いっぱいで読み返すことの大切さに気付く事なく過ごしてきました。毎月締め切りに追われ作歌する事への後悔もあり、反省の上次に進むことの大切さも痛感いたしました。今後はかけがえのない八十代を大切にゆったりと日々を楽しみたく今までのように駆け出すことは止め、生活の軸を徐々に変えていけるよう努力中です。どのように変えられるか楽しみです。

「気をつけて」三人乗りの自転車に一瞬昔の思ひ出過る
自転車に乗らぬやうにと夫や子に戒められて傘寿となりぬ
わたくしの足でありにし自転車は出番のあらず物置の隅
開炉の支度してゐるわれに寄り添ひて手伝ひくるる嫁まこちやんは
護国寺の茶会に参加は二年ぶり足取り軽く石段上る
席を待つ列に加はり見知りたる顔に出会ひて嬉しく会釈
枯れ枝に止まる鴉が久し振りの茶会の人出に群れて鳴きゐる
千両は青き実を付けゆつくりと赤くなりゆく正月近し
コーラスを続けて二ヶ月練習日楽しみに待つ月に二回を
高田さんに初めて会ひしは何時ごろか定かならざる朧な記憶
気さくなる人柄らしく短歌会に話しかけられ親しくなりぬ
高田さんの逝きたる知らせを告ぐる電話受話器の声の容赦なかりき
勤めゐる娘に時折り総菜を届けたる日の遥かとなりぬ
ビルの間に沈む日早し街並みの赤々染まる一時の好き
ふる里の大雪テレビに映されて無人となりたる生家を偲ぶ
雨風に耐へこし年月思はする木肌は温もる春の陽の中
白梅の咲き満つる枝見上げつつ今日の茶花の枝ぶりを選る
タクシーに乗る二十分運転手の話聞きをりほのぼのとして
コロナ禍に帰省叶はず早や三年今年の夏は墓参に帰らむ
九人家族に過ごしし頃の思ひ出のあれやこれやに心温もる
引き出しに仕舞ひおかれしわが臍の緒は何処にありやと思ふこと
とあり
諏訪の湖渡りて流るる夕焼け小焼け正午を知らせる時報懐かし
木陰なく夏の日ざしは容赦なし言葉少なく諏訪湖を巡る
あの夏の帰ることなし川又先生逝きてわが歳八十となる
細かき図面読み取り難しと老眼のすすむ夫の言葉聞き流す
小き数字見間違ふらし鋼材をボツにしたると夫のため息
家族四人に過ごしし頃の食卓を時折り思ふ二人となりて
家族の健康謝して毎朝仏壇に飯を供へてひと日始まる
東京散歩のガイドブックに日帰りに訪ひたき場所をいくつか選ぶ
ガイドブック手に乗る電車友の逝きこの頃多しわが一人旅
行き先の決まらず乗り込む電車にてガイドブック捲り目的地選る
高く低く飛びゆく蛍追ひかけて外灯の無き道を行きたり
懐中電灯消して蛍を追ひかけし友の生家の思ひ出遺る
離されずついて行きたる細き道闇の深さは今も忘れず
風通し良き部屋に干す着物より微かに香る樟脳懐かし
虫干しをしてゐる部屋にかくれんぼ姉と遊びて母に叱らる
薄暗き仏間も台所も日の射してわが思ひ出の遙かとなりぬ
叱られて閉ぢこめられし床下も無かりき唯々どこも明るし
免許証返納すると唐突に言ひ出す夫に驚くばかり
乗り継ぎて十余年らしクラウンを洗車してゐる夫を手伝ふ
何にする車種聞かれしも幾度か最後は夫の意見に決まりし
次の車種相談さるることなくて車庫は広々猫の遊びぬ
暑さ納まり気にかかりたる家中の窓ガラス拭くひと日をかけて
拭き終へたるガラス戸越しに木々の葉は光をいつぱい浴びて揺れをり
中秋の名月見むと芒を飾り雲間出で来る月を待ちをり

大野（おおの）　茜（あかね）　（神奈川県）

日々思ふ

人通り少なき道にマスクとる吸ふ息旨し胸郭開く
夢を見る夜多くなり鳥小屋の掃除に屈む父の姿も
骨折の利き手の指の痛む妻に代はりてゴーヤを刻む夕暮
問はれれば今住む町がふるさとと家並み変はれど言へる幸せ
五十余の柚子の皮擂り胡椒振り小瓶に詰める妻の半日
デパートの地下三階より地上迄コロナ契機に階段登る
十年を過ぎて通へる体操も仲間がひとりふたりと欠ける
脳検査の轟音に慣れ五七五浮かべて暫し音を忘るる
赤と黄の千両の枝瓶に挿し正月三日の一息の珈琲
サッカーにかける小五に地球儀をプレゼントする世界をめざせ
鏡に見る眼の下辺りの皺幾つその皺消すとふ数多の広告
落葉踏み銀杏並木の道を来てテラスに珈琲ペンと紙出す
冬雷誌繙き行けば人の世の喜び悲しみ知る歌のあり
料理屋のお節で済ますコロナ禍を楽ねと言ひつつ妻は寂し気
わが踏みて折れ曲りたる水仙は三日足らずですつくと立ちぬ

年賀状の宛名書きつつ過ぎし日に共に励みしシーンの浮かぶ
保育園の庭かけ回る幼子の甲高き声天からの声
三つ子乗る小柄な母の乳母車子に手を振れば母もにこにこ
ニシキギの夕陽に紅く染まる秋くれなゐ褪せれば冬はもうそこ
向かうから近付く知人九十歳シャキッと背筋真似したき人
ふうふうと熱き焼芋二つ食ぶ要介護三の兄の胃丈夫
ディスプレイにエコ運転と評価出る褒められてドライブ笑顔で終へる
水漏れの水道管の修理人腿まで浸り手探り工事
寒空に黄の色濃くなる甘夏に両手添へれば温もりの有り
聞き及ぶ四千本の桜なり越後高田の城跡に立つ
春の空に積乱雲の湧き上がる山の向かうは夏の来たるか
苗木買ひ四年過ぎたる甘夏は庭に馴れたか数多の花咲く
フリージア色とりどりの花咲きぬ薄紅色は初に見る色
朝採りの筍きざみ混ぜ御飯茶碗に盛れば春の香のする
咲き初めたる躑躅の生垣白き花三日後に咲く赤と桃色

鉢を割る幾筋の根の逞しさ真紅の花のアマリリス咲く
年一度の脳波検査に医師笑みて認知症には君はならぬと
霧雨にわつしよいの声近づきぬ青いはつぴの子供の御輿
コロナ禍もひと時去るか春の来てデパート賑はひ客の笑顔も
腹凹む運動続けてベルト穴二つ縮まり拳を上げる
列島に地震の続き今朝は能登いつかは首都にと警鐘鳴らす
高田城お堀沿ひにも桜満つ彼方に白き妙高の山
町内の近しき家の昼食会お喋り足りたか妻はにこにこ
アルバムは旅の写真に占められる足よ頑張れ更に十年
不整脈のエコー検査に行く妻に問題なかれと願ひ送り出す

能登大地震は甚大な被害を出した。大地震の起こる度に父の遺訓を思い出す。二十代に関東大震災に遭遇。横浜の銀行で机に向かっていた父はドアを蹴って外へ。咄嗟に丘に向かって走る。火災が方々から上り追って来る。息が苦しい。川は湯気の立った熱湯だ。やっと山手の丘に辿り着く。息が楽になった。新鮮な酸素のせいだと理解した。高台は津波から逃げるだけではないと。八十年周期を信じ忘れるなと諭された。爾来一家は高台に住み続けている。帰りは坂登りに息つくが不満はない。父の遺訓だから。

緑葉に隠れてゴーヤたわわなり隣に配れば好きと言ひ呉る
体操の教室に集ふシニア達互ひの生年探り確かむ
冬雷の年鑑届くずつしりと机に寄りて先づ一頁
雨冷えて気温は八度窓の外庭の小菊の花は下向く
黄金色満ちて溢れる金木犀この秋二度目の香り流れる
幾十年もみぢ眺めたる楓の木幹割れ枝枯れ蟻が群なす
ウクレレの練習次はイエスタディ誘はれ学ぶやうやく指が
夕空の彼方に望む富士山を斜めに遮る電線五本
息を継ぎ丘を登れば慰霊塔囲む銀杏は八分の黄色
初栽培きぬさやの種八つ蒔き紫の花揺れる春待つ
半日蔭の裏に植ゑたる蕗出でて黄色にぽつと辺り明るむ
久方の市民祭りの歌の部にドレスに着飾るシニアの潑剌
蒲団上げ窓を半分開け放つ冷気に身体ぶるつと震へる
来年の手帳を求めまづ始め結婚記念日金婚と記す
デパ地下にケーキ売る店また増えて派手を競ひて果物重ねる
寒空に向かひて鋭き葉を伸ばす水仙に白き花一つ咲く
寒波にも体操指導の先生は半袖姿で手を振り跳ねる
種蒔きたる春菊の芽の夥し間引きをせねば申し訳なし
買ひ替へたるスマホのアプリに半日を眼の痛む程出したり消したり
小樽に住む友より賜るホタテ貝焼きつつ脳裏に運河の大雪
明朝は越後高田へ桜旅鏡の妻は服決めかねる
朝九時の東京駅の地下街の弁当売りの早技を眺む
スマホより鴬の鳴く声三度友の屋敷の梢も写る

強風に甘夏の花飛ばされる春風恨めし七日も続く
野球場を囲む幾千のチューリップ大歓声も吸ひ込まれ行く
大雨にビルの軒下伝ひつつ傘振り戯る一年生達
苺ジャム鍋にぐつぐつ煮たる後美味しい食パン買ひに出る我
賜りし傘寿の祝ひの胡蝶蘭冬過ぎ春まで純白の花
ゴーヤ苗二本求めてミニ畑三日も経てばネットにからむ
睡蓮の薄桃色の花浮かぶ夏近き日の大池巡り
背の丈を競ひて計りし柱傷微かに残る築五十年
掛川の新茶届きぬ端午の日急須に注げば若草の色
半日の学びに訪ひたる大学の威容に圧さる高きビル群
生垣に三色のつつじ咲かす家滅多に無しと植木屋剪定す
咲き終へて花を摘みたる胡蝶蘭土も新たな鉢に植ゑ替ふ
炎天下気合を入れて買物へ人つ子一人見えぬ街行く
冷水を口にふくめば歯の滲みる来院早くて良いと医者笑む
飛行機の予約にスマホ初挑戦行きつ戻りつ完了ボタン
荒天の中病院へ行く途中一陣の風に記念の傘折る
友と来たる千歳市郊外平らけく蓮華つつじの群れ咲く野原

大山敏夫（おおやまとしお）　（埼玉県）

逆走車

ほんのりと明るさ残す午後四時半空に小さなうす緑いろ
日毎四キロほども歩まば削ぎ落ちむ腹のだぶつくこの程度なら
ドローンの兵器化縦横すみずみにためされて地球の何処も危な
ガラケーよりかへて四､五年かスマホばかり弄くる人に今はなりゐる
暇みてはスマホ撫でゐるやうなれど何に手間取るか苛つき始む
疾駆するわが車のサイドミラー這ふ蟻をり予期せぬ旅の最中か
耳近く蜂飛びまはる危険音バイク数台迫り来て去る
オートバイを一度たりとも走らさず七十半ばもう間に合はず
ハーレーダビッドソン優雅に去りぬ益荒男の岩崎聰之介氏もかくあるならむ
待合せの時間に早く着きすぎて聖橋渡り少し歩みぬ
聖橋の石の欄干に手触れつつ熱かりし思ふ十代のころ
聖橋越え公孫樹並木の下を行く五十五年前のもみぢ葉思ひ
神田明神下に勤めて昼の休みこの公園にキャッチボールもしき
警官らがガガツと歩道の敷石を引き剥がす見しはこの傾斜道
学生群追ひ散らし催涙ガスに汚れゐし御茶ノ水駅前わが遠き過去

十一月半ばも暑く汗にじみ聖橋口改札前の日差しの強し
ひざもとを抉る初球のスライダー外れて打者の全身ゆるむ
打者の好む真中低めにビュと伸び鋭くバット空を振りたり
躰躍り投込む直球ホームベース掠めるやうに外へ逸れゆく
息ととのへ投じたるど真中ストレートまた空振りす振り遅れぎみ
空振りの勢ひに一歩二歩よろけトラウトの口歪む瞬間の見ゆ
2ボール2ストライク渾身の102マイル外の低めに逸れつ
フルカウントの一球は内角より外へ浮き上がるスイーパー空振り三振
双手握り突き上ぐる大谷叫びつつグローブ投げ帽子投げジャンプしてをり
マウンド辺り選手ら抱き合ふ歓喜のさま彼のマンダラチャート思ひ観てゐる
足のばす感じにのぼり来たる山慈光寺に吹く五月のそよ風
桐が咲き藤咲き垂れて諸葛菜ゆれて立ち紫の花おほき道
日あたりに日陰にも著莪の咲き群れてうすむらさきのひんやりとあり
五月はじめの夏日の照れば美しき木陰のゆるる朴の樹のした
白しとも乳のいろとも日に照りて朴の葉かげに花がいくつか

うぐひすのおほらかに鳴き卒塔婆を風が鳴らして誰もゐぬ墓地
ここに眠るいくたりの名のつらなれり墓は死後の家と思へるまでに
白楊の木の綿毛が舞ひて青空の山の風のなか呼吸の苦し
マスクして花粉を防ぐこの山に白楊の木の綿毛まうれつに飛ぶ
逆走車ためらひ見せず迫り来てあやふく左車線へ割り込みぬ
わが車の脇すり抜ける逆走車サイドミラーには写す高齢者のマーク
わが脇を逆走しゆき交差点へ左折ウインカー出して向かひをり
逆走車間一髪に避けたるが何事も無きやうに走り来りぬ
階段をくだり又二三段のぼるところ墓所ありて米吉の墓が眼の前
水桶を借りて汲み来て墓をあらふ深く刻まれし米吉の名も

コスモスはのどけき花といふおもひ今日は朝よりゆつたりとゐて
微風にも花くび揺らし群れ咲けば吾に少年の哀歓もどす
届きたる後期高齢者保険証しみじみ長く生きたるよ吾は
とても敵はぬ力に繁る庭の羊歯小穴を掘りてひとつづつ抜く
三十年以上過ぎたるかこの庭の杉菜の群を根こそぎにせり
こんなにも残りゐたるか水引の白き花紅き花草取る庭に
狗尾草の穂の赤みまし実の熟す日の近からむ高き低きに
飢饉にて狗尾草の実を喰ひしことなど遺す味は記さず
狗尾草に混りツルヨシ増えはじめ暫し行き入間川を跨ぐ橋のうへ
池亀さん意識戻らず逝きたると報せのありぬスマホを取れば
登録なき番号より電話掛かり来て若き日の池亀さんのこゑは娘
御
三月号「冬雷」に池亀さんの投稿はもう無いと締切日迫れば思ふ
池亀さんの庭の池には亀もゐるそんな歌読みしことを忘れず
月一度の冬雷歌会に出る許可を旦那様より勝ち取りき池亀さんは
旦那様手作りの指輪を嵌むる指ちらり見せ呉れき隣に坐して
一字一字丁寧にて優しく読み易き池亀さんの原稿が好きなりき
吾は
池亀さんの家の前には五差路ありコンビニあるも歌読みて知る
あれから三十年か三十五年か一寸おもひ出す四十代のわれ
後ろ姿に確信あれど近づきてたしかめてよりこゑを掛けたり
メイプルバターひと瓶もらひ帰り路にくわりんたうの袋入りも
貰ひぬ
墓参りに感染リスク濃からずとも外出欲減退の三年あまり
四年ぶりの霊園には生ひしげる草多く父母の墓少し探しぬ
来るたびの目印は角の大き墓草おほひ石のおほかた見えず
この墓地のいたる所に草のびて荒るるにまかすコロナ禍三年
父母眠る墓のめぐりに草は無く管理する嫂にまづ感謝せり
コロナワクチン五回目は受けずと決めながら主治医に命じられ
翻しぬ
五回目のワクチン接種にも肩のまはり痛み二日ほど熱に憩みぬ
新型のインフルエンザ予防接種は受け続け来て特に変化なし
年ひとたびは九度近き熱に朦朧とどろどろ眠りきあの思ひ遥か
十数年わが通ふゴルフ練習場ロビーには胡蝶蘭の鉢が増えゆく
岩井ツインズのツアー優勝今年三度ロビーに掲ぐるその都度の
サイン
目のあへば挨拶しくるる永井哲二プロ指導のキッズよ岩井ツイ
ンズは
ヨネックス傘下にてこの練習場ゴルフ学ぶキッズの費用免除あり
十年前少しだけゴルフに挑みたる女の孫も岩井ツインズは覚え
をり
プロテスト一発合格以後ステップアップツアーを姉妹で二連勝
ツインズの妹千怜プロはボーイッシュにて身長も1センチ高い
らし
明愛プロの優勝一回二位みたびその中の一つはプレイオフ敗退
実力派女子プロゴルファー二人育て永井哲二プロの日々張りあ
らむ
足の爪伸びて靴下の先などの尖りを見れば老の爪先

のびすぎて歩けぬ犬の爪切りやりしを思ひつつ己が足の爪切る
わが足の老いたる厚爪切り難く苦しきまで屈みやうやく挟む
爪切るに過ちて肉を挟みしがギャンと鳴きし犬が忘れられぬなり
深爪には良きことのなし負荷かけぬ程度に切りぬ足の指手の指
飼ふ犬の命を護り共に生きしその十余年反省するばかりにて
歓喜して腹見せて寝転ぶ姿幾たび老いつつ静かに生きたる犬が
「歩けんごとなつたつちやもん」の言葉聞きのち切りしかの日
の長き犬の爪
開通して路面も白線も美しく中央分離帯もあるこの道路
国道を横切りて高速道入口へ導く道路の幅ひろがりぬ
この道路高速道入口突き抜けて反対側へのショートカット道
休日の午後には大型トラックも少なくてゆつたり走れるはよし
高速道下を抜けきて内側車線行くに前方より車が迫る
突つ走るなほ突き走りたき思ひこころに失せず躰が火照る
せつかちなるわが師たりしを思ひ出でその点は少しも負ける気
のせず
出来る限りゴールに近く在りたきと起き出でてまたパソコンの前
老身を煽り古き脳火照るまで使ひたるかなこの数日は
雑誌作り作品年鑑作りここ数日は『冊子を作る』に挑む
米吉がをみな思ひつつ哭きしころ「アララギ」の部数一千赤彦
は成す
目標は数値化すれば見え易し赤彦の場合観てまた思ふ
だから何だといふのよ君が笑ひをりその眼を見れば哀しきまでに
「西海（にしのうみ）へさらり」呟き幾十度われと短歌あり三十一文字
尋ね来るはごくごく稀と聞きながら墓所へと続く階段くだる
糸魚川から来たる人あり書く為の調査に来たるありかなり前らし
建ちてより百年余り立ち続け声あげてをり米吉の墓碑
住職に分けてもらひ挿す対の榁若き緑に芽をあまたもつ
一束の線香燃えて立つるけぶり初めはゆるくときをり強く

奥山清子（おくやまきよこ）　（山形県）

この街で

満月の夜露を存分受けたるや朝顔満開十月二日
母うたふ「庭の千草」の懐かしや在らば百二十五歳十月九日
施設より請はれてながき書道教室コロナ禍により閉めて三年
恙無く夫が米寿迎ふるをかみしめ祝ふ松風の間に
夜通しの雨に紫苑は打ち寄する波のごとくに庭に倒るる
朝朝に駅まで走る女子高生に昔のわれの姿重なる
鉤針で娘が編みたる襟巻はうす寒き日のわが宝物
樹の姿に歳月を見る栃の実を植ゑたる吾子は還暦迎ふ
栃落葉すべて畑に埋め込みて汗拭く双手に風花の舞ふ
埋めたる葉長き冬経て来年の野菜育む黒土となれ
七十余年不戦の日本称へたる輝く笑顔のゴルバチョフ氏逝く
旧き家を継がざる吾子の意を汲みて今日持山を他人に譲りぬ
戦後には植ゑよ育てよと励まして国は補助金大いに呉れき
子供らの誕生毎に記念樹を他人にも頼み植ゑし山なり
深雪に倒るる幼木家族にて支柱を立てて起こし育てき

二十年にて丈余となれる記念樹は子らの行く末知るや知らずや
大学の学費一年杉六本で足りると言ひし父思ひ出づ
輸入材の入り来りて日本の山の価格は釣瓶落しぞ
異口同音に「山は只でも要らぬ」とふ山は哭くなりわれも哭きたし
空を突き雪に映えゐる大杉の深き緑を見上げてわれは
還暦の息子と遊ぶ母の日に木洩れ日纏ふ県民の森
イギリスに学びたる孫送り来る大学院の卒業証書
招かれたる芳子姉の法要は二十七回忌あまりに早し
芳ちやんが合はせてくれたとはらからは抱き合ふしばし声も出でずに
孫の居る仏壇に留守を頼みきて写経の会の香に癒さるる
朝顔の蔓伸びに伸び宙を舞ひ垣根に届き花咲かせをり
草に負けたと諦めゐたる立葵三年過ぎて高々と咲く
盧溝橋テレビは映す七月七日日中戦争の火蓋切られし日
盧溝橋の袂に住まふ老絵描きより橋の絵買ひき三百円にて
夜の宴にわれ「涼州詞」吟ずればガイドの支さん「居酒屋」歌ひき

秀衡の命にて安親建立とふ深山観音久々に詣づ
深山観音は国の重要文化財「柱上舟肘木」が平安風と
保育士の娘は園児あやすがにわれに教ふるスマホのスから
由利高原ガイドは白髪の秋田美人中国客を巧みに交はす
「おばこ号」に鳥海山麓走りきて次駅「川辺」に息子を待ち居り
八十代最後の夫の誕生日鷹の湯宿に時を惜しみぬ
ダークダックス聴きたる帰路の三里半手を引かれ初む暗き夜道を
「ダークダックス」最後の一人ゾウさんの逝去を知りぬ今日の朝刊（九月二十二日）
子等三人大学生たりし二年間「苦しかつたね」遠き日偲ぶ
夜の更けて夫のうたふ「この街で」木々の影落つ松風の窓（新井満の歌）

遠い昔、中学校の卒業式に皆出席賞（九年間）を貰った。親からも大いに褒められ、「健康は何よりの宝物」との親の言葉は自分の核になっていた。ところが軽いと思った風邪が三月になっても治らない。私の核は崩れた。全く自信喪失である。そんな時、昨年の夫に継いで町から米寿の賀詞を貰った。これこそ健康の証、最高の幸と気を取り直した。今年の公募展の作品に決めよう。八十八歳に因み民謡の「米節」を万葉仮名で。

米寿なる親より受けしこの宝「米節」に込めわれを祝はむ

庭隅の日日草の咲き盛り紅白丸き十月四日
コロナ禍の自宅謹慎解くる朝葛の花折る十月五日
巣籠りも又よしと読む「みだれ髪」晶子の恋に恋する十月七日
籠りゐて遅れ遅れのお彼岸会菊尽しなり十月八日
植ゑ替へて居間に置きたる桜草一週間に三センチ伸ぶ
母言ひき「雁渡るまで草毟り」その姿見ず秋雲流る
金井上の春恒例のマラソンコース桜並木に枯木目立ちぬ
寺田虎彦の『柿の種』届きたり美智子さまを真似て音読始む
五回目のコロナワクチン接種案内「希望」と記して返信送る
引退の内村航平を継ぐ橋本大輝「着地よし!!」と拳握りぬ
雪つりの縄黄に映えて庭の松にふんはり掛かる初雪の朝
初雪に菊みな刈りて寄せ生ける南部鉄器の蛍の絵柄
小豆南瓜冬至に供へて独り言「ばあばが畑に作つたものよ」
雲重く風雪激しきクリスマス寒波街も人も黙して動かず
初雪の一夜に三尺積りたりじつと籠りて昼餉近づく
木通の皮水煮し晒し丸三日砂糖味噌油で今日は仕上げむ
母の歳はるかに越したる姉九十三夢語りつつ新年祝ふ
ほつこりと紅うすく三つ咲き居間に春呼ぶ「寒咲桜草」
ガーネットの指輪をつけて甘酒を作りぬ明日はわが誕生日
街路樹の辛夷の蕾固けれど朝日を受けて銀狐色
公募展迫れば胸の高なりて決めたる題は「山のあなた」に
文化祭に展示されたる歌三首の写真送りくる九十六歳の姉
東京の弟「あさづき」送り呉る好天続きて伸びすぎとあり
下萌えの「雪の下」のまろき葉の繊毛陽を受け白く光りぬ
「よろしく」と挨拶なさる子の同級生町議会議員の貫禄見せて
田中陽希三百名山踏破せる天塩岳の夕日に立てり
桜咲く国に生れたるしあはせを散りくる花弁追ひつつ思ふ
白鷹の里にも山にも桜咲き桜さくらのうた歌ひたり
甘き汁残りてあるや裏の実鵙の飛び来て啄む焦げ茶
夏の来て白山吹の楚楚と咲く去年の黒き実残れるままに
午前四時出づれば空に白き月残りてをりぬ卯月みそかに
照ノ富士怪我乗り越えて優勝す横綱の頬に涙一筋
英和辞典繙きて孫の卒業証書読み取り居れば目頭熱き
ひと息に咲きたる西洋石楠花の朝日を受けて辺り煌めく
「京子ちやん話せてよかつた」五日後の「おくやみ」欄に話しかけをり
茄子胡瓜苗植ゑ終へて一服すわれの頬撫で過ぎてゆく風
たぢろがず縫ひぐるみの如く座り居る芳子の曾孫まだ八ケ月
膝痛に草毟られぬ庭のなか清らに咲ける蕺草の花
蕺草の花は黄色の花穂といふルーペで見れば以外に華麗
美術館出でて若きらと町なかにフォークとナイフの昼餉楽しむ
剪定したる紫陽花一抱へ瓶に挿す朝空青く晴れたる居間に
石垣に岩藤咲きてわが庭の明るき池に花影うつる
雨止みて二センチ程の胡瓜生り黄色き花の輝きて咲く
みんみんと発音よろしき蝉の声社の森に朝から聞ゆ
食べ切れぬ胡瓜は佃煮にして置かんさざ波昆布混ぜて煮詰めて
遅播きのササギに白き花咲きて夕撒く水に低き虹たつ
象潟（きさかた）の青き海岸背にし立つ西施の像の白清清し
床の間の飾りを替へず道元の「春夏秋冬」に心落ち着く

小嶋知葉（おじまともよ）☆　（茨城県）

はらから

わが家を民宿もどきなどと言い休日楽しと娘の家族
子育ては親にまかせしこと多く今ゆったりと子らを迎える
「将来はほどよき田舎別荘に」半分笑って子らは言いたり
孫と読む『窓ぎわのトットちゃん』は現役時代の愛読書なり
自らが課題を持ちて学びたる先達校なり「トモエ学園」
ひらーりと栗の葉降りて積もりゆく初冬の庭は錆色多し
「こんにちは」三年ぶりに会う男孫背丈面立ち様がわりせり
除夜の鐘聞こえてきたと孫たちは歓声あげて二階に走る
「百八つ」「煩悩そんなにあるか」高一のふたり会話が弾む
二家族揃いて祝う屠蘇の席夫の挨拶よそゆきの顔
十個の「一人御節」届く八女市より娘夫婦の粋な計らい
ウィーンフィルニューイヤーコンサート「希望と理性」届けるという
「生演奏のない世界は怖い」ゲストのことば頷きて聞く
一面に霜柱立つ前庭に静かに強く水仙咲けり
平穏をひたすら願い参拝す節分の日は八坂神社へ

縁起もの「おこし」を求め老舗の行列に並び三袋求む
玄関に柊飾り豆をまく娘からのラインに「ブラボー」送る
コーラスの午後はいつものコースなり軽いランチに長いトーク
同じ道共に歩いた友なれば共鳴すること多く苦笑す
おひらきのことばはいつもと同じなり「いつまで歌えるかしらね」と
夫の言う「君はほんとに丈夫だね」が帳消しとなる七十八歳
家事うとき父親のこと心配とキャリーバッグ引き娘が来たる
病室の窓より見ゆる満月をゆったりながめ回復を待つ
ようやくに手術の結果良好と言う医師の笑顔がぼやけて見える
名古屋より息子帰りてさり気なく「ういろう」を置くわが手に「はい」と
久々に「万葉集講座」聞き万葉仮名のおもしろさ知る
筑波山を詠みたる歌は二十五首古代にありし嬰歌（かがい）の歌も
マークX無事故無違反十五年今日でおわかれ六月十日
ボストンに学びたる孫の帰省する初来日の友人と共に
わが家に二泊三日滞在し「デリシャス」と言う食事の時に

圧巻の合同歌集届く午後表紙に見入る柿の実三つ
昨年のわが生き様が詠まれたる合同歌集たからものなり
「来月から三度目の海外勤務」淡々とした息子の電話
「今度は単身赴任になるだろう」息子は本音伏せたるまま言う
はらからの集う今宵はにぎやかに寿司三昧は息子の希望
猛暑なり家にこもれる日々なれど感動場面はいくつもありぬ
仙台にて迎えられたる監督のことばは深し応援のこと
お盆にははらから集い語りあう姑の仕草娘の所作に
みやげにとわが家のぶどうに葉も添える「天狗のうちわ」と孫叫びたり
丹念に育てたる茄子や胡瓜などくださる時の友ははにかむ

短歌への誘いは、文学部に所属していた高校時代にあったように思う。郷土の農民作家といわれ、夏目漱石が絶賛したという「長塚節」の研究家であった顧問の語る「土」への熱い思い。苦しくとも最後まで読み通すようにと、場面場面の情景を話して下さった日々。更に節の生家への吟行会。鬼怒川の堤を歩きながら節の短歌を朗々と吟じ、そして解説を。あの声、あの姿は六十年余過ぎた今もなつかしく忘れられない思い出となっています。

鬼怒川を夜更けて渡す水棹の遠く聞こえて秋たけにけり　長塚　節

わが街の郷土作家展に飾らるる廣津画伯は九十歳なり
先生は夫の恩師でわが上司作品「沼沿」安井奨励賞を受く
（一九七二年）
「ポーセリン絵付けの会」の展示会友より届くしゃれた案内
真っ白き磁器に絵付けの作品はうっとりとする彩り放つ
好奇心旺盛なりし原作者時にはみ出しうとまれしことも
ダイニングの窓いっぱいの大銀杏遠近に見る黄のまぶしさ
庇こえ気高くひらく花八つ誰が名づけしや皇帝ダリア
贈らるる「抜萃のつづり」八十二号珠玉のエッセイ・コラムが数多
始めての出会いは現役時代なり迷いし時に救われしことも
ささやかな楽しみとなる日曜日ことば探しのクロスワードは
久久の上映会のタイトルは衝撃「乳房よ永遠なれ」
歌人なる故の苦しみよろこびあり中城ふみ子の壮絶な生
支部長より依頼されたる急なこと「語ってほしい短歌の楽しさ」研修は「生涯学習実践発表」と覚悟をきめて準備に入る
わが街のフレンド会の企画なる上映会は「大河への道」
日本地図完成させたる三年前伊能忠敬没していたと
わが体メンテナンスが急がれて十四日間の入院となる
入院の体験者なる先輩のラインのことばしみ入る夜更け
雑草の伸び始めたるわが庭にキリシマツツジ真っ赤に咲けり
フォレスタの歌声響く月曜日「こころの歌」を楽しみに待つ
しっとりと「ここに幸あり」笑みうかべ女声コーラス歌いあげたり
ハーモニー厚く響かす混声の磨かれたる声涼し気にして
孫演ず「リーガリーブロンド」ミュージカルことば難解にて動きに拍手
掘り立ての筍届く早朝に夫の友人額に汗して
「俺んちの山の筍やわらかいよ」ちょっと自慢気な夫の友人
山法師の白き花弁が開きいて緑葉の中を舞う蝶のよう
三本のみかんの木々に小さなる白き花咲くふんわりとして
契約後半年過ぎての納車なりきちょっと若めのその名はライズ
夫とわれ共に齢を重ねきてライズが最後の車となりぬ
ボストンからスイス経由で成田へとロングフライトも楽しと言えり
丹念に丹念に読む四十五首共感覚ゆる歌に線引く
読み進む程にせまりぬここまでの編集の汗いかばかりかと
つぎつぎとラインが届く今宵またボストン便り娘からなり
進学の二女の学びたき科の有り様を訪ねると言うキャンパスめぐり
学生の説明を聞く孫の顔ラインの中にやや大人びて
子の進路偏差値優先していたる若かりし日を少し悔やみぬ
寿命なる二階のエアコン二台とも三泊の帰省に出費が痛い
ダイニングの窓いっぱいのさるすべり白くふさふさ四方に揺れて
従弟より祝賀記念の誘いあり集う人々三百名超ゆ
政治家の従弟はもともと弁立ちて「知ちゃん若いね」などと言いたり
「わたしには仙台育英の声が大きく聞こえました」と言えり

沸騰するバスケの勝利快挙なり選手のことば謙虚に聞ゆ
フェイントをたくみにかわし連携しシュートの技も冴えわたりたり
音程の狂う瞬間味わえり席順変わるそれだけなのに
先週は歌えたはずが狂い出す「絶対音感」の乏しさを知る
最後にはメゾソプラノで歌い終え平常心にやっと戻りぬ
テキパキと家事をすませて午後七時バレー中継に釘づけとなる
快挙なり男子バレーの技冴えてパリの切符獲得したり
急激に冷えこむ空気にわが庭に実るみかんの急に色づく

小田原禮子（おだわられいこ）（福岡県）

紫のタオルハンカチ

災害のときに避難を言ひくるる民生委員も高齢者にて
ふた親の遺せるものを片付けて満天星の下に一人ゐる
菩提寺の本堂にての報恩講つぎは十五年後と鬼わらふべし
人住まぬ家のませ垣這ひのびて烏瓜ひとつ赤き実照りぬ
認知症の姉の施設に決め兼ねつ延命治療の有無を問はれ
施設に住む姉のことにて弟は礼を言ひ兄は「済まぬ」と詫びぬ
もういいと酸素マスクの中で言ふ父の姿と声を記憶す
おぼろげに科学漫画と重ね見る空飛ぶ自動車その他諸諸
思ひ切り八つ当たりしたき心地して唐突に買ふパセリ大量
献体も断わらるるといふ感染症独り身の覚悟か抗原キット
大晦日ひとりの膳に見繕ふ土瓶蒸し器に屠蘇散浸す
数の子を一つ残して七草を摘みに行くごと野菜売り場へ
大晦日に競ひ剥ぎ取りしカレンダー遥か遥かの記憶に残る
寒緩む横断歩道に落とし物紺の右手の手袋ひとつ
「喜寿祝」を民生委員の届けくる令和の五年母の歳越す

渦潮の旅に知りたるでこぽんのかの味求め地下売り場見る
通学路少年の声弾み来る啓蟄の今日晴れて風なし
博多まで七隈線の開業を三月の広報「福博連理」と
バス停にネックウォーマーの落とし物寒の戻りの不意の夏日に
花散らす雨のあがりて気づきたりいちやうの枝に新芽貼りつく
図書館の貸出しカードを作りたり有効期限にわれ八十歳
ツバクラメ道行く我に低く飛ぶ去年は気づかぬビル駐車場
四年ぶりのどんたく囃子観に行かず道譲るごとき我が身と思ふ
コロナ禍の制限ゆるみ放たるる街行く人の歩み緩みぬ
タクシーを電話に呼べば我の名と位置が即座に分かりたるらし
目に耳に英文字略語あふれゐて使ふ漢字の今日も減りをり
常よりも早き梅雨入り告げられて書店に選ぶスパイスの本
コロナ禍も五類に下がり我がマスク道行く時は腕輪となりぬ
代引きの次は置き配さるるらし向ひのドアの前の荷物は
ベビーカーの中にぐづりて騒ぐ児に若き母親スマホを持たす

遠賀川そら恐ろしき氾濫す七歳の我にフラッシュバック
流さるる家に女の名を叫び欄干に足懸くる人ありき
窓いつぱい閲覧室の書架映す早くなりたり陽の傾くが
満員のバスで二人の幼な泣くかけ合ひのごと合唱のごと
取つて置き紫のタオルハンカチをバッグに入るる猛暑と聞けば
地下街に新生姜の葉落ちてをり筥崎宮の放生会今日
登校の低学年の子ら燥ぐ夏休み明け子犬の如し
右列のバスの席より月を見る左折せる窓月影映す
赤き羽根の画面に気づく衣替へ紺の制服備へし日あり
雨の今朝頬より先に二の腕に今年も秋は来る気配あり

若い頃、俳句は言葉足らずでマイペース。（と思っていた。）一音以上七音の季節語を差し引くと残るは十数音。その点、短歌は倍以上饒舌だ。（と思っていた。）だが、季語という古今を通じて広くて深い共通語のような偉大なはたらきをする語を短歌は持たない。

だから短歌は初句から五句まで言い古された語句は入れられないのだ。（と思っている。）真に質の良い饒舌でなければならないのだ。（と思い始めている。）それは良質な生活に裏打ちされて詠む人にしか読み手に伝えられないのだろう。（と猛省。）

記録的暑さの残る彼岸会に白き器の茶渋を取りぬ
介護施設に住む姉の家来て入れば網戸の外に太きカマキリ
姉住まぬ家の近くのゴミ出しの分別曜日を広報に見る
廃坑の跡地に聳えぼた山は半世紀過ぎ緑になりぬ
防災用避難梯子の検査受く元号三つこの家に住み
博多口広場の電飾鮮やかに若き旅行者声あげ近寄る
「耳コピ」とラジオ講座の講師言ふ妙に残れり内容よりも
松と竹難を転ずる南天も緑のドアに磁石に留む
怠慢と見分けのつかぬ倦怠に自己診断はコロナの名残
三が日供へ餅載するウラジロの葉の先のカール小さくなりぬ
裏白の紙棄てがたき我が性を自ら笑ふ皺伸ばしつつ
七隈線博多駅地下五階まで延び来る近しこの囲み内
風止みて光は温し空透かす雲の向かうに定期便飛ぶ
公園の池一面の水鏡鴨数十羽とスワン舟浮く
杉檜花粉の飛来最盛と予報通りに午後は雨降る
閉局する系列店の知らせ来るＬＩＮＥで処方箋受け付くるとふ
歯列矯正も健康保険に扱ふか審議されをり国会中継
梅林寺の梅をついばむ目白見て友は電話で「聞いて聞いて」と
標本木の五輪目少し咲き遅れ励ますごとく柵に近寄る
継続を励まして後「さやうなら」ラジオ講座の講師の言へり
友と行きし万博会場の列思ふまた並びたし地に足着けて
花か葉か雨のあがりて樟の広がりて見ゆ一昨日よりも
丹沢の沢登りより三足目の靴紐の加減を試して備ふ
ハイキング雨天中止のメール来る安堵を覚ゆ次に備へむ
母の日の記憶の端は肩たたき耳かき爪切り夏みかんの香
この年の誕生日祝の広告はメールで届くクリーニング店
台風の過ぎて雀の声戻る元号三つこの街に住む
バス中に小さなあくびを押へる手マスクに当たり口角弛む
図書館に本七冊を借りて出る空に大きく稀な月見る
コロナ禍の五類にゆるみ総会に三年ぶりの参加と返す
防災用にコンビーフ缶三個買ふフタ・シート外しレンジも可能
少しでも命守れる行動を越水の画面呼びかけ続く
まづ自分の命は自分で守れといふ然りと思ふひとり居のわれ
怠りたる暦を剥げば八月の十一日は「山の日」とある
バス料金日・英・中・韓に表示され英語で応ふ運転手の声
またひとつドーナツ店も解体か店の中なる回転木馬も
またしても家の前なる街路樹を台風六号倒してゆけり
連結のバスに出会ひぬコロナ禍のなかに生まれて列車の如し
ブレーカー落ちてレンジ切り戻したり火災報知器「正常です」とふ
昨日より気温の一度下がりをり漂白をせむまな板すり鉢
母の歳越したる今年の同窓会誘はるるまま出席とする
コロナ禍の五類になりぬ彼岸花画面見るのみ彼岸会休む
記録的暑さの今日のマネキンはモヘヤの衿に衣替へせる
ぬひぐるみに見まがふ犬のせがむらし横断歩道で飼ひ主抱き上ぐ
テロップに津波の注意報じをり七つの海と地図帳思ふ
珍しく四人が女性五人にて「日曜討論」経済論ず

笠岡文子（かさおかふみこ）☆　（広島県）

平和公園

三年ぶり絵手紙展はにぎわいて力作ぞろい色の洪水
絵手紙に自在に動く筆の力「桔梗ムラサキ今日咲きました」
恒例の日本画展に加山又造の「猫の目小蝶」空色に澄む
世界人口八十億人の大切な命を守れ戦争するな
我もまた風邪引かぬよう月を見る赤銅色の皆既月食
桜もみじの枯れ葉の中で遊ぶ子ら子犬も跳ねる土手のにぎわい
深夜から朝にかけてつもる雪ちらちらふふふシーンと冷える
わが干支に気力をもらう兎年歳を忘れて声をひびかす
厳島の鳥居の赤のきわだちて船は満員新年まいり
新年に靴新しくして歩く桜の土手まで四千歩余り
恒例の新年初笑い落語会人情話に笑いふくらむ
蝋梅の枝に来ている尉鶲人をおそれず丸くて元気
宮島の鳥居の赤は陽に照りて観光客の声はずみたり
大願寺のおみくじ引けば大吉に少し喜び深呼吸する
根元からつぼみ伸びくるクリスマスローズ春を知らせる花は密やか

部屋内に甘き酢の香のちらし寿し雛を飾りて夕べ華やぐ
ＷＢＣ侍ジャパン世界一栗山監督の信じる力
目の前の山に明かりがつくようにポッポッポッと桜咲き初む
満開の土手の桜を風散らし真青の空の深き寂しさ
地面から赤芽広がり芍薬の茎は伸びゆく葉のひろがりて
春くれば浮きたつ心広島カープ野球開幕にラッピングトレイン
負けてても今日の楽しみ球場に赤が波うつカープは希望
また一つ膝の悪化で怖いもの寺の階段球場のかいだん
頂きものの新たまねぎでマリネですサクサク歯ごたえ食欲の増す
Ｇ７の首脳揃って平和公園の慰霊碑に献花九つの花輪
公園で平和を祈念する首脳たち被爆桜の苗木を植える
廊下にてスナク英首相岸田首相にカープ靴下みせてほほえむ
広場には小判草咲き緑ゆれ無心になって前に進める
梅雨なのにしとしと雨はどこ行ったゲリラ豪雨に水浸しの街
草取りも重荷になって躊躇するうごかぬ身体に雲雀さえずる

生き死には神にまかせて自然体いま出来ること自問自答す
数十年に一度の災害相次ぎて線状降水帯に水びたしの街
雨上り子燕三羽のさえずりは二度目の雛たちこの世楽しめ
梅雨明けて入道雲のいきおいてさるすべりの花天に向かいぬ
ピカドンの忘れられないあの光八月六日おしろい花を摘んでいた朝
グラウンドの火傷怪我人原爆に震えて泣きつつ四歳は見た
終戦から七十八年すぐそこに戦争の影あり不戦を祈る
大空のブルームーンにありがとう不平不満をさとして光る
くっきりと中秋の名月野球場の応援合戦の歌声とどけ
朝四時に起きてラグビー観戦すテレビの前で手を合せつつ

庭の沈丁花に赤い蕾がびっしり、その中の一つ二つはピンクの花が開いています。水仙の花は機嫌よく風にゆれています。チューリップは早やとんがった芽が土の中から次次と顔を出しています。今年の冬は暖かく春の花も早く咲くのではないでしょうか。梅や桜と花見の楽しみが待っています。行動範囲のせばまった私にとっては膝の痛みにたえながらも春の風や香りただよう街に行ってみたい。生きている喜びをたしかめたいものです。かすかでも希望のある明日を待っています。

楽しんで明るい気分のマスクする油断出来ないコロナの新ウイルス
行動に制限のない文化の日会食楽しみにぎわう店内
むべの実は真綿に包まれた黒い粒幼い日々の甘い菓子の味
おそれてたコロナ八波にとまどいぬ五回目接種後も安心出来ず
幾つになっても祝ってもらう誕生日はにかみながら嬉しさかみしむ
年明けて値上げとまらぬ日用品暮しの悲鳴聞く耳どこに
誰だろうウクライナ戦を止めるひと憎悪広がり停戦みえず
草引けば冬には冬の草はえる冬眠の虫ころころころげる
コロナから三年過ぎるもゆだんすな近所も知人も感染に苦しむ
立春に散歩の途中足元に来る子犬らをゆるく抱き上ぐ
雨の中サンフレッチェ広島の開幕戦ラインギリギリゴールにせまる
攻撃のシュートいかせず溜息つき守備にはばまれ引分けくやし
プーチンの強気の侵攻一年すぎ勝利の旗の行方混沌
柿の木の根元の紫陽花広がりて芽の出る前に枝切り始む
花の散る光の中の二人にてつもる話に鶯の鳴く
春と秋の日本画展はほっこりと小品なれど心なぐさむ
連休中もデイサービスはにぎやかに体きたえてゲーム楽しむ
春となり庭の草にも花がつき生きる姿に抜くをためらう
欲望の軍事衝突哀しみのウクライナの戦争スーダンの戦闘
六十年家族の歴史見守りてわが庭に咲く木瓜のくれない
コロナ禍も三年すぎて五類移行春風にのりバラ園めぐる
六回目の予防注射も予約するコロナの菌の消滅ねがいて
あじさいは色を立たせてあざやかにデイサービスの部屋をかざりぬ
以前の機敏な動作失いて家事する時ものろのろゆるゆる
表紙絵のオクラの花を見ておれば光あつめて清き花びら
来年の冬雷表紙絵に期待もつ花の絵楚々と楽しみつづく
寝てる間に気分が悪く吐き気する頭痛のするも原因わからず
歳重ね出来ない事が多すぎる気力出さむと光をさがす
朝からの暑さのままに延延と熱こもり夜に体力落ちる
福島の魚を食べて応援し農産物の風評も正す
今の世に理不尽の死と謎ふくむプリコジン氏の反乱と終焉
暑すぎておくれて芽吹きたる彼岸花植物の力彼岸に開く
悲惨なりリビア東部の洪水はダム決壊に家々くずれ
参加するスマホ教室理解力衰えたれば不安増しゆく
コロナ禍の次はインフルエンザ歳重ね身体なじめず弱る内臓
フランスで戦うチームラグビーに突進力あり期待ふくらむ

梶尾栄子（かじおえいこ）　（兵庫県）

銀杏

小回りのきく軽トラをわが足のごとく乗りをり農作業に老いは
真新しき夫の眼鏡残されぬ生きるつもりをしてゐしらしも
「新米をいただきます」と暫時置く袋を齧る納屋のねずみは
秋晴れに観光船の出入り見ゆハーバーランド十八階の窓
行先はあなたまかせの草の種わが衣につきて運ばれてをり
取り立てて不調なしとふ姉羨し二つ違ひのその食べつぷり
太陽光パネルはみどりを削りゆく環境にやさしと人の言ひては
丈長きコートは足に絡みさう頼り無きわが足元はなほ
冬に入り人疎らなる公園に踏まれず残るどんぐり拾ふ
長旅をして来し鴨の強靭さ見えず静かに池に浮きゐる
賞状を頭上にひらひらさせる子に問へば一気にマラソン一位と
後続車に何と思はれゐようとも朝霞深きをそろそろ走る
隙間無く身を寄せ合へる電線に並ぶ雀よ寒さの中に
芽吹き初む麦に白々置く霜の下に溜めゐん春への力
この世にてわが悔しさを告げむ人無くてひとりの涙を流す

尉鶲待ちゐしわれの気も知らず一瞬姿を見せて飛び去る
隠したき過去みな覆ふ雪白く清きこころに生きむ今日より
小春日をソーラーパネルのごと背（せな）に集めて畑に草引きてをり
去年見たるミモザの黄色忘れ得ず春休み明けに急ぐ中庭
天井の小さき染みに擬態して幼きハエの止まる春先
晩酌のつまみに喜ぶ夫のため匂ふ銀杏拾ひもしたり
漉し餡のさくら風味の甘きパン桜を見つつひとり食べをり
渋滞を避けて早朝鉄材を運び来し人トラックに眠る
「三十分歩くこと」とふ自分への貼紙ありて残る夫の字
学園の祝入学の花文字の花数減りて春は闌けゆく
瓶に挿すバラの香りは畑より疲れて戻るわれを労ふ
散る前の花摘む作業する人のハサミ迷はずバラ公園に
足乗せて電源入るれば筋肉を鍛へるとふもの夫の残す
一杯のワインに酔うて蹲きてホテルの部屋に膝擦りむきぬ
古家は換気せずともをりをりにガラス障子を揺らす風ふく

土用の夕娘くれたるうなぎなり薬と思ひいただきてゐる
検診を確と受けつつ取り敢へず一日の果てに己励ます
穫りて来しアスパラガスを丸齧り朝食前のこの身潤す
焼肉屋のあるじ入り来て大蒜の匂ひぬ狭き郵便局に
リズム良き自動プレス機の音のして終日動く疲れを言はず
「冬雷」の作品評に詠み足りぬわが思ひ酌むことばの嬉し
庭に咲く紅バラ一輪卓に置く幸せの香の今宵満ちたり
宝とも言ふべき友でありにしと悼みてくるる言葉のうれし
やさしさと労ひの言葉に飢ゑてゐる我に沁みゐるナースのひとこと
休耕の田は万の虫の住み処なり声張り上げて万の虫鳴く

台風に薙ぎ倒されたるこの稲田黄金色の稲穂揺れてをりしに
若き日に友と競ひしボーリング今日久々にピンの音聞く
ガラス窓に白き腹見せ張りつける守宮の素早き狩を見てゐる
葉の落ちて柿の実数多現はれぬ柿色の花群れ咲くごとく
反射材背に靴に付け歩く道たそがれ時は事故多き時
秋晴れの明日を約束するごとく稲穂を染めぬ夕焼雲は
ほんのりと赤味がかれる月は在り信長もこれを見たであらうか
コロナ禍にマスクの着用耳にタコ寒風防ぐ効果はあるも
羽蝶蘭の花片浮かぶ露天湯に一夜かぎりの贅を楽しむ
来春の孫の合格祈願して奈良の古刹のお札を受けぬ
鹿群るる奈良公園にも民家との境のありて馬酔木植ゑらる
あらたまの年の始めの修正会に集まる人の皆着脹れて
停留所をらんらんバスは過ぎ行きぬ通学の子ら乗らぬ祝日
瞬きを二、三度する間に朝の日は丸くなりたり山の端離れ
違算額四円のありて振込むと封書に届く銀行よりの
三人目の孫ひとりでに眠りたり母の忙しさ知りゐるごとく
「卯は跳ねる」の言葉を引きて期待する声あり卯は荷の重からむ
広き田に条播きの小麦芽吹きたり定規当てたるごとく揃ひて
背を伸ばし歩幅大きく歩けよとフレイル予防を習ふも難し
メモ魔なる夫の筆跡捨て難く小さき紙片も残し取り置く
うす紅の蕾五十余開かむと玄関に待つシヤコバサボテン
わが横の畔に鳴きつつ小雀の飛んでは止まり近づけば飛ぶ
巨大なる重機の窓を見上ぐれば目元すずしきをみなの座る
コロナ禍に自粛する日々気づかれず幸ひなるかなわが脱毛を
冬畑の片づけに来つ啓蟄の虫のごとくに動作は鈍く
出荷後の規格外のみ残さるる白菜の花の咲きはじめたり
病室に夫と小さく万歳しき大阪大学合格の孫
マイナカード「次回の延期ありません」の広報に混む今日の市役所
昼日中熱ある身にても微睡むを怠けゐるごと思ひ来しわれ
コンビニの駐車場に入り止むを待つ奈落の底を思はする雨
料理家の大原千鶴に似る人のランチ運び来祇園のお茶屋
老犬に合はせて歩きゐし人の犬亡き後の今朝一人なり
姫女菀の白き小花の溢れ咲き花園となる休耕田は
何者が何を求めて来るならむ天井裏を走る音のす
野の道に出合ふ人無しマスク外し野の匂ひ嗅ぐ水の匂ひも
つね見上ぐるばかりのつばめ珍しく地にある時の小さきを見つむ
何時にても予約時間は無きがごと医療センターに遅き昼とる
数多き客の一人の亡夫なるに覚えくれゐし眼鏡店主は
外来種に占領されたる蒲公英の出自違へど同じ黄の色
待ちゐるを知らぬ気に長くＡＴＭに動かぬ人を黙しただ待つ
葉の陰の熟れたるトマトを選り突くわれより目敏き鴉褒むるべし
時移り出陣式とは言はぬらし出発式とふ選挙かろやか
この字（あざ）に出馬する人ありて今朝ポスター貼りに男ら散り行く
茜色の香り放てる「プレイボーイ」会話はづみて薔薇展に求む
白雲を引きつつ一機西空を真つ逆さまに落ち行くごとし
投擲の選手と同じならねども布団の上げ下げに声出づるなり
真昼間にライトを点しのろのろと怯みつつ進む怒涛の雨に

農道を横切る亀に近づけば動かずなりぬ石のごとくに
収穫の間近き畑より無花果の匂ひぬ太き葉のあひだより
節電をこの頃言はずクーラーを適度に使へと予報士みな言ふ
朝ドラのネヂ工場に映りゐるプレス機親し家業にあれば
暮れ泥む若草山にゆつたりと鹿はカメラに収まりて居る
小野まつり「小野恋おどり」の若者の激しき動きに汗の飛び散る
いま少しその姿空に留めよかし瞬時に消ゆる花火を惜しむ
年々に増えたる百合は仏壇に玄関窓辺卓上に匂ふ
「お婆ちやんが喜ぶ思て」と男の孫が帰省に呉るる大阪銘菓
夏休みの子供のごとく朝顔の花を数へぬ朝の楽しみ
野をわたり山を削りて川越えて新しき道路の工事続きぬ
実の少し弾けて覗くピンク色大き葉陰に熟るる無花果
新築の玄関前に並ぶ鉢花好きならむところ狭しと
一匹の蝿気になれる台所に夫使ひゐし蝿たたき探す
地球やや冷やされ今朝は庭木々も一息つきゐむ台風の後

片桐美穂子（かたぎりみほこ）☆　（神奈川県）

回旋塔

風紋を忘れたるサハラの赤き砂小壜の中で静かに眠る
旅先で見る政治家のポスターはご当地限定アイコンのよう
職人が五秒で結わく信玄餅ゆったり広げて黒蜜たらす
朝活はオンラインでのストレッチ身体のパーツに油さしゆく
篤志家の遺贈でできた公園の木立を抜ける風おだやかに
新緑の陰がやさしく孫包むよちよち歩き見守るように
公園で出会った子から贈られたたんぽぽの花見つめいる孫
孫と見た「アンパンマン」の主題歌にわが生きる意味自問してみる
ベビー向け水泳クラスで泣く孫を抱える我に浮力が味方す
バギー押す腕にこたえる傾斜の歩道力を入れて孫を支える
結社とう我には未知の領域におっかなびっくり歩を踏み出しぬ
「冬雷」の最新号を携えてエアロバイクをこぎ始めたり
新しく通い始めた理容室サーフボードが店の看板
長髪にパーマをかけた理容師はハサミもちつつ湘南語る
十五分千三百円カットのみ予約は来店台帳記入

老い加減ふんわりさせる呼び名ありシニアグラスやグレイヘアーに
ワイファイが不調でネット止まる夜昭和の停電思い出したり
ブロッコリーの茎の食感好む友房ばかりとる我をとがめず
じゃが芋をゆでつつ大河ドラマ見る竹串刺すは後半になる
彩りと栄養バランスはかるためカフェプレートに並べる副菜
空咳をおさえるために口にする有平糖は由緒ある飴
江戸っ子の洒落が今なお残りおり「梅ぼ志飴」は梅の味せず
湯の音に蜩の声重なりて露天涼しき山の夕暮れ
白き字で「小若」と書かれた法被着て一歳の孫神輿見つめる
深川の祭りで水をかけられた孫の法被は深い紺色
「名誉にかけて誓う」とガールスカウトの誓約重たし少女のわれに
スカウトのキャンプはいつも整然と来た時よりも美しく去る
客船で新宮沖を進みゆく我らに鯨は姿を見せず
波ごしに青くそびゆる紀伊山地大空と海押し分けており
孫の名にオーシャン示す一字あり紀伊水道見て良き名と思う

海面の一部がふいに泡立ちて不穏の中からイルカ跳び出す
日光が雲をとおして降り注ぐ大阪湾の工業地帯に
「らんまん」のバナーが下がる高知市は牧野博士が新たな主役
よさこいの歌に送られ客船はシャボン玉吹き別れを告げる
花屋にて米寿は黄色と教えられ父の祝いの花束つくる
百年も船の往来護り来ぬ潮岬の白き灯台
ゆで卵四つつるりとむけた朝昨日のよどみを殻と捨て去る
宅配に届けられたるメダカの子我が家の鉢にそうっと移す
年賀状早割使い注文す手書きの余白少し残して
クリスマスカードのために降誕のスタンプ探して買い求めたり

今は危険遊具として見かけなくなった「回旋塔」。小学校の校庭にあった人気遊具で、ぶらさがって回ることができた。小さいときにはゆっくりと回り、学年があがるにつれて回転スピードを上げて、回旋塔の揺れを大きくした。高くまで持ち上げられて、回旋塔から落ちたこともあった。それでも回旋塔はスリルがあって、楽しい遊具であった。私にとって短歌とは回旋塔のようなものではないかと思う。楽しくて、怖くて、気を抜くと危ないもの。回旋塔から見えた景色はいまだに忘れられないものである。

中世の修道士らのいましめをゲームに冠す「メメントモリ」と
深海と宇宙がある世の均衡に立っている我深呼吸する
ベジタリアン、ビーガン、ペスカタリアンと菜食者にも多様性あり
足裏のデトックスに効くツボを押すアロマオイルで指をすべらせ
客船の飛鳥2にも備えあり海賊侵入防ぐ大盾
水色のベレー帽とワンピース昭和のガールスカウトのしるし
新しくバケットリストに加えたる目標は「一生短歌を詠むこと」
妊娠でポイント付与されスマホにて商品もらう少子化対策
和菓子店のレジ前の鉢にメダカ居り買い物しつつ時々のぞく
親となりサンタクロースの喜びを初めて知りきわが子の笑顔に

加藤富子（かとうとみこ）☆　（栃木県）

6回目の辰年

父親を看取り終りて子の役目やっと終わりと友の一言
子の役目終えたる友は七十歳これからが吾の青春と言う
数拾円の値しかつかぬわが着物持ち帰りきて解体したり
数枚の布地となりたる着物地は今年の冬の炬燵カバーに
十月の記録的な冷え込みに炬燵を出せば潜りこむ孫
とりたての林檎の味は格別でわれより早く鳥が啄む
十二月元気に暮らせた自分への褒美と思い胡蝶蘭買う
縫いぐるみ修理の依頼に針持てば僕もやるよと八歳の孫
年齢を重ねていつか子や孫に素敵と言われるおばあを目指そう
足元に湯タンポ入れればほんわりと今日から明日へと活力繋ぐ
百歳で旅立ちたる慶子叔母長男の嫁にして家族の要
百歳の天寿全うせし叔母の家は居心地の良い母の実家
いつだって明るい声でくるくると料理上手な叔母の歓待
連れ合いの兄弟も集いし盆正月叔母の笑顔が迎えくれたり
母逝きて遠くなりたる母の里慶子叔母とも疎遠になりて

亡き人が怒る訳ではないけれど月命日を忘れ心ざわつく
古稀すぎて動ける今が最高と旅の誘いは即座に受ける
三月の声を聞いても河津の桜濃きさくら色枝に残せり
春嵐吹き荒れる孫の入学式四月七日赤飯にて祝う
墓参り妹家族と三年ぶり閼伽桶を手に走り行く子等
小康を得た妹は笑顔見せ孫の子守りに活き活きと動く
カクテルの名を持つ一重の紅きバラ友が挿し木で育てたる若木
春キャベツ軟らかき葉を丁寧にはがして作る孫の好物
週一回孫の弁当頼まれて吾の勤務日に揃いの昼食
一年に一度だけの苺摘み友の姉の好意に感謝す
幼な児も真剣な眼で苺摘む達成感が箱に溢れる
家中が苺の香りに包まれて手作りのジャム煮詰まりてくる
梅雨入りのニュース気にしつつ館山の「海紅豆」という名の旅館に向かう
曇天の下に咲きいる海紅豆花びら厚く真紅に輝く
一人旅思いきって申し込む二泊三日の海と空の旅

旅の神に愛されたのか一人旅の宮崎旅行は雨具の用なし
旅先より土産を問えば即答す「チーズまんじゅう」娘の好物
国語力どこに行ったか中一の孫の作文あきれるばかり
数学は得意と胸を張る孫の国語力には努力が必要
幸いにコロナも病も落ちついて妹姪と旅行再開す
一〇三歳元気で生きる媼居り前向きな考えと人との連がり
友からの就職祝いのマグカップ縁欠けてきて十二年過ぐ
四年ぶりの金沢旅行は四人組揃いの箸を記念に求む
友の顔思い浮かべて食事する輪島塗りの箸手に持ちながら
現在の母娘を繋ぐ便利機器認知機能もラインで確認

今年は辰年。六回目のめぐりあい。巷では高齢者と呼ばれる。人生百年という時代であるからまだまだ若造とも言われる。だが現実的にはある日突然腰痛、手のしびれ、関節の違和感など次々に実現する。でもでも拙いが短歌は作れる。読書も出来る。針にも糸が通せる、料理も出来る。これからもこの出来るを大切に、周囲の人達の思いやりに感謝を忘れず次に巡り来る辰年までしっかりといやゆるゆると生きて行こう。

広々とした浴槽を我と友二人占めする鬼怒川温泉
旅行割クーポンありて奮発すいつもは買えぬ孫への土産
リサイクルショップに着物の査定すれば重さのみの買い取りと言う
わずかでも鳥の試食の跡あれば出荷は出来ぬと生産者言う
湯けむりに音なき雨は吸い取られ一人を堪能す日帰りの湯に
街なかを散歩している二人連れ高齢なれど揃いのポーチ
蜘蛛の糸に吊るされ揺れる沙羅の葉は十日すぎても風の支配下
マイナカードポイント付く今申し込む午前中のみ大混雑す
混雑を予想はしたがこれ程と思わず人間観察をする
年末の掃除の意欲は年毎にうすくなるらし時間はあるのに
幼き日度々泊まりしおばあちゃん家それができたのは慶子叔母のおかげ
百歳を祝いて送る子等の思い紅白のタオルが添えられている
農道沿いのトマトの赤に魅せられて戻りきて買う畑のトマト
三十代らしき夫婦は育てたる自慢のトマトの試食を勧める
かぶりつきが最高ですと勧められ赤きトマトを口いっぱいに
天城峠の山の中には桜と椿ポツリポツリと咲き始めおり
イベリスは木質化する花と知る真白き花の満開の後
二昔前に植えたる牡丹の木蕾を持つは何年ぶりか
勤務より休日多い吾の仕事今日は一日読書と映画
あなたが来る日が楽しみと言い呉るる人ありて働く意欲増しくる
入居者より私の生が終わるまで勤めて欲しいと言葉いただく
赤と黄のミニトマト苗求めきて今年の夏は豊作期待す
ミニトマト可憐な花を七つ八つ連ねて咲かす苗を植えたり
新鮮な苺の赤に手は伸びて知らぬあいだに二時間を越ゆ
奥歯が時々疼き出すことを気にしながらも荷造りをする
持っていたはずの鎮痛薬引き出しを隈なく探して二錠見つける
一人旅十三名の参加者は経験者あり初参加あり
青島の海岸沿いに咲く紫は初めて目にするハマゴウの花
幸いに鎮痛薬の出番なく一人の旅は楽しく終る
パソコンの作文提出禁止という孫の文章に誤字脱字あり
入所後の生活の一助にとスマートフォン渡されたれど戸惑う媼
雨戸の隙間に蜂の巣発見したたき落とすが一部は剥がれず
残りたる巣の再建に励む蜂かわいそうだが殺虫剤噴射
半世紀前の絹の着物の見事さに圧倒される伝統の技
草むらに赤く咲いてる百日紅主なき庭に存在示す
久々の朝の電車は様々な表情仕草に飽きることなし
幾つものポーチ取り出し化粧する車内の女性の手際の見事さ
靴下を脱いで足裏に薬塗る車内のおじさん凝視する我
季違え三つ四つ海棠の花咲きぬ晩夏の暑さに木々も戸惑う

川上美智子（かわかみみちこ）☆ （高知県）

ぎぼうし

吾も混じる県外客の行列に高知プリンの店員明るし
張り出した枝を撓めて咲く葛の花びら散り敷く小径の続く
足庇い運動不足と言う友を急かさぬように歩く里山
歩きつつ友の言う難儀のいくつかを聴くのみにしてひと時過ごす
バスツアーの席は半分空席で近江へ向かう窓に淡路大橋
雨上がりの苔に散り敷くもみじ葉の葉先も苔も生き生きとして
一夜にて景色一変する庭の積雪二十四センチあり
ぼさぼさと降り積む雪もなんのその下校の子等の燥ぐ声する
「夫の世話果てなく続くも吾が役目」老々介護の友は言いおり
ひと時を夫の介護も忘れるとバイカオウレン咲く丘に言う
降る雪にふっと浮かびて地蔵さんの帽子編みおり赤い毛糸に
この春も咲いているらし空き家なる生家の庭のぼたん桜は
支え合い健康長寿を生きたりし祖父母の浮かぶ生家の花便り
百五歳に旅立ちし祖父二年後に祖母も逝きたり百五歳にて
穏やかな大往生にあやからんと賑わう酒席夜に入りても

漸くに歌の友とも会える日の明日を思いて眠りに入らむ
鉄橋をカタンカタンと渡りゆく一両列車の響き軽やか
到着の列車を降りる人なかにぱっと目に入る友の笑顔は
桜からバトンをタッチしたように我が家のツツジは今花盛り
「気に入りの美容院にも行けたよ」と声弾ませる施設の旧友
目と耳が不自由なるも旧友は気丈に生き抜きもうすぐ卒寿
師の動作じっと見詰めて静まれる太極拳大会の最終表演「剣（つるぎ）」
表演の終われば一気に沸きあがる拍手の嵐体育館に
人前に成果を競う時迫り緊張感にふうっと息吐く
歌の友と別れて独りまた開く冬雷七月号を列車の席に
ひた走る車窓に広がる緑濃き田の面はすでに稲穂の垂れて
炎天下歩いて来たる山裾にひんやり漂う山の気を吸う
山肌に滲み出す水のチョロチョロと湿った空気はひと際涼し
たっぷりと湿った地肌に揚羽蝶水吸う横に黄蝶も並ぶ
入港のクルーズ船は観光客をどっと運んで街の賑わう

海外の大型客船入港に商店街は異国さながら
架かりたる二重の虹は良きことの予告のごとし旅行の朝に
ウクライナ国立バレー観賞に岡山までの日帰り旅行
妖精のようなるバレーダンサーの華麗なジャンプや回転次々
練習を中断させる空襲に避難たびたびというバレリーナ等は
幕下りて公演終わるも鳴り止まぬカーテンコールに登場五回
ぎぼうしの薄紫が庭に咲き風にゆらゆら辺り涼しげ
ぎぼうしの花の一つに入りたる虻の出で来る後退りして
カフェたりし頃に通いし古民家の改修工事不意に始まる
古民家に「絆ファーム」と名を付けて障がい者等の生き生き働く

短歌には素養も無く無縁の私でしたが、松中さんから冬雷へのお誘いを頂き、何年か過ぎた頃退職した私に職場の先輩だった方から、「家に居て一人で出来る趣味を持つと良い」とのアドバイスに思い切って、松中さんにお願いし入会させて頂きました。短歌の難しさに何度も挫折しそうになりながらも、先生方の気長く親切丁寧なご指導と、松中さんの温かい励ましのお陰で続けられました事に深く感謝しております。冬雷の方々の投稿歌に学びながら、これからも努力を続けて参りますのでよろしくお願い申し上げます。

コロナ禍のブランク埋めんと励みおり三年振りの太極拳大会
しなやかに竜うねる如き師の表演会場静まる武術太極拳・剣
葛の枝に絡まれながらじわじわと朽ちゆく樹木みかんも梅も
はっとして思わぬ出合いに足を止む我に驚き怯えるイタチ
迫るものに気付き鋭く見上げたるイタチの前足一歩出たまま
愛らしく嬉しく見入る我なれど見開き睨むイタチのまなこ
「思い切って行って来たら」女医さんの一言に消ゆる旅行の迷い
雨に濡れ反り返りつつ鳴く鴉仲間を呼ぶか嗄れた声で
川覗き何を狙うや雨に濡れ黒さ際立つ鴉の一羽
大空に瞬く星を目に追えば北斗七星居残りており
ゴミ出しの冷たき朝も見上げれば昨日の位置に北斗七星
年毎の越冬燕未だ見ず予知していたか猛烈寒波
約束の時間過ぎても待ちており夫を介護する友の来るまで
通いたる手芸教室閉鎖して手に残る赤の毛糸ひと玉
この里に何時より御坐す地蔵さま今日も我等に微笑んでおり
向かい合う友の後の仁淀川窓越しにブルーの水流れいて
仁淀川の川面に淡く映り込む山の斜面に咲く山桜
高知駅の乗り換え急かす案内に急ぎ乗り込む観光客等と
音たかく大型トラクター上り来る農事始まる里山の春
老い二人庇い庇われ睦まじき夫婦と連れ立つ花見のひと日
新緑の木陰が続く農道にゆったり流るる時を楽しむ
黄砂なく花粉も終わり深く吸う空気が美味しい風が優しい
青空と菜の花畑のカレンダー剥がしつつ想うウクライナの春
悪名となりて歴史に残る筈プーチン大統領の侵攻止まず

太極拳の交流会は年一度師弟ら集う観客も居て
見上げれば栴檀の花穂ふさふさと薄紫が揺れる青空
青空に空(くう)を切りつつ旋回し頭上の燕ら楽しげに鳴く
珍しく人の声する農道を曲がれば梅椀ぐ親子に出会う
実りても放置されいし幾年か次々椀がれる今年の梅は
短パンにタンクトップで街歩くクルーズ船の人等目を引く
猛暑日は外出控える人多くバスや路面電車に乗客まばら
八月の路面電車は減便し土日祝日のダイヤとなりぬ
ぎぼうしの俯き咲ける花覗き二匹の蟻のいそしむを見る
先立てる大型犬に引かれつつ知人の女性近づいて来る
声あげて共に笑いぬ飼主が大型犬を「チビ」と呼ぶ声に
「絆ファーム」の仕事は野菜の袋詰めと障がい持ちたる青年の言う

川俣美治子☆（栃木県）

空と地と

朝から空澄み渡り気持ち良く高く手を上げ体を伸ばす
沙羅の木の紅葉しているその枝にすずめ降り来てさえずりやまず
小春日和セキレイ三羽くるくると追いつ追われつ青空を飛ぶ
ザクザクと落葉ふみふみ歩く道音が楽しい足取り軽く
しとしとと十二月の雨冷たくて朝から我は動きたくなし
雲間より少しだけ見える満月は寒々として光を放つ
青空に浮かぶ白雲穏やかで何だか今年良い事ありそう
西風に吹かれてビオラ揺れ続け頼りなさそう寒空の下
殻破りフワフワな姿可愛くて手を触れてみるねこやなぎの花
花もなく葉も少ない山の道足元まで陽が差して気分上々
植えたてのヒナギクにうっすら雪積もり鮮やかな赤見え隠れする
白煙が遠くの山から流れ来るあれは花粉とくしゃみがひとつ
春風と暖かな日差し窓越しに恨めしくなる花粉の季節
冬の間縮こまっていたビオラの花陽を浴び生き生き黄が広がる
三月はシクラメンからパンジーへ花替わりきて春進みゆく

水を撒くジョウロの中に蟻一匹うろうろするを庭に移しぬ
風吹きて散りゆく桜目で追えば綺麗儚い気持が揺れる
かなめの木春の陽気に酔うように赤き新芽が風にゆらゆら
亡き父母が植えたる椿を仏前に今年もきれいに咲いたと一輪
植えたてのピーマンの苗頼りなく雷聞こえる気がかりな夜
唐鍬をえいと振り下ろし筍の手応えのあり初の体験
プランターにつやつや赤いイチゴ二個カメラに収めそっと摘み取る
田植え待つ田んぼの隣の黄金色麦畑あり刈り入れ近し
ミニトマト青い実つけて日を浴びる赤くなれなれ楽しみな朝
夏のような日ざしの中を歩いてる遠くに白い飛行機雲見て
紫陽花の花は大きく垂れ下がり一本の茎が低く支える
稲少し大きくなった田んぼには白鷺優雅に餌を取りおり
揚羽蝶ミニひまわりの花に来て付かず離れず梅雨の晴れ間を
沙羅の葉の先に水滴キラキラと光りて楽し梅雨の最中に
プランターのいんげんトマト初取りで味も見た目も夕餉の話題

昨晩の雨の残りが光ってる芝生の緑朝日に映えて
一匹のトンボ目で追い歩く道身体中に日差しじりじり
夕方に急に涼しい風が吹く雨雲探し空を見上げる
もくもくと青空攻める白い雲上がる気温にため息ひとつ
目の前で夜空に咲ける大輪はドーンドーンと芯まで響く
庭の花皆元気なき暑さにて千日紅だけ鮮やかな赤
曇り空それでも動けば大汗が夏の終わりはもう少し先
山歩く暑さ続けど足元に落ちたどんぐりプチプチと踏む
初めてのカヌーを漕いで進み行く今奥四万湖は我らの貸し切り
ゴーゴーと西風に揺れ木々唸る秋過ぎて早く冬来る予感

今年の新年にあたり三つの目標を立てた。　かいかないものだ。頭と身体が一体となり、その中のひとつ「出来る範囲でやりたい事をやる」は一月二日の誕生日に又ひとつ歳をとり、何か怠りのようなものを感じ思った事だ。　一歩踏み出す勇気を持って「やりたい事をやる」ことのむずかしさを少々感じている今日この頃だ。
二ヶ月半が過ぎたが、思うようにはなかな

中国語進歩なくとも講座に通う孫のような仲間に会える
日曜日隣の父子が自転車に乗りて楽しげな声きこえくる
めずらしく目が覚め眠れず物思い居れば新聞配達の音
一度も着ず又仕舞い込む夏服を手に取り悩みやはり捨てられず
一枚となりたる壁のカレンダー加速しながら今年も終る
遥かなる日光の山々白くなり師走の朝は冷え込み強し
新年が目前となりあちこちの汚れ気になる晴れたる朝は
いつもより静かに迎えた新年は小さなおせち夫と二人で
子も孫もスマホ画面で挨拶す顔を見られて嬉しい正月
年明けて又我ひとつ年をとる孫からのメールにハートが並ぶ
友からの誕生祝いの花束はピンク溢れて笑顔を誘う
久しぶりに背に陽を受けて編物す昔の祖母と同じ姿勢で
豆まきの声どこからも聞こえ来ず我家もそっと「鬼は外」言う
雨の道カラスが一羽横断中ほらほらどいてね私が通る
穏やかな陽を受け弓の手入れする夫は早くも春の気纏う
久々に孫たちと会い食事するばあばばあばの声心地良く
動くたびよいしょよいしょと何時からか声出すことに気がつき
可笑し
孫たちは受検にピアノの発表会様々にして成長の春
上天気に気分良くなり庭の蝶見つつヒラリと飛ぶ真似をする
朝はまだ三分咲きにて帰り道八分咲きなり桜の花は
美容院に切りたる髪に白多く鏡の中の我苦笑する
夜が更けて降り始めた雨寂しくてテレビのボリューム上げて落ち着く
久々に家族の揃う夕餉時会えなかった日々埋める賑やかさ

夏のような昨日の暑さ今日は消え気温の下がる気まぐれな五月
朝ごとに飲むコーヒーは同じ味同じ気分で大切な時
遠き山も近くの山も力強く緑濃くなる夏に向かいて
何しても何もしなくても日は進む悔いなきように今日も一日
今年初の冷し中華はガラスより瀬戸物に盛るまだ五月にて
紫蘇ジュースグラスに入れて眺めおり透き徹る赤は気高きルビー
梅雨時は好きな音楽大きめに流す気持が負けないように
四十年前のスカート穿いてみる鏡に昔の私がちらり
眠られぬ夜に聞こえる虫のこえ気になりさらに目が冴えてくる
虫取り網両手で持ちて蝶を追う一所懸命な二歳児のかお
朝ホケキョ昼はミンミン夜リーンリン季節感薄れ八月になる
仏壇に並んで笑う両親の写真に向かうお盆が来るねと
夫婦して三時のおやつに棒アイス子供のようで懐かしくなる
日中の暑さが残る夜になり賑やかすぎる九月の虫たち
学生時代の話の尽きぬ友とわれ半世紀を越え交わりつづく
コーヒーをアイスではなくホットで飲む夏空つづく日曜の朝
夕飯にひと足早く秋が来たエアコンの中で栗ご飯食ぶ
エアコンをつけず寝られる日の増えて秋は確実にゆっくり近づく
今日着るは半袖長袖空を見てそれでも決まらぬ季節の狭間
久しぶりにパンプスを履き少しだけ若返った気分で足踏みしてみる
長かった夏の終わりは急ぎ足朝夕冷たい空気流れて
イヤフォンで音楽聞きつつコーヒー飲む西日に輝く黄の沙羅見ながら
少しだけ残るペディキュアそのままにして夏の日を思い出しおり

倉浪（くらなみ）ゆみ　（埼玉県）

十三夜

祖父のよむ百人一首を真剣にきそひし昭和の正月ありき
月めでし叔父偲びつつ仰ぎみるやはらかきかな十三夜の月は
とほき日に長持うたを唄ひくれし叔父は召されて一年が過ぐ
「高砂や」つややかな声で唄ひし叔母召されてはや三年となる
七日七草十五日は小豆がゆ祖母の教へを今も守りぬ
ゆつたりと流るるやうな筆遣ひ岐阜におはします叔母九十八歳
つややかに栗きんとんは仕上がりて子等に届けん我の楽しみ
母がはりの叔母逝きませり九十六歳別れ淋しく涙にしづむ
寒水仙冬ざれの庭に凛と咲く好みし叔母の面うかびくる
幼らとパンダに逢ひに行きました遥か遠き日上野の森に
眼あけ「お花を生けなくては」と言ひたさう叔母の法名に華の字ありて
ぢざう様梅の花びらいく片かマスクの顔につけて御座します
ゆき柳こぼれんばかりに咲き満ちて彼岸の供花にと心してきる
花店の中は卒業の祝花あふれんばかりの喜びの色
面だちも少しづつ変はりてひな人形眼ぱつちりのこの頃のひな

久方ぶり中の妹と墓参するゆつくり清め心清しも
こひのぼりゆつたり泳ぐ園の庭もくかう薔薇はフェンスに咲けり
宮古駅の一日駅長藤井竜王三陸鉄道われも乗りたし
路線バス車内いつぱい夏服の高校生の笑ひ声きこゆ
亡き友の好みし花よ夕化粧立ち止まり見る名をつぶやきながら
早苗田に風わたる時水面にはさざ波たちて早苗はゆらぐ
十薬の花はさやけし水無月の庭広く占め咲きにほふなり
うの花にえご山法師半化粧しろき花咲きつぐ初夏（はつなつ）となり
今年もはや半年過ぎたり縁ありし四人の人ら天に召されて
この道は孫の家へとつづく道ハミングしつつペダルこぐ我
図書館のホールに七夕飾りあり愛らしきかなその願ひごと
遠き日の祖父の口ぐせ懐かしむ「笑顔に勝る化粧はなし」と
梅の実を祖母と一緒にザルに干す小学生の我そこに居る
暑さ極むる現場で働く人達は長袖まとひ大粒の汗
涼しげにパラソルさして歩む人　夢二の世界よみがへり来る

サフィニアを朝顔の花とまちがへし夫は朝夕水やりをする
暑きとき我を生みくれし母のこと蝉時雨ききつつ想ふ生日
カーンカーンと金属音がとび交ひて高校球児の夏はたけなは
熱中症をさけて草取り休みをり夏草たちよどこまで伸ぶる
昼下がり暑さ極まる公園にパンダと象の子児らをまちゐる
木ササゲが清しくゆれる寺庭でラジオ体操三年ぶりの
望月を叔父偲びつつ仰ぎみる「いい月だね」と叔父の声きこゆ
けがをして母の祥月お盆様墓参に行けず家でをろがむ
届く文はがきも然り文面に暑いの文字あり頷きつつ読む
久方振り二胡の音きけばよみがへるどこまでも高き天津の夏空

令和六年。本年は大変な年明けでした。自　ました。拙い作品が多い事と思いますがもう
然災害（能登地震）空の事故等、一日も早い　暫く勉強してゆきたいと思っております。
復興をと願っております。私は冬雷入会以来
欠詠だけはしない様にと心掛けて今日に至り

祭はて紅白の幕もはづされて師走のやうな川越の町
境内に流るる歌声朗らうと眼とぢきく「第九」の調べ
おしろいと朝顔の種かぞへつつ箱にしまへり幼き孫は
河原辺は茫ばうとした薄の原銀色の波寄せては返す
カサコソと音たて落葉ふみながら児童らは行くこの通学路
保育園児のマスク姿の愛らしさ「こんにちは」と言へば笑顔が返る
南天に千両万両ナナカマドまゆみも有ります赤き実が好き
店先の大きな瓶に生けられたる南天の赤は幸よぶごとし
あかつきに氏神様に祈りたり恙なくあれ令和五年は
「善光寺」さん散歩コースの友がゐて信濃から届く冬の便りが
九十九里の妹よりの宅配便いわしの酢漬は新年用に
あなうれし水仙の苔ふつくらと数へてみれば三十と二つ
告別式うからやからが一同にいつしら我は最年長に
歳たける事を身に染み思ふなり濯ぎ物干すに背伸びしてゐる
国語辞典日中辞典拡大鏡かたへに置きて書き物をする
白木蓮やじりのやうなつぼみ数多空にむかひて冬陽にかがよふ
やはらかく大根の葉は広ごりてその紫の花咲くをまつ
友の家ひそやかに咲く寒桜主の体調気づかふやうに
園児らのはじける声が聞えくる「福はうち鬼さんもうち」
紅梅と白梅よりそひほころびてキャンパス内に春は来たれり
向かひ側の家に日の丸ゆれてゐる昭和のやうなけふは祝日
つややかにらふばいの花咲き初めて木下に寄れば大陸の香りす
我家から菓子屋横丁一、二分行き交ふ人らの楽しげな声

叔母逝きてうからやから顔あはす従姉妹たちも高齢となりて
園庭の大きな大きな白木蓮あふぎ見る人スマホかざす人
千葉に住む妹きたり汐の香と干物のみやげ何よりうれし
園児らのはじける歌声聞えくる鯉のぼりと母さんの歌
寺庭につつじの花が咲きみちてその赤き色もゆるが如し
桜をはり初夏きませリラの花も紫つゆ草も涼やかに咲く
蔵の壁つたの若葉におほはれてその若緑まなこにまぶし
施設にてすごす弟に文を書く近況報告三枚となりて
ざくろの花密に咲きたりその赤はかがり火のやうなり夕暮れ時は
我の好きな虎屋の最中そつと持ち孫娘来たればあなうれし
寺庭の小さき池に蓮の花すがしく咲き初め初夏となる
夏草のあはひに赤き水引草かくれんぼする様に風とあそべり
山吹は文月の庭にあえかなり返り花なりひそと眺むる
河川敷焼けつく様な夏陽あび負けじと声出しボールけり少年
大通り早や提灯が飾られて浴衣姿の人ら行き交ふ
丈たかきゐのころ草のその穂先ムクムク太つて風とたはむる
地蔵様の供花はミニの向日葵よ日差しを受けて微笑んでゐる
ゆゑもなく白粉の花が大好きで近寄り見ればほのかに匂ふ
梅漬けをザルに並べて干す仕事祖母を手伝ひしは遥かとほき日
夏草の茂れる庭に秋茗荷顔を出しゐるまるまるとして
彼岸あけ枝垂るる枝に柿の実はうれひ深めて秋の陽あぶる

黒田江美子（くろだえみこ）　（千葉県）

さくらんぼ東根駅

才媛にて慕はれ来たる先輩の認知の不安聞けば胸刺す
長きこと留学生に寄り添ひて輝く才女我らの憧れ
師の通夜に初対面なる高田さん情深き人すつかり江戸つ子
「江東」をわが故郷を高田さんのガイドに巡る約束消える
民舞の部に男性ふたり入会し談話の種の少し艶めく
デイケアに妻送り出して来ましたと新会員の声の明るし
盆踊り生涯初の体験と八十一歳男性嬉々とす
散り積もる葉の色冴えて手織りなる布地のごとく歩道を埋める
年賀状の届く元旦に一年の無沙汰も丸く解消となる
対面の叶はぬ方と一枚の賀状に交流す五十年目も
水仙の群れ咲く土手に早咲きの桜咲き出す陽に急かされて
早咲きと括れど己が時機ありや硬き蕾の緩ぶは暫く
賑やかに重なる鳥の鳴き声を浴びて佇む行徳緑地に
絶え間なく交はす野鳥の鳴き声を聴き分けられず包まれてゐる
街区公園に植ゑたる梅の木四年目に探梅の時友知らせくる

温暖と予報の週末待ち居れば梅園の画像ラインに届く
枝垂れ梅「藤牡丹」咲く大振りの樹形に八重の大輪香る
幾人もさくらさくらと誘ひくる平和に帰する日常ありて
暖かくなれば下待つ花見なり戦禍コロナ禍収拾つかずも
生きてゐる時間を「この世の滞在」と詩人の表現宇宙に頷く
明らかな陽射し不足に健気なり花枝先に満ちて揺れをり
常緑の樹々に囲まれ枝垂れ咲く花は三春の子孫木なり
ひと月を感動の無き日々として生きたのか作歌に詰まりて思ふ
さり気ない何時に変はらぬ姉の声転移数多の癌告知受けたと
「時間少しはあるかしら」姉の言ふ生への意思や強く籠れる
孫と住み大学生活支へやると姉の目標完了間近に
学生の孫と二人の六年間姉の暮しに進化重ね来
対面に見舞ひ叶へり食欲の戻らぬ姉に駄菓子を持ち行く
「さくらんぼ東根駅」に降り立てば褒賞の如くさくらんぼあり
さはやかな駅舎ほがらにさくらんぼ佐藤錦を贅沢に食む

荒天の予報にあれどさくらんぼを愛しむかにひかりさしたり
ふらつき東京駅地下に踏み迷ふ我が社会力の衰へ進む
放射線治療受入れて姉の言ふ「この世の時間をもう少し戴く」
絵を学び演劇愉しみ莫大小（メリヤス）屋に嫁いだ姉の願ひを聴かう
コロナ後は暑さ指数の報じられ熱中症予防に閉ぢ籠る日々
利用者の予備軍なりと誘はれて介護施設をぶらり見学
大目標健康・安心・安全と施設運営の理念に触るる
株式会社の介護施設運営に営利の目的如何に遂ぐらむ
起き伏しは株式会社システムの生活支援サービスを受く
この国の医療も介護も産業に経済社会の只中にある

歌舞伎俳優市川中車（香川照之）は、父猿翁と縁薄く幼い頃から一度も会えずに育った。二十五歳の春、思い立って会いに行った父から「あなたは私の息子ではない、あなたと別れた時から私の人生が始まった、帰りなさい」と言われた。ただ中車には「私の息子ではない」という父の言葉を聴きながら「あなたのことを愛している」としか聴こえなかったと言う。

残虐な事件を起した若者達が「殺すのは誰でも良かった」と言った衝撃的な言葉を「誰でもいい、誰かに愛されたかった」とも私は聴いた。

九十歳の先輩女史は凛として代表の任さり気なく為す
我が集ひ先輩女史の悩めるを吐露できる場と成りて幸ひ
旧友と半年ぶりに長電話締めの言葉は「今を生きよう」
シニアマンションを叩き売るかに繰り返し特典付きの案内届く
体操の代はりと言へど男性も民謡曲を口ずさみ舞ふ
風流踊り影響ありか三人目の男性見学入会となる
コロナ禍の脱皮を図るひとつとて男性初の盆踊り舞ふ
ウォーキングマシンに十分歩めども消費カロリーキャンディひとつと
友逝きて三年前の舞姿ラインに送らる一人通夜する
家居せる日の多くなり公園の真中に聳ゆる欅は裸木
年賀状の添へる一文に拘りて宛名の相手の来し方押し遣る
二十年振りに教科教員を担当すると友の決断まづは応援
教員不足の解消ならず再任者要請となる新たな景色
鋸南町の頼朝桜は河津より贈られたると冠の妙味
休会の書道サークル四年目も再開決めず茶会に親しむ
集まれば気心知れた古き友話題途切れぬ喫茶壱番館に
久々に心晴れると年嵩のひとり居長き友の言ひたり
寒空にライン友だち繰り出して十六本の梅花を観賞
開発を免れた地の五十年目楠木樫の木貴重な樹林
一本の桜に近き山桃と貝塚伊吹の陽を遮りぬ
物干しに隣家の主婦と談笑し二日後の訃報あまりに悲し
亡き人の手塩にかけた芝桜花ボラの花壇地域に遺る
ひたすらに肩甲骨を上下させ重き頭部の解消図る

基礎年金「特別徴収」の名の下に順次引かれて受領は五割
たかが飴と口にふふめば久しかる風味食感蘇り来る
駄菓子屋に購ふ飴の製造所「春日井製菓」「榮太樓」はなじみ
辛口の伝統手練りニッキ飴の相性良く気分整ふ
直火炊き天然素材のニッキ飴病み付き日に三個を限度とす
たかが飴されど飴なり「日本書紀」に神の供へに作りしと記せる
「縮んだね」「膨らんだね」再会の物言ひ着地は「生きてゐて良かつた」
リハビリの理学療法士変はりたり青森出身の新人二人に
前任の理学療法士二年目は訪問リハビリへ漕ぎ出づ
「東京駅」三年振りの地下街は変化大きく戸惑ふばかり
工事中の乗り換へ通路は壁板に沿ひて歩める平易な所在
「エキチカ」に物珍しき店並び存じ寄らずに乗り換へ口へ
抗がん剤の治療始まり早々に姉グレイヘアーのウイッグ求む
吐き気下痢と抗がん剤の副作用治まり姉は在宅を選ぶ
サンルームに午前5時前あかあかと危険な暑さの一日始まる
このあかは何と表現するのだろう東の窓に今朝も張り付く
新聞の大型広告に煽られるマットレスセット半額セールと
新聞のふた面占めて売り出さるマットレスは売れ筋なるか
セット買ひは六割引きと大幅なディスカウントに購入欲失す
広告にオリンピック選手起用され手放せないと愛用の弁
日本橋老舗の海苔や鰹節を江戸川岸に対面販売
佃煮店牛鍋店も加はりて若旦那会の事務局運営
常夜燈遺る江戸川舟運の長き歴史に結ひある催事

佃煮のあみエビアラレふりかけのサケ牛そぼろ今も「ご馳走」
寂しきは浅草海苔の表記消え看板全て有明海産
サービスの税込み価格一覧に日常の家事労働重なる
民間の介護施設の増大にサービス格差多様にあるらむ
百歳は百年前から生きて居る高齢者施策遅れ遅れて

兼目　久（けんもく　ひさし）（栃木県）

深紅の色

瓶のキャップに水を注ぎて一杯を硯にたらし墨をすり行く
濃く磨つて水で薄めればちやうどよき墨量となり幅を書きゆく
昼日中花を閉ぢてをり夜になれば花開きたりオシロイバナは
ハキダメギクは誰が名付けたかゴミ溜めで発見されにき花は美し
太陽を左に右に見つつ帰る運転する道カーブ続けば
直径が18センチのブロッコリー巨大ブロッコリーと我名付けたり
使ひ終る筆をそのまま放り置く筆はかちかち固まりてをり
残りたる母の日記帳のところどころ変体仮名も混じりて書けり
「新しい景色」が見られる未来なりと各新聞の見出しに躍る（W杯サッカー）
つぶつぶの米が入りたるどぶろくの酒をもらひたり甘くうましも
十月の寒波来りてハキダメサウ自ら腐り根元よりしぼむ
ポインセチアの深紅の色の奥深さに魅せられ店の一鉢を買ふ
二月まで畑に残る白菜は風雨に当るも甘さを蔵す
日本を抜きＧＤＰ二位の中国は戦艦を作り海へも進出す
建物は上から下にペシャンコに砂山の如く押しつぶされたり（トルコ・シリア地震）

民主党政権の時に廃止されし本市のダムは復活されたり
ダム工事復活となりてわが街にコンクリート車行き交ひてをり
大根や人参果物など一個づつ値段表示ありスーパー店内
練習に練習を積み負けないとふ精神を積み上げた底力（ボクシング井上尚弥選手）
むつくりと土を押し上げ芽を出せる馬鈴薯の芽は生気に満ちる
三月に入りて暖かき気候なり「しもつかれ」作るは二月に一回
近年は三月中に満開になる桜の木開花早まる
条幅の草書作品を寝る前にくづし字を更に確認したり
十年間使ひ古したる筆なのに弾力ありて使ひやすしも
銀行の窓口に置く紙ぶくろに First for you の文のほほ笑まし
南極に越冬したる隊員はキャベツの千切りを食べるを好むと
四月末に播きし大根太くなり六月に入り下ろして食めり
大谷選手がホームランを打ちし時球場の子供フォームを真似する
落下する花が流れる水に浮かぶとふ「落花流水」を条幅に書く
タイル張りの玄関前に行き交へる蟻の歩くを踏むを避けたり

どれを出すか展覧会に書の作をまじまじと見て一点選ぶ
客観的に見れば年寄りの部類なり八十代の半ばの我は
空海は線に重みあり最澄は清澄にしてやさしき筆跡
インド人口世界一位になりにけり十四億を越え中国を抜く
「中国菜（な）」と称する種を今は売つてをらず菠薐草に似たる食感
大薙の男体山を眺むれば岩止め・雪止めのコンクリ壁光る
顔眞卿の「建中告身帖」のふくよかさに生命力の豊かさを覚ゆ
八十代半ばを越えて隣組の最年長となりたる吾は
家具店は廃業したりコンビニになりたる街の中心市街
牧野博士の連続ドラマ始まりて植物の名のつぎつぎ出づる

寒い冬が過ぎ去って、三月末から四月初めに、桜の花が咲く。あちこちに花見の客がくり出す。桜の花が咲くと、わが家庭菜園も忙しくなる。

年を経るに従い、昔のようにシャベルで広い土地を耕す訳にはいかない。すぐに疲れてしまう。動力の小型トラクターで耕す。畝を作り肥料を施す。

四月初めには、ジャガイモの植えつけをする。カリフラワー・ブロッコリーも移植する。大根、カブ、小松菜、ホーレンソー等の種もまく。収穫が楽しみである。

春が来て夏が来りぬ秋を飛び越し今年の気候冬になりたり
各家庭のプラスチック資源を集めたるぎつしり高く積みトラック走る
道路にて鹿が車に衝突しドライバー死すとの事故起こりたり
風受けて銀杏の木の葉舞ひながらゆつたり落ちて歩道に積もる
散歩道の低き山に登り来れば東南に筑波山くつきりと見ゆ
納豆まで値上げと妻に聞き及ぶ納豆は我のたんぱく源なり
ウクライナはどこかの国の歯車にはならぬとゼレンスキー大統領言ふ
対スペインサッカーワールド試合終り再度の逆転勝利の日本
若き頃は300枚書きし賀状なれど八十歳越えて100枚となる
新しい景色が見られる時代なりと森保監督笑顔で話す
（W杯サッカー）
賀状書く師走となりて又一つ年を取るとの感懐を受く
駐車場の片隅に猫ら二匹にらみ合ひつつ声をはりあぐ
長靴をはきて畑の中を歩くすべつて転んで尻餅をつく
立春を越えれば春が来ると言ふ今年の寒さ長く続けり
二日前に雪が降り来る予報当たり二月十日早朝雪降り始む
一枚づつビニール袋に包まれて千枚漬は孫のお土産
顔手足寒く感じつつ地を見れば畑土湿り潤ひのあり
ロシアを支持するしないは勝手だとプーチン大統領居直りて言ふ
自国をば守らねばならぬ日本の軍備増強に拍車をかけねば
（岸田首相）
家庭ごとの廃食油の精製油は飛行機が飛ぶガソリンとなる
寒くなり温かくなるを繰り返す桜の花を待ちゐる吾は
池の面にばたばた羽を動かして春到来を喜ぶ水鳥
プロ野球開幕以来プロ野球の記事で賑はふスポーツ欄に
防衛費を増額とする案を突如一方的に決む岸田内閣
認知機能検査高齢者講習のハガキ受取る予約をせよと
海浜に高層ビルが立ちをれば海風とどこほり気温が上がると
認知機能検査高齢者講習のハガキ受取る予約をせよと
WBCヌートバー選手のペッパーミルの仕草おもしろく子等も真似する
野球部の投手が投げるボックスに立ち速いと高校時代に感じたり
明け方に厠に起きたり電気釜の沸騰する音しじまに聞ゆ
側溝の穴より伸びるドクダミは穴より十センチ頭を出せり
最下位の二人が投票同数でジャンケンをして勝者がくじを引く
馬鈴薯の葉と同じやうに混じり伸ぶホトケノザの花馬鈴薯の花かと
ご縁があるやうに五円玉をティッシュの中に入れくれる時計店主は
高三と大学四年の孫娘の名前を違へてたびたび呼べり
地方紙にも大リーグ情報新設さる日本選手の記事日々伝へて
塩分を夏には取れと妻言ひて胡瓜漬けをばまるごと出し呉る
テレビの天気予報の当たりたり目覚めてこの夜雷鳴渡る
農耕地・畑の栽培目的の以外に生ずるを雑草と言はん
馬鈴薯を掘らんとすれば五日間雨降り続く畑土ぬかるむ
ロシアのウクライナ侵攻にミャンマーの国内圧政報じられざり

牧野博士のテレビドラマの始まりて種々の雑草が出て面白し
菅原洋一「知りたくないの」歌謡曲をピアノ伴奏に歌ふ九十歳
日光線の電車に乗ればアメリカの母と子は我に席を譲れり
けふこれから馬鈴薯掘ると妻に話す言つて間もなく雨は降り出づ
一位の木の先端の厚き葉は枯れて茶になりて落つ新陳代謝か
連日の三十五度を越す熱さにも畑の雑草繁茂し伸びる
車を避け道路の隅に生ひにけるコニシキサウは平べつたく伸ぶ
ぴよんぴよんとはねて飛びたる青蛙の大量発生す足にむらがる
庭の中に植ゑたる紫陽花上部をば塀にはみ出し花が見えたり
真夜中に頭上に雷鳴けたたまし落ちるのではと大き音たつ
高校野球決勝戦の対決に開始からテレビにかじりつき見たり
朝起くれば八時にテレビのスイッチ押す楽しみとなる野球放送
（高校野球）
八十代は二十九人中一人も居ず市会議員の選挙始まる
一週間三十五度を記録したり陽の出る前に畑を耕す
畝をたてる土の壁面に青蛙つつと滑り登るを得ず
優勝を「あれ」と称する岡田監督阪神優勝の指揮を執りたり
八十歳以上が一割の日本人口年寄り増えたり我もその一人
失投といふものはない投手みなプロの意識持ち投げてゐるから
雨洩れも音がぽたぽた天井に築五十年のわが家の住まひ
一晩中風が吹き荒れ雨戸鳴る風の猛威が我が家を襲ふ

児玉孝子（こだまたかこ）☆　（愛知県）

素直に生きる

食べ頃となりたる柿のぽたぽたと落つるは空し袋に拾う
鶴岡八幡宮に参詣す気遣う息子に願い叶えり
卒寿こえ歌舞伎に旅行に大学祭思いの足りて佳き神無月
雲のなき皆既月食見尽くさんと独り川辺に仰ぐ満月
為すことの終りは無くも今日ひと日体の動きくれたるを謝す
センターに玉葱苗の並びおりまだ作れそうと百本を買う
健診に状態よしと歯医者言う帰りの自転車軽く踏みゆく
家族等の揃う正月迎えるに「無事」の掛軸祈りて掛ける
大寒の入りにひと花寒あやめ庭めぐる吾をここぞと引き寄す
最高齢で出演するに不安あり舞台に五分前深呼吸す
オールドマンに踊る「大江戸花ごよみ」幕開き舞台にライトの眩し
わが畑の葱持ちくれば鋤焼に煮込みくれたり温もる団欒
おでん煮たと熱き鍋持ち娘来て予期せぬ夕餉に温もり味わう
役職のつきたる長男多忙とて寒肥頼むに出来ぬと断る
独りには負担の寒肥迷いつつ次男に頼めば軽く返事呉る

春寒に下校の女生徒スカートに素足をみせて寛ぎゆけり
貝母の芽もりもり育ち一角を緑おし合い春めく花壇
世界一侍ジャパンに湧く列島吾も釘づけ勝利の瞬間
桜咲く寺庭に集う「そばの会」花を愛でつつ仲間明るし
家康の敗れ逃れし大樹寺に敵払いたる僧の閂をみる
春くればゴキブリ団子を鉄則のごとく作りくる四十余年
休眠の畑に夏野菜植えるとう急に気忙しく土掘り返す
夏野菜植える準備を為しいるに左腕急にひどく痛みぬ
夏野菜を植える経験なき次男にトマト茄子胡瓜頼む連休
腕いため耕作するを怠れば夏草増えて気の休まらず
天光のよき湯に娘と痛む腕さすりゆっくり寛ぐ母の日
抽出しの印鑑落款処分できず夫の証と出して又仕舞う
新しき踊りの稽古始まりぬ吾が身に問いて仲間入りを決む
午前五時朝顔五輪鮮やかに息する花か揺れつつ開く
蝉の羽化刻一刻を見詰めおり初めて出会う命の誕生

もちの木に体震わせ初蝉の鳴くを目にする静けき朝
飛びたてる鷺の姿に麗しく三輪咲きて微かに揺らぐ
孟蘭盆を迎えるお磨き手伝い呉る嫁手際よく仏壇を清む
仕事終え暮れるに急げば眉月の西空に冴えこおろぎの鳴く
昭和の子水を買うなど夢にも無し老いてボトルに富士の水飲む
待ちいたる女孫の男児出産す帝王切開したとラインあり
初めての落花生作りを楽しむに莢とる烏の仕業に驚く
きらきらと風にテープの光りいて落花生の実抜かるる跡なし
折角の息子の誘い又と無し早速に用意す暑く晴れた日
大学院合格したと男孫くる長生きして聞く吉報嬉し

所属していた結社が廃刊となり、お世話になっていましたT様の紹介で、「冬雷」に入会させていただき、八年となりました。編集長様はじめ、編集委員の方々の御苦労に、充実した内容の「冬雷」誌の届くことを楽しみにしています。

自分の思いをどう詠むか、何を選ぶかと考えるのですが、結社の理念に、又会員の方の短歌に、捉え方が広くなりました。時折に、一首作品評のあり、刺激が大きく励まされます。力の許す限り考える時間を楽しみ生きる糧にしていきたいと思います。

横浜に息子夫婦と一泊の旅楽しみ待つも身の不安あり
氷川丸の近き夜景を眺めつつ静けき港に幸せ包まる
八幡宮に引きたる御神籤凶と出る落ち着き読みて吾を戒む
コロナ禍に入学式もなき学生三年を経て大学祭成る
部分食の月を見詰めて一時間光の消えて赤黒き球
幸福は眉ひそむれば逃げると言う昨日のいざこざ今日は捨て去る
声張り上げることなど無きに報恩講の経の習いに二日を通う
鍬仕事は偶のことなる長男はきついと言いつつ優しく藷掘る
さつま芋掘るを漸く成しくるる兄弟二人難なく終る
花壇の花年改まり植え替えにパンジーデージー金魚草買う
知人より頂く葉ぼたん白と紅松飾りのごとく玄関華やぐ
昆布巻きに田作り煮豆つくらねば年越せぬと煮る大つごもりに
脳力の衰えゆくも前向きに穏やかに生くと書き初むる日記
一年をかけて習得した踊りオールドマンに出演せんと励みたり
何事もなく出演を終えたるは仲間の支えと安堵する宵
味よしと友の褒めたるレモンの木よき実のなれと寒肥弾む
寒き日に夕餉の支度煩わし藷粥炊きて独りの食足る
老いわれの植えたる花は美しく花壇に三色鮮やかに伸ぶ
独りだから整えたりと言いし男性僅かを病みて逝きてしまえり
供えてと姪の呉れたる章姫を飲み門におとすは惜しと味わう
「憧れを捨てて勝とう」と大谷の選手に告げる言葉のちから
無造作に水仙いろいろ差したるを眺めいただくゆとりの夕餉
何気なくテレビつければ「水戸黄門」夫の好みを久久に見る
右奥歯に歯間ブラシの挟まりて折れてしまいて抜くにも抜けず
微妙なるゴキブリ団子の生地づくり効き目のあるや光る虫見ず
投票所の受付に確かめらるること然りと答え一票投ず
四月には植え付け終ると思いたるに儘ならぬ身を嘆きいる夜
晩婚の孫は八月出産と花鉢を持ち訪ねくれたり
東窓の緑のカーテン朝顔ときめて種まく赤と紫
自転車にスマホ見ながら乗る青年我はハンドルしっかり握る
わが畑の一隅を埋めたる半夏生友は眩しとスマホに写す
二十歳の名人誕生藤井七冠タイトル多くも驕る面見ず
庭に咲く紫陽花ぬらす梅雨の雨花は重さにじっと堪えいる
種を採り蒔きたるゴーヤ芽を出さず諦めおれば出揃う六月
多忙とのみ言いたる長男白樫の生垣剪定やっと成し呉る
夏草の茂るに手を貸す人もなく早朝作業に二日を動く
朝より蝉暑く鳴きトマト捥ぐ小玉中玉鈴なりの枝
夏野菜の弱るにひと雨願えども週間予報に雨マークなし
外気温三十九度に「元気アップ」迷うも仲間のよきに参加す
友呉るる鷺草花芽の青く立ち暑さをさけて夜露にあてる
夕風にのり紅萩の咲き初めぬ季節の移りゆく処暑の日に
落花生畑に光るテープを張り廻らし烏の手応え様子を探る
湯に行かぬか草取り成す朝誘いくる急な話に戸惑う一瞬
付知峡に恵那山臨み「おんほいの湯」独り静かに吾が身を労う

小林貞子（こばやしていこ）　（山形県）

白銀と白魔

月半ば楽しみ開くパソコンに最新号の冬雷誌読む
渾身の気迫を込めて焼く陶器一途に励む眼鋭し
おほどかな手捻りながら凛として賜る花器の胴の膨らみ
祝にと蛍火のランプ賜りし盛りの頃の陶工の意気
刺毛ある角榛を素手に剝き食べさせ呉れし父の指はも
つのはしばみの芳ばしき実の甘やかさ妹と二人の思ひでの味
小春日に桃色一つ咲きてより山茶花たちまち花に膨らむ
マンションのベランダ育ちのレモン二個切口青く贈られ来たり
寡婦の身の姉が寂しく懐かしむ治療に添ひし道道の花
限無しに嵩積む雪は剃刀で薄く削ぐごと精気を奪ふ
白銀と言ひて白魔と呼ぶ雪を憎み切れずよ白は美し
空中に微塵の氷の針含み名は寒気団寒さ身を刺す
ひとときの陽射し厨を過り行き廊明るめて今日は立春
ドナドナドナと小く歌へば彼の肉を一世避けゐし父母の偲ばゆ
牛をりて農のたづきの立ち行きし黒き巨体の父の相棒

絵の中に五本の福寿草咲きて黄の花弁は今も輝く
幸ひを込めて描きし福寿草「クナウ・ノンノ」は女神の化身
雲の間を望月遠く渡り行くせめて照らせよわが愚痴の闇
枝先の芽鱗落ちゐる粗目雪早も林に春は兆せり
この星と火星の夕焼けは逆と云ふ真青の空と青き太陽
花便り早も届くとテレビ告ぐ籠編み進む手に春日影
夜もすがら胸の底ひの疼きをりさあ眠らうぞ眠りは薬
正月の雪に阻まれし子等帰省さみどりの葉の柔く清しも
久久にあにとおとうと一つ部屋何語るやら夜更けの灯
去年今年約束のごと花時を選びて逝けり二人の義兄
日輪を紗にてすぽりと包むごと霾る一日山朧影
蕨野のさ緑わらび採り頃を早天の霜降りて茶に焼く
アルデバラン牡牛の右目の赤き星眉目良き乙女を今も探すや
火の色の水平線に飲まれゆく夏至の落暉を息詰めて見る
梅雨晴れに藜を湯掻き胡麻汚し年に一度の中気の予防

笊に上げ裏返し干す今年梅あの人この人恙無けれよ
葉月二日の窓に向き合ふ望月は白道低く南を行けり
父眠る丘の道薙ぎ墓掃除一人通ひし妣を寂しむ
横川の流れの細る川原石しろじろ熱し今日秋立ちぬ
地の底に氷を抱くや夏の井戸掬へば甘さ身の内めぐる
スーパールームーンの硬き銀の色かたへの雲に光を透す
後ろより気配を消して秋来たり白露の今朝は霧り合ひて冷ゆ
『風の中のマリア』は未知の世界観読み終へてはや夏の黎明
小望月の七彩の輪の美しき行く片雲を虹色に染む
長雨と風にしだかれ倒伏の稲を見回る若人無言

さりさりと白菜を食む青虫よ美味いだらうね無農薬だよ
カーテンの割れ目探せぬ検診車男子のエリアを開けてしまひぬ
夏櫨の黒き実扱けば笊二つ濃き紫のジャムに作らむ
牛肉の時雨煮あけび詰めなどを送りやらむと一日精出す
ばあちやんのお蒸し待つてゐたのよと遠く住む孫の声の明るし
ベランダで終日柿の皮を剥く皺の手元に陽射しを浴びて
野路菫ぽちりと小き濃紫小春の畦に三つ返り咲く
畑仕舞実りの土に礼を言ふ今日の晴れたる空の薄青
裸木に柿の実数多残りをり陽に輝くを詫びつつ見上ぐ
山道の傾りに低く枝を張りてはしばみの木は今も立つらむ
錆止めの弁柄色の裏階段いづれ焦茶に塗りて戻さむ
おみづけの漬け時だねと便り来て赤粗目糖急ぎ買ひ足す
「メッシ勝つ」報道最中妹ははろばろパリのホテルにをりぬ
長の年桃と梨とを賜りし優しくシャイな義兄でありし
先行きの足跡へ一歩また一歩登校の児ら膝までの雪
三尺の雪に静もる朝の道人も車も除雪車を待つ
歳神を祀れぬ家の仏壇に溢るる程の供花を捧ぐ
「椿象（かめむし）の秋に少なは雪少な」この冬降りに降りて大雪
冬晴れに戸を開けやれば忽ちに澱みたる気と埃た走る
長年をオイルヒーター寝間に置き夜を通して温む幸せ
時折は正座をせんと試みる横座りしか出来ぬ両膝
音も無く細き雨降る雪原に薄靄立ちて雨水となりぬ
広げたる高き末より青み来て岸辺の柳柔く煙れる
木星と土星が隣り合ふ夕べ焼餅焼きの雲お邪魔虫

七千八百万キロを一飛び火星へ避暑に行く温暖化後の地球の夢想
銀嶺の飯豊連峰膨らかにけふ清明の空に横たふ
ベランダの手摺に靡く庭木木をばつさりと伐るまう惜しく無し
階段に伸び来る枝の払はれて夕影の中切り口白し
雪下の土盛り上げて蚯蚓追ひ土竜その身を養ひをらむ
雪消えて土の小山の数知れず莟を抱くプリムラ埋まる
鳥兜水仙福寿草などのアルカロイドを土竜苦にせず
積雪の下にて長期稼働する土竜忌避器を切に望みぬ
健やかに変はらぬ子らよ垂乳根は安けき夢を旨寝に結ぶ
桜蕊散らふ傍ら緋の桃の一本在りて狂ほしく咲く
撫若葉八重の桜の盛りゐて電話の向かうの姉の放心
連休の帰省者揃ふ大家族笑顔のまどゐは通夜の哀しみ
愛らしき曾孫を得たる福耳の義兄は眠りぬ花に埋もれて
海越えて飛来の砂塵目に痛し陽は照りながら空の濁れる
柘植垣の根本を被ふ射干の花飛び立ちさうな軽やかな白
蕺草は射干に競ひて高く伸ぶ剣の葉叢かき分けて抜く
浜茄子の香り仄かな白き花うてなの下に小き実を持つ
若葉風清かに薫る道の上に木洩れ日追へば決意揺らぐも
満月は文月の宵の山の端を明く照らして今昇り来ぬ
丈高く育てし藜の細き杖中風予防に良きと人言ふ
行商の人より買へばこつそりと鵜と鷹の目が窓に寄り来し
四十五歳に車の免許を取りしより行商のひと遠のき行けり
赤み帯び南に低き十六夜の右へ並びて朱のアンタレス
木の上の完熟を待ち捥ぐ梅は甘さ仄かな梅干となる

早朝の靄に屈まり動く人墓掃除はまづ草挽りから
夕立の気配を含む黒雲よ疾く来よ暑さ鎮め給へよ
夏闌けて川沿ひ柳ねずみ色茂りあふ葉の猛猛として
遠山は暗く煙りて驟雨らしとんびまいたけ育ちをるらむ
椎茸と昆布といびり南蛮の辛み宜しき万能醤油
蜆汁濾して一夜を冷蔵庫猛暑の冷汁茗荷と豆腐
三〇度超ゆる暑さの夕つ方伸びる甘藷の蔓返しする
柚香菊摘みて遊べばふうらりと秋津一匹親しげに寄る
知らぬ間に狐の剃刀薄桃の花咲かせゐる彼岸会近し
飯豊嶺に沿ひて白雲立ちわたり夏の果の空深き色
秋晴に裏階段のペンキ塗り十年保てと焦茶の塗料
今夕の風呂の湯を二度上げやらむ身に冷涼の長月の尽
秋霖に立ち並む電柱黒く濡れ人影の無き昼の町並
丈高く黄の頭状花咲き群れて野の菊芋は秋雨の中

小林芳枝（こばやしよしえ）　（東京都）

うどんを煮込む

ひかりつつ東に移りゆく雲にほそくかさなる薄墨のくも
心経を読みつつをれば息を継ぐこゑのかすれは墨継ぎに似る
中央に露地作られて向かひ合ふ三階建ての白き住宅
後期高齢といふ域にゐる身のめぐり減らすことなく七十八歳
医療費の一割負担の決定を喜ぶ友は一月生れ
気掛かりの事柄ひとつ解れたる電話の後にうどんを煮込む
満開を過ぎて深まる花のいろ河津桜の一樹をあふぐ
河津桜と川のあひだの遊歩道足もとちかく蒲公英が咲く
花終へてしづまる若木河津桜の疎らな枝はこれから伸びる
川の上に架かる大きな橋ありてしろくまぶしき傾斜をのぼる
ボール打つ音軽やかに響きくるテニスコートの柵の内より
簡易テントビニールシート三月の光のなかの広場いつぱい
昼まへの公園を一時間ほど歩く休日のバス途中下車して
「よりみち」という居酒屋のありしこと思ひつつ昼の公園に寄る
ウオーキング続けてきたる友の足軽く細かくわが先を行く

数十年ぶりかと思ひつつ来たる本土寺に続く杉の木の道
参道の空を覆ひてゐる杉の乾びて剥けて幹太く立つ
土寺につづく日陰をゆく人等さはさはとして騒がしからず
花菖蒲の池を囲める道筋の右手斜面に紫陽花のはな
萎れたる花菖蒲手に摘みながら目立たぬやうに動く人をり
俯きて画用紙むねに寄せながら絵を描く人に離れて通る
紫陽花と花菖蒲咲く庭過ぎてしづかなり本堂と墓地の入り口
紫陽花の葉に蝸牛見つけたる遠き日のこと思ひつつゆく
紅葉の頃も来たいと言ふ声す細かなモミヂの葉を仰ぎつつ
ヨーグルトにかけたる今朝の苺ジャム少し長めの四国のかたち
緑茶にバナナ食パンチーズヨーグルト順に詰め込む気だるき朝も
危険なる暑さになると一言を添へてをはりぬ今朝の予報も
信号を待つ間に出でてくる汗の流るるままにまた歩き出す
終了間際の郵便局のカウンターに職員ふたり立ちゐて迎へ呉る
管理室の庭に芙蓉の咲き初めてくるしき暑さ九月につづく

七十代最後の歳を楽しめと朝にみじかきメールが届く
ひさびさの電車にこころ落ち着かずスマホに見入る人をみてゐる
明日からは十月になる土曜日の上野駅まへ陽射しまばゆし
改札を出でむとすれば人混みの中より抜けて友の現る
顔あげてゆけば公孫樹はびつしりと完熟ちかき実を抱へをり
軽快な友の歩みに合はせゐて整ふわれの歩幅と速度
上野駅公園口に人を待ち一人帰りしとほき日のこと
明らかな高みの白を目差す絵のしづかな青に身を置いてみる
絵のなかのほそき裂目にはひる日のひかりが届く緑の原に
知識なく入りたる韓国料理店に迷ふことなく選ぶビビンバ

私の住む集合住宅の敷地は大きな三角形になっていて道路に囲まれているので三角の庭が二つある。その一つに柚子が一本あり大きくなったので毎年十二月に管理人さんと収穫して籠に入れ郵便受けの前に置いている。数時間で無くなるので皆さんに喜ばれているのだろうと感じている。今年も柚子が沢山実って夏の頃から楽しみにしていたが小さくて皮が固くて使えそうもなく収穫を諦めた。夏の暑さの所為かもしれないがとても残念だった。柚子が置いてなくても誰も何も言わないのがマンションらしいといえるかもしれない。

大規模修繕工事終りて滑らかに光るベランダ鉢ひとつ置く
三度目の大規模修繕ベランダはわが物ならずとまた思ひ知る
台になり物入れになり古き家具部屋に並びて不自由をせず
ガス台に出番少なくゐる薬缶いつよりか光り失ひてをり
ＩＨに替へたる娘のキッチンを追はれて此処に十五年ほど
何の汚れか分からぬ染みを一つづつ消して達成感われに湧く
膝に乗せて磨く薬缶の側面に秋日あかるき窓枠映る
四十九歳が限界と言ひ転職を決断し実行したる長男
「動けなくなつたら来れば」あつさりと缶ビールの蓋開けながら言ふ
アラームを忘れて眠りたるらしく自づから目の覚めゆく今朝は
二時間も遅く目覚めてしまひたる朝はだらだらせず起き上がる
八時まで眠りてしまひたる朝の外の明るさ食パンを焼く
パン食に替へたるのちも日本茶を朝あさ淹れる仏とわれに
二時間ほど遅れて目覚めたることの午前も午後も差障りなく
眠れずに苦しみし頃に試したる早起き作戦ほぼ十四年
くれなゐの蕾いくつか開きたり梅は枝先すこし伸ばして
吾が背より低き木に咲く梅のはなくれなゐ深く小さくひらく
誰かさんが庭に植えたる梅の木か今年も一月半ばに咲きぬ
寒中に咲きはじめたる梅のはな行きにみて帰りには足止めて見る
広げたる枝にたつぷり日のあたる冬は欅の休息のとき
植ゑられて四十四年吾の知る四十二年欅をあふぐ
冬空に向かひてひらきゆく枝を束ねて欅の幹直立す
ひとり来て石のおもてを拭きてをり彼岸のまへの平日の朝
この墓は西方浄土に向いてると言ひし人ありき納骨の日に
回り道して花を買ひたる店も墓もわが家より徒歩数分の距離
草生ふる隙間なく並ぶ墓石の隣の人に合ふこともなく
両端と高さを揃へたいといふ石屋の望み適ひたる墓
屋根越えて枝垂桜の咲きし家しばらく空地のち駐車場
工場の跡地の広き駐車場ひとつの隅にコンビニ出来る
古びたる工場のある町だつた八百屋魚屋豆腐屋が来て
牧水の歌につながる町の名に節などつけて口ずさみたり
貰ひたるどら焼きひとつ卓に置き包みの内のふはふはに触る
八十歳現状維持を目標にさしあたりけふの作業を熟す
伸ばしたる蕾の先を震はせてサボテンの長きはな緩みくる
一どきに咲くかとみえて僅かなる差に先立てるひとつがひらく
サボテンにうすももいろの花五つ咲きて明るき夜の部屋のうち
球形の茎より伸びてひらきたる五つのはなの保つ均衡
新じやがと挽肉に片栗粉入れすぎて固まつちやつたけふの煮物は
チョコアイスひとつ冷凍室に残りをりひと月まへの日の余り物
カレンダー下げて今年も冷蔵庫のドアに貼られてゐるマグネット
蝉のこゑとほく聞こえて目覚めたる午前五時半けふは海の日
休日を楽しみにしてゐたる日を思ひて床にながながと居る
遠浅の海に遊びてゐる人を映して朝のニュース始まる
海の日を含む連休三日目の夕方に出てコンビニに行く
汗びつしよりになることもなく危険なる暑さと言はれ終日籠る

風少し吹きはじめたる夕方に南の窓を全開にする
飛切りのゑがほで踊りつつ歌ふ「人生一路」美空ひばりが
ベランダに向く窓ふたつ開けて寝る扇風機ゆるくまはりゐる間に
朝はやく畑に出でてゐるならむ友の育てたる膨らかな茄子
人体に危険な暑さといふ日にて百日紅は涼やかに咲く
少し熱めのシャワーを浴びる午後六時缶のビールをひとつ冷して
エアコンの排水を飲んでゐたといふ夏の雀は朝はやく鳴く
誕生日だね今日も暑いねと言つてみる八月十九日写真の母に
ベランダを南の風がとほりゐて君子蘭は少し葉先を揺らす
山を崩し川をうづめて溢れゐる雨の一部をテレビは映す
身を守る行動せよと呼びかけてアナウンサーの声早くなる

後藤恭介（ごとうきょうすけ）☆（茨城県）

予後の生活

腕時計して麦の道ペンとメモ持ちつつ歩く晩学の吾
眼の手術終えたる後の「うつぶせ寝」夜中に何度も起きて長かり
一歩ずつ回復待ちなる眼の術後今日は退院桜花咲く
眼の術後初めて畑に行くわれに妻同行すさくら満開
見知らぬ猫我が縁先にくつろぐを窓越しに見る我と妻なり
古稀越えて元気な妻の誕生日いつもの鮨屋へ宵のひととき
網膜剥離と言われて緊急入院す午前に受診し午後再手術
病室のゆっくり流れゆく時間は詩歌の時と思いてメモす
痛み止め飲みて退院の五月晴れ片目の暮らしに生き方思う
いつの間にか序列社会に慣らされて多様な生き方忘れていたり
「花ありて人生楽し」と母言えり吾もその歳同じ思いに
報道さるる国を地球儀で確認す世界は広し未知の国々
眼をいたわる方法考え実行す癒しの曲とグルメ三昧
昼寝して気力体力よみがえる老と闘う午後の一歩に
豆腐売る車のラッパ近く聞き昭和のくらし偲ぶ夕ぐれ

長男の渡米に家族不安ながら赴任先での活躍願う
突然に警報音の鳴るスマホ身構えるうちガタガタ揺れ来
五月晴れ牛久シャトーの鯉まつり子連れの客に賑わう出店
目を患い幅を広げて前向きに老後を生きんとゆっくり歩む
ハラミちゃんの奏でるピアノを聞きながら不思議な魅力に触れる心地す
大学の展望カフェは客まばら会議の後の語らいに湧く
パトロールの防犯会員ゴミ拾い身近な事から美化を拡げる
朝顔と風船かずらの蔓伸びて今朝は軒まで到達したり
夏休みのラジオ体操する子らと朝あさ集う大人も元気に
「冷麺」と「冷し中華」違え注文すラーメン店に妻とのランチ
梅雨明けの予報に部屋の模様替えマンネリ暮らしに気分一新
緑濃き木漏れ日受けて露天風呂コロナ禍初の軽井沢の旅
あれこれと思索の時間ジャズを聴く今やるべきこと先々の事
温暖化と疫と戦のこの地球暗雲抜けて希望の世紀へ
念願のときわ路旅の日立駅カフェでランチ後プラネタリウム

科学館のプラネタリウムに見る星座銀河の中の小さな地球
牛久藩の歴史を学ぶ夏季講座熱心に聴く多くのシニア
牛久市の「かっぱ祭り」は四年ぶり踊りを遠慮し見る阿呆なり
久々に上の鰻重注文し妻とのランチに舌鼓うつ
図書館で「ＡＩと人権」受講する将来の不安肌に感じて
ＡＩを縛る法律必要か人智を超えるＡＩ強し
「冬雷」を車中読みつつ上京す語句と表現多々学びつつ
東京駅の前に連なる巨大ビル日本の発展表すごとく
十坪を借り居る畑は雑草で畝づくり前の草処理が難儀
目を患い耳学問に強くなる生き方変えてゆっくり行かん

退職後、短歌に出会ったのは二年前の秋でした。龍ヶ崎短歌会に、誘われ参加しました。月一回の歌会に参加する中で、冬雷の存在を知り、投歌を始めたのが昨年の四月でした。丁度一年たち西暦二千二十三年の冬雷に計、五十首掲載されました。短歌は俳句よりも、本人の心情がストレートに表わされるので、人生記録になると思い、挑戦しております。二千二十年に人生初の句集を出版しました。今後も短歌に励み、歌集を出せればと思います。今後とも、諸先輩のご指導を宜しくお願い致します。

日に四度目薬さすは三種類術後の回復を薬に託す
幼児から外国人まで患者来て眼科も混みあう大学病院
久々に折り紙の箱三種作りぬ昔の箱を思い出しつつ
長男を交えて食事会をする渡米の前の会話がはずむ
眼を休め音声入力活用し気を配りつつ文字変換す
リズミカルな電車の振動帰りには安心感あり眠りを誘う
東北の十三年目のど根性ひまわり育てて開花待ちおり
夏休みのプラネタリウムに子ら数多ギリシャ神話と七夕ロマン
笑点の笑いの内にある工夫落語に深き学びの数多
軒先に日毎十輪の花を見る我家自慢の妻の朝顔

齋鹿ミヤコ（さいかみやこ）　（神奈川県）

これで幸ひ

ピカピカの高速バスに乗り込みつトイレの付くを確認しつつ
半分は空席のまま発車する川越ゆきの高速バスは
友と乗る川越湘南線のバス川越までを停まらずに行く
乗客はほとんど女性同世代孫の話の聞こえてきたり
友の足歩幅小さくなりをれば時に腕組み街を歩けり
庭の柿はじめて甘くなりてをりサイズの大きくなりたる今年
届かずにそのままにしておく庭の柿ときに雀の啄みてをり
酸つぱさと甘さのちやうど良きみかん届きて師走の八日となりぬ
家中に黒豆煮ゆる匂ひさせ来る年迎へき連れ合ひ居りき
歳晩に煮るもの切るもの減りきたり連れ合ひ好みし黒豆もなく
人ひとり歩ける畑のみちゆけば白妙の富士ひとり占めなり
踏むたびに足に安けき畑の道を覚えておかむこの足うらに
正月を過ぎれば並ぶ八朔の今年はザボンの大きさのあり
特売の文字のシールの貼られたるにぎり寿司パック迷はず買ひぬ
咲き続くスーパーサルビアロックンロール雫下の朝に枯れて終ひぬ

スカートを履き始めればある友に声をかけらる恋してるのかと
スカートをはかぬ年月ながくありこの三月のスカート再開
青鷺が職場の庭に立ち続くヴァイオリンの音聴きて居るのか
江ノ島へ渡る人等に混じりつつ連れ立ちゆくは富士をみる橋
散歩する二重瞼の柴犬を褒めれば稀と聞く二重瞼は
葉桜と八重のさくらを見に行かむ散歩に誘ふ今日の掛け声
どうしても迎へに来ると言ふ姪が姉と立ちをり到着ロビーに
もしもしと言ふ声だけが聞こえきて兄は電話を切りてしまひぬ
兄夫婦デイサービスに通ひをり手すり新たな玄関にして
ひとり飲む兄に付き合ふ一杯の芋焼酎の意外にうまし
また来ると言へば涙の顔となる兄の両足むくみてをりて
締切といふ日の月月めぐりきて三十一文字を数へてをりぬ
締切といふ日のなくて過ぎゆきぬ畳の上のダンボール箱
アルバムに貼られずにある数々の写真こたびも元の袋に
歯科医師の「知覧に行けば悲し」と言ふ口を開けられ目隠しされて

歯科医師はさらに語りつその跡の知覧に茶の木が植ゑられたるを
特攻隊と知覧のことを知らずして兄の土産の知覧茶のみたり
占ひのラッキーカラーといふ白のスカートはきて出かけてみたり
占ひのラッキーカラーのスカートを履きて過ごせば何事も無し
何事もなければこれで幸ひとせむスカートのラッキーカラー
子の世話を手伝ひくれし友はいまデイサービスに通ふと言ひぬ
いい色ねと上着の色を言ふ友が何遍も言ふ一日の旅行に
ワイパーを最大速度にして走る稲妻いくつ目の前にして
ホトトギスの葉を齧る虫見つけたり既に太りてからみつく虫
ホトトギスの葉につく虫は淡茶色からだ丸ごととげに覆はる

令和六年一月半ば、初めての入院であった。入院中の毎回のご飯は水分の多いご飯粒のほぼ潰れたお粥に近いものだった。お粥で思い出すのは、母にお粥を作って貰ったことが無く、「おかゆで病気は治らない」と言っていたこと。そのせいか私も家族や自分のために お粥を作ったことが無く、お粥を食べて美味しいと感じたことがない。それでも病院のご飯を食べ続けた。あゝ粒のあるご飯を食べたいと思い、症状が落ち着いた頃に退院の許可を願い出て、一週間の入院を済ませた。

四軒の住宅建つる計画の看板が立つ富士見の畑に
新築の三軒の家ああさうなのかやつぱりここも土のなき庭
美術館の池の面の波立ちぬめだかの泳げばめだかの波の
夏の草ふせぎくれたる菊の群れ花の終はれば刈らねばならぬ
庭の菊刈れば新芽の伸びてをり新芽残せるほどの刈りとり
白バイにお先にどうぞと促され道に入りつ白バイ四台に
新年の箱根駅伝誘導役のあの白バイ隊を後ろに付けつ
白バイに後ろを見られつつ走るくるまの速度をすこし気にして
富士をみる畑に家の建つといふ区割り図じつとあらためて見つ
測量をしてゐる人に尋ねれば畑の道は無くなるといふ
家たてば畑のみちは無しとなる畑のみちに霜柱たつ
土の上を歩けるところは公園と富士見の畑にのぼりゆくみち
修理され赤に塗らるるブランコを漕いでみてをりあの日のやうに
やや狭きままに座れるブランコに空を飛びをり前に後ろに
この店の寿司の味知る吾なれば特売の運しあはせの運
新調のプリーツスカートの足もとのふはふは弾む蝶の心地ぞ
スカートに目覚めたるらし一遍にスカート三枚買ひたりもして
ひと昔前のスカートはきて行くあの店めざしスカート買ひに
川沿ひの道を歩けば松の木の天辺にとまる鷺三羽四羽
朝の日に煌めく川面背景に職場の庭の白梅満ちつ
花咲けば伸びたる枝と幹の黒映える桜木ことしの思ひ
手を組みて踊りを競ふ大会に参加のわれらほぼ高齢者
高齢者に混じりて踊る小学生その滑らかさすばやき動き
芽吹きたる高き樹木に顔寄するキリンのすがたと色にブラボー
往き来するライオンときに立ち止まる鬣の顔なにを思ふか
蹲り客に尻むけ餌を喰む生き物は顔をみせてはくれず
不要なりと思へど買ひ物するときにマスクしてゆく決まりのやうに
ウイルスはマスクの隙間を透るらしそれでもひとはマスクしてをり
「マスク装着続けます」と回答したる人が九割といふ調査の結果
目覚めれば気になる一つ浮かびきてその後ながく深く眠りぬ
兄嫁の踊りの衣装はそのままに箪笥に収まる兄の意のまま
縁取りの金うるはしきヘアクリップ姉の遺品を兄より貰ふ
手を貸せど一人が歩き易いと言ふ兄は杖もちひとりで歩く
何年か着ることのなきブラウスとズボンの類の捨てられずをり
これをいつ使ふのだらうどうしよう日付不明の大量のネガ
墓参りの下り坂にはわれの手にゆだねくれたり杖つく兄は
兄夫婦二人の姉と甥と姪われの墓参にあはせてくれつ
知覧茶の歌を雑誌に読みたるを思ひて土産の知覧茶のみぬ
知覧茶の知覧といふ地は特攻隊の若きら飛びたちゆきけるところ
「人生に迷ったら知覧に行け」の表題の出版案内けさの新聞
種まきは五月と書きてくれし友のふうせんかづら五月に蒔きぬ
犬の服といへども襟のつく服のその値でシャツが三枚買へる
朝方の地震警報の音と揺れ揺れ収まれば眠りてゐたり

雨のなか車を運転してゆけば水かぶる道のしばらく続く
夕暮れの雨ふる街を走るときヘッドライトの頼り少なし
ほとんどを虫に喰はれたるホトトギス茎のひとつに蕾を付けっ
秋明菊の蕾知らずに花ひらく暑さの終はりと思へるころに
彼岸花こんなところに芽の伸びつ車のそばに二本立ちきて
長き茎のびたる先に開きたる花びらふつうに赤彼岸花

斉藤トミ子（さいとうとみこ）☆ （栃木県）

日向の匂い

胃袋が驚いていむ常食まぬ食材次次バイキング料理
土穿り落花生ひとつ銜え飛ぶ鴉は辺り見ては又来る
富士山はこの方角と目を凝らす霧立ち籠める大菩薩峠
積もりたる落葉を踏みて登る道落葉松の葉のきらきらと降る
穴のあく靴下干しつつ思うなり彼の山此の山共に歩みき
吐いて吸う呼吸のリズム整いてクロールに二粁ゆったり泳ぐ
救助ヘリで運ばれたという妹の元に運転ナビを頼りに
山仲間の連係の元救助ヘリの手配素早く感謝しており
クリーンハイク蜈蚣退治と銘をうつ唐沢山の塵拾い行く
小綬鶏の鳴き声を聞く散歩道いつもの道に初めての声
持ち寄った御数静かに分け合いてコロナ禍なれど山頂の昼
冠雪の男体赤城白根山眺めつつ食むおにぎり美味し
車椅子を二男に押され温泉に向う夫は常見せぬ笑み
双眼鏡のピント合わせる間もなくて翡翠いづこカルガモを見る
松の木を怒涛の如く唸らせて下山の我れを目掛け風吹く

強風を立木に縋りやり過ごす吐息の如き静まりを待つ
バス停にバスを待ちいる女高生スマホ見ながら踵落しせり
自転車の中学生とぶつかりぬ小走りに角曲がりたる時
芹なずな土筆萌えいる畦歩む杖つく妹見守りながら
血管を狭くするもの皆美味し「やっと分かった」夫呟く
春菊の黄色の花のかわいらしトイレに一つ生けて眺める
青い空緑の葉っぱ白い花五葉ツツジの満開の道
雨止みて車の反射眩しかりその向う側大き虹湧く
血糖値を計るセンサー正直にアイス食べたる値を示す
祖母の手の甲を抓んで皺皺と笑った記憶今は我が身に
収穫のじゃが芋の肌綺麗なり去年の教訓肥料やけ無し
小さき花ヒメイワダレ草の群れ咲ける田んぼの畦に他の草あらず
紫陽花の花浮かべある手水舎に鴉が一羽水を飲みおり
凍らせたペットボトルの四、五本が紫陽花とともに手水舎に浮く
偶に水と液肥やるのみの月下美人今咲き初める微か揺れたり

十二時間かけて咲きたる月下美人十輪程が満開となる
荒草の勢いているその中に南瓜が一つ実りておりぬ
覚えなき南瓜逞し荒草に蔓絡ませてその上を這う
スマホ見て梅と塩とを計りおり梅干し作り初に挑めり
赤紫蘇を入れれば瞬時に赤くなる天然色素の鮮やかな紅
梅の香と日向の匂いも壜に詰め梅仕事終うおいしくなあれ
悠悠と頭上舞い飛ぶ大き鳥遊水池に住むこうのとりなり
卒論に渡良瀬遊水池選んだと駒沢大学の学生参加しており
学生のアンケート用紙に渡良瀬の貴重な姿の行末託す
心音がはっきりしてると聴診器当てつつ女医は笑顔にて言う

齢八十！　になる私。今まで比較的元気に来られた私だけど先日突然入院（病名ラクナ梗塞）毎年の健診で異常無しのオールA。食事運動等気を付けていたのでショックでした。足が地に着かないフワフワ感、ロレツが回らないー等おかしいと気づいてから直ぐに受診できたお陰で後遺症もほとんど無いのが幸です。その時のリハビリ師に趣味を聞かれ「短歌水泳登山」と言ったら「頭と身体を使う事のバランスがいい」と。進歩のない私だけど、これからもライフワークとして行きたいと思っている。

好きな物少しに足ると思いいてつい手に取りぬ料理の数数
残さずにペロリたいらぐバイキングワインの酔いのほろほろとくる
今朝も又落花生銜える鴉あり地中に有るを何故知りたるか
合羽着て登り出だせり山頂は雪に変りて皆燥ぐなり
真ん丸の大き月なり山間に月食前の月輝けり
高速を走りつつ見る皆既食右に左に在り処確む
太腿の内転筋が無いと言う医師の言葉に愕然とする
朝朝の散歩欠かさず山も登るそれでも付かぬ内転筋は
意識あれど重態なりという知らせ意識があれば話ができる
クライミングの講習中の滑落と緊急の手術五時間に及ぶ
妹は骨盤骨折手術終え大きボルトが三本写る
リハビリを開始せるとの妹に何はともあれ安堵しており
双子座の流星群を見むとして目を凝らせども流れてくれず
厚着してベランダに立ち空眺むセブンイレブンの光が眩し
仰ぎ見る銀に輝く飛行機の音は後から追い掛けてくる
障害のある人の働く「なかが和苑」片手に掃除機かける人あり
渡良瀬の遊水池での観察会チュウヒ隼トンビを見たり
「たこの足」絶滅危惧種の枯穂あり芽吹ける春に又見たきもの
初ひばり囀る声を聞きながら畦に土筆を摘み摘み歩く
遠く霞む霞ヶ浦を見下ろして宝篋山にカップ麺啜る
いつも置く場所にあらざる免許証昨日の我の動線辿る
リハビリを他人（ひと）の倍程続けたる妹退院す一人で歩ける
鶯や雲雀の声を聞きながら笑まう妹涙ながせり
じゃがいもの植付けしたり母言いし「彼岸前に」を守りて今年も
我が言うに従う夫静かなり怒りいし日の懐かしくもあり
センサーに己の身体守られてインスリン打つ夫見守る
花むしろに座してままごとする園児我れにどうぞと花びら山盛り
春風に花びら落とす桜木の幹はどっしり枝ぶりの良し
朝朝の散歩にいつも会う人の歩みぎこちなし腰痛なりと
去年の春一株ありし草藤の今年蔓延び畦に群れ咲く
菜園に大きく実る空豆の画像が届く楽しみに待つ
今までの半分程の食事にも怒る事なく夫食みおり
糖質を少なく野菜を多くする食べる順序も指図するなり
歳問われ来年八十と答えたり動ける身体それだけで良し
荒草とじゃが芋の茎背比べ試しに掘れば大きじゃが芋
猫じゃらし杉菜の生える畦道にヒメイワダレ草は勢いており
荒草は草にて退治と白き花ヒメイワダレ草の畦に蔓延る
紫陽花の痛んだ花を入れ替えて空仰ぐ巫女孫に似ており
静かなる力秘めたる月下美人年に一度の花を咲かせり
渾身の力に咲ける月下美人翌朝だらりと花首垂れる
三十分早く散歩を切り上げて涼しきうちに草搓りする
土用干し初日ぐんにゃり三日目は指に弾力感じる迄に
梅を干す笊を写してスマホにて送れば「待ってる」と返信のくる
バンダナを替えても直ぐに汗まみれ滴る汗が目に染みるなり

人は皆暑い暑いと嘆くなか蟋蟀早やも鳴き初めたり
渡良瀬の遊水池での観察会絶滅危惧種の多くありたり
蔓性の植物多き秋の原渡良瀬釣舟あまた咲きおり
隣り合う人と見せ合う検診票身長体重歳が気になる
切り傷に火傷にアロエ塗る我れにアロエ信者と息子は笑う

早乙女イチ☆（栃木県）

ミカンの実

静かな日どこか行こうか孫に誘われ買物にでもと足利へ行く
キンカンがビー玉ぐらいの大きさになりて青青と青葉に映える
爽やかな朝日に輝く菊の花ミカンの木下に紫映える
重たげに黄色になって下がりいるミカンを一つ取り食べてみる
キンカンをお酒に漬けて楽しみに風邪など引かぬように飲みたい
そよ風に揺すられ高く朝の日に輝きているゆずの実数多
館林方面にでも行って見る田畑の道を城沼めざして
さむ風の城沼の中白鳥は居らず鴨だけが数多沼のふち
池ちかく数多の鴨が寄りてくるパンをちぎれば足元までも
ばあちゃん出かけようかと誘う孫どこにしようか花が見たいよ
とちぎ花洋ラン展示見に行こう花センターのみかも山へ
センターに入場すれば五十種のラン二百鉢見事に並ぶ
サボテンのとげとげ見ながら回りゆく見上げるほどの細長いのも
ばあちゃん誕生日だねおめでとうどこか食事にと誘いくれたり
佐野駅のイルミネーションきらきらとして城山が明るく見える

道の駅田沼の方へ回りゆきイルミネーション車窓より見る
皆やさしく今日は楽しい日をすごし本当にうれしいわが誕生日
買物にでかけようかと定休の孫にさそわれる静かな朝に
足利の方へ向かって走りゆく欲しい物あれば買ってやるよと
薬局を見て行こうかと言うほしいのはやっぱしこれだポリデントね
キンカンが黄色くなって朝の日に映えて一つ取り食べればあまい
バラ園の中は華やかどの花を見ても見事ねきれいなバラだね
あちこちと車椅子にて回りたり真っ白なバラをそよ風揺らす
そよ風に揺れるミカンはまるまるとキンカン位の大きさとなる
高々と風に揺れつつ柚子が生る取る日を思いじっと見上げる
出かけるよ早くしたくして買う物をよく考えて忘れないでね
スーパーでうどんやたまごヨーグルトのみもの箱でいろいろと買う
ミカンの実青葉の中にまるまるとピンポン玉位大きくなって
茄子苗が大きくなって生りはじめ毎日取れて朝がうれしい
ピンポン玉ぐらいの大きさのミカンの実枝に下がりて少しもぎとる

二本ある茄子が毎朝採れるのでたのしみにしてざる持ちて行く
夜の町に食事すませてドライブをしようと孫と佐野町めぐる
庭の草伸びてきたけど子らが言う「外に出るなよ草むしりだめ」
まるまると青葉の中にキンカンがビーダマくらいの大きさになる
ミカン生りあまたに生って重たげにぶらさがりたり少しもぎとる
夏草が生き生きと伸びばあちゃん草むしりなどしないでよと言わる
草むしりしたくなるけどがまんして外に出ないでじっとしている
重たげにあまたに生って色づいたミカンを一つ食べたらあまい
高き枝見上げておれば柚子の色黄色くなって朝日に映える
彼岸花紅と白あり見頃だよ行って見るかと長男が言う

故矢島さんから短歌を勧められて、三十数　しき文字をつらねている今日です。楽しく
年が過ぎました。毎月の歌に考えながら、長　やっています。
男や孫に何処かへ、連れて行ってもらい歌ら

帰り道はやしをまわり沼見える所通れば数多のくるま
バラを見に羽生の方面へと走る車窓から見る麦畑黄色
草むしりしたくなるほど庭の草のびのびとして除草剤撒く
着いたよと車を降りて出て見れば雨がふって彼岸花見ないで帰る

櫻井一江（さくらいかずえ）　（東京都）

幻の万博

五輪過ぎ岩山の如く残さるる晴海選手村のビル静もりて
「万博は昭和十五年三月から」の一文を脳裡に晴海の地歩む
小看板晴海通りの一角に立ちて示す日本万博事務局棟跡
万博の事務局庁舎は二階建て写真に示さる大いなる建屋
戦争の激化と更に参加国減少にて万博開催ならず
幻の万博となりし事務局棟は傷病兵収容の所となりぬ
晴海には兵隊さんの病院あつたのよ昔を語る隣人の在りき
万博と五輪に合せ勝鬨橋の架橋急かれし日中戦争最中
勝鬨の開橋式には療養中の兵士も参加の渡り初めし挿話
水清き大いなる白石並び立つ吉野川沿ひに吉野宮滝遺跡
吉野宮跡地に立ちてこの地より「壬申の乱」の始まりを聞く
自転車で子と巡りし「石舞台」今日来てみれば料金所の建ちて
門松を飾る習ひの無くなりて町内配布の「謹賀新年」を貼る
東方に58階建マンション完成し我が家に陽光の支障を来す
白々と夜明けは知れど陽の見えずビルの隙間に明るき青空

窓磨きたつぷり陽光とり入れて一時間ほどの天然暖房
長き陽の叶はぬ環境覚悟せむ一年前の正月とは違ふ
川流れビル建ち並び森ゆたか「台北１０１」の展望台に立つ
総統府の内覧すんなり許されて案内人優しく撮影は自由に
昨日は2万歩優に越したれど故宮博物院目指し今日も歩まむ
先を行く息子は折をり振り向きて我が歩みの速度を確かむ
台湾へ思ひがけずも親子旅想ひ出ノートに厚く記さむ
「栂尾」から宇治に根付きて栄え来し茶園の伝統守り居る処
ノルディック・ウォークの効果効能を知らすマイク音広場に響く
四月半ば気温26度に若きらの夏姿の集ふお台場海浜公園
八重洲より丸の内側への通路にて修学旅行生の列に混じりぬ
中学の修学旅行と聞くにつけ我ら当時の苦き思ひ出
東京へ修学旅行に来し我らＴ君失踪の不意の出来事
三越の本店前の地下道に我らの組のみ残され並びき
伝へずに東京の兄に会ひに行きしＴ君失踪は思ひ出ばなし

橋渡り切るころ汐の匂ひ濃し築地川・隅田川の交差の位置の

午後七時カラスと虫の大合唱森に響かせ浜離宮は在る

草餅のヨモギを摘みに姑と晴海の原に出向きし事も

埠頭にてバナナ船の底まで見て来しと五十年前の子らの遊びは

小笠原へ初の船旅妹と客船ターミナルより乗り込みし「につぽん丸」

東京湾大華火祭に招かれし客船ターミナル今ばりばり壊さる

朱塗りの大鳥居に注連縄の張られゐる薬王院は堂々の寺なり

薬王院の精進料理は美味にして擬きのフカヒレ肉団子牛しぐれ

三枚におろし終へたる鰺の骨カリカリ食める唐揚げにせむ

軟らかき青森産の秋牛蒡ささがきするに匂ひ際立つ

二〇二〇東京オリンピックは新型コロナウイルス感染の収束を見ないまま翌年に開催。其故、晴海の選手村から競技会場へのバス移動以外、選手達は村から一歩も外出を許されなかった。五輪後、選手村界隈は全て進入禁止区域となり地元住民にとって灯の無いビル群を傍観するのみに時は過ぎ去った。

二〇二三年コロナ禍が5類に移行し、選手村跡地は「晴海フラッグ」の名の下に大規模街づくりが着々と進んでいたのを目の当たりにして息を呑んだ。新築小中学校の校舎は既に総仕上げに入っていた。

「石光寺」の師走の庭に黄やピンク色鮮やかに寒牡丹咲きをり

天皇陵に続く参道樹々茂りマスクの儘に森林浴の感

おもむろに「瀬田の大橋」渡りゆく左右に新幹線琵琶湖を見つつ

古代史の「壬申の乱」の最終の「瀬田の大橋」琥珀色の耀き

古代史を好める人の旅にして講師にそれぞれ質問相次ぐ

鉢植のカラー大きく花開き冬日浴びつつ温暖化を示す

吾が窓に陽光とどくは限られて正午前後の一時間ほどに

快晴の窓開け払ひ冬の陽を背に受け本のページをめくる

乗り降りの自由なるシルバーパス使ひ日向を歩まむ冬空の下

鉢植のカラー寒波に抗へず気温四度に花首の垂る

冬空に堂々咲きゐしカラーの鉢を低温予報に手立て怠る

木場公園の森の一角に立つ男性大型カメラの設へ済みて

振り返る事なくレンズを覗きつつ「エナガ」を撮ると構へ崩さず

高木の葉群の中にエナガ入るを見たるが故に待ちに待つとぞ

エナガとは初に聞く名の鳥にしてこの目に見たく遠巻きに待つ

エナガの巣あの裸木の上方と教へらるるも我が目に見えず

「滅火器」「消防栓」など目にしつつ総統府の廊下を親しみ進む

交差点を一斉に飛び出すオートバイの百台超の爆音夕闇つんざく

建国の父たる孫文坐像まへ厳かに始まる衛兵交代儀式

バス降りてかなりの階段上がり行く山懐の高山寺の境内

国宝の「石水院」に坐し聞き居りぬ開祖明恵上人の遺訓また御歌

雨の中「日本最古の茶園」たる高山寺の茶園のみどり勢ふ

自然石の重ね合はせの石段は雨中に滑らず歩める不思議

栂尾の「本茶」は宇治へ移植され宇治川の水と地盤に適せり

優良茶「宇治七茗園」の指定受けし内唯一残るは「堀井七茗園」

高台に広がる茶園の日除け幕木々の表情見つつ使ふと

わが友の誘ひくれたる「台場」でのノルディック・ウォークの

当選はがき

当日の天気予報は午後雨となれば持ち物ついつい増しぬ

身長に合はせポールの調整と持ち方などの指導を受けつ

右ひだりポールを持ちて歩めれば身体全部を動かし居りぬ

「完歩証」名刺大ながら頂きて5㎞コースの難無きが幸

予報時の雨は降らず夏日にて帰宅後すぐに土砂降りとなる

東京駅の日本橋口に友迎へ久々のクラス会に足取り軽く

水戸からの根付きの韮と三つ葉持ち友の土産は生き生きとして

採り立ての野菜の恵みつね言ひをりし友との会話の深まる土産

三つ葉は、ね、種が弾けて増えるから友の助言に大き鉢選び

トンネルの開通成りて半年後尚も歩道は暫定迂回道路

歩みゆく築地大橋の過ぎ左手に築地川を挟み浜離宮の森

迂回道路過ぎて浜離宮を囲む川に沿ひて歩めば汐留川に至る

環状第2号線のトンネルの工事中の高き塀いまだ残りて

目の前を走り行きたる乗用車トンネル車線にてすんなりと消ゆ

新橋と築地を繋ぐトンネルの利用車わが街バンバンよぎる

四股を踏む形に枝を伸ばす松かつて子ら遊びしままに生き継ぐ

見送りの南極観測船「しらせ」に集ふ人らに混じり声援送りき

うねるごと晴海変はれど仏壇のガマの穂しづかに盆を迎へる

富士山の登頂を目指し予行にと山歩きに行く娘夫婦は

法螺貝の合奏近付き大本堂に坐する身に湧く神秘なる緊張感

方丈殿に移動し法話後ピカピカの廊下を渡り精進料理の会へ
40倍の選をくぐり集まれる幸運の皆さまと主催者の挨拶
コロナ禍に面会不可のながかりし娘と浸かる高尾山温泉
従姉から貰ひし甘漬け梅の実はコロナ禍経るも味の変はらず
漸くに国産南瓜の出回りて買へるは嬉し四分の一切れ
大根の葉付きの半分買ひ来たり漬物煮物自在のレシピ
スーパーの野菜の特売選びつつ思ひ広がる生産地の景
冷蔵庫整理の品々ひと鍋にゆつくり煮込むポトフに倣ひ
調味料大方目安の我が料理濃き味なればレタスの出番
姑の好みし茄子のオイル焼きクルミ味噌添へ月命日に

桜井美保子（さくらいみほこ）　（神奈川県）

サーベルの展示室

きのふ見たるピンクの椿八重の花また見たくなり歩き出したり
郵便局に寄りてスーパーにも回る革の擦れたるブーツで早足
改修の工事に池の水抜かれ群れゐるヨシの切株あらは
池底に積もれる泥が埋め立ての工事と思ふほどに広ごる
歩数計六千歩を少し越したれば残る用事はバスに乗り行く
新潮社古典集成の源氏読む中古なれども活字うつくし
眠るまへ源氏セミナーイヤホンに聞きつつをれば耳鳴り治まる
大根と里芋それぞれ煮るだけで昼までの時間たちまちに過ぐ
ひとつ本にクリスティーとクリスティあるのに気づく電車の中で
突風の運びきたれる砂ぼこり鍵穴の周りにうつすらと付く
八階のベランダに強き風ありてサンダル片方見えなくなりぬ
左手に吊り革握り右の手に持てる文庫本捲れずにをり
わが横に立つ人つり革より手を離す本のページを繰る数秒に
地下にある書店のすぐに見つかりぬ何を読まうか「ハヤカワ文庫」
散らばれる書類の下に隠れたるスマホを探す着信音して

胴切りをしたるサボテン冬越して切り口の横に二つ芽の出づ
冬物と夏物混じりごちやごちやの夫の引出し一気に整理す
引出しを締めればいいのに開けたままそのくらゐはだまつてゐよう
「片付けはもうできないよ」それならば私に任せて衣服の入れ替へ
けふのわれ面倒がらず手に洗ふダウンのベストとベロアのジャンバー
汐入の駅に降りたる瞬間に潮の香まじる風を受けたり
歩道橋のぼれば明るき空のもと少しの距離に横須賀の海
子規の句碑に触るるばかりに姫女菀ひよろり一本傾きて咲く
句碑を見ず隣の台に蹲る猫に釘付け日傘の二人
母好みし色はピンクと思ひつつピンク溢るる薔薇園めぐる
花から花誘ひ込まるる心地なり薔薇の盛りのヴェルニー公園
幕末にフランスより来て製鉄所つくりしヴェルニーの若き力や
夕食の食器あらひてゐる時にサーベル発見のニュースを聞きぬ
英国のパーク公使を暴漢より守りし土佐の侍ありき
土佐藩士ビクトリア女王より拝領のサーベル公開に落ち着かずをり

ウォーキング兼ねて夫も行くと言ふそのサーベルのある美術館に
入館の日時ネットに予約せり雨でも風でも兎も角ゆかむ
サーベルの展示室に一歩入る夫も吾も言葉控へて
鉄製の刀身に彫らるる藩士の名GOTOの文字（もんじ）渋く光れる
庶民われ歴史のかけらの宝物サーベルと鞘をちかぢかと見る
古びたる文庫本に触れたれば目次はらりと剥がれ落ちたり
数行の中の言葉を練り直す包丁の刃を研ぎゆくやうに
たまにつかふ母の包丁トーストにのせるトマトのすぱつと切れて
島木赤彦文学賞の受賞決まりホームページの熱くなりゆく
ネット歌会スマホにひらき批評読む横浜線の始発電車に

七十代半ばを過ぎると体力的な衰えを感じることが時々あるが、好奇心とか探究心は健在だ。ある日、偶然耳にしたニュースは歴史的な出来事の一端を伝えていた。幕末に天皇に謁見するために御所に向かっていた英国公使パークスが刺客に襲われたが、二人の藩士が公使の命を守り、感謝のしるしとして英国女王からサーベルが贈られた。その藩士の一人、後藤象二郎が拝領したサーベルが見つかり公開されるという。機会を逃さず早速、東京丸の内の静嘉堂美術館を見学。歴史を証明するサーベルに心が震えた。

「まだ雨が降つてゐますか」問うてくる人ありいで湯に浸りてをれば
亡き叔母に何処か似てゐる人にして温泉の湯に話の弾む
宿泊の人かと思へば温泉の近く住める地元の人なり
市より貰ふ入浴券にて来るといふ湯河原温泉大浴場に
引き籠りにならないやうに出掛けよと言ひてくれたり地元の婦人
長靴が好きなんですと帰りぎは水玉模様の長靴姿
頼朝をささへし土肥実平の館跡にバス発着す
税関の職員二十数名の演奏ひびく「横浜音祭り」
集まれる人の後ろに立ちをれば消毒液持つスタッフが来る
さまざまな部署に働く職員ら桜木町駅前に演奏者となる
半時間の演奏に吾の知る曲あり「翼をください」胸熱くなる
寺院でのジャズコンサートの連作に勢ひありき高田光氏
「時間許すかぎり投稿めざします」入院まへのメールの残る
送りくれし高橋真梨子のCDを聴きつつ年鑑の君の歌読む
こんつめて無理しちやだめといふ声を聞いてるやうな秋の夜なり
引越の処分に捨てし源氏なり改めて買ふ第一巻を
ATMの順番待ちは戸外ゆゑ風冷たしと夫もどりて
ストールとズボンとブーツ手提げまで白なり車中の若き女性は
スカートのスリットよりレースのぞかすもファッションなりや
駅の階段
鰻丼の夫と鰻嫌ひわれ玉子丼とする今夜の夕食
左耳の聴力少しおとろへてスマホの声を右耳で聞く
立ち座りよいしよと言はぬ吾であれ動画の体操積み重ねをり
突風にわが家のサンダル落下せり他家の垣根の下より引き出す
息子一家の赤き車に手を振りて駐車場に夫と見送る
曇りたるレンズにスプレーの泡を掛くもう一時間作業のありて
買ひ置きのブルーベリーのサプリメント思ひ出し飲む眼まなこ
疲れて
月に数度役立つことあり『古語辞典』『短歌文法65講』
改札の近くの地図に海沿ひの公園確かむ初めての街
家族多く暮らしし頃の夕食の麻婆豆腐を母喜びき
ほつとする味なり久びさの炒り豆腐むかし作りし時よりうまし
どんな味かわからず作る豆腐ステーキフライパンを手に何か楽しく
水溶きの片栗粉にて瞬く間とろりと仕上がる餡掛け豆腐
鍋持ちて豆腐を買ひに行かされし幼き頃の赤羽の町
一丁を汁(つゆ)用に切るを豆腐屋に頼みて待ちき少しの間
「冷奴にしましたよ」と置く卓袱台に菜はそれのみ映画「にごりえ」
小分け豆腐酒の肴に冷えたるを食べてわが家に夏が来りぬ
悪玉のコレステロールを抑へたし自分のために対策を練る
暑き坂くだりてくれば石垣の下に群がる露草の花
籠る日の多き八月図書館の行き来に夏の体力保つ
返却の書を手に下るエスカレーター窓に中庭の緑が眩し
戸外より幾らか涼しき図書館に来たりて暫く汗とどまらず
幾つもの書架を巡れる半時間ティータイムのごとリフレッシュせり

ターミナルの日陰にバスを待ちてをり不思議に涼しき風の渡りて
真夜中に降りたる雨に草の色濃く輝けりバス待つほとり
大きなるバランスボールに腰掛けて背中まつすぐキーボード打つ
手の指を握つてひらくトレーニング「関節に効くよ」息子は吾に
「冬雷」のホームページを日に幾度ひらき確かむ動きあるかと
最新号 Web 版より歌をコピーして貼り付け「作品二評」とととのふ
備蓄用のカレーに満足してをれど家のカレーが食べたくなりぬ
うちのカレーやつぱりうまいと角切りの肉買ひきたり朝から夫は
根菜類いつも揃へて籠にありすぐにカレーを作れる態勢
香りすら忘れてゐたるローリエの葉つぱ一枚煮込みに使ふ
レトルトのカレーの辛さ楽しみて家に籠りきコロナ三年
年重ねほどほどの辛さがよくなりてカレーを作る夏越して秋
朝五時に夫が散歩に出たるあとホームページとメールチェックす
味噌汁の出し取りながら気にかかる用事いくつか頭掠める

酒向陸江（さこうみちえ）☆（東京都）

ランドセル

東の窓に見ゆる月円し赤銅色の徐々に欠けゆく
小六の時の担任久保先生熱く語りし『月食』の仕組み
月に映る地球の翳の大きさよみるみるうちに月隠れゆく
東の空の赤銅色の月ま夜中ま上に皓皓と照る
細心の注意払いて通勤の娘がとうとうコロナに感染
持病ある吾への感染気遣いて「二階に来ないで」「紙皿にして」と
二人きりの家族が二階と下に居て会話の出来ぬコロナ禍生活
家庭内感染するなく回復の娘と向き合う夕餉の卓に
次女の住む目黒の町より大崎まで散歩コースというに従き行く
八千歩越える散歩を日課とし娘は仕事に励みいるらし
若き娘に学び今日より歩かむか足腰鍛え元気に過ごさむ
誕生日「産んで下さりありがとう」父母の墓に花いっぱい捧ぐ
ウクライナのニュースに父母偲ばれる吾の出産戦禍の只中
ソ連兵の銃撃の目をかいくぐり漁舟にもぐり引き揚げ来たると
父母の苦労の下に育まれ戦禍の恐怖は記憶にあらず

ランドセル買ってもらった喜びと父の笑顔が最初の記憶
吟行会の初体験は韻松亭上野の森に短歌浮かばず
湯ノ湖畔の一泊二日は楽しかりき個性出でたる詠草なつかし
大白鳥飛び交う湖にも行きたりき関口さんの案内に従い
国立の桜見て欲しとの吟行会開花未だし恥ずかしかりき
桜咲かずハラハラひやひやの思い出のあの日の会場今は更地に
「草取りは無心になれて大好き」と友の言葉は深く残れり
プーチンの猜疑心より始まりて不穏な空気の世界情勢
ミサイルを飛ばし喜ぶ金正恩玩具にはしゃぐ幼の顔して
「和をもって貴しとなす」世界観を持って下され各国のリーダー
原宿より根津美術館まで歩きたり友と互いの健脚喜び
大雨に八王子バイパス土砂くずれ地名〝鑓水〟に近藤未希子さん偲ぶ
若き日に災害対策学びたりき伝えゆきたし日頃の生活
特別に非常食など取り寄せず米乾物のゆとりある備蓄
折々に近況メールを呉るる嫁札幌・東京距離の短し

章哲（あきのり）君が仕事でテレビに出ましたと明子さんのラインが弾む
騒音の始まりくれば窓閉めて冷房の中に一人の自由
ゆっくりと部屋内整え読経してテレビに読書時々ピアノ
深い青へブンリーブルーの朝顔を賜り育てる暑さに負けず
八月の陽射しは強く早々に窓閉め冷房まだ九時なれど
学童の声の聞えて新学期九月に入りても三十五度続く
二時間をロシア語の歌に包まれて意味解らねど身心安らぐ
この時期にロシア民謡歌う意味平和を願ってと語りくれたり
ご近所の月に一度の『ゆる仲会』転んだ体験この頃多し
コロナ怖れ酷暑を避けて家内に籠り続けて足腰弱る

冬雷作品年鑑の装丁の美しさ、開いて見ると文字の大きく読みやすい一年分の合同歌集に感激。コロナ禍で籠りきりの時期も、酷暑で外出叶わぬ日々も、毎月冬雷誌が届くことは何よりうれしいことでした。
編集から発行まで、携わっておられる先生方、本当にありがとうございます。心より御礼申し上げます。
今、新聞紙上を賑わす暗いニュースが多い中、少しでも明るく希望の持てる未来を子供達に孫達に残してゆきたく、微力ながらも努めて明るい短歌を詠ってゆきたいと思っています。

空見上げ小六の頃を思い出し皆既月食に心は弾む
月に映る地球の翳は只一つロシアウクライナの区切りはあらず
戦時下の惨状語らず逝きし父母（ふぼ）語れぬ程の悲惨を偲ぶ
初日のみ七度五分なる発熱に娘は隔離の部屋から出でず
紙皿の食事を階段上に置き声だけかけて顔は合わさず
一週間濃厚接触者の吾は面会謝絶、外出禁止
幾度の手洗いうがい消毒にふやけた手指をクリームに撫づ
荷物なく雨も降らねばバスに乗らず駅より歩く二千歩余り
飼犬と歩きし頃の懐かしや一ツ橋大一周四千歩を越す
身心に余裕ある日は天満宮へ片道五千歩のどかな脇道
正月の青天続く武蔵野の坂のない町国立を歩く
背の高き父が自慢の吾なりき胡座にかかえて髪洗いくれき
鏡餅細く割って火鉢にてこんがり焼いた汁粉こうばし
奥日光吟行会の十三名写真と共に資料も残る
未だ咲かぬ桜の木下を歩かれて先輩諸氏の短歌のみごとさ
桜木の幹の黒さを詠う人街の営み詠む人ありき
草取りを好きと思えば苦にならず朝々自然に手が伸びている
路地庭にクリスマスローズは勢いてこぼれ種より又増えてゆく
こごまりて花を覗いて「これは八重」「これは一重」と花好きの友
下向いて謙虚に咲きたるクリスマスローズ花のお陰で友情深まる
市議選の応援夢中に一週間当選ほっとそののち虚
市議選は党派に寄らず人物をよくよく知りて選びゆきたし
この時世電話作戦敬遠され友人知人を訪ね歩きぬ
高得票に市議当選の若き友これより先も見守りゆかな
若き日に共に学びし友人が根津美術館に誘い呉れたり
根津美術館に燕子花図屏風を拝観し庭を歩けばかきつばた一面に咲く
久しぶりに健康指向の友人が「もち麦」みやげに訪ねくれたり
プチプチと麦の食感心地良くついついおかわり食欲進む
貧富の差この頃大きくなるらしも倹しく生きて不満を持たず
意気込んで備蓄したりきアルファー米賞味期限のすぐ来てしまう
道路脇排水口の詰まらぬよう運動兼ねて清掃楽しむ
君付けで呼ばるる息子はもう五十とやかく言うまい円満なれば
レジ過ぎてレシート確認する姿いずこも同じ一斉値上げの
四年ぶりチャリティ公演開催に主催者代表挨拶たじたじ
歯切れ良き津軽三味線バチ捌き身体も心もほぐれゆくなり
会場は満員御礼おしゃれしたボランティア仲間も四年ぶりなり
早朝の窓を開ければアサガオの涼しき紫に郷愁覚ゆ
去年東今年は西の新築に騒音やむなしと許せる齢
高校の同級生から電話あり「宮沢賢治の番組見よ」と
六十年ぶりなる友と長電話気持の通じ本音で語る
声に出し宮沢賢治の童話読む年経て今は感銘深し
外出を控えて籠る部屋内に子供のようにピアノの練習
九月四日岸本力のリサイタル雨降り喜び上野に出かける
彼岸花咲く頃となりようやくに酷暑の日々の遠退きくれたり
暑さ故芽は出ぬものと案じいし彼岸花咲く白が先ず先
彼岸花その名の通り秋分の日より咲き出す赤も追いかけ
松葉ボタン百日草の赤や黄が酷暑の日々に力くれたり

佐々木政子（岩手県）

栗駒山

晴天に籠るをやめて出で来たり歌を詠まむか喫茶店に入る
写経終へ厨に立てばやすらぎぬ今日は夫の祥月命日
昨日より気温下がりてゐるならむ水道の水冷たく感ず
被りゐる雪分けて咲くすみれ花傍へに蕾抜き出でて立つ
缶ジュース持ちて休みゐる公園に鳩飛び下りてわれに寄りきぬ
バス停に二人無言に立ちてをり気づまりなれば降る雪を言ふ
現世（うつしよ）の地震水害多々あれど戦争にあらず平和に感謝
手焙りの火鉢なつかし祖父の部屋暖かかりき幼きころの
震災後に建ちたる墓の多くして晩秋の陽に墓石光れり
アパートより見ゆる限りに霧漂ひカラスの鳴き声聞きてゐる
茫茫と潮けむり立ち夕暮れの霧の如しも鷗低く飛ぶ
窓に見る桑の緑葉に湿る雪重き愁ひのしらじらと降る
テレビ止め読書にすれば咲き極まる百合の花びら二枚散りたり
強風の吹けばわが家の玄関前に枯葉集まる此処が終点と
若き頃ボランティアにて老いし人ケアしたりき今世話を受く

ベランダに立ちて仰げる夜の空ほそく鋭き月移りゆく
青天に誘はれふらり出でて来ぬ白く見ゆるは山桜かも
道の辺の切り株に腰を休めをり栗駒山（くりこま）の雪輝くが見ゆ
面識なき媼なれども休むわれに話しかけゆく田舎よきかな
日の沈み栗駒山の上空を朱色むらさき明るく染むる
西空に夕日輝き水田の早苗小さく水にまもらる
わが動かば空気さわぎて散りぬべし飾りおきたる黄の百合の花
旅に街に出づることなき窓に見る桑の新芽の去年より早き
不可もなく可もなき一人暮しなり机のストック良き香を放つ
並べある木材のすき間に咲く草の淡き水色かすかに見ゆる
願ひ一つ結びて来たる八幡神社椿の蕾ひらくころかも
栗駒山に落ちゆく夕陽刻こくと赤色深め大きくなりぬ
厨ごと済ませて眠らむストックの花の香りの漂ふ部屋に
残りたるトマト苗ひとつ可哀想と求めて植ゑて花の咲きたり
野の花は野に咲きてこそ美しと夫言ひしを手折らむとして気づく

吹く風の急に強まり干したるズボンハンガーのまま飛ばされたり
さやさやと若葉かげ立つ夕暮れに体調くづす友案じをり
仏壇の花を替へむと買ひにゆくタクシー代は花より嵩む
澄む空に湧きて崩るる雲ありぬ故郷の友の入院を知る
目覚めれば先づ戸をあけて空気替ふリリと鳴く虫の声のさはやか
生前の夫の好物の洋菓子が次女より届く祥月命日
丘の上の一つ部落に建つ墓の整然とみな海に向きをり
栗駒山の見ゆる窓辺の椅子に座り珈琲啜る部屋の日溜り
聞き役になりて茶房に休みをり窓の向かうに無花果実る
夜の更けて寒さ感ずる時ありてうすき毛布を裾に用意す

老い進み来し方を振りかえって見る時、私の日常はひたすら引越しが多く落ち着きませんでした。
夫の仕事の都合で転勤が多かったせいです。夫が退職してからも、今度は長女の事で予定にない事が多くあり、家を建ててやったり故郷を離れ岩手県に住むことになったりです。故郷に帰れなかった事は残念に思いますが、自然のなりゆきですので致し方ないと考えを、気持を変えてゆくつもりです。
現在は岩手県もよい県と思って居ります。

捨てられたるゴミの中より馬鈴薯の芽が出て花咲く自生逞しく
鉢植ゑの青紫蘇便利に使ひたり心にとめおく白く小さき花
何時しかに外出少なき日常に靴履くこともたまさかとなる
羽黒山の池に咲きゐし河骨の黄の花忘れず参りてみたき
昨日より気温下がりてゐるならむ水道の水冷たく感ず
気づかれもせずひつそりと冬の薔薇葉陰に咲いてゐる姉の庭
秋祭り馬は怒りて首をふる馬上の「家老」は満面の笑み
高速道に鹿の出づると標識あり眼可愛き絵の添へられて
廃駅のホームに立てば山清水流るる音の近くきこゆる
事しあらば何時ものやうに話しかけ己たしかむ阿弥陀如来尊に
空すみて照り渡りゐる月の夜の虫の鳴く声聞くこともなき
ひろらなる墓地見渡せば椿の赤墓石の間に際立ちて見ゆ
家事などはやめてしまへと思ふ時あれど己のために続くる
余るほど自由はあれどわれ一人年ごとに老ゆ楽しみ探さむ
磐井川ゆるく流れよ白鳥の今年も姿を見せてくれたり
バス降りて初めて通る道の辺に梅の花咲く心明るし
亡き夫の干支は兎の金色と白兎飾り偲びてをりぬ
淋しさの代償なるかこの自由夫逝きてより十年目なり
初雪の降りて明日には長靴を買ひにゆかむと予定を変へる
関東に桜の咲きて春となりわが住む陸奥は小雪ちらつく
古里の友の周辺みな逝きて淋しと話す人事にあらず
卒寿すぎ施設へ移らむ思ひあり決断つかず日々過ぎゆきぬ
わが心萎えたる時に思ひ出づ踏まれても立ち直る蒲公英を
今一度会ひたき友の逝きしとふ古里に無沙汰十年余りに

リハビリのマシンに乗りて歩みをり外を休まず歩みてみたき
一茎に八輪咲ける白百合の丈高だかと喘ぐがに揺る
リハビリにゆけば癒ゆると信じつつ今日も膝腰鍛へてきたり
活けてあるあやめの花の朝の蕾夕べひらきて濃紫すがし
隣り家の泰山木の花咲きてわが二階より親しみ眺む
山裾に車を止めて桑の実を母と食べにき笑顔忘れず
窓に寄れば夕明りつく家々見えわれは今日ひと日片付けしたり
熟さざるトマトを持ちて来たる友完熟待てず共に味見と
毎月を同じ内容にて出す手紙一グラム超過と戻りて来たり
独りゐて活字に楽しみ刻忘る卒寿をすぎて本に頼れり
何時しかに八月となり盆近し過ぎれば暑さゆるみて来るや
歩みゐて初鳴きの蟬の声を聞く降りゐたる雨の何時しか止みて
今日もまた太陽昇り燦々とボタン付けするわれを照らしぬ
洗ひ物午前中にからりと乾く今日の猛暑のありがたきかな
歩みゐて鳴きゐる蟬の声をきく降りゐし雨の何時しか止みて
雑草に交る青紫蘇は去年鉢に植ゑたる種のとびたるらしも
充分に物食みながら生きがたき現世嘆く声に頷く
洗ひ物午前にてすぐ乾きたり今日の暑さの有り難きかな
歩む足ややに重きを励まして秋の日暑く墓に向かひぬ

佐藤靖子（さとうやすこ）　（東京都）

鳥のトマト

アニメーション漫画の題かなわが手首ガングリオンと診断されつ
強震のニュースのあとに芝居にゆくあまた暗転そのつど長し
福井県の大震災を忘れ得ず地震恐怖症はひと日にて成る
ひとしごと終へたるやうに白き月しろきあしたにありてしづけし
そこここに椅子おくことの便利さよ小さき椅子に干し物たたむ
一腹のはらこの注文に鮭一本届く釧路の生活ありき
金髪をとがめられたる少年の金髪の自画像その師に褒められる
娘の子ボーイ二人のそれぞれの恋人の名ののののかともももか
元日の青空をゆく飛行機は平和国発平和国行き
日を三つ書く名の友を「ひみつのアッコちゃん」と呼ぶ
とほりみちのオレンジ色のまるき実を鳥のトマトと言ふ子と歩く
べにの梅しらうめひらくひとところ離りてみれば色まじりあふ
牛蒡の花しらずきたりぬ紫の薊に似るを知らずきたりぬ
底翳とふ言葉のあれば上翳とふことばついでに覚えおきたり
「烈子」といふ名の知りあひのその「烈」をわれら母子は讃してやまず

白妙の障子に少しまたすこし爪を立つるはコラきじとらか
三月三日うまれのわれは3尽しの東京タワーの赤き灯したふ
待ちゐたる便りありたりそののちのけふはよきことつぎつぎつづく
フリージアに添ふる木苺ひとえだの曲折ごとに緑の芽吹く
これ以上のびないほどに伸びをしてこのままプツンと命切れさう
一日を耐へて二日目洗濯すれば即ち機械を二度回す仕儀
和音ならドミソのやうな単純さときにシファソにならむとするも
「糸通し」役立つてます縫ふの字は逢ふに似てゐる逢ひたしとても
明治通り全長33・3キロといへる数字に満足しをり
弁当に缶詰のチェリー飾りたりこのアイテムも星霜かさぬ
ララルーを娘が弾けるうららかさ娘の今昔おもふひととき
蔓二本からまりあひてその先の輪となりわれの首を撫づるも
スズメ目スズメ科スズメ属といふ雀を血筋正しと見をり
氷砂糖梅仕込みたる瓶のなか個体それぞれはや緩みくる
山芋の蔦這ふところ雄花の穂きりりと白く満つるしづけさ

寝ては覚めこの夢無実と安堵すること四度ほどに朝は来たりぬ
街路樹の下に生えゐる悪なすびことし店屋の花壇を占めたり
けふの気温33度は許します33といふ数字に免じて
うしろがみまへがみ束ね物語書き終らぬ子あすより学校
娘らの会話に入らむと近づくに足のみならず舌たたらふむ
駅前にタクシー待てば果てしなし穂高のとんびおほきく巡る
山荘に引く電線のうへかぼそかるとんぼとをほどみな風に向く
海あらぬ安曇野の地の穂高神社お船祭りの用意してゐる
交通の神より46番大吉を受くけふ乗る「あずさ」は46号
暑すぎる残暑のコスモス咲くあたり通りてその日すずしくすごす

用語の略語が増えるなかで、ちょっと笑えるのが「もしトラ」である。大統領選挙で、もしもトランプが勝ったら、なのだが勝つ勢いが報じられていて本当は笑えない。これは略語ならず略文だ。なんでも略す。同じ省略でもショートカットは時に人迷惑だ。例えば三角形の二辺を歩くのが大変だから、他人の土地になる一辺を通ってバス停へと抜ける。よく見かける風景だ。こういうのは道義的でないなあと、ちょっと思う。

「チョコ」「きぬ」と呼ぶ猫飼ふと人いへりうちには子の絹ねこのチョコゐる
歳月といふ言葉にもうるみくるセンチメントをどうしたものぞ
道みちのつつじの常緑いろさめていちやうのもみぢただ受くるのみ
今の世のマスクと帽子ふつうにて怪しき人のふつうに紛る
付箋といふいつも机にあるものをけふ買ひたれば思はぬ高値
食べさせて甲斐ありちさき子が米のうまみをすぐに言ひたりこよひ
直筆が届き不安のかたまりの解けて歌ふよ「春の小川」を
甘いのにすつぱい顔になつてしまふ昔のみかんの記憶生きゐて
つきまとふ猫にむかひて声たかく「こんにちはー」と言へばかくれつ
猫柳わかき雄花の赤紫がしだいに鼠のいろになりくる
姪のいふ「私だけの伯父ちやん」亡くなりて私に言ふは「みんなの伯母ちやん」
車窓に見る浚渫船のしづかさを弾けきれないわが身に重ぬ
デージーの白さのなかに咲くパンジーV字の型に背中を押さる
花粉撒く杉の雄花の枯葉色枯れてゐる葉と思ひてをりぬ
豊洲なる市場の鮨に三嘆し帰りに詣づ魚河岸水神社
蚊のやうなそれより少しややこしき虫を殺せり鉛筆の背で
おほいなる地にそのままの影おとす「影富士」といふ写真を見たり
ベランダの牛蒡の広葉に蝶の来てすぐ虫の生る戸を開けられずくれなゐに見ゆる椿が地のうへに白を混ぜつつ広がりてをり
忘れたる菩提樹のなまへ思ひだす呪文は「ブッダ」ブッダと唱ふ
読んだかな未だだつたかな図書館の本借りてくる当て事のやうに
かの国がまたかと思ふ速報は藤井聡太六冠達成の件
むすめらが朗らかに看てわが過去の夫ふくふく逝きつめでたし
日の差せるカーテンに猫窓格子たへなる歪みに写るひととき
まづわれに餌を欲りてより三毛猫が雉虎猫を呼びにゆくなる
新ジャガの味といふより懐かしさ剥きてつるつるかはゆさ増しぬ
運動会赤組白組応援団天に閧なすまだ高き声
敵方の応援団長はウルトラ級美少年にして運動会たのし
男の子二人を抜きて一着のわがいへの子の粘りに感ず
ただいまは「まー」おかへりは「りー」わが家の省略一例にして
開幕前のオーケストラのおのおのの音を曲かとぼんやり聞きをり
注射しに行く公園に見たるもの蠟梅の実ぞともしびめける
瓶にさすさるとりいばらの実を猫が落として転がす落として弾く
クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテこれがピアノの正式名らし
報道の猫を見てゐるわが猫よいきり立つなく執着うすく
ただ生きてゐるのみゆゑに使へざる「上には上が」といふ言葉など
いつも待つ日照の信号十時前なら木陰あることを知りたり
うどんに具をのせむとすれば幼子が急いで言ひぬ「そのまんまいいです」
長編にこのごろ少し飽きながらまた上下巻借りてしまひぬ

再三が再四に及ぶアンコールああ面倒なああ帰りたい
まづ娘そのまた娘そして猫われに按摩をさせてよこたふ
藤井棋士の師匠にどこか似るやうな大谷選手の通訳水原
よこたふる身のままオン・オフ自在なるリモコンこはれつテレビの大ごと
京極夏彦のトークに目を開き図書館通ひに楽しみの増す
母の里姫路城下の家うちに隠し階段ありて遊びき
どつしりとせる長屋にて通り抜けられる納屋ありし敦賀の城下
野にあればをみなへしまたをとこへしやさしき白と力ある白
何日かまへの残暑はうそのやう冷気のコスモス背をのばし揺る

佐藤幸子（さとうよしこ）　（山形県）

溝蕎麦の花

女郎花慎ましやかに風に揺れここを居場所と庭隅に咲く
溢れるやうに芯よりおがる白菜は畑土を隠し長き列なす
野辺に咲き野辺に萎るる柚香菊霜を纏ひて今朝の輝き
媼逝き喪中の標のある家の八手の白き花真つ盛り
箱一杯貰ひたる石榴ひしめきて何かを叫ぶやうに口開く
大根煮る厨の窓から深深と降る雪見えて明朝思ふ
炬燵にて林檎剥くときテレビでは冬の戦禍の老婆を映す
ホットミルクに粉末コーヒーを散らし入れ今朝のマーブル模様を啜る
ウェブ動画のキャブレター分解を参考に夫は管理機の修理に挑む
「べろ追つかけて行く」と食べゐし妣の声を思ひ出しつつ啜る「みそうず」
誕生日を祝ひ娘に送りたり牛肉に吾の菜漬けを添へて
認知症の母と歌ひし「数へうた」九十五歳の声耳に残れり
如月のヨガ教室に心地よく背中を伸ばす猫のポーズに
吸ひ込まれさうな青空に白鷹山の気象レーダー静かに立てり
突き上げる辛夷大樹の枝先の数多の蕾朝日に光る

穏やかな春の日差しの中に立つ杉の大木は花粉爆弾
「あの頃はねえ」などと口ぐちに懐かしみ子育て終へたるをんな等集ふ
一泊し帰る息子を見送ればあかときの空に三日月滲む
芽吹きたるいろはもみぢの葉の付け根花房とならむ朱き塊
地元産のハウス胡瓜を五本程辛子漬けにす一本漬けで
珍味山菜知る人少なき夜衾草（よぶすまさう）夫採り来てわれは湯沸かす
猪の見つけ残しの筍と翁笑ひて一つころがす
五月晴れなり襖をすべて開け放ちけふは酸素で身体を満たす
朝々のホットミルクの薄き皮上手く掬へばよき兆しあり
「よつこいしよ」と声出し鍬を降り下ろせば掘り起こす土少し軽しも
田植ゑ待つ鏡のやうなる水張田に今朝降る雨の静かな波紋
一面のしろつめ草の花の香の満ちる中ゆく一両電車
下枝をばさり落とせば青楓一抹の風招きて涼し
ライターのガス燃え尽きる瞬間に「ボツ」と音して消えてしづまる
早朝より鮮度が勝負のさくらんぼ摘みて「腰付けはけご」に入れる

作業場にさくらんぼ詰める女らは指先巧みにマスクで喋る
さくらんぼは早朝よりの収穫で男らごろりとみな昼寝する
山桑の木陰に刈草を敷き詰めて屍のポーズで白雲をみる
夫の意に逆らふでもなくわが意見さらりと言ひて少し離れる
畑にて菜園の知恵教はりし媼コロナで逝きしと聞きぬ
冷房の設定温度は十九度畑帰りの車内の極楽
畑隅の手入れ届かぬ叢の溝蕎麦の花一面ももいろ
道の端にいつか見た花コシオガマ「まあ久しぶり」とカメラを向ける
去年より七日遅れて白菜の苗植ゑ終へて夕焼けのなか
間引き菜を抱へ帰れば弓張月判押すやうに夕さりの空

「炉の灰にわれの名を書き父親は文字教へし幼きときに」。以前地元の歌会で詠んだ幼い日の父と私。小学校に上がる前の私に父は囲炉裏の灰に火箸で「こんのよしこ」と何度も何度も書き消して名前の書き方を教えてくれました。大好きだった「とうちゃん」。でも思春期になった私は家に止め置きたい父を振り切り就職をし、やがて結婚をして両親を引き取りました。どこかぎくしゃくとした父との長い生活。今、父の遺影は穏やかに笑っております。でも私は時々その笑顔の中に厳しい視線を感じてびくっとする事があるのです。

青白き月の明かりは亡き母の部屋の隅まで静かに照らす
更待月に深く鎮もり木も草も吾も眠りぬ祈りの世界
茜雲のたなびく空を数十羽の鴉とび去り秋の日没す
ザラ紙にメモりたる歌を見直して語順を替へる厨の卓に
店主八十歳馴染みの店はそろそろの終ひ仕度と聞きて頷く
冬の朝白き三日月が雲の間に薄く残りて透き通るやう
冬菜摘む畑の中に鎌のありいつ失ひしやそつと手に取る
短きも歪なものも二股も吾が畑の人参みな愛ほしき
たて続けにくさめ三つでる夕間暮れ秘薬の漢方紙包薬飲む
お歳暮の礼の電話が従姉よりありてその声に元気を確かむ
予報通り雪に埋まる朝の庭白実南天は深く首垂る
音もせず雪降りつづく午後四時すぎ車の屋根には四十糎程
ひと夜降り戸口開ければ雪嵩は胸まで届き夫と声あぐ
早朝から雪との闘ひに無我夢中道路を確保し空腹覚ゆ
林檎剥きて夫に渡したる後にわれは炬燵に少し居眠る
ヘアードネーションしたる孫娘ショートの髪をピンク混じりに
染めて現る
靴先に雪玉転がし大股の足跡を追ふ今朝の散歩は
強力寒波襲来といふ予報見て取り敢へず灯油タンクを満たす
使ひ捨てカイロを二枚背に貼りて零下六度の厨に立てり
大寒の今日も始まるヨガ教室先づは「太陽礼拝」のポーズ
啓翁桜満開のホールに学生の吹奏楽の響き軽やか
亡き母に聞かざるままの血縁のその拡がりを又従兄弟に聞く
二月五日日足伸びたる夕空にスノームーンと言ふ満月昇る

鰯雲に見え隠れする豆名月団子十五個供へて待つも
窓を開け朝ヨガすれば目に映る濃い紫の琉球朝顔
くだものも米も不作と聞く朝にシャインマスカット届き喜ぶ
趣味なれど大粒揃ひのシャインマスカット婿の苦労を思ひ頂く

「おばあちゃん！」声の響きは喜びの女孫の電話入試合格
雪解けてケーンと鋭き雉のこゑわが心臓に当たる心地す
「変わりない？」と訊ねれば息子は解かりゐて「うん」と一言
髪を掻き上ぐ
後期高齢者医療被保険者証届くチラシと共に郵便受けに
屈まりて草引く背に降り来るはあと一押しと選挙カーの声
まだ少し風が寒いと花揺らす朝日の野辺のたちつぼ菫
真つ直ぐに立つ大杉の先端まで絡みて山藤たをやかに咲く
在りし日の母と愛でたる白躑躅今咲き盛り蜜蜂らを寄す
健やかに老いる途こそ知りたきよ認知症介護の講話のなかに
トラクターに夫が耕し柔らかき畑に二三羽の鴉が遊ぶ
今朝は雨心しづかにヨガをなし硬き身体の声を聞きゐる
夜半の雨が等間隔に樋打つを痛む右腰さすりつつ聞く
腰覆ふ痛みにけふは鬱々とクロスワードに気を紛らはす
スマホに見る写真はいづれも太り居て嘘はつかぬとわたしを睨む
仏壇に手合はせ帰る女孫二人半日過ぎても残る香煙
箱詰め待ちの保冷容器のさくらんぼ十段涼しき場所に重なる
五個掛ける六列二段のパック詰めさくらんぼ並ぶ赤い宝石
さくらんぼ「紅さやか」のジャム作らむと朱き汁飛ぶ種抜き作業
真夏に雪山のごとき雲の峰神々しさに暫し眺める
友の愚痴週休七日の夫との三度の食事は辛すぎる刑と
また明日も晴れる予報かお日様が真つ赤にもえて燃え尽きて落つ
秋野菜植ゑる畑作りに疲れ果てマッサージチェアに身体委ねる
一面に広がる鰯雲を輝かせ光る満月を夜更けに眺む

嶋田正之（しまだまさゆき）　（埼玉県）

大河原紙

庭先に常と異なる気配あり数多の羽毛微風にゆるる
行きずりに落ちたることも縁ならむ一羽の鳥が死して横たふ
墜落の理由にもしや万が一鳥インフルエンザを先づは疑ふ
片方の羽を突き上げ横たはるその無念さのまざまざとして
飛ぶ鳥に問ひてみたしやこの空を何処に向かふ時の出来事
ただ一度テレビに観たる青丹の背の美しき青鳩と知る
海岸に群れて水飲む青鳩の映像今も眼裏にあり
北方の山を塒の青鳩かさすれば向かふは湘南の海
暮れなづむ庭の垣根に帰りたる番の雀の二啼き三啼き
朝陽射す頃に飛び立ち戻るまで二羽はひと日に何を語るや
今日もまた些細な事の口喧嘩　歳重ねても賢くなれず
鬼はそと撒きたる豆の数粒を鳥の餌にと庭石に置く
今ここに八十五年を振り返る戦後の貧しき時を含めて
数々の失態あれども恙なく今ある幸に感謝をせねば
急がない躓かないと己が身に言ひ聞かせ視る如月の月

同窓の八十五歳を祝ふ会の開催企て対ふパソコン
糾へる縄の如しの教へあり次に来るべきものを恐るる
思ひ切り剪定したる鉢植ゑの薔薇に今年も数多の赤芽
軽やかな風の撫でゆく菜の花にとまり損ねて紋白蝶は
抽象画はじめて描く作品に春の会場少し騒つく
写実的絵を描くとのレッテルに逆らひ見たる春の試み
心境の変化は何と問ふ人に尊敬したる教授居りしと
大河原紙の呼称復古と知りたれば体の中に騒ぐもののあり
湿りたる楮打つ音遠くより響き来たりぬ小寒き寝床
濡れ紙を干すお日様の匂ひこそ今も脳裏にふる里の香
板に張り乾きたる紙はがす人手際の良さに見惚れし冬日
とりどりの緑葉薫る暗渠道頭上を掠めツバメ越しゆく
窓外をゆつたり動く雲見詰めベッドに仰向き点滴を受く
部分麻酔為されおほよそ十五分膀胱結石切除はじまる
手術後の感染症の高熱に再び駆け込み救急の処置

救急の受付に計る体温計四十度超す数値を示す
右腕に針を刺されて点滴を受けつつ運ばる六階の部屋
ひんやりと小さき吸盤付けられて終始監視の患者となりぬ
ひきもきらずサイレンの音聴こえくる午前三時に何の病か
見晴るかす武蔵平野の病院のベッドに眺むる秩父連山
熱下がり入院三日の退院は秩父嶺かすむ母の命日
恋といふ文字知らぬころ庭畑に熟れたるトマトをむさぶり食みき
有り難う礼を言ひつつ根の土をほぐしてやりぬ月下美人の
水遣りの雫の先に三つほど赤み帯びたる小さな花芽
立待の月に合はせて開きたる今年三度目夜の喜び

盛り蕎麦を肴に冷酒の一合をカウンター席の片隅と決め
角桝の袴のグラスに溢し注ぐ粋な習ひを愛してやまず
手を触れず唇ほそめ吸ひふふみ舌に遊ばせ喉に重畳
今ここに生き存へる偶然に感謝をしつつ銘酒一合
ジーパンの似合ふ臀部にありたやと日々歩めども効果はあらず
胸筋を腰鍛へむと公園に自己流運動ひろき紺碧
一日の設定歩数は七千歩預かる犬の散歩に満たす
会場に会ひたる友と見つめ合ふ己が身を知る三年の時
其のうちに何時か飲まうと約束の友の訃報を告げ来る電話
空中に襲撃をされ落ちたるかならば犯人は鷹か隼
美しく香り気高く束の間の幸を呉れたる月下美人よ
吾よりも歳若くして逝く人の特に増えたる令和この年
後輩の死因はなんと医療ミスアナフィラキシーショックと知りぬ
近親の二人を含め幾人も友を失ふ令和四年は
香典袋どこかと聞けばアリマセン即座に応へるコンビニの人
防衛費増税案の唐突に浮上したるはこの年のこと
大雪のニュースに心痛めつつそつと目つむる今年の柚子湯
息子らに暮れ正月は任せむと思ひながらもそば粉を二キロ
手袋の片方のみが落ちて居り霜に覆はれ道の日陰に
欅の木の天辺に来て百舌が啼く餌を探せる叢の在り
酒が飲め食ふもの旨く杖つかず歩けることを良しとして風呂
物心つきたる頃より八十年顧みたれば躓きもあり
子や孫等十人集ふ誕生会二十五階の冬の紺碧
三人の睦月如月誕生を同時に祝ふ我家の習ひ
立ち止まり時には薔薇に顔を寄せ愛でる人等の笑顔を想ふ
テレビドラマ「見知らぬ橋」の撮影にメンデンホール氷河に立ちき
馬の背の如き氷河の上のロケ加山雄三、三田佳子等と
クレバスに宙吊りとなる撮影をサポート呉れし植村直己
ナイロンのザイルを体に巻き付けて踏ん張る植村宙吊る加山
北極圏単独横断冒険の費用を稼ぐためなる仕事
三日間氷河のロケの宿泊はツインルームに直己と二人
犬橇の訓練のため訪ねたるエスキモーのこと面白く聴く
分厚き手握り再会喜びし対談番組収録の日
マッキンリー単独登山のクレバスに滑落したるや行方分からず
着飾れる同窓生の集ひたる宴会場に八十五の春
老齢化進む我らの団体にじわり増えゆく限界の声
強風にビニール袋が高々と自由を得たる喜びに飛ぶ
去年よりも多く飛び来る霾に想ひもかけずマスク役立つ
降る雨に朝の散歩を取り止めて安堵して居る己に気づく
犬と来て白詰草に蹲り細身の媼は四つ葉探すや
雨あがる道を犬連れゆく先の屋並の間に光る黄雲
三日月の鋭き刃観るにつけウクライナの空の穏やかにあれ
薄暗くがらんとしたるスタジオに独り佇む夢を見にけり
脚本を繰り返し読み浮かび来る脳裏の景色を図面に落とす
尺角のフロアタイルのスタジオの縮尺図面に消しては描き
完成のセットに照明なされたる時の喜び独り占めして
演技する俳優の映るモニターを副調整室のデスクに見詰む

照りつける道歩み来て公園に誘惑をする木下のベンチ
公園のベンチに座り居心地のよろしくあらず臀部の骨が
遥かなる彼方のことと思ひたる米寿が視野に入り来りぬ
義弟（おとうと）の根分け呉れたる無花果の青々としてその名はキング
雨降らず狭庭に朝夕水撒けど無花果の実の硬く太らず
何時かまた会ふ時あらば透明なその管外し逢ひたきものよ
夜顔にまた逢ひたくて種蒔けど遂に発芽を為さぬこの夏
習慣の朝の散歩を取りやめる体温を超す空気となれば
朝夕の犬の散歩は欠かせずに肉球のこと思ひ遣りつつ
濁りなき眼持つ頃夜の庭に寝ころび観たるあの天の川
奥行の深く視力の限界のうねる宙空けぶる星群
庭に観る三山越えたる堂平に東京天文台観測所在りき
あの頃の香り旨味も歯ざはりも齢重ねて脳裏に今も
桃や葡萄の品種改良進みゆく傑作としてシャインマスカット
透き通る緑の美しきマスカット食めばはじけて甘味よろしく
黄ばむ季忘れたるやら葉は青く今年再び無花果が生る
庭先のいなばしだれの葉の先に秋の便りが遅れて届く

正田フミヱ（しょうだふみゑ）☆　（栃木県）

菜園の季節

お月さまが昇ってきたよと児の声に諾いながら庭に出でたり
久しぶり家族で仰ぐ赤いつき皆既月食始まり出せば
発芽したカブに不織布掛け遅れ青虫たかり葉っぱ無残に
白菜の防虫ネット開けたればコオロギ紋白蝶が近寄りてくる
育苗のサニーレタスは小さくてピンセット使い定植を為す
サニーレタス定植すれど小さくて活力液肥かけて励ます
白菜の大きな葉っぱ立ち上がるいよいよ来たる結球の兆し
結球の兆し見せたる白菜に最後の追肥ていねいにやる
白菜の頭を押せば固くして結球の手応え嬉しくなりぬ
庭うちに柴犬きたり尻尾ふり頭下げつつ懐くしぐさよ
逃げ出した柴犬かもと首輪見るかわいい顔立ちきれいな毛並に
警察は柴犬の写真三枚撮る三ヶ月保護をわが家が預かる
警察から迷子の柴犬預かりて餌やり散歩と家族手分けす
預かれる柴犬に興味あるらしく早起きなして児は犬に寄る
飼主が迎えにくれば飛びつきて迷子柴犬鳴きて喜ぶ

柴犬は飼主のもと帰りゆきこの二ヶ月を思いて眠る
空っぽの犬小屋見つつ散歩にいづ決まりのコース一人歩きぬ
帰りたる柴犬見んと児は言いて連れ立ちくれば尾を振り舐める
三月にトマト種まき初めたり大玉中玉ミニを楽しむ
トマトから数日遅れてナスをまく小さなポットに一粒ごとに
割れトマトをまとめて畑に埋めたるに今年三月発芽するなり
育苗のわが家のトマトは小さくて自生トマトに逞しさあり
菜園に来れば野菜のそれぞれが追肥だ支柱とわれを促す
春大根のビニールトンネル霜おりて冷たき朝に発芽確かむ
空豆の莢をさわれば固くなり下向きおりて収穫とせん
空豆の茹で上がるころ塩を入れ茹で汁につけ柔らかさ保つ
空豆を茹でて仏前に供えたり祖母やちちははの好物なりき
刈草を干して使うよ敷草にキュウリ茄子の根本守りぬ
刈草を干せばしんなり敷草にトマトの根本の泥跳ね防ぐ
茄子の実を収穫しつつ朝日見る畑の温度三十八度

育苗のニューメロンの定植す放任栽培初挑戦を
ニューメロン七個なりたり甘いかおり収穫のめどついに来たりぬ
初めてのスイカ栽培に挑戦す病気に強い種を選びぬ
大玉のスイカ栽培の種まきは桜ちるころと見当つける
スイカ種を九センチポットにまきたれば弱温コタツに発芽を待ちぬ
スイカ種の発芽を見ればうれしくて良く出てきたねと言葉をかける
スイカ苗の徒長防ぐに日向に出し夜は弱温コタツに移動す
成長を待ちつつおれば八月に三個の実が付きネットで覆う
土砂降り止みスイカ案じて来たるとき二つに割れて蟻が群がる
残りたる二個のスイカは無事にあり収穫の籠を抱きて帰りぬ

季節を巡り家庭菜園を楽しんでいます。毎月の短歌は、菜園のことばかりになりつつあります。種まきから発芽の時を待つドキドキ感が楽しいのです。菜園は、失敗の連続ですが、反省を踏まえてこの次は工夫をこらしたくなります。野菜に目をやれば歌にしてみたくなります。私の歌の力は乏しいですが、ご指導のおかげさまで続けさせていただいております。辞書をひいて書くことも冬雷にて学びました。毎月の冬雷を読むことで会員の皆様に会っている気持になります。

紋白蝶が白菜カブに卵産み青虫食害呆然となる
白菜の防虫ネット掛けたまま結球までは見守ることに
玉ネギの苗作ること喜ばん大小あれど秋の陽輝く
霜や風小さな苗はきつかろう不織布掛けて見守るとする
オミクロン対応ワクチン五回目を高齢なれば止む無く接種す
輝ける今年最後の満月を嬉しく仰ぐ有り難き夜
草を取るわれに寄りくる柴犬は急に現れ人懐こい犬
何処から柴犬きたるか思案せり庭にあそびて帰る様子なし
保護したる柴犬飼主分からねば交番に知らせ拾得物扱いとなる
白菜を漬け込むわれに子の妻が「お待ちしています」にこやかに言う
収穫の白菜大根漬けたれば水上がるまで幾たびも見る
漬かりたる白菜大根食む家族の「美味い」一言にやる気湧き出す
餌を買い迷子の柴犬預かるに犬の寝床をまずは整う
登校の児らに迷子の柴犬は朝な朝なに頭なでらる
柴犬を探す人あり尋ねれば迷子の犬の飼主とわかる
飼主は迷子の犬を「マル」と呼び抱き合うさまに安堵するなり
片付けんと枯れ木のバジル触るとき香りの立ちて脳まで癒す
育苗のホウレンソウにレタスなど霜除けのビニールトンネル掛ける
歳晩に咲き初めたる紅梅が二月の霜にめげず咲きおり
ソラマメの開花が早く心配す霜よけ不織布外さず置きぬ
畑にて発芽をしたるトマトの群れ抜けばトマトに殻が付きおり
並びたるトマトの苗に「苗屋さん」と家族が言えば笑ってしまう
ふわふわのボタンの花を愛でたれば堆肥と腐葉土根元に撒きぬ
春くればボタンの花芽数えたり花芽の周りの草取りもして
定植に畝の準備が手間取りて育苗インゲン蔓のばしおり
春大根の種を二月に蒔きたれば保温資材を念入りに掛く
春大根の二月種まき初挑戦に温度計置くビニールトンネル
西風の強き時思う春までは春大根のトンネル守ろう
春大根の栽培始め三ヶ月力一杯に大根を抜く
空豆に不織布を掛けて凍害を防ぐを今年初体験す
空豆の倒伏防止に支柱立て紐を張りたり三段ほどに
空豆の実のふくふくと手に感ず石灰まいてカルシウム補給
夏椿静かに咲ける白妙の花美しく輝きており
草を刈るほかなき畑に立ちたれば鎌を片手にざくざく刈りぬ
腰ほどに草茂れるも刈り取りて半日干せばしんなりとする
ツルムラサキ干した刈草に守られて太き茎伸び大きく育つ
繁茂した草刈り取れば直ぐに干し畝に敷いては夏日防ぎぬ
畑にて一本咲けるヒマワリは雨の中でも笑まうがごとし
高温にカメムシたかるピーマンの収穫おそし薄め酢かける
ニューメロン栽培本を読みたれど何処まで放任わからずに居る
ニューメロン活力液肥注ぎたり有機石灰も蔓見つつやる
収穫のニューメロンを仏前に小振りなれども達成感あり
スイカ苗の成長見ては活力剤千倍液のスプレーかける
行灯のスイカ苗育ち摘心せず自然にまかせ蔓のみ動かす
スイカ作り自然にまかせ待ちおりて実の太りくれば枯草を敷く
鴉からスイカを守るに枯草をバサバサかけて用心とする

実りたるスイカ収穫の目前に土砂降り続き畑に行かれず
仏前に収穫のスイカ初物を供え報告す自然栽培

鈴木計子（すずきかずこ）　（東京都）

月見草

店頭の野菜にまじり商品となりて売らるる籠の鈴蟲
二年餘をみてもらひたる医師かはるマスクの顔しか知らざるままに
出まかせの節つけ子らに読みたりし「ぐりとぐら」の絵本作家逝きつ
手に取りて買ひたるものをここも又販売機となる農家の野菜
友の名の洋子は姉の名前にて宛名書くたび姉が思はる
顔向けて思はず見たり呼ばるる名姉と同姓同名なれば
われよりも夫と長き鍋に炊くおでんの時はいつもこの鍋
混む駅の地下構内の柱かげ一羽の鳩が動かずにをり
一つだけ実となる庭の獅子柚子が色づきはじむ師走となりて
元日の空気つねより澄みてゐて烏のこゑの遠く響けり
前後して走る襷の選手らの歩調のしばし合ふことのあり
手袋の掌のべて朝の日の温み受けをり電車待つ間を
正月の三日初売り広告ははや恵方巻の豫約を募る
ふる里になかりし慣ひの恵方巻つくらず買はず少し豆まく
おおさうか忘れてゐたと父言ひき電話叶はぬ今日は生まれ日

祖父よりの卒業記念の計子印いまも使ひぬ実印として
小麦粉をこねて四五〇日ねかすと記すくず餅食べぬ
小麦粉のくず餅はじめて今日食べつこれが江戸より伝はる味かと
葉となれる桜の続く樹下道ふうはり舞ひ来ぬ花びら一枚
校庭に盛りと咲ける藤みむと棚下に来つ投票のあと
妻亡くし犬と暮らすお隣りに犬仲間出来こゑの明かるし
鉢に入れ友もちくれたる月見草ゆふべ四弁の白妙ひらく
白妙の清楚さ見する月見草はじめて見たりああ本物と
よべの白けさはピンクに変はりゐて一夜の花閉づ月見草は
前に立つ女性の開く背表紙の南紀白浜われも行きたし
やまぎはの霞める春の日の空に浮くごとく見ゆ富士の嶺の白
跳びながらホームの屋根をゆく烏くちばし少しあけたるままに
与へたり貰ふものとは思はざる元気が足りずこの頃われは
気力出ぬわれに会ひたき姉が来つまどろむあした二日続けて
思ひ出し着たるレースのカーディガンいたく褒めらる手編みと言へば

知らぬまに抜けてなくせる指輪いふ友は突然夫なくせり

立札の注意促す赤字消えクイズのやうに残る黒文字

前に立つ杖に気づきて立ちあがる二駅前に譲られたる席

一面にクローバーの咲く広場みえつ隠れつ椋鳥がゆく

クローバーの広がる広場を渡る風ふかく吸ひたり緑の風を

降車ボタン押さむと待ちてゐたる子が先に押されてべそをかきをり

声のよき六人（むたり）のこゑの重なりて施餓鬼会の経堂に満ち満つ

西の空あをの見えゐて東より覆ふ黒雲ゆく道ぬらす

せな丸きぢぢがよちよち歩きの手ひきゆく更に背中屈めて

見て過ぎて戻りてやはり買ひてみる脂肪たらざる今年の秋刀魚

わが家の庭ともいえない地に獅子柚子が一本ある。夫の育った金沢の家にあり、母はおおゆと言っていた。わが家のは夫が鉢で買ってきたのを翌年地植えにしたものである。毎年丈はどんどん伸びたが、待てど暮らせど花もつけない。ようやく一昨年は一個実になった。ところが、去年は何と十個余の実をつけ七個が一キロ近い実となった。これにはさすがに驚いた。貰ってくれそうな人に五個を嫁がせ一安心、残りは正月に飾った後ママレードにして作り続けているヨーグルトにのせて食べている。

病院の医師らに奇跡の鈴木さんと言はれゐるらしその後の兄はソプラノの笑ひごゑ子ら叱るこゑ開けたる隣りの窓より聞こゆ丸まりて座席に眠る子かるがると抱き上げその父すばやく降りゆく

こゑのよき鶯の子ゆづり受けテープの親を聞かせにき父は父飼ひし雲雀と鶯ともに鳴くテープはどこにあるのか今は頼みたる新米のほか里芋と文そへくるるふる里の米屋はふる里の魚沼産のコシヒカリ新米のつやに卵かけ食ぶ

一キロの躰重増減誤差範囲なれどもわれにこたふる減少

昼前の公園遊ぶ子らをらずベンチに煙草すふ一人をり

窓よりの朝の気深く吸ひてをり伸ばす手足の先まで届けと

野火止の流れに沿ひて並び咲く皇帝ダリアなべて日に向く

われよりも夫と長き鍋に炊く大根こんにやく多きおでんを

灯油売る車はなぜに物悲しい五木の子守歌流しゆくのか

当たる当らぬは二分の一ゆゑ勘もまた視力判定に加担するらし

幼児にすぐ目がゆきて頬ゆるむこんな私を思はざりにき

乾きたる石にわが影映りつつ水なき川を渡りてゆけり

スーパーの売場を占める恵方巻さがす福豆すぐ見つからず

雪豫報発令中の文字かかげシヤベルが並ぶスーパー入口

骨付きの肉と野菜をストーブにまかせて夕餉にポトフと言ひて出す

澄む空に飛行機雲の長くならず明日も晴れらしシーツ洗はう

リハビリに通ふ医院の静まれり記録的なる寒波の豫報にくず餅の消費期限は二日とぞ四五〇日ねかせたる後

マタニティマークに気づき席を立つ微妙なふくらみ見ゆる人ゐて

袴にて眠りゐる人振袖の袂が床に垂れてゐますよ

冬待たず履きにしブーツ出さぬまま過ぎ来つスカートはかなくなりて

われ用に編みたる模様のセーターを気に入り孫がもらひてゆけり

背丈ほぼ同じくなれる孫と撮る時すこしだけ踵をあげぬ

ほぼ同じ背丈となりてわれ越ゆるらしき躰重女孫に聞かず

花ふぶき花のじゆうたん花筏おもひ残して桜散りたり

温き日の続く農家の販売機お化けのやうなはうれん草出づ

ビル風といふはこのこと交叉点おそろし恐し飛ばされさうで

服が好き好みもあるといふ小き犬と暮らせり子のなき友は

与へると言ひまた貰ふと言ふがありそんなものではないはず元気は

まどろめるあした続けて来たる姉さめてその意味おもひ打ち消す

編みてより四半世紀経るカーディガン肩に重たし手編みのレースが

足裏をあはせたるまま容易く口に持ちゆく抱かるる幼は

自転車にて通る小さき公園に悪なすび咲くひとところあり

公園の傍へに咲きゐる悪なすび己の名前知るよしもなし

髭あらき横顔みする隣席の膝におく手のいたく滑らか

境内に蓮の花咲く施餓鬼会の経の間（あひ）に歌ふ「蓮の花」

笑顔にて泣きゐる仲間の肩たたく選手が映るチームの負けて

乗りきたる人が視界を遮りて置く荷の形コントラバスらし

お揃ひの服の幼が改札より上が下の手をとりてゆく

柄デザイン姉とのお揃ひ覚えをりお盆の泊まりにゆくとき着にき

お揃ひは姉のおさがりまた着るをその頃思ひ至らずわれは

ポケツトに手首に顎に各々に委ねられてのマスクの在り処

乗り来たるわれの三倍ある女性友の降りたる席に坐りぬ

食べられると聞きて知りたきマテバシイ友が実と葉を持ち来てくれつ

鈴木（すずき）やよい　（東京都）

トロロそば

トロロそばと注文すれば店の人「自然薯そば」とこだはりみせる

大根を切りつつ月蝕思ひ出し包丁置きて急ぎ外へ出る

目を凝らし欠けゆく月を見た後のテレビの月は画面を覆ふ

屋根上の発電パネルは秋の日の輝く光を吸ひ込みてをり

校舎より部活の和太鼓響ききて心高まる夕暮のなか

点滴を引きてトイレに行く姿ガラスに映りて夜の更けゆく

入院のカーテン隔てた隣の人は「畑に行きたい」と訴へてをり

病室に小さきリース飾られて通るたび見る金のトナカイ

坂道はリハビリなりと言ひきかせぬくき陽を背に一歩づつ進む

七福神めぐりて通る畑には立ち枯れのナスが実を残しをり

境内に移されて立つ尊徳像読みゐる本に鏡餅の載る

ほこり払ひ昔のダンベル上げてみれば思ひもかけぬ重さに驚く

川涸れて水溜りに立つ白鷺は身じろぎもせず冷えゆく夕に

木蓮の輝く白は汚れきて隣家に落つる花びらを詫ぶ

はれやかに桜の下で写真撮る新婦の緞子は陽に輝ける

春の陽を背中に受けて草引けば目の前の土に蝶の影飛ぶ
やる事はほかにもあれどひたすらに草引き抜くは逃避なるらん
夕闇の川に連なる鯉のぼり疲れ果てたか静まりて垂る
来てみれば時季終はりたるツツジの寺で萎ぶる花も写真に収む
靴を手に火渡りする人続くなか山伏に抱かれ進む子のあり
食草のウマノスズクサ伸び始め葉裏に見つく小さき卵
葉を食ひ尽くし茎一本のてつぺんに危ふくとどまる揚羽の幼虫
降り続く雨の沁み込む土のうへに梅の落ちくる鈍き音して
高速で上昇始むエレベーターに不安で見詰む都鳥の飾り
スカイツリーで心に残るは景色より都鳥飛ぶエレベーターの中
茂る草と抜きたる跡の境目をフーと眺めてけふは終りとす
東京駅の向かひのビルの展示室標本だらけの異質なる空間
剥製のうつろなる眼が並びゐる都心のビルの真夜中を思ふ
炎暑のなか鉄板の熱を背に受けて焼きそばを売る町内祭り
焼きそばの売場離れて水を飲む西日はまだまだ衰へのなし

炎天下の畑仕事に行く夫は水と一緒にカラムーチョ持つ
白狐の怪しく踊る山車見上ぐ身動きとれぬ群衆のなかで
夏シーズンの新幹線に吾も乗る骨折したる母の見舞ひに
在来線を待ちつつ思ふ母のこと線路わきには夏草の伸ぶ
夏祭りのスタッフTシャツ着る夫はショッキングピンクが意外に似合ふ
テレビでの掃除特集は念入りでそこまでやれぬとスイッチを切る
午睡どき静まり返る保育園に青の帽子が干されて並ぶ
夕暮れの土手は暑さのやはらぎて草を刈りたるにほひの残る
香道の体験予約をしたれども日にち迫りて気後れのする
家々が電車の窓を流れゆき細切れに見ゆひつじ雲の空

高尾山が近くに見える地に住んでいる。ハイキングをしたり、ケーブルカーで薬王院に行ったりする身近な存在だ。時には自転車で高尾山口まで行ってトロロそばを食べて帰ってくる事もある。
昨年の秋、琵琶滝まで歩いていて白い大きな蕾を見つけた。てるてる坊主のような形が可愛いくて調べてみたらタマアジサイだった。
この日から、琵琶滝までの道がお気に入りのコースとなった。今年はこの道を季節ごとに歩いてみようと思う。

朽ちかける鳥居の奥が気になりて長き石段こはごは登る
好奇心の勝りて石段登りくれば小さき祠と狐の像あり
気掛りなニュースの多くテレビ消し黙して草引く優しき陽のなか
師走となり手付かずの草を刈りゆけば無くしたる鎌さびて現る
通夜の寺へ暗き坂道傘さして登る二人の足おぼつかなし
寒きなかパイプ椅子にて待つ焼香テントの屋根より雨流れ落つ
茶の素養なけれど憧る「曜変天目」茶碗に沈む宇宙を想ひて
小学校の小さき池のビオトープ葉を枯らすガマが一株陽に立つ
手術後の熱高きなか配膳のざわめく音をもうろうと聞く
病院の窓よりみゆるオレンジの朝日は濃さ増し世界を変へる
家々を覆ひて広がるオレンジの光のなかより鳥の飛びくる
点滴の雫はゆるりと膨らみて朝の輝き閉ぢ込めて落つ
点滴を互ひの横に立てたまま夕日に見入る名も知らぬ人と
点滴の外れたる身で行くトイレ自由の両手を目の前に掲ぐ
風知草の大鉢欲しくて退院の次の日出掛く痛みこらへて
好きな事やりたきやうにやればよし珈琲じつくり蒸らしつつ思ふ
入院の眠れぬ夜にぐるぐると考へたる事メモに書き出す
かうしたいと拙き言葉で伝へれば美容師頷きカットを始む
退院に買ひ求めたるシクラメン回復につれて花弱りゆく
画帳広げ舞ひ散る桜も気にかけずスケッチする人鋭き目をする
見事なる盆栽なれど枝枝をたわめる針金見るはせつなし
届きたる大藤の動画に心弾む旅思ふだけのいつもの朝に
園児らの鯉のぼり並ぶ橋のあり一人ひとりの名を見つつ渡る
艶やかな石蕗の葉に反射する光のまぶし誕生日の朝
山門に立ちゐる古き仁王像傷む体にたくましさ残す
返納に穴のあきたる免許証一つの区切りと身の軽くなり
打ち込みし社交ダンスを友は捨て施設巡りてどぢやうすくひ踊る
みなで行く昔の上司の墓参りかつての仲間はそれぞれに老いて
古き服を着て出たものの糸ほつれボタンの落つれば劣化と諦む
四年ぶりの祭りは終はり玄関に汚れたる足袋そのままにあり
正式な作法知らねど楽しみにと茶せんと抹茶をネットで探す
梅雨明けねど猛暑となりて手渡すは畑でなめよと去年の岩塩
目の前に迫るクヂラの骨格に驚きをればカヘルの骨もあり
例年になく強き日差しに葉焼けしたギボウシ哀れで遮光ネット買ふ
四辻に山車あつまりて競ひ合ふ激しきお囃子夜空に響く
そのままに形残して乾きたる紫陽花にみる静かなる強さ
ネックレスの糸切れて落つこれもまた老化と同じ経年劣化
冷房の電車で深く首を垂る長引く夏の疲れたまりて
賑やかな園庭の隅に枯れたままタウモロコシ立つ収穫終へても
汗ばみて目覚むる朝は急に去りまどろみつつ聞く静かな雨音
袈裟を着てヘルメット被りバイク乗る僧みて気付く彼岸の入りと
暗がりに穂芒浮かぶ夜の土手に立ち止まりて見る中秋の月
蒟蒻を昔ながらに売る店のあんみつセットは帰りの楽しみ

■五月号掲載八首（追加掲載）

ジャカウアゲハまさか真冬に羽化するとは部屋に置きたるさなぎを悔やむ

八日間飛ぶこと少なく水だけで過ごしたる蝶動かなくなりぬ
花芽かたき桜の影は朝練の生徒の上までながながと伸ぶ
閉まるドアに猛然と走りきたる人荒き息にてスマホ見始む
サンバイザー去年の夏より使はぬまま片付けもせずに冬は過ぎたり
高々と春めく空に舞ふ凧の見下ろす景色を吾も見てみたし
梅祭り行き着く前にペダル壊れ自転車押して道引き返す
窓辺にてボサボサに伸ぶる豆苗をそのままにする緑うれしくて

二〇二三年　誌上作品展望1

桜井美保子

この欄で担当する三十四名の方々の自選作品から二首を選び短評を記したい。

金柑の熟れるまで枝に有るや無しや食べ時確かな鳥には負ける　青木初子

庭の草木を愛情深く詠む。金柑にネットを掛けずにいるのも野鳥達への配慮。

四十分手をさすれども問ひかけに反応あらず寝息の聞こゆ　同

介護施設にいる夫との面会時間。話はできなくても心は繋がっている。

アマリリス二鉢培ひ幾年か咲かせる前の置き肥を二つ　赤羽佳年

「二鉢」と置き肥の「二つ」が響きあって希望を感じる。

おとろふる体いたはり生きてゐる今日いちじつの暑さ乗り切る　同

作者は冬雷ホームページに毎月「歳時記風」のエッセイを投稿。身の回りの四季の変化を詠んだ作品も多い。自らの老いを見つめつつ明日へのパワーを持つ。

小さき布を少し絞りて染めてみる元気良き藍の発色は良し　赤間洋子

藍染は短歌と共に作者のライフワークとなっている。住み慣れた亀戸から国分寺へ転居。新生活の中で展覧会に積極的に参加する。行動的で素晴らしい。

米寿を祝ふ最後の高校同期会母校に近き錦糸町にて　同

米寿を迎えた折の同期会の歌には感慨が籠る。最後の会とあるが、お元気で好きな道を前進していただきたい。

たちまちに青葉となりたる公園に子供のこゑのほがらに聞こゆ　天野克彦

季節の変化は早い。青葉が広がった公園に遊ぶ子供の声を捉えて温かい歌。

廬山寺の「源氏の庭」を見んと来つ桔梗花咲くむらさきの庭　同

「源氏物語」を愛する作者である。紫式部の邸宅址といわれる寺を訪ねた。桔梗の「むらさき」と紫式部の「むらさき」を掛けて豊かな表現となっている。

朝焼けの空に広がるいわし雲朱色に染まり山々をも染む　有泉泰子

朝焼けの空と山々の景。暮しの中で接する自然の情景の美しさが伝わる。

弁当を手渡す吾と利用者のなにやら話す笑顔あふれて　同

三十年間、配食サービスの活動を続けている作者。テレビの取材で、その様子が報道された。弁当を心待ちにする利用者と作者との笑顔の交流が素敵だ。

楽しかりし旅の思い出一つずつ宝物のごと取り出している　飯嶋久子☆

夫君と巡ったイギリスの村、友人とのサハラの旅などたくさんの思い出の旅がある。それらはまさに宝物である。一つ一つ思い浮かべるのも楽しい。

夜の田に蛙の声の満ち満ちて田の面に月は揺れつつ映る　同

日本の原風景を思わせる。田の面に映る月と蛙の声が印象的。

七五三祝ひの曽孫のちぎり絵がスマホに載るを友ら驚く　飯塚澄子

東京都美術館に展示された作者のちぎり絵を冬雷ホームページで紹介させていただいた。曽孫さんの愛らしさが伝わる色彩感の豊かなちぎり絵だった。

吟詠会主催の任を果たし終へ記録写真を楽しむ文月　同

主催の任を果たして無事に行事を終えた安堵と清々しい心境が感じられる。

早咲きの紅梅白梅続く道漂う香りに肩のほぐれる　伊澤直子☆

梅の香に体が反応して肩のあたりがほぐれる。日常生活の中での小さな発見を大事に詠んでいる。

病院の帰りにおしゃれなカフェありてウッドデッキにそよ風通る　同

おしゃれなカフェで一人の時間をゆっくり過ごす。病院通いにも楽しみは見つけられる。下句の爽やかさに惹かれる。

卵焼きを一口で食う父を見て世話する我等驚き笑う　石渡静夫☆

退院した父は意外に元気で卵焼きを一口に食べて家族を驚かす。父を囲む家族の温かさが溢れた作品である。

旧河川の川幅らしき段丘をたどれば嘗ての流路見えたり　同

河川はその時代によって人工的に流れを変える場合がある。かつての流れの跡をたどりその全景を心に描いている。

秋風の駅に立ち食い鴨うどん「やわらかめに」と通院の夜　糸賀浩子☆

闘病中の作者。通院の帰りに温かいうどんを食べて体調を整える。「やわらかめに」と頼むのも自身への労わりから。

すべも無く難病と闘い痩せた足に履かせた終の白足袋思う　同

ご長女は長く難病と闘われた。病床にありながら作者のことをいつも気遣われていた。「終の白足袋」が哀切である。

日の射せる庭に舞ひゐる蜆蝶止まりて広ぐる紫の紋　稲津孝子

蜆蝶の動きを印象的に捉えた。小さな命が美しい「紫の紋」を見せる。

穂の長き紫蘇の実摘みてこの年も佃煮つくる母の味にて　同

毎年紫蘇の実を摘んで作る佃煮は母から伝授された味なのだ。懐かしい味に遠い昔が思われることだろう。

左肩やや冷たきを感じつつ朝の床のアンダンテカンタービレ　稲田正康

起床時間まで間がある朝の床。何か思いを巡らしているのかもしれない。曲名が緩やかな響きを持って一首に収まる。

見おろしにある街いつも明るくてきは立ちてあり黄の壁ひとつ　同

高い階の窓から見える輝くような街の景。その中の黄の壁に視線が止まる。

見て見てと三品添えたる丼の写真送り来孫はスマホに　乾　義江☆

弾むような言葉と共に料理の写真を送って来たお孫さん。心が和む歌である。

瑞々しい紀州南高梅を梅干しに嫁御に頼まれ四キロ仕込む　同

作者は梅干し作りにも精を出す。「紀州南高梅」の固有名詞が効果的。「嫁御」という言葉には相手への優しさがある。

車庫前に出し置く古紙類軽々と回収車来て過去を持ち去る　井上菅子

古新聞などをリサイクルするために回収車が来た。何気ない日常を切り取ったが一歩踏み込んだ表現が鮮やかである。

移住して不便楽しむ人たちと不便を嘆く先住民と　同

移住する側と先住民側の考え方や感覚の違いに着目した。なるほどそうなのだろう。双方を対比させた一首で面白い。

寒鱈の兄より届き離れ住む子を誘ひをりどんがら汁に　井上鈴子

兄からの心尽くしの寒鱈が子を誘う切っ掛けになっている。きっと美味しいどんがら汁ができたことだろう。

縁側に庭を眺むる兄なりき格子のシャツで座つてゐさう　同

兄への追慕の歌。その服装も仕草も作者ははっきりと見えているのだろう。

大雪に融雪装置の止まりゐて三日遅れの新聞届く　井上槇子

豪雪地帯の暮らしの大変さが想像できる。三日遅れの新聞が届き安堵の様子。

母の日にカーネーション供へ墓参せる青年われに花束くれぬ　同

青年は他界した母のお墓参りに来たのだろうか。その日、住職の妻である作者に感謝の思いで花束をくれた。日頃から檀家の人々と交流し何くれと心を尽くす作者のお人柄が偲ばれる。

流さるる直前の吾が家テレビに映り息子ラインに動画送り呉る　岩渕綾子

東日本大震災のとき作者は他所の病院に入院中だったために命が助かったそうだ。津波で流される直前の自宅の映像は貴重だが心が傷む。悲しみにめげず生きる作者の姿に感動を覚える。

故人曰く「つなみてんでんこ」この教へ園児が歌ふ坂を登つて　同

小さな子供たちも自分の命は自分で守ることを歌から学んでいる。

孫の為開いた童話に息子の文字このいたづらは君のパパだよ　植松千恵子

子から孫へ伝わる童話の絵本。いたずら書きを見つけて孫へ話しかける。下句の話し言葉が温かく響く。

まだ暗き早朝ウォーク蟬は止み虫の音がして秋忍び寄る　同

季節の変化を鋭敏に捉えている。早朝の散歩は発見がいっぱいだ。

生い繁る柿の木の葉は猛暑日のベランダに差す朝陽を遮る　卯嶋貴子☆

柿の葉はしっかりした厚さがあるから繁っていると日差し避けになる。秋に実を収穫する楽しみがあるが、夏は木陰を作ってくれる。存在感のある柿の木。

もう一回免許更新に臨むため新しくメガネを作りに出かける　同

生活に必要と判断しての免許更新。前向きな心が具体的に表現されている。

月二回点滴うけてきたりしが夫の通院一回となる　江波戸愛子☆

夫の通院の回数が減ったという事実だけを詠んでいるが、その背景には夫の病状を気遣う妻の心がある。快復への新たな一歩。お元気になられますように。

あなたをね探しに来たよ何回もかの日のははを店主の言えり　同

「はは」は夫の母を指すのだろう。嫁と姑の間が円満であったことがまず思われる。頼られて嬉しいが、そういう状況

になることは寂しくもある。

家系図の頁をめくれば新京でのわれ五歳の写真一葉　樗木紀子☆

新京は満州国の首都。懐かしい写真に厳しい時代のことも思い出している。

六十年ゼラニウムとわれ共に存り枯葉除けば小さき緑葉　同

長い歳月、作者と共にあったゼラニウム。枯れたかと心配したが新しい葉が芽生えていた。これからも咲き続けることだろう。

梅雨あけてけふより軽きワンピースはだへに優し久留米絣は　大塚照美

いよいよ夏という時に軽やかなワンピースを着る。それも肌触りの良い久留米絣のものなら最高だ。季節を楽しむ心。

転勤の日のあさ家に来て呉れし父の涙を見き生涯一度の　同

別れというものは寂しい。娘を思う父の涙。その記憶は心底に刻まれている。

境内に焼きゐる鯛焼き二つ買ひ急ぎて帰る静もる街を　大塚亮子

二つという数詞が歌に温もりを感じさせる。家で待つ人のために足早になる。

千鳥ヶ淵の桜はひとりで見る慣ひ人の流れに逆らはず行く　同

一緒に花見を楽しんだ友が亡くなり、今は一人で千鳥ヶ淵の桜を見ることになったようだ。その心境が下句に出ている。

アルバムは旅の写真に占められる足よ頑張れ更に十年　大野　茜

まだこれからも旅を楽しみたいという思いがある。それには歩く力が必要だ。自らを励ます作者。読者も応援したい。

夢を見る夜多くなり鳥小屋の掃除に屈む父の姿も　同

あの世の父にも夢の中なら会える。しかも遠い日の元気な父に。

日あたりに日陰にも著莪の咲き群れてうすむらさきのひんやりとあり　大山敏夫

五月、慈光寺の山道は著莪の花が盛りである。冷たさを含んだ山の空気が著莪のうすむらさきを際立たせている。

逆走車間一髪に避けたるが何事も無きやうに走り来りぬ　同

咄嗟の判断と運転技術で逆走車との衝突を避けられた。どきどきの場面だったがすぐに平静な心を取り戻している。

鉤針で娘が編みたる襟巻はうす寒き日のわが宝物　奥山清子

心の籠った贈物は何より嬉しい。寒くなってもこの襟巻きがあれば安心だ。

子等三人大学生たりし二年間「苦しかつたね」遠き日偲ぶ　同

大学に行く子が三人となると経済的にも大きな負担がある。大変だった二年間を夫と心を合わせて乗り越えた。

病室の窓より見ゆる満月をゆったりながめ回復を待つ　小嶋知葉☆

焦らずにゆったりと構えて回復を待つという。心に余裕があるのがいい。

ボストンに学びたる孫の帰省する初来日の友人と共に　同

海外で学び知り合った友を連れてお孫さんが帰省。英語と日本語が飛び交って賑やかな交流ができたことだろう。

災害のときに避難を言ひくるる民生委員も高齢者にて　小田原禮子

このような時に大切な役目も果たす委員も高齢者とは少し不安がある。自分で判断して速やかに避難することも事前に考えておこう。

取つて置き紫のタオルハンカチをバッグに入るる猛暑と聞けば　同

猛暑のさなかでもお気に入りのハンカチで汗を拭えば元気が出る。

また一つ膝の悪化で怖いもの寺の階段球場のかいだん　笠岡文子☆

寺も球場も作者のよく行くところ。広島カープの試合を見る球場の観覧席の通路も階段。油断して足を踏み外すと骨折につながる。足元にご注意を。

ピカドンの忘れられないあの光八月六日おしろい花を摘んでいた朝　同

原爆の光を少女の日に見た記憶は今でも深く心に刻まれて消えることはない。

後続車に何と思はれゐようとも朝霞深きをそろそろ走る　梶尾栄子

視界が定かでない朝霞の道。安全に気を配りながら速度を抑えて走る。それが一番だろう。意志の強さが感じられる。

足乗せて電源入るれば筋肉を鍛へるとふもの夫の残す　同

少しでも体を鍛えようと頑張っていた夫を思い出している。何事にも良き方法を見つけて努力する人だったのだろう。

ベビー向け水泳クラスで泣く孫を抱える我に浮力が味方す　片桐美穂子☆

赤ちゃんといえども抱きかかえるのは大変だが、水中では浮力があるので負担が少なくなる。お孫さんの水泳レッスンを支えて奮闘する様子が見える。

ゆで卵四つつるりとむけた朝昨日のよどみを殻と捨て去る　同

ゆで卵がつるりと綺麗に剥けるのは気持がいい。鬱々としていた気分を切り替えた下句の表現が光る。

家中が苺の香りに包まれて手作りのジャム煮詰まりてくる　加藤富子☆

ジャムを煮る様子やその香りまで想像できそうである。出来上がりの味への期待感がある。

四年ぶりの金沢旅行は四人組揃いの箸を記念に求む　同

久々の四人集まっての旅行である。気の合う仲間との楽しい時間が流れる。

歩きつつ友の言う難儀のいくつかを聴くのみにしてひと時過ごす　川上美智子☆

苦しい心のうちを話す友の傍らで、ひたすら聴き役に徹する作者の優しさ。

降る雪にふっと浮かびて地蔵さんの帽子編みおり赤い毛糸に　同

絶え間なく降る雪にお地蔵様を思い出し、その帽子を編んでいる。この歌にも作者の優しさが表れている。「赤い毛糸」は印象的な結句となった。

亡き父母が植えたる椿を仏前に今年もきれいに咲いたと一輪　川俣美治子☆

父母が植えた椿が今年も咲いた。仏前に一輪供えて父母に話しかける。その声はきっと届いているに違いない。

ミニトマト青い実つけて日を浴びる赤くなれなれ楽しみな朝　同

弾むような心がリズミカルに詠まれている。ミニトマトが赤くなるのを心待ちにする朝である。

二〇二三年　誌上作品展望2

大山　敏夫

私の担当は34名。スペースとの闘いだが、できるだけ多くの作品を取り上げるように心がけた。

幼らとパンダに逢ひに行きました遥か遠き日上野の森に　倉浪ゆみ

幼らって、子供なのか孫なのか。パンダが初めて来て国中で話題になった頃なら、たぶん「子どもたち」だと思う。当然作者もお若い。希望に満ちた思出だ。

この道は孫の家へとつづく道ハミングしつつペダルこぐ我　同

これは現在の姿。楽しんで日常を生きている膨らみのある詠風である。

さはやかな駅舎ほがらにさくらんぼ佐藤錦を贅沢に食む　黒田江美子

現役引退後も積極的に活動され、社会へ目を向けてゆく作者は、行楽で来た山形でさくらんぼを楽しむ。

この国の医療も介護も産業に経済社会の只中にある　同

予備軍だと言われ誘われて見学した施設では、介護現場の実態に真摯にふれ、鋭く建設的な歌を作っている。

民主党政権の時に廃止されし本市のダムは復活されたり　兼目　久

粉飾せずに事実をさっと歌う中に本質に触れる斬り込みもある。政権が変われば廃止になったこともあっさり復活される政治判断には考えさせられる。

空海は線に重みあり最澄は清澄にしてやさしき筆跡　同

書から人物感にまで想像を膨らませる手法に弾力がある。

為すことの終りは無くも今日ひと日体の動きくれたるを謝す　児玉孝子☆

「素直に生きる」のタイトルそのままの作品群で日常語で単純に歌うのが良い。

もちの木に体震わせ初蝉の鳴くを目にする静けき朝　同

かたわらこのように自然を見る確かさもある。「体震わせ」に命の躍動を感じ、自らの励みにも繋げてゆく。結句には幸福感が溢れる

白銀と言ひて白魔と呼ぶ雪を憎み切れずよ白は美し　小林貞子

雪国に住み永年の雪との関係が美しく出ている。感性鋭く表現力にも富む。

葉月二日の窓に向き合ふ望月は白道低く南を行けり　同

白道が西へ向かえば仏教語の「白道」だが、歌では南へ伸びているので月下の一本道だろう。そこはかとない希望の象徴のような作り方に見える。

終了間際の郵便局のカウンターに職員ふたり立ちゐて迎へ呉る　小林芳枝

小誌事務局として郵便局とは親密な関係なのだろう。その対応からして敬意が込められている。

改札を出でむとすれば人混みの中より抜けて友の現る　同

待ち合わせの駅改札口前の状況が「人

混みの中より抜けて」の描写で輝いた。友の個性的な行動や、それを見る作者の視線の熱さが活写された。

昼寝して気力体力よみがえる老と闘う午後の一歩に　後藤恭介☆

どこか不自由なところがあると慎重に身を律して過ごすこともあろう。それが「闘う」に現れている。様々に動く周辺にも目を向け、楽しむ日常も見える。

ＡＩを縛る法律必要か人智を超えるＡＩ強し　同

何かと注目を集めるＡＩを見て、率直に問題提起もする。

歳晩に煮るもの切るもの減りきたり連れ合ひ好みし黒豆もなく　齋鹿ミヤコ

年末の慌ただしさの中でこう回想している。エッセイでは入院も体験されている。兄と芋焼酎を飲む歌もあり、鹿児島の出身なのか。印象的なのはスカートを素材とした歌がいくつもあること。

スカートを履き始めればある友に声をかけらる恋してるのかと　同

その中の一首。

心音がはっきりしてると聴診器当てつつ女医は笑顔にて言う　斉藤トミ子☆

仕事に登山に健康的に過ごしてきた作者も入院することになり、ショックを受けたと言う。この歌では芯は丈夫なので頼もしいが、病気にはご留意を。

穴のあく靴下干しつつ思うなり彼の山此の山共に歩みき　同

早くこの靴下と共に、あらためて美しい山を目指してほしいと思う。

皆やさしく今日は楽しい日をすごし本当にうれしいわが誕生日　早乙女イチ☆

矢島芳子さんに誘われて入会し三十数年と言う。懐かしい先輩の名が出て嬉しい。一連感謝と喜び、幸福感に溢れていて、ほのぼのする。

茄子苗が大きくなって生りはじめ毎日取れて朝がうれしい　同

みたまま感ずるまま歌にする率直さが短歌を作るという原点を思わせてくれる。

門松を飾る習ひの無くなりて町内配布の「謹賀新年」を貼る　櫻井一江

勝関橋の近くに住み、その地元の歴史、移り変わりを見つめた一連で歳月の重さを感じさせた。そんな中で、この一首は現在の状況がつぶさに出ている。

三枚におろし終へたる鰺の骨カリカリ食める唐揚げにせむ　同

旅行詠等でも楽しませてくれるが、元気の源はこのような細かい食生活の智恵が齎すものだと思わせる。

きのふ見たるピンクの椿八重の花また見たくなり歩き出したり　桜井美保子

たぶん、じっと観察して歌にしようとでも思ったのであろう。行かなくっちゃという積極さを感じる。

数行の中の言葉を練り直す包丁の刃を研ぎゆくやうに　同

作歌でも同じだが、ちょっとした文章を書く時など、こうして推敲し熟考を重ねるのだろう。真剣な姿がうかがえる。

深い青へブンリーブルーの朝顔を賜り育てる暑さに負けず　酒向陸江☆

朝顔の花の鮮やかな色。この色合いは現代人の感覚なのだろうか。自然体で社会の動きの中へ参加してゆく作者。

この時期にロシア民謡歌う意味平和を願ってと語りくれたり　同

ロシアの起こした戦争も二年を過ぎて長引いている。ロシア民謡を平和に歌いプーチンにも聴かせたい。

残りたるトマト苗ひとつ可哀想と求めて植ゑて花の咲きたり　佐々木政子

歌歴長い作者だが感性の柔軟さが抜けている。いずれ実を結ぶトマトの苗の、花が咲いた時点で歌い以後を想像させる。

仏壇の花を替へむと買ひにゆくタクシー代は花より嵩む　同

高齢なので歩いて行ける距離にない店に、タクシーを走らす。下の句のさりげない叙述に故人に対する思いが籠る。

日を三つ書く名の友を「ひみつのアッコちゃん」と呼ぶ　佐藤靖子

何か読みつつ言葉遊び、ゲームをしている感じになる。これなどは比較的簡単なレベルですぐに「晶」だと気付く。

山荘に引く電線のうへかぼそかるとんぼとをほどみな風に向く　同

この三句以降のひらがなの連続が何を言うのか解るに少し手間取る。「とを」が「十」に繋がり解決。連想ゲーム風に展開することも多い。この歌の「とんぼ」は前の歌の「とんび」を受けているようだ。

穏やかな春の日差しの中に立つ杉の大木は花粉爆弾　佐藤幸子

のんびりする春日の下には杉の大木が猛烈に花粉を噴き上げている。恐ろしい光景が結句の「花粉爆弾」に込められた。

夫の意に逆らふでもなくわが意見さらりと言ひて少し離れる　同

夫婦間の機微がさりげなく語られる。自然を歌っても労働でも家庭内を捉えても、温かい作者の躰を通した叙情がある。

大河原紙の呼称復古と知りたれば体の中に騒ぐものあり　嶋田正之

故郷東秩父村特産の細川紙がユネスコ無形文化財指定を受けたが、その名は古くは「大河原紙」であった。その古い呼称が復活されたのを心から喜ぶ。この年鑑の表紙絵は本来は「黄蜀葵（とろろあおい）」を描くところを似た花の「オクラ」になった。黄蜀葵は和紙のツナギ材に使われた。

立待の月に合はせて開きたる今年三度目夜の喜び　同

これは「月下美人」の花である。

菜園に来れば野菜のそれぞれが追肥だ支柱とわれを促す　正田フミヱ☆

我が子を育てる様に、時には声をかけその身に触れたり撫でたりスキンシップも忘れない。

空豆を茹でて仏前に供えたり祖母やちちははの好物なりき　同

そして収穫。種を蒔いて楽しみ、育つのを見守る楽しみ、収穫の喜び、短歌に作る歓喜も生まれる。

白妙の清楚さ見する月見草はじめて見たりああ本物と　鈴木計子

太宰治が月見草と言ったのは待宵草の類だと云われているが、この歌は北米原産の本物の花である。歌のように清楚な四弁の白い花。夕べに咲いて朝には萎む。

クローバーの広がる広場を渡る風ふかく吸ひたり緑の風を　同

一面に広がっていれば美しく匂う心地にもなろう。風も緑に感じるのも解る。

葉を食ひ尽くし茎一本のてつぺんに危ふくとどまる揚羽の幼虫　鈴木やよい

対象を凝視する眼の働きに感じ入る。

高尾山の近くに住み、自然にも身近に親しみ、観察眼を磨いたのかもしれない。

靴を手に火渡りする人続くなか山伏に抱かれ進む子のあり　同

高尾山の火渡りか。大人に混じり子どもも挑むのだが、幼い子は山伏姿の方の手を借りる。微笑ましくも、厳粛な雰囲気を観ている。

新しき本を買ひきて新しき本の香りに暫し満たさる　須藤紀子

本好きの作者。新本の匂いって独特のものがあった。主にインキの匂いだが、豊かなる学識の香りの如きである。

木々たちが新しき衣纏ふゆゑ我も購ふ春の衣を　同

そして自然の中へも融合している。擬人化した木々とも影響しあっている。

姑の残ししパジャマわれが着る黒マジックの名前そのまま　髙橋説子

死という別れが否応なく続いて来る時期がある。姑との別れも残されたパジャマを通して具体的になると家族という不思議な関係を考えさせられる。

気がつけばベンツとボルボに挟まれてこんなスピード気を引き締める　同

運転中の面白い体験が楽しみながら回想される。

終電のホーム明るくケイタイを見入る人々二宮金次郎のごとし　高橋燿子☆

ちょっと笑ってしまう。シニカルというよりは、真実尊徳像並の勤勉な人々が今は溢れているのであろう。

母の日を祝いてくれる嫁娘みんな母だよ賑わい嬉し　同

華のある女系のボリュームを感じ、一緒に日常語で祝いあっている楽しさが弾けるようである。

三日程寝込めば筋力失いて腰ふらつきぬ夏風邪のあと　髙藤朱美☆

特に日頃運動をしない人は三日も寝込めばこの歌のようになる。しかし癒えれば直ぐに戻るから心配ない。

暦には真珠つけたる猫が居ておしゃれを忘れた吾を見つめる　同

きっとお気に入りの暦なのだと思う。

時折り作者に貴重なるアドバイスを齎す相棒なのだと思った。

仏具店に線香選ぶもまた愉し梅にスズラン桜の香り　高松美智子☆

今はこういう楽しみ方もある。仏具となると重たい雰囲気となるが、こんな様々な線香があるのは作者のみならず歓迎だろう。

枝ぶりは不格好なれどそれなりとわが手に造る庭の楽しみ　同

下の句は自信に溢れ潔い。庭づくりも短歌作りも同じ、これでよいのかと思う。

オトシブミの揺籃を見つけし林道は車入れず崩落ありて　橘　美千代

この背景に蟠り解しきれないものがあるように感ずるが、現れた情報以上を汲み取るに限界がある。

ふたたびを歩み始める君のためただあたたかき食事を作る　同

下句に込められたメッセージが伝わり、よい結果を導く起爆剤になればと願う。

道端に乾いた音をこもらせて桜の落葉積もりに積もる　立石節子☆

風に吹かれ集まる桜落葉の乾いた音を捉えて描写した歌。まなこの仕事である。

女子医大合格をして老いの身の論文を書く初夢見たり　同

旺盛なる向学心の作者を思わせ、自身も少し躊躇い気味なのが初夢ながら、リアルに出ている。

この朝は裸眼にハガキを書いており老いてわが眼に奇跡が起きる　田中祐子☆

独り居の我に世間は優しかり確と生きねば申しわけ無い　同

奇跡的なことを起こすほど日常のひたむきさがあるのだろう。読んで気持の良い歌、詠んで前向きに生きられる歌、そういう作品ばかりであった。

夫婦して植えた記念樹南高梅今は一人で花を楽しむ　谷田律子☆

毎年楽しみはあるが、今は一人で観る花だというのが読後に韻を引く。

精一杯きもののオシャレ楽しんで東京行きの急行に乗る　同

呉服店を営んでいた作者なので、こういう機会は生き甲斐に繋がるのだろう。

三陸の正月魚「どんこ汁」円卓囲み家族温もる　田端五百子

状況が眼に浮かぶようで、新年を祝う円卓を囲む家族を祝福したくなる。

「日本の誇れるスイーツ」石焼きいも公園のベンチに孫と分け合ふ　同

これも幸福感にみちていて読者もそのお裾分けに与れる気がする。タイトル「余生の日々」を生き生きと過ごす作者。

畑中の夫婦案山子の衣替え今日はマスクに麦わら帽子　塚本節子☆

役に立つ働き者の夫婦案山子なのだろうが、管理する方のユーモア感も見えるし、それを観て楽しむ作者も面白い。

「男前」の豆腐みるたび思い出す手料理上手な友の食卓　同

この豆腐のネーミングにインパクトがあり、作者の感性に響いたのであろう。

見つけたる夫と吾の二十歳頃の一枚の写真に会話が弾む　津田美知子

きっと交際中の懐かしい場所でのもので、会話が弾むのも無理はない。

「ばばの着た振り袖着たい」と女孫言ふ「五十年前の地味なのが良い」と　同

そしてこの歌に繋がる。こんな可愛いことを言われたら、メロメロだろう。

好奇心もち続けたいと子に言へば喜びくるるそれこそ願ひと　戸部田とくえ

この気持には賛成である。

牛蛙いつしかその声せずなりて思へば再び聞きたしあの響き　同

歳月と共に環境も変化して昔はありふれたことも消えてゆく。牛蛙の声は結構騒がしいのだが、懐かしむのは古き良き日の追憶かもしれない。

散歩中知人の家に呼びこまれ朝のコーヒーで話題たっぷり　豊田伸一☆

こういうこともあるのが散歩の楽しみ。散歩を継続すると季節の様々な花との巡り合いもあり、生活に彩を添える。

庭先に植えたきゅうりの初物のもぎたて食えば今年もうまし　同

また身近な野菜等も作る。結句の「今年もうまし」に自ずから実感が籠る。

二〇二三年　誌上作品展望3

小林　芳枝

担当は35名。一年間の作品から少しでも作者像が伝えられたらと願っている。

甘夏の花に誘われ蜂が飛ぶ私は香りと緑に憩う　永井享子☆

蜜を求める蜂、香りと葉の色を楽しむ作者、甘夏の白い花に寄る目的をはっきり示して蜂と同じように楽しんでいる。

雨あがり南天の実を守るごときらりと光る水滴のあり　同

雨後の水滴に目的を持たせる感性は個性的で鋭い。入会して九カ月なので歌数は少ないが細やかな描写が光る。

ネジ花を登りつめたる蟻一匹立ちあがりおり紅の花先　長尾弘子☆

細い茎を登りきった蟻の戸惑う様子がきっちりと描写されて余韻が残る。

横網町公園に立つ朝鮮人犠牲者の碑に花供えあり　同

関東大震災から百年後の今も供えられている花に心を寄せる。情報の乏しい時代の犠牲者を忘れず有事に備えたい。

電子レンジなき職場にて活躍す十年前の保温ランチケース　中島千加子

手作りの昼食を冷めないように工夫して通う新しい職場の一齣がみえる。

鷺草の小花浮くやうに咲いてゐた独り居の母の夏の玄関　同

玄関は子供の頃の思い出の場所でもあろう。晩年の母を思い寂しさが漂う。

必要な荷物詰めながら浮かびくる介護ステージの先のその先　永野雅子☆

父の施設入所が決り必要な物を整えながら過ぎる今後の事。回復を望めない状態を思い自分が為さねばならぬ事を思う。

町会の神輿を担ぐ町民の食事を作る四百人分　同

町会の行事にも積極的に協力して地域に尽くし、神輿を担ぐ四百人の食事を作るという。頼られる存在である。

発つ前に娘の植えたるプリムラは初霜のなか鮮やかに咲く　永光徳子☆

コロナで三年振りに帰国した娘との楽しい日が過ぎて二人で過ごした日を懐かしむ。可愛い花が心を明るくしてくれる。

腹筋もスクワットも難儀して最後は嬉しい脱力タイム　同

トリム体操には体のバランスを整える効果があるという。暫く休んでいた体は思うように動かないが楽しめたようだ。

あと五年経てば還暦なる吾の顔の染みなぞ気にすな母よ　中村哲也

年末で帰省した息子をまじまじと見て案じる母に優しく返す。短い会話のなかに温かさがあって微笑ましい。

暑さにはあへて豚骨ラーメンにニンニク入れて体力保つ　同

何事も真剣に向う真面目な作者。次の月にコロナに罹ったので効果は？であるが軽く済んだようなのでアリだろうか。

左目を隠して見れば線歪む右目黄斑やはり異常か　中村晴美

医師に指摘された黄斑浮腫を確かめてみる。「そうかも」と思いながら新しい異常に不安が募る。

三日間なぜか涼しき風の吹くチャンスとばかり草刈り機振る　同

少し涼しくなった日を逃さず草刈りをする。草は刈られても刈られても逞しい。

芦屋川シルバーカレッジに入学す窓に春雨音なく降りぬ　西村邦子

シルバーカレッジは高齢者の学びの場であり地域活動の人材育成の場であるという。知識を広げて学ぶ姿勢に敬服。

三年ぶり家族揃ひてバーベキュー大玉西瓜を舟形に分く　同

三年振りはコロナの影響だろうか。バーベキューの締めに食べる西瓜は舟形に切って種を飛ばして齧るのが似合う。

製鉄所よりふき出す煙今朝はなく林立する煙突静かに立てり　野村灑子

近くに川崎製鉄の工場があるようなので常に活発に煙が出ているのだろう。煙の無い風景を楽しんでいる感じもする。

恐竜の名残りの如き長き尾をくねらせトカゲは草むらに消ゆ　同

草むらに消えたのは小さなトカゲなのだが恐竜を思い浮かべて楽しそう。

人間が人を害する事なかれ人々の願ひ届かぬ戦　橋本文子

この願いが叶う日がくるのだろうか。

日中と夜の温度差大きくて信州の野菜おいしかりしよ　同

松本市から娘の居る米子市に移ってから長いが信州野菜の味は忘れない。その美味しさの基となる気象条件をきちんと捉えて説得力がある。

捥れずに数多残れる柿の実を熊にやりたし雪降る前に　羽田孝輝

木に残っている柿を冬眠の前の熊にやりたいという。人も熊も命は同じと言う信念をもっている様で近年の野生動物の行動や扱い等について考えさせられる。

落ち着かぬ明日の今頃手術台あれもこれもが手につかぬ午後　同

腕の手術を受ける前夜の気持の乱れがストレートに詠まれている。手術を経験した人には良く分かる心境であろう。

一ヶ月あと半月と日を数え四十年の仕事を終える　浜田はるみ☆

四十年勤めた職場を去る日が一日一日と近づく。複雑な気持は数字の内に籠められていて淡々と詠まれている。

藤の幹大きくうねり広がりて池の上まで張り出しており　同

スケッチする為に見ている藤の木の力強い雰囲気がそのまま詠まれているようだ。描写力は絵にも歌にも大切だろう。

ストーブの上の薬缶にたぎる湯を注ぎて朝まで温き湯湯婆　林美智子☆

子供の頃に毎晩タオルで巻いた湯湯婆を抱いて眠ったが柔らかな温かさが心地良かった。作者は必要上使っているのだがその温もりを感じている。

ウクライナと父の日記が重なりぬ戦禍の後の何もなき暮し　同

壊れたものはもう戻らないということを父の日記で学んだ作者。現在戦っている人々の戦争後の暮しを憂う。

スマホにて二人並んだ写真受く生受けて二時間の子とその母の　藤田英輔☆

を連れて来る声　　同

冬の厳しいカナダに来るカナダ雁の鳴き声は待ちわびた春を連れて来る嬉しい声のようだ。頭のなかに広い空と大きな風景が浮かんでくる。

身辺の整理をすると友よりの葉書一枚　繋がり断つと　　本郷歌子☆

最近多くなった年賀葉書お断りの知らせ。仕方のないことだがやはり寂しい。

ジップラインのハーネスを着け出番待つ鳥の気持ちになりたい我は　　同

バスケットボールを応援しジップラインに挑戦する活動的な作者。その快適さは癖になるようだ。

日のひかり求めどこまで伸び立つかわが家の南天二階へ届く　　本間志津子

必死で太陽を求めて伸びた南天に驚きながら何とかして生きようとする植物の意欲に圧倒される。

雲多き行合ひの空に雨が欲し大気の熱をさます風欲し　　同

夏の終りの頃だろうか。山形でも夏の暑さは堪えがたくなっている様だ。曇ってきた空を仰ぎながら恵みの雨を乞う。

庭畑に数株残る春野菜あつまりて咲く小き黄の花　　益坂順子

生育が遅れたのだろうか。食べられずに残った野菜の黄の花に思いを寄せる。

急登の後に拡がる花の尾根こころの躍る黄の兎菊　　同

苦しい登山の喜びはこうした景色に会えることだろう。疲れを忘れる一瞬。

定着したる就活婚活終活に今ではパパ活離活ポイ活　　松居光子

最近どんどん増えている短縮語をリズムよく並べて印象的。短縮語には意味の分らないものもあって言葉の変化に戸惑いを覚える。

春休みに訪ひ来る女孫らに見せたしとひと月遅れにお雛さま飾る　　同

ひと月遅れて雛を飾るのは孫たちに見せる為という。喜んでくれただろうか。

鍋料理にわが育てたる春菊を入れれば香りと湯気と広がる　　松﨑みき子

自分で育てた野菜を調理する醍醐味が感じられる。香りも湯気も買ってきたものとは全く違うのだろう。育てた人にしか味わえない無上の喜び。

山風の冷たさ背に当たり来る目の前の海にあの日を思ふ　　同

海を見ればあの日が重なる、辛いことだが何年過ぎても消えない恐怖である。

明けきらぬ朝一番の雪を踏み今日の新聞配られて来る　　松中賀代☆

作者は床の中で聞いているのかもしれないが早朝に届けてくれる新聞配達の人への感謝の思いが湧く。

山道に入れば木を切る音がしてこころ丈夫に五千歩を目指す　　同

散歩だろうか。山道を歩きながら人の気配に安心して歩けるのは嬉しい。

笑みをもて巧みな司会の高田氏に笑顔あふれし冬雷大会　　松本英夫

会の為に何でもやってくれた高田氏を思い出す。作者とは入会前からの友人。私が最後に会ったときは「数人での歌会をしたいね」と熱く語っていた。

若き日の妻の笑まひのやさしさの時折のぞく老いたる今も　　同

年齢を重ねても妻の良い所だけを見てくれる優しさ、若い日の細かい部分をも忘れない優しさ。言葉が見つからない。

腹いつぱい食べたかと問ひキャベツの葉ひつくり返して青虫抛る　　町田勝男

青虫は満腹になって自然に戻ってゆくのだろう。「抛る」は少し乱暴なようだが男の優しさを感じさせる。

啓蟄を待たず出でたる蜥蜴の背春日にきらり一瞬のひかり　　同

少し早めに出てきたあわてんぼうの蜥蜴、驚いて叢に潜る一瞬を捉えた。タイトルの「失はれた時をもとめず」は甘さを戒める自分への訓示であろう。

雨降らぬ校庭に広く砂が舞いサッカーボール蹴る音響く　　三村幸男☆

校庭の砂塵の中でボールを蹴る音が響いている。サッカーをする少年達が走りながら声を掛け合っているような風景が想像されて行きずりに聞いた音かもしれないが爽やかな感じがする。

献立は妻の要望聞き入れてオロシハンバーグ電子レンジで　　同

妻の希望で用意したオロシハンバーグ。食事は人と食べる事で美味しくなるが夫婦で食べればその数倍も美味しい。

二十六度のフロリダに孫はプールにて泳ぎたりとふ正月三日　　三好規子

海外の人との交流が多く、語学研修でフロリダに居る孫から二十六度というメールが正月に届き気候の差を実感する。

介護士に嚥下障害あると聞き夫の好きなにぎり鮨もち帰る　　同

好物の鮨を食べさせられずに持ち帰る事になってしまった。年末に骨折し辛い日が続いたが今は快方に向かっている。

亡き夫に似てゐる娘指先の爪の形も指の長さも　　村上美江

第一歌集『さみどり』が好評である。娘の指を見て夫を思う気持が切ない。

目に映るみどり全てを突き抜けて車走らす山々の道　　同

山道をこんな気持で走ったら爽快だろうな、と思わせてくれる歌だが心に何か晴れないものがあるような感じもする。

専用のパソコンに二月の例会日入力し

てゆく教はりながら　森藤ふみ
本部歌会の準備と受付、最近は慣れないパソコンでの会場予約も担当する。大切な役を着々と熟す。
橋に向かふ神輿進まず人波の上に出でたる鳳凰揺れる　同
動きの遅い祭りの神輿を離れて見ている作者。写実的で焦点が合っている。
笹竹のすき間より見る南天の実が小春日に揃って光る　安川敏子☆
幾つもの薬を飲みながら籠らず外出する作者。目線は自然に明るい方に向く。
鈴の音でドアの開閉気づかせるデイサービスの楽しいトイレ　同
デイサービスでトイレの出入りを鈴の音で知らせる工夫を楽しみ一日を楽しむ。
石またぎ根をまたぎきて枝くぐり苔に手をつき水をひとくち　山口　嵩
秋の山を歩く様子が具体的。ひとくちの水に救われてまた元気に歩けそうだ。
三本の曲線ゑがく飛行機雲　戦なき空に在りてこそよし　同
大空の飛行機雲を見ながらも戦いの続く国を憂う。平和を願う思いが籠る。
春の土手餅草つみて振り返る紺碧の空支える大地　山崎猛☆
明るい上句で下句には安定感がある。
蓬は美味しい草餅になったのだろうか。
デジタル化を信じ過ぎては危険だと思い次第にわが確信す　同
コロナでデジタル化は急速に進んだが不安を感じる人も多い。元気な学生の頃を思い出しながら大事にしなければならないものに気付く。
ＷＢＣ侍ジャパン強かつたいつ迄も続く吾の興奮　山崎英子
アメリカに勝利して世界一になった喜びに満ち溢れて興奮がとまらない。
百一歳と書かれケーキに祝はれて娘と孫との楽しき食事　同
百歳の誕生日おめでとうございます。山崎さんの歌に励まされている人は多く、私もそのなかの一人である。
産直の菜花のおひたし春の味やはり今年もはづせなきもの　山本述子
菜花は私も春になると必ず食べたくなるが産直は香りが格別だった事だろう。
夕散歩草むらからの虫の音に背筋伸ばしてリズム整ふ　同
昼の暑さに疲れた体がシャンとするような快い散歩である。足元から虫たちが応援してくれると思えば元気になれる。
成長の遅れに施す一振りの肥料に勢う皇帝ダリアは　吉田綾子☆
広い敷地に植えられた植物は大変多いようで河津桜なども咲くという。細やかに世話をする様子がみえる。
三本の実生の木槿それぞれに色の異なる花を咲かせる　同
実生で育てた木槿の初めての花は大きな喜びとなり花の色の個性を楽しむ。
午前中保育園児の来る広場どんぐり残し掃除してをり　吉村昌子
園児等の喜ぶ顔を思いつつ落葉を掃きドングリは残して明日の楽しみとする。
九十九里の浜に打ち寄するひとすぢの白波続く空の下まで　同
穏やかなリズムのなかに九十九里浜の大きな風景が見事に表現されている。

二〇二三年　誌上作品展望4

特別作品・今月の30首・スマホの写真一葉短歌二首

橘　美千代

「特別作品・今月の三十首」より。特別作品は冬雷賞受賞者の五十首詠。今月の三十首は四月号から十一月号の間に掲載された七名の方の作品だ。いずれも読み応えのある力作づくしである。今後の冬雷の指針となると思う歌を抽出した。

◇**社寺巡拝抄　天野克彦**

千八百年の歴史を秘めるこの社あそび場なりき幼きわれの（住吉大社）
焼夷弾に焼け出されたる記憶あり万代池へ逃れし記憶
住吉区帝塚山（てづかやま）に生を受くにほひなつかし七十年経ても
高円の山に見おろす奈良盆地身すぎ世すぎの生活が見ゆ
鴨長明のなげきかくやと思ふまで祇園界隈変はりてゐたる
社寺巡拝の始めは住吉大社。摂津国一之宮で全国の住吉神社の総本社である。この千八百年の歴史を秘める社で幼い作者は遊んだのだ。第二次世界大戦末期に一般市民一万人以上が犠牲になった大阪大空襲。アメリカ軍の焼夷弾から生家近くの万代池に逃れたという。忘れがたい恐怖の記憶であるが歴史上の証言としても貴重である。大阪府大阪市住吉区帝塚山が作者の出生の地であるという。生まれ育った土地の匂いの記憶はいつまでも残るもの。七十年経っても。奈良市春日山の東南にある高円の山。標高423メートルからは奈良盆地が見おろされ市民のなりわい生活が垣間見えると。「方丈記」の「ゆく河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず」と無常を嘆いた鴨長明にも劣らない。かつて作者が行き慣れた祇園界隈は変わり果ててしまった。

◇**鄙のあけくれ　本間志津子**

子もわれも素直ならざる性ゆゑに美談のやうには行かぬ日日
東の空に朝焼け赤赤と凶凶しきまで
空を染めなす
手袋を脱ぎ太陽に手を翳す信号を待つ僅かな時間に
後遺症に苦しむ娘さんと作者の生活を示唆する一首目。母親は子のためと懸命につくすが子の方は感謝するそぶりもない。どころか自身の不如意への鬱憤の捌け口として当たってくる。気持ちがかみ合わない。まこと美談のようにはゆかぬもの。一日の始まりを告げる東の空の朝焼けを「凶凶し」と感じる作者の心には屈折した情念が潜むのかもしれない。太陽に手を翳す作者。手に入れられなかった何かを掴もうとしているかのようだ。

◇**雨の帰山　石渡静夫**☆

十三年振りに乗車の予讃線讃岐の山々雨に隠さる
練習の前に洗面歯磨きを夜行の体目覚めさせよう
北風の無くあたたかな梅林にこのまま居たい囀りを聞き

十三年ぶりの帰省であろうか。久しぶりに乗る予讃線の車窓から眺める讃岐の山々。雨にけぶる山々。作者の懐かしさや車内の湿った空気感が伝わってくる。少林寺拳法をなさる作者はストイックに修行に励んでおられる。夜行の明けにも心身を清めて練習を。読者も邪念が払われるようで居住まいを正す。いつも真剣に気を張っておられる作者が梅林の中にくつろいで「このままここに居たい」と呟くさまが魅力的な三首目。

◇**東日本大震災　岩渕綾子**

3・11のち十二年夢の如し盛岡の眼科に入院中に家は全壊流失す

松原を朝なあさなに散歩せしから偲べば声がきこゆる

3・11に生きのこりし吾に息子言ふ父の分まで長生きせよと

東日本大震災からはや十二年。大津波と福島第二原発事故に国難とも言える大惨事となった。原発事故処理の難行、行方不明者、避難後の帰宅困難、復興の遅れ等々いまも未解決な事態が続く。その当事者である作者の歌はどれも真実が籠り力強く読者の心を揺さぶる。入院中に家が全壊流出という衝撃的な事実。震災前の穏やかな海と松原をゆくうからの思い出。生き延びた作者に「長生きせよ」との息子さんの言葉があたたかい。

◇**温め酒　佐藤幸子**

父母と過ごしし番地の〈ストリートビュー〉鬱蒼たる杉林見ゆ

雪解けの山の畑にのぼり来て獣にほひの風の吹かれる

夫には人肌ほどに温め酒われもほのぼのホットワインで

故郷の地名地番は地図上に今は無くなったが、かつてそこには幼い作者と家族の生活があったのだ。グーグルの〈ストリートビュー〉で見るとそこは鬱蒼たる杉林に。画面に見入る作者が浮かぶ。二首目。雪解けの山の畑には獣のにおいのする風が吹いてくると。山深き環境の特異さに驚かされる。重量子線による治療が奏功し退院された夫君と共に飲む温かい酒。温め酒。ほっとした気持ちと思いやりに溢れて心があたたまる。

◇**岳切（たつきり）渓谷　戸部田とくえ**

鳥のこゑせせらぎの音につつまれて思へば懐かし岳切渓谷

八十二歳それでも母を思ふたび幼さ戻る委ねてみたく

公園の落葉ふみつつ子の言葉〝ポジティブにあれ〟のひびきあり

岳切渓谷は大分県宇佐市院内町の温見川上流にある渓谷である。作者の故郷の辺りなのであろう。まさに歌うようにその景を懐かしむ。読者は一連の歌の世界観にひきこまれる。故郷を懐かしむ思いはやがて亡き母へと繋がってゆく。母との茶摘みの思い出に。気を散らす作者を母は暖かく見守ってくれた。もう一度幼い自分に戻り委ねたいと。公園を散歩して踏む落葉の音を「ポジティブにあれ」と聞きなす感性がユニークである。

◇**介護の日々　乾　義江**☆

退院して臥所に眠る夫を前に先行き思えば心挫ける

日に三回ほぼ一時間を点滴のごとく

胃瘻から入れる栄養食

死を伝える電話に息子から言葉を受け途端に我が身の力抜けゆく

夫君が脳梗塞を発症された平成六年から亡くなる二十二年までの怒涛のような介護の日々が綴られ一気に読ませる。脳梗塞を繰り返し夫君は失語症、寝たきり、嚥下障害となり、作者は気の休まる暇も無かった。始めは先行きを案じ「心挫ける」であった作者。胃瘻造設を決意して後は二首目のごとく次第に介護の現実を受け入れていく。介護士やケアセンター等の援助を活用しやり遂げられた。「力抜けゆく」に全てが凝縮されて。

◇**沸騰列島　植松千恵子**

土砂降りは線状降水帯あつといふ間に水路は溢れ道路が川に

この夏は北半球を熱波が襲ふ便利な暮らしも酷暑を招く

少年は急な雷雨に立ちこぎしてリュックをゆらし家路を急ぐ

令和五年の夏は猛暑日の過去最多の更新が相次いだ。四十度を超える地域もあり、各地でダム湖が干上がり飲料水や農業用水が不足した。まさに「沸騰列島」であった。「線状降水帯」という言葉も注目された。気象用語で「積乱雲が線状に次々発生してほぼ同じ場所を通過または停滞し極端な集中豪雨をもたらし、災害の原因となる」という。文明生活により発生するCO_2等や森林破壊による地球温暖化に原因があると鋭く切り込む。

次に写真と歌のコラボの妙、「**スマホの写真一葉・短歌二首**」の作品より。

◇永光徳子

夕暮れて観光客の姿なく天狗伝説頭をよぎる

修験道の霊山である高尾山の参道での嘱目詠。天狗が出そうな巨木が並ぶ。

◇村上美江

虹色に砕けてけぶる荒波を恋する吾は少しも恐れず

亡き夫君とデートした思い出の碁石海岸。今あの時のように虹がかかって。

◇齋鹿ミヤコ

散歩する犬に出会へば犬とじやれ声高くなるわが連れ人等

人々を案内して富士山の見える橋へ。楽しんで心はずむ様子に作者も安堵。

◇飯嶋久子

平磯の白亜紀層の岩礁に砕け散る波高く白し

白亜紀の地層がある平磯海岸。6500万年前の岩の上に白波が砕け散る壮観。

◇櫻井一江

走る児もブランコ乗る児も譲り合ふルールさながら公園の賑ひ

タワーマンション立ち並ぶ間にある児童公園のようだ。子供の歓声が響いて。

◇松中賀代

緑の葉繁れる中の国道を大型ダンプの轟音つづく

高知市と徳島市を結ぶ国道195号線。大型ダンプの轟音が絶えまなく続く。

◇大塚亮子

宮参りに姑に抱かれ眠る子の五十を過ぎてわが八十となる

富賀岡八幡に宮参りをした子も五十歳に。再び参拝し今あることに感謝する。

須藤紀子（すとうのりこ）　（埼玉県）

寒月と犬と

日食をこれが最後と言ひて見し母思ひ出づ今宵の月食
歳をとつても元気ですねとわが犬に幼き友が大人びて言ふ
家売りて移れる部屋より富士山が見ゆると友は言ひて清しき
書きさして手の止まりたるテーブルに薔薇一輪が音なく崩る
寒月の照らす草道さくさくと犬と娘が行きて戻り来
北の山南の山より梟の鳴き交はす声寒明け近し
降る雪を避けて椿の木の下に鶫は僅かな草を啄む
新雪に残る足跡いくすぢかアラヒグマ行き狸も行きたり
子を胸に荷物は肩に傘を手に若き母ゆくは戦士にも見ゆ
金星と木星が今宵近づきてまた離れゆく宇宙の出来事
平安に遠きこの春杉山の花粉は怒りの炎にも見ゆ
雛様にお茶を進ぜてまた一年お休みなさいと母のせしごと
新しき本を買ひきて新しき本の香りに暫し満たさる
木々たちが新しき衣纏ふゆゑ我も購ふ春の衣を
鳥は鳥の言葉を交はす三月に誰にも会はぬひと日暮れゆく

浮遊する紋白蝶と黄の蝶が一瞬触れあひまた離れゆく
大陸の砂漠の砂を巻き上げて国と海とを風は越えくる
桐の木の薄紫の花房を揺らして渡る晩春の風
まだ若き凌霄花の葉の群に纏はり揺らす風も幼き
新緑を切り裂くごとく風荒し命あるものは生きよとばかり
空き家より秘かなる声漏れ聞こゆ睦みて暮らす獣の家族か
烏峠はいづこなりしか少年の兄が目白を捕ると聞きしが
杉花粉積もる物干し拭きあげて今日より外干し解禁とする
箱根空木の慎ましやかな花の色葉に守られて梅雨空の下
草の葉に止まりては移る白蝶を老犬は目に追ひゐるしばし
クビキリギスの低周波に似る鳴き声の草叢に湧き夏は来たりぬ
母と見し薔薇園に今年叔母と来てもうゐない家族のことを話しぬ
彼方より激しき雨音迫り来て老犬励まし帰宅を急ぐ
急げども土砂降り雨に追ひつかれ天然シャワーの恵みを受けぬ
側溝を出て再び入りゆく丸き足跡月明かりの下

神社掃除終へて静まる境内に瀬音届きて草の香の満つ
出会ひたる瞬時に眼輝きて狸追はむと勇む老犬
雲の中雷同士語り合ふ穏やかな声を聞きつつ眠る
息吸ふも苦しき程の炎熱をランドセル負ひて子ら帰りくる
侵略も加害もあらずと言ひ募る声が汚水のごとく湧きをり
足場組む若者はパイプの上に立ちハンマー振るふ青空を背に
巣作りの鳥の如くも職人は軽々と材を運びては組む
薄紅の淡雪舞ふと見上ぐれば秋の気配に散る百日紅
下の田に白鷺居りて上の原に青鷺のをりそれぞれ一羽
彼岸花の盛り過ぎたる草の原我が傍らに犬も見てをり

一年間に作った歌を並べてみて、つくづく長閑な土地に暮していると思う。他所には災害や戦争さらには虐殺で、信じられない程の理不尽に曝されている人達が居る。そんな中で個人的な日常を詠う事に異和感を覚えることもある。それは単に自分の作る歌に納得できないせいなのかもしれないが。

今は亡き歌人の小中英之氏が「鎮魂のため、季節のため、」という言葉を残している。軽々しく実践できることではないが、深いところでこの言葉に励まされながら歌を作っていけたらと思う。

この道に真向かふ先の山裾にわが町はあり夕陽が眩し
日光に弱き肌持つ娘なれば月の明かりの優しきを言ふ
喜々として遊びし頃のあれこれを懐かしみつつ老犬に添ふ
無残にも命奪はれし人々の魂はいづこに行きて安らぐ
サフランの赤き雌蕊を摘みためてサフランライスを作る楽しみ
拾はれて猫は新たな飼ひ主の足にまつはりごろり転げる
勝ち負けを競ふ競技を嫌ふとぞ言ひし教師を今懐かしむ
護摩講に今年の人出多くして護摩木焚く火の勢ひ強し
九十を越して今年も正月に綿飴を売る的屋の大姉
林道の清掃に行くトラックに乗せてくれしは九十の媼
野鳥来て庭の蜜柑を食べ始む立春まであとひと月あまり
高すぎて我には届かぬ枝にある蜜柑はすべて野鳥の取り分
ヘルプマークかばんに付けたる青年に席を譲れば会釈返さる
近隣の飼ひ犬あらかた世を去りてわが犬の長寿を皆褒めくるる
病院の前のバス停雨の中凍えて並ぶ列に続きぬ
カーナビを頼りて知らぬ道行けば思ひもよらぬ夕富士を見る
星数多動かぬ中をゆつくりと点滅しつつ行く光あり
常識とふ言葉はすでに死語なるかマスク着けよとまた外せよと
我が家も実家の庭木も丈ひくく詰めて主の老いを知らしむ
詰められて花の乏しき山茱萸は幼き頃の吾子と植ゑにき
歯に残る苺の種を噛む時に母の畑の苺の香のす
啄木鳥が新居を作る音響き一所不住に心誘はる
蒲公英の群れ咲く中より飛び立ちて視界を過り黄の蝶は消ゆ
剪定の薔薇の枝先貰ひ受け挿し置けば芽吹く春の陽気に
狩り好きの犬老いたれば庭に出ずトカゲもヒミズも長閑に生きよ
ひとり居となりて久しき軽鴨か川の中州に眠る番は
戦争は殺し合ひなれど勝つために洪水までも起こすか人は
雷をいたく怖がりし犬なれど耳遠くなり眠り穏やか
この秋に後期高齢者となる夫庭木詰めをりひたすら低く
米作りもう止めたらと言ひたかり肺病む兄に米貰ひつつ
わが犬と同い年の犬この頃は外では会はず夜鳴く声す
歩けなくなりたる犬が乳母車に穏やかに乗りて散歩道ゆく
真夜中に水飲む犬に起こされて眠れぬままに開くツイッター
楢枯れが今全国で進むらし見渡す山に枯れ木目に立つ
面眉鳥の激しく啼きて飛び去りぬ台風七号は日々北上中
今日の運勢流し読みしてその後でラッキーアイテム珈琲を飲む
ニセアカシアの花の天ぷら甘きとふ聞きしは昔未だ食せず
長き時待ちて咲きにしミモザなり虫害により儚く枯れき
猿出没注意促す放送が街に流れる君のことだよ
今日もまた砂漠の水場にオリックス群れるを見ゐるライブカメラに
秋の日の早き日暮れに暗みたる足場降り来る終はりましたと
不用意に秋を迎へて戸惑ふ日虎の尾揺れて蜂誘ひをり
秋風に波立つ草野眺めゐるこの犬を連れ海に行きたし

髙橋説子（たかはしせつこ）　（栃木県）

ひとりでも笑ふよ

施設より返されし義母の遺品には吾が購ひし花柄パジャマ
姑の残ししパジャマわれが着る黒マジックの名前そのまま
庭いぢりだけをする日の始まりに戯れに塗る赤きマニキュア
赤き爪を軍手に隠し黙々と小枝伐りつつ常より楽し
晩秋に狂ひ咲きなる紫陽花の三つの毬よいいぞ頑張れ
気がつけばベンツとボルボに挟まれてこんなスピード気を引き締める
走りつつ好みて聴くはブラボーの掛け声入りのカンツォーネなり
姑のための手摺やスロープを夫が使ひ今われ待機す
真青なる空さへあれば木も人もけふは伸びると思ふいちにち
案の定先頭をゆくミニパトのあとに遅めの車列の長し
二十年前にも拾つて来たつけね飼ひ猫を孫と取り合ふ息子
旅できぬ十年を経ておもむろに帳尻合はせの旅が始まる
また一つ空き地に大き家建ちぬ二軒の陽当たり半分にして
既に番号付けられをりて横着か反抗かまだカード作らず
セーターに合はせて爪の色替へる七十越えの楽しみ得たり

タクシーをやめて地下鉄そして徒歩ひとりで来たぞ赤坂アクトシアター

道訊けば地図アプリ見て近くまで案内くるる若者いいね

観劇のいちにち五人に道訊ぬおのぼりさんは訊くのが一番

対向車のライトが光り減速す右折の吾に嬉しき合図

ライト一瞬「お先にどうぞ」の合図する心の余裕われも持ちたし

給油口にノズル挿し込み握る手にエネルギー感ずセルフ給油は

車椅子をトランクに積みひと走り最後の花見の夫は笑顔

某作家に「顔のパンツ」と称されたるマスクそろそろ脱ぐとき来たり

第一子の誕生よりも先だつたあなたの長き闘病の始まり

覚えきれぬほどのあなたの病歴のあとに私の大腸ポリープ

羞恥心を捨てて見てゐる大腸のポリープ三つユスラウメの如し

麦の穂のオリーブ色に出揃ひて今にも銀のバツタ跳ねさう

寄する波に似る音をたて麦の穂は風に大きく小さくうねる

タッチパネルを何度繰りても見当たらぬ玉子の値上げは回転寿司にも

あんなにも愛でし水仙抜きてゐる弱き半夏生の邪魔になるから

この家に共に暮らしし人達の位牌四つと暮らし直す日々

代はる代はる歩道にはみ出す向日葵にハイタッチして児ら登校す

ランドセル月曜セットにプールバッグ首から水筒雨なら傘も

登校班の列を乱して四、五人が猫一匹を囲む一時

猛暑日の信号待ちを縁石に座りて早も水筒開ける児

ひとりでも笑ふよ普通に声出して面白ければちやんと笑ふよ

敷地内の電柱二本は稼いでる僅かな場所代なれど吾を越ゆ

ステゴサウルスの緩きカーブの背のやうな山が見えれば吾が町近し

「もう充分明日曇つても」と孫と観る十五夜前夜の真ん丸の月

道端のヱノコロ草が誘つてる猫になつてよじやれてよと揺る

沢山あった趣味は加齢と共に淘汰され「刺繍」と「映画」が残った。（短歌は私にとっては通信教育であり趣味ではない。）近所に大型シネマズが出来て私は救われた。家を空けない主婦、の駆け込み寺だ。近隣の映画館も含め年間四十～六十作、この十八年で九九八作を観た。直に千作だ。息子には「佐野で一番観てるんじゃない？」娘には「刑務所もの好きだよね、ママ」と言われる。独りになって急速に「旅行」が「映画」に迫り、情熱では既に抜いている。

身代はりになりしかランドセル型の孫の御守り道にぺちやんこ
ドライブレコーダーの装備なきゆゑ気を抜かず青信号でも右ひだり見る
苦しげに呻くやうなる経つづき遺影の義弟の声思ひ出す
チェーンソーに揃へられたる生垣の山茶花の固き蕾落ちをり
長いこと無人の庭の整備され鶏頭ひとむら赤々と咲く
一年を通して咲くや強き黄の背高泡立草の晩秋
似た家の並びて主の出勤をエンジンかけて待つ車増ゆ
真正面に眩しき雪の富士山の見える陸橋を好みて走る
空模様を気にしつつ行く道に見る墓洗ふ人一年の暮れ
セルフレジに慣れ来てピッとスキャンする動きスムーズに見えてるだらうか
小吉の神籤だいじに持ち帰り盆栽の松の小枝に結ぶ
寒波去りクリーム色の日は満ちて水仙の葉は落ち葉持ち上ぐ
丸四年たちて漸く決壊の護岸工事に重機ぞくぞく
姑のオルゴール時計の「ヘイ・ジュード」いま顔洗ふわが上に鳴る
一つなら散歩途中に二つなら車に積みて出すゴミ袋
国産車より安いよと言ひたきを怺へて会話を遮らずをり
十年で擦り傷だらけのマイカーを宥め宥めてあと十年は
末孫の卒園近し後部座席のチャイルドシート外せる漸く
雨の日の役目は舅姑を乗せて職場に順に送りき
数か所の桜を観ては手を合はす特に念入りに惚け封じ観音
しやがめない膝の憎らし腰折りて伸ばす手に触る芍薬の新芽

夏野菜を刻みに刻みネバネバの「山形のだし」作りては食む
夜通しの雨が上がればそこここの水の溜まりに日差し飛び込む
いい加減覚えて欲しと朝あさに吠えくる犬を朝あさ睨む
大型の輸送トラックに挟まれて緊張走る魔の時間帯
朝五時の露天風呂にて青空の最初の青の欠片を見たり
十七年通ひ続ける映画館に一人にんまり千作近し
必需品らしき日傘を銘々に提げて電車に乗り来る女子高生
できるなら畑でボンボン燃やしたし物置一棟ガラクタの山
処分場に運んでくれる人も無し物置ふさぐ先祖の箪笥
「奥歯二本入れ歯になるの」と言ふ友に「私も」といふ言葉飲み込む
ミニ本の「百人一首」は子の部屋に栞そのまま埃被れり
血管を撫でられ探られ針五回刺されて始まる検査前点滴
半夏生の柔なる双葉を守らむと周りの水仙を球根ごと抜く
離れ住む子の世話受けしジャガイモか常は無人の庭に勢ふ
遥かなる知覧の土に育ちたる新茶味はふ旅の仕上げに
原始人並みの鈍さかわが身体ワクチン五回副作用無し
接種券届けばすぐさま予約せりワクチン六回目ためらひも無く
しやがみ込みをさなは庭の蟻の巣の入り口にカッパエビセンを置く
スマホ持たず出でたることに気が付けば途端に予定は頭から消ゆ
友ふたり泊まる予定のわが客間に風を通して同窓会を待つ
戦争がここにも来たかけたたましき「直ぐに避難せよ」との警報
あなたでなく吾が好きな花ガーベラを墓前に供へ散歩を続く
XLのボタンダウンシャツ捨てなくて良かつた庭に着て花いぢり
パラパラと餌を撒けば鉢の藻の割れて目高浮上す溶けずに生きて
音立てて雨戸開ければ夜通しの雨のにほひする風通り抜く
手が指が淋しくてまた取り出しぬ三年ぶりの針と刺繍糸
まだ吾に伸び代あるや指先が取り戻したる糸の感触
無難なる服にカラフル動物を刺繍せんと繰る恐竜図鑑
猛暑日の登校班に幾たりか日傘さす女児違和感の無く
遠廻りなれど途中から通学路はより安全な農道に入る
集団の中の孫の背追ひながらずつと後ろに散歩を続く
いつからか鶴にはなれぬ靴下を履くときに立つ一本足に
ポストから出してその場で「冬雷」の封を切ること少なくなりぬ

高橋燿子（たかはしようこ）☆　（埼玉県）

変わりゆく日々

山車目指し動く人波の流れのまま三年ぶりの川越祭り
山車総出に押し合いへしあう人人人市制百年今年の祭り
木犀のかすかに香る裏道を祭り衣装の人ら行きかう
人に酔い祭りに酔いて戻る道囃子の音が遠くなり行く
遅蒔きの野菜が育ちぬ小春日に腰さすりつつ蝶を目で追う
子に聞かす玉藻前の言い伝え「逃室」「夕狩」地名のいわれ
那須山の輪郭うすく見えている別れの夕は木の葉降る中
晴れ渡る元旦迎え手を合わす努力を誓い仰ぐ富士山
川沿いの道村社へと進みゆく行き交う誰かれ寿ぎかわして
セリ探す冬色の畔に蕾抱きナズナ地に這う明日は七草
免許証返納決意の夫が娘に譲る車を清めいる朝
「スポーツジムに自転車で通うこと」仕事にすると夫の目標
雪兎吾妻小富士に現れていぶかる声聞く一月半ば
故郷の親兄弟の有難し飯坂温泉に聞く福島訛り
吾妻山フルーツライン夫の生家四年越しに墓参終えたり

福豆にミニのお面が添えられてよい年掴めと孫よりエール
お多福と鬼の面付け豆を投げ笑いの止まらぬ無心のひと時
雛飾りて友等集えり「元気が一番」しくじり話にはじける笑い
作り手の心伝わる感触あり吊るし雛の仲間に買いたる緑の鶯
終電のホーム明るくケイタイを見入る人々二宮金次郎のごとし
慈しみの色ほんわかと幼子が掬い遊べる桜はなびら
枝のない幹にほっこり二つ三つ白く膨らむ木蓮うらら
モネの絵を思い出させる花の野に少女の帽子がひらひら跳ねる
吾が採り夫が運ぶ嘗ての暮らし改めてありがたし
玉葱を畑から家へ三往復今日はここまでペダルが重い
へとへとの身をマッサージ機にゆだねあれこれ思う先々のこと
残さずに植えたる苗の豊作に学ぶ事あり体力知力
母の日を祝いてくれる嫁娘みんな母だよ賑わい嬉し
子等の集い先々までも願いつつ終あることのふいに掠める
「早起きは三文の徳」と言いし母が不意に浮かぶ目覚め良き朝

一人掘る馬鈴薯畑に聞こえ来る園児の歌う七夕のうた
明けきらぬ朱色の空の広がりを立ち尽くし見ている橋の上から
静もれる都都古別神社の敷地百合の花があちこちに咲く
従妹同士の気安さあらわに鮎を齧る娘と姪は飲んで喋って
鮎三匹たいらげた孫に「うまかったかい」肩寄せる姪は婆の顔して
歳重ね陽明門を見る度に「新たな思い」と言いたる我が師
一升の米を背負いて修学旅行那須から日光は遠しその頃
眠り猫見て「めんごくね」と言いたる友の懐かし記憶次々
車内にて厳暑のニュース聞きながら日常戻る乗り換えの駅
東照宮の大杉木立苔に目を奪われながら歩む坂道

物忘れに「ギクッ」とする事たびたび。息子から時代は変わっていると言われて皇紀２６００年東京府浅草区浅草生まれなどと存在しない、知らない人がおおい。医学や環境整備のおかげで長命をさずかった。スマホを使うのも四苦八苦。それでも便利に使い孫に教わりながら短歌のメモに重宝している。これからも「冬雷」とのつながりをさがしていきたいと願っています。

好きなだけ持って行ってと言う友が手際よく落とす大き渋柿
皮をむき熱湯に浸して干すという挑戦しようか干し柿づくり
オレンジの月にかぐや姫の話をかわす四百四十二年ぶりの月食
あんぽ柿好む夫はベランダに「まだ渋いかなあ」と幼子のよう
三十個の柿が日を浴び十日ほど「うまい」と頬ばる福島生まれ
わが体調の整わざるまま遅蒔きの野菜が追いつく日和続きて
風もなく親族揃い卒塔婆焚く初冬の那須に精霊送り
凧を持つ父と糸引く子の声が川向うより弾け聞こゆる
筆頭に「隠居」あり死語をさがす言葉遊びに興じる集い
ベートーベンソナタ「告別」第3楽章由奈の演奏に努力に拍手
演奏を終えた由奈は感謝告ぐ「続けなさい」と支えた母に
ゆっくりと甘酒沸かす昼下がり日のさす居間に夫と犬と
運転歴六十年を区切りとし三河に向かう夫を見送る
老いという試練は犬にも迫りきて鈍る目や耳吾に向け来る
チョウザメは淡水魚と聞かされて鯉と泳ぐを見て居る土湯
友の編みたる一目一目の温もりに生き方学ぶベスト羽織りて
田畑より春を告げるかラッシュの車内に映える白いスニーカー
わが吊るし雛に加えたい思いあり手に取りている緑の鶯
梅が咲き木蓮桃と瞬く速さこの春忙し花咲じいさん
切実な悩み打ち明け整理がついたと友はさばさば花見の帰り
山桜の葉の赤優し仰ぎ見て「いいね」で通じる幼友達
師が矯める手指の様を思いつつ花を生ける久しき花展
たおやかに生けゆく様に憧れて教え乞いたる若きあの頃
舞うようにケイタイなぞる学生に孫を重ねて見ている車内
波立てて青野をうねり吹く風に見え隠れする花色様々
久々に子等が語れる家族の近況「きこえますか」と嫁は問いかく
保育士の嫁が孫の婚約を耳元ちかく知らせてくるる
これまでの経過を聞きつつほろ苦きビールがうまい祝杯上げる
藤が咲きつつじもきれいと墓参りかつての中学校を眼下にして
学校の坂がきついと十二歳吾の電動自転車をうらやむ
車無き暮らしいつしか慣れ来たる今思い知るこの収穫期
まだ残る白や紫の玉葱が夕日を返し畑に並ぶ
豊作を我がことのように喜喜として友は収穫手伝いくるる
七夕の飾りのように房になる木立ベゴニア好きな花なり
小豆煮る厨に夫が「今日は何？」義母の命日も遠くなり行く
「まめだね」と覗く夫に言い返す「生きてる間は嫁だからね」と
訪ね来て息子は記憶にないと香を焚くおはぎ食べつつ義母を語りぬ
空き車庫に間隔取りて置く鉢に花のさまざまのびやかに咲く
マラソンの練習に行く息子にくっついて野沢温泉へ突然の旅
吸い込まれ行く闇潜むごと目を凝らしおり長いトンネル
夏空に湯沢の街の広がりを何年振りかとまぶしく過ぎる
五時間後に落ち合う約束段取りの説明そこそこ息子は走り去る
オカトラノオエーデルワイスを初に見る上ノ平の自然植物園
ゴンドラや温泉入浴植物園会話弾めり帰途の車中は
身に染みて親子の絆の有難さ照れずに吾も夫と伝える
見慣れたる東北道を棚倉へ参拝に行く娘等と同行
蝉の声オニヤンマが掠め飛ぶ社は深き木立に凛と

是非見てと勧められたる「時の鐘」川越市とは姉妹都市なり
大杉の中に仰ぐ荘厳な陸奥一宮石都都古別神社
羊歯と苔が石灯籠を飾りおり「素敵な帽子」と娘はつぶやける
膝に手を置くと楽だよと娘に言われ長い階段目指す御廟
湯葉入りのそばを食べ終え娘の夫に今日一日の礼を言いたり

高藤朱美（たかふじあけみ）☆　（茨城県）

ルドベキア・ヒルタ

関わりたる「かもめ」の動画は息子から開通労いいいねを送る
来日し七十一年信徒等に身を捧げたる神父は逝きぬ
ふるさとの修道院で別れする婚約式の時のビファー神父と
五十本のバラは次女からの贈りもの生日の朝の空気晴れやか
涼風に秋明菊が揺れているすくすく伸びてピンク際立つ
子や孫が集い寄る日の法要は家族の出会いを叶えてくれる
男の孫の二度目の職場は外資系刺激をもらいて励むと語りぬ
月末にビザ更新で子は帰国ハーフマラソンを娘と完走す
待ちわびた県庁見学叶いたり展望室より水戸市眺むる
県庁が「白い巨塔」の舞台にてアメイジンググレイス忘れえぬ曲
教会に手話講座を立ち上げし亡夫の歩み確かなる日々
子らからの好みのプレゼントむらさきのストール羽織れば身の暖かし
コロナ禍で伸びたる婚礼写真撮る息子夫婦の望み叶いて
幼な児の正装姿決まりおりネクタイすれば小さな紳士
五時間の手術をしたる爺ちゃまにママは付き添い児は留守番す

「月九ドラマ」の撮影場所は母校よと女の孫語るを聞きて驚く
はやばやとこぶし木蓮花ざかり控えいる桜の出番待つ我
あさイチのかてぃんさんに湧く夜に「キラキラ星」の動画は娘より（角野隼斗）
結弦君を見たい願いのかないたり娘と観たるフィギュアスケート
久々の人ひと人のいる都会人に酔いて帰るグリーン車の窓
音も無く黄砂は国を包み込む防ぐ手立てのなきおそろしさ
朝夕に育ち見つめてわき芽かくトマトの「アイコ」我が子のような
汁物に冷凍トマトを足しおればだしに深みの増してほほえむ
京都にて「大礼服」を修復する従姉妹の姿の映像楽しむ
大阪に住み始めたる男の孫のブランコ動画に癒さるる我
ボストンの美術館を薦めればゴッホやモネの写メール孫より
五年経ち胃カメラ大腸ガン検査生き抜く為の辛さしみじみ
モンゴルの馬頭琴との出会いあり野太く優しく繊細に響く
幼少期米国育ちの女の孫に古里を案内し笠間を巡る
孫の投げたる硬貨が刺さるしめ縄に良縁願う出雲大社で

今に知る夫亡き後の交流はグリーフケアなるシスターの優しさ
一升餅べそかき引きずる男の孫にエール送りつつ動画見つめる
三日程寝込めば筋力失いて腰ふらつきぬ夏風邪のあと
男の孫のビニールプールの初動画憔悴する身の栄養剤なり
幾月も盆の休みを待つ我に子らの帰省を阻む台風
ひまわりに似たるルドベキア・ヒルタ飾り黄の華やぎに満たされている
男の孫がマンタを見つめる写メールをＡ４サイズで部屋に飾りぬ
「立ちました」ママの弾んだ声届く次は一歩と笑い合いたり
ライト浴び合唱するは敬老会冷や汗流るる初舞台なり
暦には真珠つけたる猫が居ておしゃれを忘れた吾を見つめる

若者がすばやく手に取る道の駅我も真似した青胡椒醤油
四ヶ月で首が座るのスマホ見る一歩一歩と孫は成長す
法要に参加叶わぬ子は米国ラインを繋げば寝言の響く
十二年留守と思いて過ごし来て見守りくれたる遺品整理す
七個程レモン色付き茶の友に二年続きの不作は淋し
少子化を防ぐ手だても男の孫に子育て支援は間に合わぬなり
ミサイルあり大雪のあり北の方から命脅かすもの降りてくる
「サイレント」手話で繋がるストーリー弱者に優しいドラマの多し
次々と家族感染の知らせあり手作り菓子を次女の家に送る
久々に逢えば「あなたは誰なの」と七ヶ月児は目線そらさず
表紙見てオクラの花も実も好きと真夏を思う年のはじめに
手をのばしドキンちゃんをつかもうとハイハイの一歩動画また見る
生存の奇跡を祈る大地震地殻の移動為すすべ無しか
娘や孫とライブに酔いてミラーリング「宝塚」観るは炬燵に入りて
荒草を集めて積みて月日かけ腐葉土作りに挑戦したし
陽をあびてふわりふわりと産毛舞う車検待ちつつ外見ておれば
球児たちメジャーリーグ予備軍なれば次は誰かとセンバツ楽しむ
恒例の旅が戻りて栃木路へ大谷石切場に古代を偲ぶ
真夜中に春雷響く長き刻地震もありて身の縮むなり
ナビあれど不安の勝る遠き道孫に逢いたくエンジンかける
さや豆に支柱立てつつ白き花の実りを待ちて追肥そばに置く
G7会議の様を見守りて緊張感じる三日間なる
日本一支える笠間の栗畑樹木より真白に湧く花眺む
供養という思い込めたる一万株二本松寺の紫陽花友と見る
鉢植えの黄葉が目立つはミニトマト原因何かと水かけをする
ジャム作りしたれば体調悪くなり冷風水と吾は慌てる
「思い出のグリーングラス」を口ずさむ死刑控えし人の歌とは
フロントガラスに張りついているカマキリを庭に放しぬ客のごとくに
熊の出る我が地に不安は無いけれど猿出現にすばやく戸を締める
夏祭りワッショイ山車引く子供らを何年振りかとはしゃぎ見守る
早朝の太陽の光強過ぎて停止する暇無しのクーラー
暑さ避け日の出る前に墓参り供えたる花みなうなだれむ
オクラ穫り朝食に添える納豆とひと味違うネバネバの感
そうめんを家族で食すドラマあり夕餉が決まる茄子天揚げて
刻々と変わるレーダー目にしつつ落ちつかなくもポトフを煮込む
大人気と知ればスジコと鮭にぎる塩分気になりイクラに替えて
開花待つ月下美人と満月のライン届きて我も月見る

高松美智子（たかまつみちこ）☆　（栃木県）

積み木

本読むもペンを握るも苦手とせる父の文字にて曽孫の名前
喉の奥に常にからめる痰ありて払いたき「我」のごとく棲みつく
からからと落ち葉を巻きいる風の道しばし足止めこの身に感じる
それぞれの体内時計に色づける三毳の山の楓の遅速
磨きたる大き窓より柿紅葉澄みたる空に艶やかに映ゆ
黄ばみたる居間の障子を貼り替えて姑は八度目の卯年迎える
来て嬉し帰りてまた良し三家族が揃いて賑わう正月の明け
昨日より少し肥えたる上弦の月が冴えくる藍深む空
六〇分の体操教室療法士はストップウオッチ手にメニューをすすむ
太腿の筋肉ひざ裏ふくらはぎ意識を向けてストレッチする
幼子が片付け忘れたる積み木ふたつ炬燵の中の足が見つける
折おりに突っかかりくる人のおりぼそりと呟ける「当たり場がねえ。」
文句でないクレームでないと言う人の訴えいつしか身の上話に
仏具店に線香選ぶもまた愉し梅にスズラン桜の香り
伽羅白檀好み様ざま仏には供物となりてわれにはアロマ

背中にも目のあるごとく気を配りてレジ打つ女性が店を切り盛る
ぼけ封じの成就院の本堂の左に座しいるおびんずる様
疎開先は静岡富山と言い合いて少女の記憶を語りあうふたり
潔く刈り込まれたる薔薇の枝の棘の先まで三月のひかり
真白きも薄桃色も柔らかく風に撫でられ雪柳揺れる
量のある芍薬の白がふくらみて甘き香りに蟻這い上る
若きにはひと時なれど老い人に一生ともいえるコロナの歳月
首が据わりて母に抱かれるみどり児は人の動きを目の端に追う
人見知りを覚えてみどり児声掛ける爺を見詰めて目線外さず
みどり児の目端の動き表情筋と会うたび頼もしシナプスの働き
青味ある薄きみどりで咲き初めて白へと移るアナベルの毬
ディズニーのヒロインみたいな名を持てる白き紫陽花はアメリカ生まれ
枝ぶりは不格好なれどそれなりとわが手に造る庭の楽しみ
宅配便のいつもの女性はてきぱき動きネイルの指に受領印を受く
園芸に短歌に刺繍と趣味を持つ友はひとりを愉しむ達人

疲れ気味に咲き継ぎているリップセージに羽音忙しく蜂が寄り来る
沸騰の時代来たると会見で事務総長は地球を憂う
処理水を汚染水と言い違えたる大臣の本音の透けたる発言
めまい頭痛心ざわつく人多し台風警報出されたる今日
常には閉めぬ雨戸を閉じて備えたり台風直撃と予報の夜を
仕事場のかたわらに置く竹定規は一年三組たかまつひろあき
四年ぶりの公開開催と校長はコロナの日々と青天を言う
君が代に国旗掲揚見上げれば真青な空に昼の半月
指先を胸まで振り上げ足踏みて一年生は入場を待つ
軽快に「天国と地獄」の曲流れて徒競走に声援が湧く

「短歌は正直だな」とつくづく感じている。仕事をしていることを言い訳に目の前のことにしっかりと向き合っていない自分、締め切り直前に慌てて上辺を整え推敲も怠ったまま歌を出している自分に嫌でも気づかされる。ある歌人の方が、その時々で移り変わっていく心の動きを捉えて言葉にしてその時々の「自画像」を描いていくようなものと短歌を語っていた記憶がある。一年の短歌を振り返る機会のあることに感謝しながら私自身の積み木の一片としたい。

夫を看取る友に頼まれオムツ替えのスキル教えるモデルとなりて
一株の黄の小菊がこんもりと秋の陽たっぷり浴びて明るし
淡紅の秋桜のなか大人びて揺れるチョコレート秋桜
迷いつつ信号無視をしたる夢を繰り返し見たる目覚め悪き朝
まだらなる記憶と意志ある遂行力の95歳にときどき惑う
デイサービスとショートステイに助けられ六十歳すぎても働ける幸
秋薔薇の深き紅色暮れなずむ周囲の景色に溶けこみて映ゆ
植木屋の手の入りたる友の庭木々のすみずみ冬陽が注ぐ
葉牡丹とビオラの紫を寄せ植えて夫を看取りたる友に届ける
霜柱に土盛り上がるパンジーの花壇に陽が差し土が潤う
レンジで二分暖められたるあずきのカイロ凝りたる首肩温めてほぐす
フラットなルービックキューブと向き合いて半刻無言の六歳の指
新しく仏壇を据えたと声掛けられて仏の前で亡き人を語る
「経営学」「哲学」「教育」「政治」「児童書」仏となりても蔵書に囲まる
戒名に「鳳」の一文字賜りたると語れる友の目に溢るるものあり
四十九日の修業も無事に済ませたろうと泣いて笑いて友はつぶやく
逝きし人の書棚に並ぶ『火の鳥』全巻ひとり身の頃より持ちいると聞く
人の業命継ぐこと生きる意味手塚治虫の『火の鳥』読み継ぐ
境界線を引くこと苦手と自覚がありてときおり心閉じやり過ごすことあり
五つ先の信号までもがすべて青背中を押されて西へと向かう
夫看取りて間のなき友との散歩道ふらりと覗く仏具のショップ
赤黄みどりと毛糸の帽子の地蔵様がそれぞれの表情に参道に立つ
紅葉マークの車より降りたる老ふたり杖を頼りてぼけ封じ観音に参る
眠りいる大藤の根方にドリル入れ液肥施さる春彼岸すぎ
地に植えて十年経ちたる紫雨花が今年初めて花芽を付けたり
長男二十歳アルバイトふたつを掛け持ちて母の日に贈り呉れたる紫雨花の鉢
年々にみどり茂れど花咲かぬ一本の株を見守りて来し
感染症の二類が五類に変わろうと高齢施設の対応変わらず
窓口に面会制限するわれも家族を思うと心が揺れる
友達はできたか給食は食べられいるか孫の入学半月が過ぎる
植木屋の手間を一日稼ごうと柘植に木犀皐月を刈り込む
老々介護にふたりの暮らし守りきたる九十二歳を施設に迎える
車椅子を介護する夫も要介護難しき病と闘いて七年が過ぐ
ローズマリーを嫌うと聞けばベランダに鳩対策の鉢を据え置く
お母さんお休みですかとラインくる息子は今日も休日出勤
早苗田の幼きみどりが逞しき若々しき緑へと育ちて七月
それぞれの事情心情を察しつつ今日三人の入居者迎える
住み慣れた自宅の片付けもそのままに施設入居の覚悟と不安
あなたが来ると空気が変わるね昼どきのホールに同僚は言う
背丈こす蓮の葉群をかき分けながら城沼めぐりの遊覧船すすむ

四日足らずを咲きてしぼみて花散らすと二日目の花か朝の陽に映ゆ
糖度は十度フルーツとなりたるトマトの赤黄オレンジが店先に並ぶ
八月を二日残して夏休みを終えたる児らの登校の列
持ち帰りたる朝顔の鉢もはや枯れて猛暑の夏の観察日記
茄子みょうがオクラを刻みて手間をかけ友に振る舞う山形のだし
パソコン作業に巻き肩となる人多し事務所のおおかた肩の凝り持つ
指の腹広くて深く反り返るわが母指を人は指圧指と言う
指先から癒しのオーラが出ているとおだてられるもまんざらでなし
釘を持つも包丁握るも不器用な指が褒めらるツボを探る時

橘（たちばな）　美千代（みちよ）　（新潟県）

二〇二三夏　水涸れて

朝顔の日よけカーテンに花咲けりかつて老夫婦住みゐし家の
いつの間にか秋は深まり満天星（どうだん）の心に沁みる真剣な赤
オトシブミの揺籃を見つけし林道は車入れず崩落ありて
鈴の音の山の森より響きくる下の道ゆくわれらのもとに
十二月一日に初雪ふりてまた冬がはじまる裏日本ここに
スタッフの退職の日の近づきて追ひつめられゆく応募無きまま
開院の頃よりこころひとつにて歩みきたるとは思ひ違ひか
コロナにて欠勤重なり退職者も育休中も動員でしのぐ
糸切れて散りたる幻影水晶（ファントムクォーツ）をさがしてたどる昨日の場所を
棚の間にここにゐるよと山型の模様浮かべて水晶の玉
一列のみ残る鳥居をくぐりゆく傘を片寄せすれ違ひつつ
雪原をぬけ行く稲荷奥の院ゆきと帰りと景色がかはる
「地球人どうし戦争するなんて」と『宇宙戦艦ヤマト』の作者は（松本零士）
ビートルズナンバー流れるラーメン店「ビコーズ」にのせて食べるつけ麺
風おこし貨物列車が駆け抜けるローカル線駅静止せるまま

砂浜に停まれるままの赤き車たちまち下りる夕闇に隠る
声あげて暗き空ゆく白鳥の群れあり北へと夜どほし翔ぶか
風の日に森を歩めば聞くものか「松に松の風樟に樟の風」
ひいやりと鼻腔を満たす夜の風オリーブの若葉と埃のにほひ
失ひたる十年を取り戻すため君と駆けゆかむこれから十年
「お母さん待つて」と言ひしオウム居ず遠足の子と来し遊園地に
ピアノ弾く指の動きに関節の痛みやはらぎエアピアノする（CM関節症）
六月は待合室の絵をかへる画家の形見は白き菖蒲（あやめ）に
刈り取られ復活したるネヂバナは群れ咲きあぐるシュプレヒコール
誰もゐぬ水曜午後の公園はわれだけの庭初蝉をきく
ふたたびを歩み始める君のためただあたたかき食事を作る
早朝覚醒つづきてだるき日々あけて雨音のなかまどろむ今朝は
眠剤に体は眠り脳は覚め本読みたけれど体にしたがふ
気がつけば夜更けに蝉の声しげく昼のごとしもこの夏異変
自転車小屋の灯りを昼と違へるか蝉の声しげし夜の校庭に

自販機を月夜の海と違へ目指し海にゆき着けずウミガメの子は
綱に引かれ走り横断しゆく犬信号無視せる主人とともに
加速するツクツクボフシの鳴き声に急きたてられて晩夏のま昼
ツクツクボフシ鳴きては止みぬふりむくは遠き日の「だるまさんがころんだ」
雨降らず稲田の土のひびわれて「グスコーブドリの伝記」を想う
一月半ぶりなる雨に木々濡れてたちくるにほひに朽ち木の混じる
露おきて息づくコニファーところどころ茶色くこの夏きびしかつたね
猛暑に雨の降らぬこの夏ダム湖の水消えてあらはるひび割るる土（内の倉ダム　八月）
融雪用「消雪パイプ」の地下水を田にめぐらせて稲守らむと
取水塔にて降る雨を見る水いまだ低きダム湖にふりそそぐ雨

南向き日を浴びてわが満天星の赤には真剣さが足らぬなり
十五年前にこの道を歩みきて見つけし巻き葉オトシブミの技
杖つきて鈴鳴らしつつ山を下りきたる人に会ふ鳥居の石段
ヤマモミヂの紅葉（こうえふ）沈む手水より浄めのみづを汲む朝の社に
昨日までの金色の日差し消え失せてひときは暗し霙ふる朝
冬タイヤ交換まに合はずシャーベット状の雪を避けつつそろそろ走る
人手不足にコロナワクチン五回目の個別接種できず患者らに詫ぶ
降りつづくこの雨のいつ雪になる十二月なかば心せく日日
家族内感染に濃厚接触者スタッフの欠勤重なりて詰む
いつの間に糸の切れゐて水晶の玉の消えたりわが手首より（幻影水晶）
糸切れてわれを去りたる水晶の玉のいくつかあきらめつかず
雪原のただ中の森まねきくる鳥居列なす稲荷奥の院
このたびの雪に大木倒れきて稲荷の鳥居の列を破壊せり
この空き地の隅にのこれる小さき墓一面の雪に見えなくなりぬ
一晩に五十センチ越え積もる雪かつては当たり前なりし光景
ここ十年ほどの暖冬つづきにて雪を忘れたか新潟県民
駐車場のゲート開きていちめんの雪の反射に眩惑されて
歯の折れたるひとあるといふを思ひつつあずきバーを食ぶ硬く甘きを
夜十時を過ぎて帰らぬ娘待つ青年とふたり出かけてゆきて
ときめきと陶酔の時過ぎてのち終りの不安に苦しみき恋は
ラーメン店の太き梁の間ただよへるビートルズナンバーいつも流れて
天気予報はづれて雪の降る平野ぬけて列車は北をめざせり
日本海み下ろす窓に腰かけて夕日を待つも雪雲厚く
急に気温上がりて急ぎ帰れるか夜更けに幾度も白鳥の声
雪溶けて今日見つかりぬ正月に失くしたる水晶の玉五つ
アクセス多き学会セミナーにログインできずわがパソコンの買ひ換へ決めぬ
気がつけば十年近くこのパソコンを使ひきたるかアナログなわれ
旧きMacより新しきMacへとデータ移りゆくクローンを生まむ
今日もわが車のまへにキジトラ猫飛び出して来て急ブレーキ踏む
吊り橋をわたりて見ゆる土砂を盛り修復されたる堤防と宿
被災後に再開したる温泉宿あの柴犬が尾をふり寄り来る
何年ぶりか実家のピアノに触れてみる黄ばみたる鍵盤調律もされず
十何年ぶりピアノを弾きて関節症の指の痛みのやはらぐ不思議
帰り来るもの無きゴールデンウィークの日々e-learningにてひたすら学ぶ
新緑の季すでに過ぎ山はだの木々の緑の力強さます
コロナワクチン六回目にて初めての発熱か夜更け悪寒にふるふ
甘き実をあまたつけむかヤマボフシひたすら白く尖りて咲くも
猫とわれ窓より見てをり争ひて飛び交ふ鵯コニファーに来るを
六月は薔薇さき盛り坂道の垣より垂るる花に手ふれぬ
わが娘生まれし六月白き薔薇を庭に咲かせきかつてのわが家
車庫からの通路に咲けるネヂバナを過ちて踏み詫びつつ起こす

雨あがり今年最初に咲く木槿ひかる露あまたおきて見ひらく
食べるとき小鼻ふくらみ笑む君の顔を思ひてシチューを仕込む
皮膚に痛み覚ゆるほどの熱気なり炎天に木槿もわれも灼かれて
白き木槿茶色に枯れてスモークツリーの穂しぼむ地球の熱に灼かれて（地球発熱）
ひさしぶりに「ごんぎつね」を読み泣きてしまひ泣ける自分になにか安堵す
父の墓義父母の墓とめぐりゆき炎天に枯れたる供花をとり替ふ
うすがもりの里の裏手に鳴き盛りぷつり鳴き止むツクツクボフシ
ほそき苗そだち青々と立ちゐたる七月の稲田いま水枯れて
たわわなる稲穂と見えて中は空に愕然とする水不足の夏
石段を百段のぼりゆきて見る古き社は閉ざされ無人
（五十公野豊田神社）
猛暑過ぎふたたび木槿咲きはじむ白きはだへはあれて乾くも
渓谷に満ちるダムの水標高百七十メートルの水渇れるとは
見わたせるダムの渓谷囲む崖は土剥き出しに水位の下がり
（内の倉ダム　十月初旬）
この夏に渇れたるダム湖いまだ水の少なく汀に下り立てさうな
西ノ峰焼峰山に二王子岳の水をあつめてダム湖にそそぐ

立石節子（たていしせつこ）☆　（東京都）

惜別

道端に乾いた音をこもらせて桜の落葉積もりに積もる
一月に子息逝きたる高齢の友よりの文涙に読めず
夫と長男続けて見送り終活もしたりと友の草木染め貰う
子兎の絵柄入りたるカレンダー友に送りて生きよと願う
裁判の判決待たず友は逝き空き家を彩る真っ赤な紅葉
主のあらぬ家に紅葉は赤々と夕陽に映えてひときわ目立ち
月蝕に天変地異を恐れたるいにしえ人の思いや如何に
八十過ぎ食事の上げ下げに疲れ果つ息子一家のコロナの感染
五十年牧師の妻をつとめ来て友は待降節に天に召されぬ
せわせわと歳押し詰まり諦めて大掃除せず年越し蕎麦とす
年毎に年賀欠礼多くなり身に迫りくる自然の摂理は
節料理息子の妻の味付けに舌喜びて忙しく動く
あらためて戦火の中の人想う感謝感謝の新年迎え
山茶花の花弁の先の黒ずみに快晴続きの空見上げたり
女子医大合格をして老いの身の論文を書く初夢見たり

雑踏のコリアンタウン歩きつつ平和を願い生命を想う
マスクせぬ春になること願いつつ冬の寒さを乗り切らんとす
泥田にも美しい花咲くと言い励みし友の無念さ想う
子ら集い雪集め来てかまくらを作らんとして日の暮るるまで
冬枯れの庭に紅梅咲き始む根元に水仙黄色く添えて
隙間より差し込みくるは薄明かり今日一日の命たしかむ
ガイドブック頼りに巡るプチ田舎春本番を探り歩かん
帰るべき故郷もたぬ身にとりて夫の生家はうれしかりけり
空爆の画面見ながら食事する我が性にして我にあらざり
遠き日に同じ時刻にオリオンを見詰めた願い今も変わらず
桜咲く森下文化センターで弟子の社中展あれば向かいぬ
西安の更に西から吹く風に運ばれ来たる黄色の砂か
一週間のうちに四人が亡くなりてわが身に沁みぬ心して生きむ
人生を楽しむべしと思えども義務を先にし先約を消す
五年前三渓園にて詠みし歌義姉の遺作は「明日香」最終号に

訴える義姉の不安を取り除く術を判らずただ笑顔のみ
zoom 止め対面となり耳遠し調整中の補聴器つけて
中国の残留孤児の話には我もあわやと思い当たりぬ
学校で育てたトマト持ち帰り夕餉の時にふるまう孫は
この夏は永遠の別れの多かりき共に若き日過ごしし仲間
車内には「自分を向いて歩こう。」と広告ありて来し方思う
市の健診正常なれど体重は徐々に減りつつ体調は良し
この夏の暑さ耐え抜き黄ばみたる葉を切り落とす非情なる手が
宗教の争いなるか為政者の欲望なるか民は疎か
逝くまいぞ孫の成人見届けむあと七年の健康体操

中学時代からの友人に誘われ、八十歳の時に入会しました。義姉が「明日香」会員でしたので、入会したい旨を伝えましたら、廃刊になるとの事でした。丁度その時に誘われ「冬雷」に入会しました。うれしくて入会を即答したものの、感・勘共に鈍くなり、続けられるのか大変不安でした。毎月、四苦八苦しながら、大山先生の〝感想〟を頼りに続いています。五十年選手の方から新入会員の方までの作品にも啓発を受けながら、亀の歩みを進めています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

節分の豆の用意は少なくて意気のあがらず声も小さく
雪予報に孫ら喜び登校す心静かに庭を眺めん
人災と天災の差は何処にある自然破壊の尽きるを知らず
早朝に雨戸開けるも寒風は裏に荒れつつ吹き込まずあり
コンサート昭和生まれの友と聴き昭和の歌を懐かしみつつ
聴き足らぬ思い残してコンサート終るとも立てずお茶の時間に
ふと意識失いしとふ友の言胸騒ぎして心痛みぬ
コロナ禍が少し静まりパーマかけ三年ぶりに髪豊かなり
冬越して芭蕉も見たるこの黄砂ゴビ砂漠から運ばれて降る
友倒れ脳検査受け結果待ち中学からの交わり深し
詩吟の師ひっつめ髪にマスクして地味な和服に身を包み居り
最近は息子の白髪増え始め健康診断の数値気になる
わが息子帰宅時刻が遅くなり勤務先での苦労多きか
旧盆に夫の兄弟集りてそのにぎやかな談笑のとき
線状降水帯かかりて流されし爪跡は草生す縄文遺跡のあたり
ひと回り上の辰年の義姉逝きて残したる短歌暑き日に読む
義姉逝きて遺影の横に短歌誌あり若き頃より「明日香」の会員
生前に送られ来たる「明日香」には義姉の詠みし歌三首のありき
歌詠みて食事をしつつ心から寛いでいる我は幸せ
孫たちとその母親と待ち合わせ同じ屋根の下に住まうも
韓国の書道会との食事会言葉通じず心通わす
若き時リンドウ好みし母思い買い来たる花夕べ活けたり
静かなる真夜中のみを歌つくり雑踏に居ても詠みたく思う
怖れつつ市の健診を受けたるが異常なしという怪しき気分
久し振り他教会から集いたり元気でまたねと帰途につきたり
願わくは氷らむとする湖見たし高校よりの思い果たさん

田中祐子（たなかゆうこ）☆　（埼玉県）

八十路

この朝は裸眼にハガキを書いており老いてわが眼に奇跡が起きる
左眼は生まれついての弱視にて頼みの右眼を五十代に病む
数回のレーザー治療と懇切なる医師の手当に回復の頃
期待せず飲み継ぎ来たるこのサプリ友の勧めに十年あまり
路線バスの届かぬ地域と驚きぬ市役所を囲む中央三丁目
先人達の予測は逸るるか都心寄りに駅は開通二〇〇五年八月
独り居の我に世間は優しかり確と生きねば申しわけ無い
ふんわりと身を包み呉るるカシミヤのセーター老いの気後れ糺す
問診に気後れは無く答えたり医師の柔らぐ視線を受ける
処方箋を片手に仰ぐビルの窓に光差し来て雨あがるらし
春の陽がガラス戸越しの縁側を鈍くひからす艶拭きのあと
いつ来てもお部屋がきれいと嫁達は明治の母の躾に惑う
明日あたり来るや否やと巡らせて里いもと烏賊の合わせ煮作る
オクサンは仕事と言いてひょっこりと来たる長男に不足はあらず
薄桃の五弁の花のひそやかにクリスマスローズ咲く傘寿の朝に

こと細かき管理の栞は嬉しかりわが生日を胡蝶蘭祝い来
ほんとうに真綿色にて玄関の板間を占める蘭の気高き
五つほどの蘭の茎を数えたる少年これらも咲かせてと笑む
ジャズバンドの古きＣＤ出で来たり鈴木章治の鈴懸の径
ＣＤをひがなかけたる雨の日はひとりに余るカレーを作る
懐かしさの極むる今朝はそそくさと乗り継ぎ来たる姉の菩提寺
気付かずに蘭の茎はみなひらき古家の玄関華やぎに満つ
夜の間は風呂敷などを蘭の花に掛け置くが良いと美容室のあるじ
忘れるが頓に増したる日々なれど幼き頃の記憶は鮮明
小六になりたる遙かな教室に担任父の教え子と告げき
鐘撞きの櫓を描きに峰寺へ父がたびたび登り来しと和尚さん
ひとさまの語りに父を知り育ち若く逝きたるその身を悼む
裸眼にて上手に針と糸を成しほんの縢りをできたと喜ぶ
真夏めく夕暮れの部屋へ蚊が入り一匹なれど穏やかならず
渦巻きの蚊取り線香僅か在りこの香が好きと昔を想う

小中の息子ふたりに怒られき蚊取り線香を切らしたる夏
地区内は店一軒に頼り居て売り切れ等は珍しくも無き
農村の呼び名の似合うわがまちの目まぐるしきよ半世紀過ぐ
初めてのははの日なりき鉢植えの薄桃に咲くあじさい賜わる
夫の手に庭へ植え替えて幾年か土壌等しと嫁が喜ぶ
氷川さまの四年振りなる夏祭りの氏子総出にどきんとしたる
獅子舞を担う若手の継承に年寄達の苦労知りたる
臥しがちの夫君の世話のいっときにあなたのハガキは嬉しいと友
ひらがなに埋もるる母の長き文を繰り返し読みき嫁ぎて浅き日
ほんの少し自信を持ちて籠らずに姿勢正して八十歳を行く

道幅の狭き土手道並び来たる老女ふたりと歩を譲り合う
新しき家が次つぎ建ち並び越し来たる人のそれぞれを知らず
少年とその姉の動画に緩みたりスマホの操作に近頃慣れる
丁寧にスマホを説くは長男か次男はささっと要約し説く
パンジーの株植え済みて午後二時の遍く日差しにふわっと眩む
ＮＴＴのクレーン車来りて庭を占め劣化の電話線を直し呉れたり
宅配のチャイムに庭を駆けんとす　あ、走らないでと配達のひと
何故となく袖を通さず仕舞い置くセーターこの冬鏡に映す
寒風に頬あからめてネモフィラの数多の苗を持ち呉るる農婦
この寒さ根付くを願いネモフィラを肥料多めに花壇に植える
十日経ちて霜を被るも強靭に花壇に根付くこのネモフィラは
無くしたと諦めていたプレゼントの手袋コートのポケットに潜む
路線バスの車内事故後か張り詰める運転手さんの注意の連呼
雨の日のバスの車内は滑りやすくこの時間帯は老い人多し
コロナ禍のマスクに頬を守られて寒風のなか帰路のバス待つ
週末はドバイへ渡ると事も無く帰国日問わず笑顔をつくる
少しだけ肝が大きくなりたるか不安払いてひたすら生きる
暖かき日差しに庭へ遊び出で黄のパンジーにほっこりとする
濯ぎものを干し終え覗く庭隅のクリスマスローズ今年も咲き呉る
小一の登校の子とその父の朝のゴミ出しは角まで一緒
甥なのか昨夜の雨か墓石は春の陽差しに清しくひかる
年齢を受け止められずブラウスを選びて鏡に問いかけて居り
父と子のキャッチボールの球が飛び少年拾いてぴょこんと辞儀す
梅の実がこんなに取れたと刈込みの途中長閑にシルバー庭師さん
梅の実は差し上げますとわが言うを刈込みの音に消され届かず
若き日の勤務先なる図書室に家康全集揃えて在りき（山岡荘八）
貸出しの規則を守りアパートのテレビ無き部屋に家康を読みき
夜更けても読み継ぐわれに兄の目が大きくひかりスタンド消さ
れき
早朝の花壇の水撒き楽しかりコスモスきれいに群れて育ち来
小康の義妹の電話は嬉しかり声和らぎてちちはは語る
岩道をおっかないねと義妹言いて筑波山頂に夫も若かりき
棚経の法衣の裾を白足袋に纏めて坐する若き住職
少年の頃より見知る住職の棚経のさわり先代に似て
バス停に髪長きひとの立ち居りて近付くわれに会釈下さる
手入れ良き髪に女性と思いたるも幅広き靴に男性と知る
定刻を僅か遅れてバスが来て男性手振りに「お先にどうぞ」
わがハガキを喜び呉るる友の居て老々介護の慰みと知る
母われに忘れることも必要とポツリ呟く五十八歳
駅前の広場は個性の溢れ出で老いも若きも自由に闊歩
背表紙の題名順に目で追いてやはり無いわと駅前の書店
時代ものはほんの一角に仕切られてコミック本の列なす書店
ネットでも購入は可と子は言いて期待はせずに題名を告ぐ
湯あがりの髪を乾かすひとときをドンと響けり河川敷花火
北へ向く窓いっぱいの鮮やかなる花火を見ませと亡きひとを呼ぶ

谷田律子（たにだりつこ）☆　（栃木県）

ソプラノ

七草を摘みて飾れるサザエ籠ススキの穂先にツワブキ添えて
週一度友と連れだちウォーキング霜月の風に枯葉散る道
八十路でも身づくろいしてスニーカー日焼け気づかい坂道あるく
サンローランコートのタグを確認し愛着ありて断捨離出来ず
冷え込んだ夜猫の小屋気になりて暖房機入れホッと一息
豊作のダイコンの山眺めつつ後の料理をあれこれ悩む
万歩計風邪で使わずポケットにしまったままに洗濯機の中
買物は三毳の山の販売所強風の中散歩は中止
山積みの洗濯物をたたみつつ外の仕事の寒さを思う
凍らぬか小鳥のためのあまり飯小枝に下げたザル確認す
目白たちもみじの枝に十数羽下げたるザルの飯をついばむ
この痛み起きれば治る仕事痛天地返しの二月の土起し
塀越しに隣り家に咲く梅の花我が家の梅と比べうらやむ
夫婦して植えた記念樹南高梅今は一人で花を楽しむ
遅咲きの梅の花びら一面に畑の空地華やかに舞う

いろは坂雪の残れるしめる道友の運転にベルトをにぎる
期待せず来たるワールドスクエア思いの外に見応えのあり
休憩の金谷ホテルのディナーの洋菓子満腹感で夕食は抜き
遅咲きのわが庭の桜雨降りに満開めざして一気にひらく
この時期の戦い始めの草取りは一日たりとも休むを許さず
東京女子医大の甲状腺ガン治療経過観察のみで良しとなる
精一杯きもののオシャレ楽しんで東京行きの急行に乗る
いつもなら空いてる急行飛び乗れば空席のなく連休と知る
涙って涸れる事あるのと聞く友の悲しみの過去聞かずとも知る
言いすぎた言葉をかえしてほしいよと思いつつ心で深々と詫ぶ
歯をくいしばる昼寝の自分に気がついて畑の仕事午後はお休み
母猫が子猫をなめて外出す日向ぼっこの子猫は昼寝
燕のフン玄関先を汚す日々掃除しながら巣立つ日を待つ
取り取りの色に咲きいるグラジオラス春は悲しい別れの季節
毎日が平凡すぎる昼下がりこれでいいのか猛暑の夏に

どしゃ降りに気づきて梅の土用干しいそいで仕舞い味見してみる
食欲あれどふとりたくない手術前主治医の言葉「やせなくても良し」
甲状腺手術の前に病室で『サラダ記念日』読みながら待つ
見上げつつ私の病の癒えるを祈る酷暑の夜の魚座の満月
病室のベッドに一人休みいて我が手の甲のシワを眺める
声を出す器官の近くを切開すソプラノの声いつ戻るやら
補聴器ナシ裸眼で週刊誌読む母を息子は家の宝と言いぬ
美容室にてパーマをかける九十七歳あやかりたいと人は握手す
さがし物メガネと携帯返事ナシいつもの事なり視野に入らず
三人の女子会の日は遅くまでつきぬ話と茶菓子の山と

軽トラの後部を見て笑っている二人の女性がいました。私も駐車場に車を停めて見に行きました。シルバーマークと初心者マークが二つついていました矛盾していておもしろいと思いましたが祖父と孫が共有で使っている車なのでしょうか。ブレーキの踏み間違いなどを思い出し、車なしでは生活が不便になってしまう環境を思うと安全に安全にと心掛けたいとつくづく思いました。

泥濘の道の草取り墓参り庭に咲きたる菊の花持ちて
なにげない物音にすら脅える夜独り暮らしの寒々しさに
一万歩あるき疲れてコンビニでボトルのお茶買い喉を潤す
ヒヨドリやジョウビタキの好む餌赤い実生る枝残して剪定す
断捨離をするキッチンのゴミの山気づかぬうちに溜め込んだ日々
カーテンを取り替えて床磨きして断捨離をしたり良き事あれと
外猫に餌をやりつつ番をするカラスの襲撃より守るため
三本のシャープペン机の上にあり使う事なくころがしたまま
五キロほどやせたる孫の顔のぞく食欲あるか元気あるかと
戴いたサプリメントを飲むたびに友の心のやさしさ思う
友の庭の古木の梅の花一輪咲きて今年の春を見ており
まだ咲かぬ梅に期待す今年こそ梅ぼし作る南高梅の
凍りつく竜頭ノ滝の水の音氷の下を勢い良く流る
宇都宮豆腐料理の店仕舞に駐車場満車のにぎわい
夜は鍋朝は弁当ナットウ卵息子と同居の張りのある日々
キッチンの窓から見える大椿満開の花が地に落ちており
初夏近し暫くぶりの友と会うあしかがフラワーパークで時を忘れて
あしかがフラワーパークの民族衣装の団体客咲きかけの藤よりも華やか
早朝に小窓を開けて見る天気雑草対策に膝腰痛む
大雨に倒れてしまった麦なでしこ添え木をあてて見事に満開
クレマチス五種類の花咲きほこりからみ合う蔓の始末にこまる
桜葉の繁る木陰で草むしり頭上の枝で小鳥さえずる
ズッキーニ昨年食べたおいしさを忘れられずに五株も種まく
種から見事に育ったズッキーニ梅雨の時期には雨傘かぶせる
草むしり土の中より虫出でて枝の先からスズメが騒ぐ
日の当たる夏日の庭で草むしり日焼けの肌のシミ気にしつつ
コンサートで偶然会った旧友と後日ゆっくり会う約束す
暑くてもやらねばならない草むしりセミの声きき日蔭に入る
仕合せな気分で描くデザイン画のれんに仕立てて店先に掛ける
いつもながら天才画伯と友は言うのれんは遠くで見てねと私
早くから全国大会楽しみでたまの東京遠足気分
おかえりと声がけすればただいまの返事がかえり気分良し
満月の明かりに気づき窓を開く矢筈のススキ乱れ咲きおり
ナビつけて太田に向かう一時間慣れぬ道のり不安とあせり
講演会いねむりしそうでハッとしてしっかりメモ取り眠気をさます

田端五百子（たばたいおこ）（岩手県）

余生の日々 II

鋭角に区切らるる間合ひの中天に十三夜の月皓々と輝る
塩を吹く婿の帽子を手洗ひす力仕事を頑張りくれき
幻に顕ち来る古地図あの角の駄菓子屋に若い私佇む
若き杜氏注ぎくれたる今年酒切子グラスに渦巻き光る
神棚に止まる秋蚊を「あれあれ」と小声で幼指さして言ふ
柿のれん軒ゆがむほど干され居て伯母は小さく縁に居眠る
雪の来る気配す空を見上げつつテイクアウトの鯛焼き受け取る
新雪に珊瑚の色に万年青の実枯れたる庭を彩りて映ゆ
三陸の正月魚「どんこ汁」円卓囲み家族温もる
「このくぼ地に福寿草は春待つよ」寒風よ少し温まつてゆけ
「日本の誇れるスイーツ」石焼きいも公園のベンチに孫と分け合ふ
星屑が雫の一滴こぼしたか星空仰ぎ目薬を差す
角曲がりたわわな柿が目印と枯葉掃く僧教へくれたり
とくとくと切子グラスに御神酒（おみき）つぎ家族団らん回し飲みする
嘘して読経の一節飛ばしたる僧は素知らぬやうに声張る

確保する電車の席で舟を漕ぐ妹に停泊の背を貸す我は
日本の景観カレンダー厨に吊る「つもり旅」十二回楽しむつもり
荷を解けば故郷の菜虫まろび出で日脚のびたる縁をさまよふ
向ひ家の二階の窓に映り居るマーマレードのやうな夕焼け
蒼穹へ白鳥首をそらし鳴く帰還叶はぬ故郷恋ふか
いぬのふぐり空はこれからこんな色飛行機雲の長く尾を引く
ねこやなぎ銀の毛布で雪解水はじきて光る土手は春色
先客の数羽のハトが居る公園寒さ和らぎ春色濃くなる
銀鱗を光らせコンベヤーに寝かさるるサクラマスの水揚げ浜活気づく
途中下車降り立つリアスの海の風高き防潮堤を男浪が洗ふ
運動会の呼びもの生徒らの「鹿をどり」太鼓打ちつつ泥はね踊る
白日傘回してスキップする人の若くはあらぬふくよかな足
角折らるる種袋手箱に残り居て母の回忌の法要過ごす
梵鐘の聞こゆる夕べ父と子の前になり後ろになりて仔犬付きゆく
花ざくろ咲き満つる枝に「売家」とふ木札つるされ風に揺れゐる

ばら嗅ぎに寄りゆき防犯灯に感知さる素知らぬふりして踵を返す
土手に咲く花に蜻蛉の止まるさま写さんとして水路にはまる
遅れたる友ドクダミの匂ひせり草の命が議場に満ちぬ
かなかなの一声残しそれつきり窓越しの園児ら深く眠れる
夕映えの光る川面と並走し盆を帰省す車の一群
左より右の腕ひときは日焼け濃し日傘分け合ひ友と浜ゆき
子ら巣立ち独りに広き縁に座し中天に澄む満月仰ぐ
配達の人は滴る汗ぬぐひ「ここにハンコ」と網戸越し言ふ
つばくろに玄関とられ勝手口頭を低くしてひと月余り
下校の児舗道の空き缶蹴り上げて諳んじゐたる九九の段忘る

草の名をアプリに聞いて楽しみぬ夫と歩みし裏道歩く
白寿なる人と新酒を猪口一杯味はふ今宵十三夜の月
犬のふぐり・へくそ葛・盗人萩だれが名づけしか愛らしき花に
コロナウイルス感染したるあなた「1」と数へられこの広報に載るか
土器出でて遺跡指定を受けし丘を街は発展より取り残したり
図書館の戻りの坂道秋の陽に輝く黄葉菜に拾ふ
川の州に拾ひし小石に彩色す眠りの猫が入選果たす
初秋の日差しを受けて紫立つ岩手片富士どつしり鎮座す
骨董市の掛け合ひ聴きて門を出る夕べの空に鰯雲みつ
楢木くべつつ「俺の十八番」とひばり節調子外して家主は謳ふ
軍刀を立てたる遺影ある部屋に伯母は終日籠り居たりき
千歳あめ引き摺りながらも口答へする児を励まし階くだる
棟梁は足袋の鞐(こはぜ)をかけ直し秋天に組む足場をのぼる
見晴るかす山々の樹々年輪を引き締めてゐむ外は吹雪ぞ
咳き込みて止まらぬ一夜海老のごと伏せて一番鳥の声聞く
夕映えをおびただしき鴉が鳴き騒ぐ姉焼く煙細く靡けり
一夜だけと預かる孫が母を恋ひハモニカのごと泣きじやくりみる
羊羹の大きさ競ふ兄妹(あにいもと)じやんけんぽんと妹Vサイン
ボクシングに孫の開けたる壁の穴日本の景観暦で覆ふ
赤いじよじよ片方だけが倉にあり十二年目の小春日に出す
震災より干支一巡したる今日晴れやかな姿に希望重ねる
荒れ果てた空き家の庭に境界線訴へるやう水仙が咲く
山門の近くの陽だまり春息吹く蕗の薹七つスマホに写す

「肉球も火傷するよな世の中」と散歩乞ふ犬風呂場へ連れ込む
「庶民のサンマ食してみたい」病床の昭和天皇願はれし伝説
波洗ふ生家のひき臼貰ひ受け干支一巡し苔むし鎮座す
四年ぶり天に花火は打ち揚がり喧騒の中「平時」かみしむ
自転車にアイスキャンデー行商せし伯父の話を懐かしみ聴く
法面に山百合の大輪咲き誇り二メートルの高きに二十一輪の花
「ハイカラな匂ひ」と友は呟きつつ花魁花に顔を寄せゆく
「コケッコー」鶏の声アパートの屋上より降りくる散歩コースに
たぎる湯に早採り和布くぐらせる緑と汐の香厨に満ちたり
震災後十二年経てサンゴ付くコンテナが沖縄に漂着したり
「黒い札束」仲買人ら揶揄したり故郷の海苔ぞ父母顕ち来る
三歳の誕生日に父贈りくれし二尺五寸の市松人形
「まだ母さん借りておくよ」と二十三回忌の数珠を揉みつつ婿の呟く
倒産の噂ながれる旧家の庭二つの蔵に桜吹雪舞ふ
満開の桜の下に筵敷き三人の孫置きスマホ構える
草の芽の延びる畦みち赤のバイク見え隠れして坂登りゆく
咲き満つる桜めざせば膝わらふ百の石段息切り登りて
竹藪に鳥のさへづり朝まだき三三五五の柔道着の生徒
いづくともしれぬ鶯鳴きつぎて巡りの樹々の緑濃くなる
「夜な夜なの蛙の合唱やめさせて」新興住宅よりクレームのあり
窓越しの春の日差しに舟を漕ぐ人らを乗せてバスは迂回す
校庭にブラスバンドの響きをり時々鶯の声も聞こえて
紙魚のある系図たどれば「女」とのみ記されてをりその後は知らず
橋上に浅瀬を覗く川上を目指して雑魚は命をつなぐ
銀輪に行く生徒らのブラウスが六月の風を大きくはらむ
しやがみ込み茂みを探すをみな居り四葉のクローバー知人に贈ると
草に名を問ひつつ庭に草むしる「雑草とふ名はない」陛下のお言葉
このフロア億の商品陳列すとふ迷路の如き売り場を巡る

塚本節子（つかもとせつこ）☆　（茨城県）

夫婦案山子

またひとつ馴染みのスーパー閉店す「四十六年間有難う」のチラシ入りて
自らの花の重みに耐えかねて黒蝶ダリア斜に咲きおりぬ
湯ノ湖畔つり船十艘あさ霧をまといて静かに釣人をまつ
湯ノ湖畔のつり船風にゆれながら停まれる岸をかすかに離る
朱の椀の熱きみそ汁手に包みのどに沁み入る晩秋のあさ
鵯は南天の実を啄みて枝揺らしおりブランコ漕ぐように
ロンドンから帰省の息子二年振り熱き日本茶三杯飲み干す
南天とピラカンサの実を食べにくる鵯一羽仲間は居らず
正月十日ピラカンサの実忽ちに「鵙」三十羽来て食べ尽くしたり
戦争に子どものこころの壊れゆく戦場だけが戦にあらずと
夫に添い病院受診の電車待つホームの先の山笑う朝
グリーン車の乗り心地良し三月振りゆっくり揺れる旅のこころに
大津波に娘をさらわれし人の言う「骨でも良いから抱きしめたい」と
朝からの冷たい雨を眺めつつ動画のなかの花びら偲ぶ
壊されたるなじみのスーパー更地にて春の嵐の渦巻きており

言いたきを胸にしまいて仰ぐ空おぼろの月の吾を包めり
ヒバの木を抱きしめ巻いて山藤の紫の房風に揺れおり
選挙カーのうぐいす嬢の声かすれ手を振る先に若葉風吹く
繋がるる電柱直立不動にて田の面に映る春の夕ぐれ
田の畦に白鷺一羽佇めりおまえの仲間は何処に居るや
さくらんぼのナポレオンの枝手折りたる葉かげに赤き実数多輝く
天豆の若き実すべて空を向き熟れたる莢の頭垂れおり
畑中の夫婦案山子の衣替え今日はマスクに麦わら帽子
薄紫の下向きに咲く茄子の花ひとつ付きたる苗を植えおり
日の暮れて光集めたるあじさいのアナベル白く夕闇照らす
ゲリラ豪雨に稲水没す四日間呼吸はしてるか苦しくないか
五日後に田の水引きて立つ稲の青々として胸なでおろす
出入りする燕の為とシャッターに穴をあけたりスタンドの主は
夫植えたる桔梗の花の一重と八重藍色ふかく風にそよげり
風船のような桔梗のつぼみなり開けば青き星型となる

茄子きゅうり日照りの日々に実の縮み日除けの筵も乾びておりぬ
ガソリンも気温もじりじり上がる夏アラームのごとき点滅赤く
庭隅のシャガの葉裏をしっかりとべっこう色の空蝉が抱く
夜明けよりひねもす激し樫の木の茂みより降るクマゼミの声
軽トラの荷台に溜まる水たまりにクルクル遊ぶ蜜蜂のおり
エアコンの室外機より流れいる水を求めて来る雀おり
朝の光に松葉牡丹はゆっくりと花びら開き夜を待たず萎む
曼珠沙華群れ咲くあたり一面の焔となりてわれを誘う
亡き友の教えてくれし旨き豆腐「男前」が一番なりと
「男前」の豆腐みるたび思い出す手料理上手な友の食卓

糸賀さんに冬雷にお誘い頂き早三年の月日が流れました。皆様とのご縁に感謝の日々です。作歌は毎月の〆切に追われる状態ですが、詠んだ歌についての小林先生の赤ペンのお言葉が毎月楽しみで、とても励みになっております。入会当初「誰かの心に残る素敵な歌を詠みたい…。」等と」思っておりましたが、最近は日常の些細な事を日記をつける感じで詠む事が多いです。まだまだ未熟な私ですが皆様のご指導の下精進を重ね今後も生きていく日常の延長線を自然体で詠み続けて参りたいと考えております。

ミニトマトの「アイコ」の苗木二本植え十月下旬に五十個採りぬ
湯むきしたトマトの「アイコ」に塩胡椒オリーブオイルからめて旨し
さつま芋の試し掘りする紅あずま太ぶとゴロゴロ歓声上げる
空心菜の伸びたる先のそれぞれにあさがおに似たる白き花咲く
氏神の祀らるる石の傍らに琥珀色した空蝉見つける
留守電に一年振りの友からの「電話を待つ」との低き声あり
留守電を聴きて電話すひとり居の友の声聴く一年振りの
「主治医より乳癌ありと告知され相談したく」と友の語りぬ
EV車にてライトアップさるる中禅寺「千手観音菩薩」に願う
卒寿近き叔父の守り来し梨畑にソーラーパネルの波来たりけり
亡き叔父の植えてくれたる「きよみ」の木十五年経て二十個実る
我が班を纏めくれたる人の逝く知らせのありて言葉を失う
長寿会初詣の旅は三年振り参加二十一名笑顔にあふる
鎮座して二千六百有余年香取神宮の参道長し
参りたる香取神宮の帰り道長き参道に背筋伸びたり
江戸末期日本全国測量し地図作りし伊能忠敬の記念館訪う
測量の旅五十歳より十六年全図の仕上りは没後三年なりと
スーパーのバーゲン情報スマホのメモに記して忘れたる二つあり
一日かけ煮込みたるカレー届け行く夫亡き友の夕餉に添えんと
帰り道カレーの温もり掌に残り宵の明星と火星煌めく
防犯にと息子より届く犬小屋に陶器の柴犬一頭置きぬ
朝あさに陶器の柴犬に声を掛け「おはようさん」と頭撫でており
咲き初めたる陽光桜の花便り遥かロンドンの息子に送る
龍ケ崎ファーストトマト届けたし叔母の溢るる笑顔想えば
牛久大仏の横顔遥か見上げつつ先延ばしにしたる歯科医へ急ぐ
WBCの逆転劇に手を止めて訪問看護師共に泣きたり
毛氈を敷きたるごとき芝桜淡紅色に庭すみ覆う
「七転び八起きするのはもういいわ無理はしない」と友の言いたり
植え替えて一年経たる君子蘭六本悉くつぼみ持ちおり
君子蘭の濃きオレンジの花ひらく花弁の八枚甘く香れり
主なき家の紫陽花うす紅に色づき初めて人待つごとし
梅ジャムに青梅甘露煮梅ジュース終日(ひねもす)われは梅仕事する
ふっくらと青梅甘露煮仕上がりて濃茶と共に味わう真昼
桔梗紋は竜ケ崎城主土岐氏の家紋と聞けばゆかしこの花
エアコンの特売セールにかけつけてサービスの団扇にしばし涼みぬ
去年まで七キロ穫れたるブルーベリー今年は猛暑に実のしぼみおり
友の夫の新盆祭壇賑わいて花ろうそくの灯りやさしき
夏のゆうべオハグロトンボ光りつつ氏神様の巡り飛び交う
駅待合室の座席にカナブン二匹居てそっと移せり椅子の下へと
じりじりと日の照る真昼の松葉牡丹赤白ピンクに暑さ忘るる
滑らかでコクある豆腐「男前」友を偲びて味わう夕べ
「掘り立てよ」友の笑顔と新生姜たっぷり届く十月初め
新生姜スライスにしてらっきょう酢たまり漬けするおつまみづくし
秋の夕べ生姜づくしの献立の締めはかき揚げ天ぷら旨し
紫蘇の実をしごきて作る常備菜セピア色なる母のメモ見て

津田美知子（つだみちこ）　（岩手県）

家族と共に

一の字を書くは易しも白寿の母に一の字足すは一年がかり
熱のある母の白き手握りしめ「頑張れ」と「もう充分」が交差してゐる
スーパーの胡瓜にトマト茄子ピーマン移ろふ季節知らずに並ぶ
値上がりて常より小さき鏡餅供へて明日の平和を願ふ
芋の子と白菜人参鍋の中冬に最適今夜の豚汁
白寿の母古稀なる吾を案じゐて吾は白寿の母を案じる
母強し痴呆混じるも頑張るは古稀なる吾の頼れる存在
母からの去年の賀状は「夫婦仲良く体大事にね」と記しあり
第八波今年もコロナ収まらず子等孫等来ぬ正月となる
吾が急ぐ足を止めさせるケーキ屋の甘き匂ひに誘はれて買ふ
熱湯に早どり若布くぐらせる手品のやうにぱつと緑に
義母の世話今日また一つ加はりぬ薬に嘘せぬやうゼリー絡める
絶滅の「妖精のランプ」見つかりて知識無けれど其の花見たし
招かれた「おゆうぎ会」にわが孫は終始しやがみて踊る気配無し
大船渡に四寸程の雪積もり難儀してゐる気仙沿岸

職を持つ母の来ぬこと寂しかり入学式も卒業式も
嫁ぐまでの母との二十二年間義母とは疾うに五十年経つ
昭和五十四年四月二十三日生まれの吾が娘真つ青な空と満開の桜
桜咲く季節になれば浮び来るあの日の母のぎこちなき仕草
久々に降る雨音を聞きながらひとり居て心穏やかになる
一年生の背負ふ大きなランドセルスキップすれば共に跳ねをり
子等の声小学校より聞こえ来てうるさいと苦情言ふ人の有り
満開の淡きピンクの山桜芽吹きたる葉の黄緑に映ゆ
柿羊羹「重い重い」と言ひつつも放さず胸に抱きてゐる母
見つけたる夫と吾の二十歳頃の一枚の写真に会話が弾む
初めてのショートステイに義母行きて鳴る筈のなき呼び鈴聞こゆ
手に職を持ちて現役の夫なれば義父の厳しさ今有り難し
「ばばの着た振り袖着たい」と女孫言ふ「五十年前の地味なのが良い」と
ここ数年四季ある日本の春と秋短くなりぬと吾は思へり
水切りに水面七つも飛ばさむと石を探すも兄には敵はず

北国の岩手も猛暑になりにけり南部風鈴の鈴の音むなし
九月には百歳となる母の手を握れば吾に思ひ出聞かせる
笑顔の母体調良くして話し呉る一向に来ぬ吾を待ちしと
日中は真夏日なれど朝晩の涼しき風に秋の虫鳴く
今日の予定忘れぬやうに記したるそのメモ用紙探してをりぬ
時ずれて初秋に咲ける桔梗一輪白かと見紛ふ微かな紫
猛暑過ぎ濃き青色に澄み渡る空を見上げて深呼吸する
十五夜の芒と萩を摘みにゆくいつもの坂道斜度増したやう
迷ひある心に染み込む心地して説法のことば有り難く聴く
吾からの百歳祝ひのプレゼント「何かは忘れた」と兄に告ぐる母

「菊の花庭に咲いたよ」と独りごと言ひつつ仏壇の娘に供ふ
「スマホには待ち受け無いからいらない」と夫のガラケーに孫達の顔
初詣に家内安全願ふ親と出店の綿菓子めあての子供ら
年賀状出さず塗り絵も書かぬと言ふ白寿の母の気力は何処に
今日からは義母との通院楽になる乗り降り低き車届きて
器用な義母九十八になりたれば箸で挟めぬとフォークに替へる
子の指示を携帯に聞きキーを押し動かぬパソコンどうにか復活す
古稀過ぎの我等世代もパソコンは傍らに置く常用の機器
鹿もキジも狩猟解禁感じるか姿隠して鳴くこともせず
近頃の怖いニュースの報道に気分紛らすとパソコン開く
転びたる義母を起こしたる古稀の吾まだまだ力持ち合はせをり
介護する吾を見かねて動く夫雪かきしたり風呂掃除したり
ザクザクと霜踏み歩けばその先に確と残れり鹿の足跡
春爛漫に生まれし娘仮死状態にて命危ふかりき
娘の名吾は「さくら」と決めゐしが夫は早々に「裕美」と届けたり
高齢者の事故のニュースに返納の頭過るも免許手放せず
重要な移動手段のマイカーは田舎暮しの必需品なり
北国にやうやくつつじの花咲けど雨止まずして容赦なく降る
手土産の柿羊羹を手渡せば白寿の母は「佐藤屋のだね」と
真夜覚めて暫し夫の寝顔見つ共に暮らせる年月思ひて
薄日差し湿度の高き梅雨の庭に桔梗・紫陽花・菖蒲咲きゐる
本物と間違へる程のオニヤンマ蚊取り線香より効くと夫は買ふ
未熟児として生まれたる女の孫は吾が背を越えて新成人に
地図を見て予定の時間と組み合はす旅行の前に何度も何度も
白寿の母「戦争はダメ良い事は一つも無い」とニュース見つつ言ふ
盛岡の貸しロッカーの扉には名物の冷麺わんこそばの絵
この猛暑我が家の一番涼しきは台所なりと終日過ごす
北国も真に危険な暑さゆゑ昼は動かず夕方より動く
もしや火事かと飛び起きて見る朝焼けに真つ赤にそまる一面の雲
ヂリヂリと夏の太陽照りつけて縮れて咲けるコスモスの花
百歳の母に贈りたるセーターの幾何学模様気に入りたるや

戸部田（とべた）とくえ　（福岡県）

お福わけ

花の苗しをれて寂しむ雨のあと意外なほどに生き返りをり
新宿の街は今宵雨となる傘さす人みゆ「今半」の窓に
「今半」のさくら色なるすきやきを和み味はふ子にすすめられ
都内にて四十一階レストラン見下ろす夜景に夢心地せり
両親の共の八十一歳健在を喜びくるる息子しみじみ
颱風のたびに危惧せる庭の柿あかね色の実をまぶしめり
遊びにこよ息子に言はれて嫁もまた待つてゐますのメール再び
おばあちやん幼に呼ばれいとしさの増せる今宵の子の家に
五歳児と電話でじやん拳あと出しも勝負あやふや愉快なりけり
ガイドの旗ゆれつつ続く小学生その楽しげな列に寄りゆく
寺院に修学旅行の子どもらの行列つづく次から次に
おほらかな気持なりて京都の街めぐる元気不思議なほどに
正月の帰省約束してくるる大学生の子に礼の葉書を
遠く住む大学生の子に便りする干し柿たべごろ如何と書きて
おもひ出すたびに嬉しく古里の小川の蟹の逃げゆくさま

挨拶に無視してゆけるその人の心さびしむこの朝の道
畑に立ちいつしら育ちてゐる野菜増せる親しみ慈しみつつ
好奇心もち続けたいと子に言へば喜びくるるそれこそ願ひと
年明けて夫と共に八十二歳たがひにこころ寄せあふ日々に
古里の友よりこまごま届く荷に椎の実しばし包む両手に
名を呼んでみてと友の言ふ電話「チコちやーん」「ニヤーン」一声す
「お福わけ」出雲のみやげ菓子の名のほのぼのとして胸にしまひぬ
隣家のどうだんつつじ紅葉し見頃となれど主は施設に
解体の始まる隣家長年の縁（えにし）ゆゑなる思ひは深し
何事もいつも善意に受けとめて諭してくるる夫に感謝せり
雨のあと一際のびる玉葱の畑ある身のよろこび多く
帰省せる子に先づ告げるチューリップ見事開花の色彩り見て
佇めば清水流るる音のして高山寺境内に人影のなく
栂尾の見頃のさくらこの夜半雨の豫報ことさらうれふ
すれ違ふ人なき階段登りつつ明恵上人うやまふ高山寺

公園の木立ちにカラス舞ひ降りて不意に突かれ暫しをののく
蛙の声ききつつ母の田植ゑせる仕種のうかぶ雨ふればなほ
牛蛙いつしかその声せずなりて思へば再び聞きたしあの響き
唐突にカラスの声して見上ぐれば親しみ増せり輝くまなこ
この度は羽田に迎へ子に頼む自信なくせりこの頃頓(とみ)に
子の家に出さるる品の完食に「素晴らしい」と喜びくれたり
西風の吹けば風鈴なりやまず心にしむる南部鉄の音
庭に咲く節黒仙翁くれし友このごろ難聴さびしく見つむ
蟲のこゑ庭にただよふそのひびき静かに念仏となへてをり
朝の道「ご苦労さん」と翁の一言むねにをさめて家に着きたり

スムーズな歩みの出来て買物より帰り着きたり褒美のやうな
レンゲの種まきつつ浮かぶ一面の花つみレイを友と作りし
村瀬女史九十歳とてハイヒールその心意気に脱帽せり
街に出てこみ合ふ道を歩きつつ人それぞれの孤独に思ひを
あらためて「奥の細道」読みたくて感慨深くページひらけり
友もまた眠れぬ夜の多くなる「それはそれよ」と明るく言へり
そばに置く兎と熊のぬひぐるみ夢をやさしく育ててくれつ
玉葱に肥料施し舞ふ雪の稀なるゆゑのめぐみに感喜せり
育ちゐる蕪(かぶ)の可愛さ増す畝に自然の不思議みるたび思ふ
さ緑の柿の芽吹きこの年もやはり心ゆらす弥生の庭
思ひのほか元気に歩けて巡る寺すべてご加護のゆゑなるもの
竹の子のゆでたる温み頂きてつくづく人のまごころ思ふ
この春はとり分け繁る庭のふき皮剥きしてのちお配りせり
タンポポの咲きゐる野の道あるきつつ素直な明るさ戻りきぬ
突然に顔面マヒになる友の言葉が出ないと電話にかぼそく
夏野菜いつものように植ゑ終へて先づは支柱たてて安らふ
植ゑつけの苗の根付き喜びつつこゑをかけたり時にはふれて
黒猫の車道渡る瞬間の停止する車に震へとまらず
毛布のふち補修すませて落ちつけり母の小まめさ思ひ出しつつ
蜂楽といふ名の饅頭いただきて懐かしくその甘い香りの
自生せるあかあを紫蘇の育つ畦みるたびつのる豊かな思ひに
軒下に雨宿りせる雀のこゑ難儀に思へて寂しくなれり
夏椿あさあさ拾ひそのたびに惜しむ白妙その清楚さに
あぢさゐのとりどり咲ける雨のあと庭を巡りてわれ淑やかに

樟若葉朝日に輝く公園に来ては見上ぐる気持ちあらたに
芋づるを挿して気温の上昇に根付き危む雨を願ひつつ
曇り空チャンスと励む草とりを済ませて見回す褒美に思へて
博多座の藤山直美の観劇に思ひたちたり喜劇求めて
この年の柿の豊作あまたの実しげる若葉に抱かれつつ
育てたるトマトの味の格別と喜びくるる夫に朝採りせり
梅雨といふ季節に咲けるあぢさゐの晴れ間の空につづく七色
深夜に聴くラジオ度々大雨の避難勧告の緊急うながす
子どもらの山笠担ぐ表情の無邪気な元気おもはず涙
自転車の前籠に乗る犬の帽子を被りハンディファンと
蟲のこゑ風のそよぎの心地よく一人住む子に便りを出せり
ビンに挿す薮蘭(やぶらん)まこと見るほどにそのゆかしさの限りも非ず
九十三歳一人暮しの老女正座して頷きくるる見習ふべしと
繁る野に玉簾咲く意外さに心ひかれて立ちつくしたり
鉄線につるのはびこる葛の道ふれて歩けり思ひをこめて
けふもまた日の出とともに歩みつつこの健やかさを喜びとせり

豊田伸一（とよだしんいち）☆　（茨城県）

葉がしおれすっかり落ちたどんぐり

葉がしおれすっかり落ちたどんぐりの歩けばつぶれブシュブシュと鳴る
色とりどりのバラ咲く四季の楽しみを知人と庭で語りて尽きず
血糖値上下にはげしく変化してあわててぶどうをほおばり安堵す
散歩中知人の家に呼びこまれ朝のコーヒーで話題たっぷり
わくらばの散りてうずまく路地の奥掃けども風に戻されてくる
散歩中たわわに実る柿の木あり陽に照らされて食べ頃に見ゆ
秋の陽に照らされて葉のかがやけり散るときまでを楽しむごとく
バネ指の痛みが増してこらえおり揉みて温めて少し和らぐ
来春に花咲かすなら蔓の葉を取り除けよと知人の言葉
トラックの風にあおられ葉が舞いて寒さひとしお身の縮こまる
冬間近となりてするどきバラの棘に気をつけながら剪定したり
庭の柿いつの間にか枝のみとなり寒さ一段と厳しくなりぬ
初霜が降りて寒さが一段ときびしくなりて咲く小さき花
風吹きて枯葉が踊る並木道霜降りてなお寒さ増しくる
命日に風吹きすさぶ中を来て義母の墓前に線香ともす

寒風に早咲き水仙つんと立ち負けず耐えるを教えられたり
正月にみかんを食べる孫娘甘きをうまく選びながらに
未だ葉の出ぬバラの枝暖かな二月初めに棘のみ目立つ
隣の子爺の顔見に訪ね来る嬉しくなりて玄関に急ぐ
嫁ぎ先に娘の顔を見に来れば隣の畑に白鳥の群れ
餌を求めて池を飛び立つ白鳥が畑のみみず群れでついばむ
足ぶつけわが迂闊さを笑えずに声も出ずひたすら痛みに耐える
庭先に小さき花が咲きており冬の間を耐えぬく生命
繁りたる葉のすき間から立ちあがり咲くピンク色の桜草のはな
桜草一面に咲く春の庭花を眺めて今日もたのしむ
雨あがり蛙鳴く声高らかに深夜に響く春の訪れ
大輪の深紅のバラが温かき太陽を浴び輝きを増す
チドリソウの青紫の花盛り気づけば庭に低く咲きいて
胡瓜の蔓支柱求めて巻き付きぬ上にのぼりて生きてゆかむと
一夜明け快晴となり青空に五月の花に蜜蜂が飛ぶ

隣の子が満月だよと言いに来て家族みんなで夜空を見上ぐ
庭先に植えたきゅうりの初物のもぎたて食えば今年もうまし
隣の子我が作りたる将棋盤大事にかかえ挑みに来たり
真剣に将棋盤見つめる少年の未来を思ひ楽しみの増す
ゴーヤの実日増しに育ち重くなりこの朝ひとつそろりもぎ取る
隣家の子の入院見舞のひまわりの絵と作文に心打たれる
風吹きてすだれ波打ち揺れており暑苦しさを少し緩めて
夜ふけて猛暑やわらぎすきま風涼しく入りてエアコンいらず
秋来れば寒さ身にしむふとんの中ひんやりとして体縮こまる
残るバラ秋風の中につんと咲く今年最後の花を見せつつ

散歩中みかんたわわに実る庭ありて我家は成らずじまいか
走り去る車の風に踊りいる落葉あり路上のあちらこちらに
たくましく水仙の花咲くちから寒風に耐え今年もひらく
紅と白の梅が一緒に咲きており道行く人の視線の先に
桜草陽差しを浴びて地にひくく揺れて美しピンクの花が
バネ指の痛さに耐えてきたけれど手術日決まり不安になりぬ
里帰りの娘親子はあいさつし帰りぬ駅まで妻が送りて
アスパラガスの驚くほどの大きな根横に広げてねかせて植える
ひらひらと風に吹かれて散る桜眺めておれば気持ち和らぐ
あやめ咲く庭に明かるく陽が差して眺めいる間の心おだやか
ひらひらと桜花びら散りておりすぐに実をつけ小鳥がつつく
我が庭に小さきみかんの花が咲く昨年は実にならず散りたり
扇風機廻しひと時安堵する五月なれども暑さ厳しく
我家のバラに花咲く赤白黄今日も眺めて心を癒す
猛烈な雨風となり台風の情報聞きつつ戸じまりをする
我が余命宣告されて考える薬を飲んで望みをかける
癌数値薬を飲んで小さくなり希望を持ちて今後に備える
ちどり草長く咲いてて種となる来年も観られる感謝の気持ち
もらいたるあじさいをテーブルの上に置く葉がピンと張り力強さあり
暑すぎて庭の野菜はナスも生らずキュウリも生らず楽しみの減る
たわわに真赤に熟れたるミニトマト毎食味わう我家の畑
猛暑日の夕方涼しく散歩するさわやかな風を身に受けながら
隣の子から治療がんばれと便り受け元気をもらい涙あふれる

夕暮れにアブラゼミ鳴くジージーと猛暑おさまるひと時の間に
空高く轟音響かせ飛行機が飛びゆく姿すがすがしくて
気力減退は九種の薬飲むせいか皮膚にタダレの出来て治らず
残りたる一輪のバラひらきたり夏の終りの庭の片隅
窓からの寝起きの風の涼しさよ妻の気づかい心に染みる
街路樹のドングリの実はつぎつぎと落ちて踏まれて潰されて散る
寒さ増しふとんの中で縮こまる炬燵が欲しいと思いながらに

永井享子（ながいきょうこ）☆　（東京都）

自然に囲まれて

早春の光り輝く満月をベランダで見る夫と二人で
雲間より日の光さしいくすじもこぼれ落ちくるあたたかき線
ベランダに花粉たまりてざらざらすくしゃみを一つ春のはじまり
裏山の巣から飛び出す親鳥はえさを求めて一直線に
頂に雲がかかりて雪山は毎日違う美しき山
ガマガエル土より出でてグアグアとあちらこちらで合唱す
ムクドリが落した小枝持ち帰り小びんに差して小さな花見
白鷺が大きく羽を羽ばたかせゆうゆうと行く空に見入りぬ
大鷹が大きく回り円を書く一筆書きで餌をさがすか
カラスの持つ卵を狙う鳥が二羽どうしようかと鋭く飛び交う
庭の花薄紫と白になり春まっ盛り猫も鼻寄す
はこべらを抜く時はじく種の音生きているのを知らせてくれる
高齢の母耳遠く不自由なれど良き事だけは聞き取れるかな
甘夏の花に誘われ蜂が飛ぶ私は香りと緑に憩う
山藤は木々にかぶさりゆったりと長く咲きおり笠の如くに

ガラスビンに入ってしまったガマガエルそっと逃がして蓋を閉めたり
梅雨入りの宣言待たず雨空に肌で感じるしっとり感が
ミニトマト成長早く脇芽取る大きく育て花を咲かせて
遠い山に鉄塔二本建てられて今の世の中写し出される
雨の後ベランダに残る黒い砂中国からの黄砂が届く
雨あがり南天の実を守るごときらりと光る水滴のあり
ゴーヤの葉の緑互いに重なりて簾のごとし心やすらぐ
パン作り発酵遅く気がつけばイースト菌を入れ忘れたり
早朝におしろい花が咲きほこり色水あそび思い出される
急な雨に洗濯物を取り込みて晴れ間になると又干している
明日葉にアゲハの幼虫五匹居り大きくなれと毎日見守る
運転手のやさしく注意するアナウンスバスに聞きつつ心にきざむ
受診待つ窓そとの空を大鷹も白鷺も舞い勇気を受ける
毎日の用事を足しに母と娘が一緒に出掛けられるしあわせ

毎日が初体験である事を実感している日々です。こんな思いは今迄には無かった。こんな失敗は今迄した事がない。年をとる事とはこういう事なのかと。気をつけて動作、思考もゆっくりとしよう。感覚ではなく思考も遅くなっている。高齢の母と腕を組んで歩くことは大切な一時で、嬉しい事です。苦労ばかりしてきた母は楽しい思いを味わったり、見たりして、喜ぶ顔が見たいです。高齢者安心センターの方に助言をいただき暮らしてます。

長尾弘子（ながおひろこ）☆　（東京都）

独り言

店先に通り掛りの園児らとひざまずき話す笑顔の翁
公園のジャングルジムに園児らのピンクの帽子が動き回るも
富士山とスカイツリー並びいてシルエット鮮やか夕焼の空
姿よき一本桜の外葉より紅深みゆく霜月うらら
河川敷夏の木陰に集いたる胡桃大樹は今実を落す
いっせいに地をころげくる枯れ落葉ゴルフボールの紛れるほどに
凩は胡桃の木下に積もりたる落葉ころがしやがてまきあぐ
風に乗る鳶のんびりと廻りおり抜ける青空裸木の上
山並の上に雪雲連なれり豪雪ときく友の住む町
四万温泉ひなびたる宿に身をおきて湯けむりの流れ窓下にみる
少しの酒に饒舌となるわが友ら笑って涙して思い出語る
真向いの小さき滝を眺めつつ顎までつかる朝の露天風呂
いちょうの並木に落葉詰めたる大袋ふたつ並べて人影もなし
真青なる空に咲かせた紅梅をスマホに写し壁紙とする
数羽ずつかたまりて居るは鴨ならん氷雨ふりしく橋桁のもと

一枝の桃の紅咲くかたわらに小さき雛を置きて吾が春
高齢者走るを拍手で送りたり最高齢は八十九歳
仮装して笑顔で過ぎる汗の顔こんな平和の続くを願う
街路樹の木蓮ならぶその白き花びら春光を含みて重し
いち早く色なき街を明るめる白木蓮に日がな雨ふる
雨に散り踏みしだかるる白木蓮花は土色道にはりつく
墓参おえ行く手さえぎる花吹雪に顔仰向けてしばしたたずむ
チロチロと小さき蝶の飛び交いて土手の傾りにむらさきつめ草
から傘を差し掛けられたる大輪の白い牡丹のきわだつ品位
週末のぼたん祭りは賑わいて競い合うごとくシャッターを切る
どくだみのつよき香りに手折らねど白き十字の花の清しく
足元の子雀何を啄むやバスを待つ間を棒立ちの吾
ネジ花を登りつめたる蟻一匹立ちあがりおり紅の花先
足の指グーチョキパーと繰り返す今日の歩数は三千二百歩
独り言多き一人居の暮しにてテレビの人に応えるは常

脊柱管狭窄症の腰痛にひたすら耐えて梅雨明け間近
この暑さ過ぎたら逢おう友の声電話の向こう蝉時雨かな
梅雨あけの危険な暑さ報じらる光る積乱雲ふくらみてゆく
この暑さ性に合ってかモンステラいつつの葉っぱ大きく開く
炎天の工事現場に立つ人のファンにふくらむ上着の背中
震災後百年の被服廠あと読経ながれて参拝者つづく
災害時の流言飛語の恐ろしさいつの世にも有ると頭を垂れて聞く
横綱町公園に立つ朝鮮人犠牲者の碑に花供えあり
すみだ祭り賑いおれば売店に肩をふれあい右に左に
伝統のゆかしきことよ華やかにすみだ芸妓祭り盛り上ぐるなり

皆様のお歌に感動し自分の下手さに恥入るばかりで心が折れそうな時もありましたが、これまで添削の御指導を頂き続けてこられたと思います。感謝申し上げます。この頃は雨が降らなければ、朝ラジオ体操に近所の公園に出掛けて、数人の仲間と体操の後少し歩いて駅近くの喫茶店で軽い食事とコーヒータイム。皆八十を疾うに越して健康の不安もあるが、励ましあいながらこんな時を続けて行こうと話している。それには足が萎えないこと、頭が惚けないことを願う。もう暫く皆様のお歌を拝読して感銘を頂きたいと思う。

敷石にピラカンサの赤き実を砕きて散らすは何鳥なるや
歩く会資料片手に参加するアメリカンスウの木初めて見つく
父と子と脚立を据えて何枚も駅に近づく電車を写す
藤棚の長き花房重たげに色鮮やかに紫ゆるる
蚊柱を払いつつ行く公園に咲き盛る躑躅あさひを返す
穏やかな水面に誘われ歳忘れこわごわ渡る池の飛び石
モンステラ固く巻きたる葉を解く生まれたばかりの色はやさしく
うの花の垣にあらねどその白き色さえざえと咲く朝の道
あおぎみるタイサンボクの白き花駅近き道にみつけたる朝
掌にエノコロ草を転がしてなつかしみおり十三の夏
虫除けの色あざやかな「おにやんま」胸につければこわいと言わる
カーテンの端にブローチ「おにやんま」これにて虫が入らねば良し
注文はＱＲコードにてとありお茶を飲むのも一苦労する
若者の多き店にて注文のグラスの中に点滅する光
ようやくに秋めく風に木々の葉を紅く染めゆく園の木立は

中島千加子（なかじまちかこ）　（東京都）

Time goes by ～優しき日々へと～

ぼんやりとしてゐるところが満ちみちる月の与ふる希望の余白
日に当たる場所から檸檬いろとなる高層ビルの谷の街路樹
風強きビルの谷間の日陰から見ゆる彩雲ひかり広がる
電子レンジなき職場にて活躍す十年前の保温ランチケース
生きづらさ語るあなたの心想ふ電話の声にラインの文に
闇に眼が慣れて見えくる赤つばき街のあかりの揺れゐる川面
日没は間もなくですとパソコンのメッセージきてデスクをたちぬ
オリオン座横切る流星見る一瞬そのひとすぢはわれの永遠
ビルのそとコンクリートの階段に散りて広がる山茶花のはな
始業まであと二十分山茶花のはなびらたどり階段のぼる
花びらに導かれゆけば花の季の終り近づく山茶花の樹
高層のビルに朝陽は遮られ届かぬけれど山茶花は咲く
吾が文字が好きだと言ひてくるる友に薄梅色の便箋選ぶ
ゆでたまごメーカーセットし明日のこと考へるはやめ毛布にくるまる
雷の音を聴きつつ選びをり芍薬ことしのつぼみをひとつ

雨雲の隙間に月と星見えてもう充分なり今日といふ日は
東京で終り始めてゐるつつじ水戸の街には咲き満ちてをり
鷺草の開花を待たず母は逝く真白き花を年ごと増やして
鷺草の小花浮くやうに咲いてゐた独り居の母の夏の玄関
鉢花の年越し得意な母なりき水やり株分け大事に育てて
電話すれば母は大抵ひとりきり「お兄ちやんは忙しいの」と
「寂しさにもう耐へなくていいのよ」と棺の中の母に呟く
大粒の雨が束の間休むときぼんやり光るまろやかな月
やはらかな月のひかりに見えてくる波打つ雲の白さと厚み
月と街のあかりをうつす水滴に美しさ増す夜の紫陽花
紫陽花の毬に触れればあぢさゐの体温ぬれる指につたはる
紫陽花の葉のつけねには百日紅マゼンダピンクの花びら残す
夕焼けの色を取り込む木のみどり立秋過ぎてざはざはと鳴る
部屋のなか迷ひ込みくるアキアカネお前の空はここではないよ
台風の去り行く金曜夕暮れに扉は開き神輿が出でぬ

三年ぶり大きな神輿と踊るひと露店に家族の笑顔の溢る
月の顔なでゐるやうに雲流れわたしも連れていつてと願ふ
夕暮れの近づく小路かぐはしき白粉花の低く咲きをり
一本に赤と黄としろ単色と絞り咲きあり蜂迷ひ飛ぶ
「まあ可愛い」明るき声の近付きてかがみゐる吾に花の名を聴く
銀の髪ゆつたりとした語りくち祖母に似てゐるひとに微笑む
この街に半年前にきたばかりまだ慣れないと笑顔返さる
白粉花だけが咲きゐるこの場所に見知らぬ人との優しき対話
同じもの見て可愛いと言ひ合ひてぬくもるこころ胸に手を当つ
声かけてくれたることに礼を言ふ白粉花の咲き灯る道

コロナ禍以降、労働災害の被害者となり、また、母を亡くした一年でもあった。歌があったことが私にとっては救いの一つであった。いつも、言葉が出ない状況から立ち直れた隣には、未熟ながらも歌があった。私は忘れない。ここから生きる日々を一歩一歩踏みしめる。つらくとも季節はめぐり花が咲く。月が昇り、星が光る。ひとつひとつをしっかり心に刻み、生きる。今という一瞬に無限の時間の広がりがある。夢をまた持つことができたこと、動き始めたことに感謝したい。不器用なりに私は生きようと思う、歌とともに。

ヘアサロン半年ぶりに予約せり怪我に涙の日々にさよなら
髪伸ばす提案をされ惑ひをり鏡のなかの五十四歳
三日後に満月になる月見上げサロン帰りの髪は花の香
争ひやウイルスにひとが荒みても宇宙は廻り四四二年ぶりの月蝕
ロールシャッハ・テストのやうな月模様ああ私は仕事をしたい
月蝕の翌日の夜は薄曇り木星だけが煌々とあり
短時間労働始む最善の健康回復手段と思ひて
電車待つホームに遠く椿の樹赤やはらかく花咲き溢る
夕映えがいちばんきれいに見える窓フロアの端の吾が好きな場所
見えぬもの感ずる心が大切と新月ひそむ空を眺める
水仙の小鉢に香る冬の終りストールなほしゆつたりと吸ふ
朱鷺色の朝焼ける空に白く浮く月の写真がラインに届く
淡き色に安らぎおぼゆる帰りみち梅の花芽が生まれ始める
夕焼けを見損ねる日の続きゐてコットンに垂らすネロリの精油
祖母に似る雛はいつも胸の奥いつでも会へるあの微笑に
吾のことを忘れてしまふ母となる「疲れた」口癖は変はらぬままに
「疲れた」は母の口癖きくたびに悲しくなつた幼き日から
まだ癒えぬ痛みに耐へて膝抱ふ介護できねば帰る場のなし
夢二描く赤き服着た少女見て吾に似てゐると言ひし日のあり
読まれずともよしと思ひて母宛に夢二の絵葉書ポストに落とす
マタイ書を読みてノートに記しゆく思ひ患ひ神に委ねて
雨が降り気温あがりてまた雨と芍薬の花に厳しき気候
白き羽のやうな花びら生まれ出づ芍薬の莟ゆるみ始めて
紫陽花が色づきそむる川べりに紋白二頭もつれ戯る
風のなか離れてしまふ蝶二頭それぞれの空飛び去りてゆく
アマリリス蘭とアロエとシクラメン遺影の父はいつも花の中
調理済料理いつぱいの冷凍室コロナ流行の前と変らず
紫陽花の大きな毬の続く道「こちらにおいで」誘ひくるやう
背丈より高くに咲きてゐる毬に顔をあげれば広がる視界
雨に濡れ濃くなる緑の香のなかでやうやく呼吸できたる心地
「アイスがいい」冷凍バナナを嫌がりて母を困らせし幼き吾は
栄養が高まる冷凍バナナからパワーをもらふ八月の朝
パソコンの電源いれれば回りだす小き扇風機三百三十円
小さくておもちやみたいな扇風機不可欠となるパソコンワークに
混雑の花火大会に出向くより吾一人だけの線香花火
もうすこしあと少しだけ歩きたし日暮れの街に風が流れる
まだ暑さ続くと予報のこの街の木の葉は秋の色まとひそむ
軽やかな祭囃子が夢に鳴り昼寝を止めて身体を起こす

永野雅子（ながのまさこ）☆　（東京都）

先のその先

十四段抱えて上り早半月六十キロの父は重たく
階段の途中で三段滑り落ち自宅介護の限界を知る
特養から入居打診の電話来て明後日に決める面談の日を
特養の相談員は父の状態を聞き取り詳しく用紙に記録す
腎不全の父に加療は求めずに看取りを希望すると伝える
入所日が決まりて後に去来する八年間の介護の想い出
八年前父の交通事故以来自分を鼓舞して働き来たり
必要な荷物詰めながら浮かびくる介護ステージの先のその先
年明けに食事の量が半分に落ちたと施設のケアマネが言う
三週間振りに会えたる父は車椅子で鼾かきつつ眠りていたり
急激に体力落ちてゆく父に不安覚える一月八日
一月十二日早朝父が死去したと告げられさっと血の気が引きぬ
眠りいる如き父に沢山の花を手向けて感謝を伝う
火葬場の思いもよらぬ混雑で位牌抱えて車中一時間待ち
骨壺に納められたる父いたく小さくなりぬずしりと重く

営業を続けることが何よりの供養と思い翌日から働く
六年前茶道の教授者目指さんと師に相談し申し込みたり
年に一度開催される講習会に五年通いて教授を目指す
講習会は盛岡次は新潟にそして静岡日曜日帰り（ひがえ）
大阪の土日連日開催に参加を決めて講習受ける
納骨を終えたその場で住職は塔婆立ての修繕を言う
支払いを考えながら上野まで書道展へ足早に向かう
師の作の運筆鮮やか力強い穂先の勢いに圧倒される
通信で細々続ける書の稽古辞める理由を探しておりぬ
書く事の意欲が再び甦り筆持つ気力も徐々に戻りぬ
柴又へ向かう電車は単線でゴトゴト揺れる心地良い感じ
線香を手向けて父の戒名を指でなぞりて語りかけたり
カンカンと電車の接近告げる音は昔と変わらず懐かしくなる
昇進の友祝い八人集まりて六年ぶりに食事会する
乾杯し近況に耳を傾ける皆それぞれに苦しき年代

父亡くし半年経ちぬ日常の変わらざること有り難きかな
古石場文化センターイベントに出店依頼の電話がかかる
四年振りのこどもまつり開催と職員の声に意気込み感ず
休日を返上してのイベントは家族総出で朝から準備す
新盆の仏壇を飾る鬼灯は橙色の実の映えており
新盆の父はおそらく先祖らを笑顔で先導し連れ帰るらん
町会の神輿を担ぐ町民の食事を作る四百人分
一回も神輿を担がず終わりたりこんな祭りも悪くはなしと
一年前杉並に住む従姉妹より叔母の調子が悪いと知らされき
肺炎で七日後叔母は亡くなりて再会叶わず母落胆す

塩むすび頬張る父を見て思う何を考え何に喜ぶ
食べこぼし叱られている父は母に不真面目としか映らぬらしく
自宅介護の最後の日まで怪我の無く過ごせる様に仏壇に祈る
二時間の聞き取り面談終了し気付けば夜の開店間近
ケアマネに迎えのタクシー依頼して粛々進む別れの手順
父の居ぬ空のベッドに横たわり父の見ていた景色を見渡す
三日後にレンタルベット回収され部屋に不自然な空間出来る
入所後に施設にコロナが発生し父の様子を知る機会無く
父の葬儀早朝からの冷たき雨止むことの無く地面を叩く
祭壇の両脇にある花の籠旅立つ父を守るが如く
四年目はコロナ発生講習会は開催見合せと手紙の届く
今年度講習会は二年分纏め開催との通達貰う
会場の書道用品販売員は我が知らぬ師の人柄を言う
飛び石の臨時休業を告知する貼紙をして心の弾む
日曜の空港行きの車中にはスーツケース持つ人多く居り
亡き父と美味しい鰻を食べしこと思い出しつつ参道をゆく
唐辛子の多く浮かんだ赤き汁火鍋は四川料理の名物
激辛の火鍋を初めて食べた夜胃の痛くなり脂汗出る
激辛のスープを食したる夜は朝まで胃痛で目が冴えており
不思議にも我が舌は辛き火鍋の味旨きものだと思いいるらし
有名な火鍋専門大型店池袋駅より徒歩五分なり
専門店は食材多くつけだれも自分好みに調合できる
幾つかのパンをトレイに会計へ老舗なれども PayPay 利用可
待ち合わせ一番乗りに来て見入る通り過ぎゆく人の多さを
これからも健康第一に過ごそうとまた会う約束し散会となる
猛暑下に浅草寺まで歩き来て満願堂の芋きんを買う
天候に左右されぬロビーではエアコンの効く売り場快適
描き上げた怪獣の凄さを説明し一歩も動かぬ男の子おり
新盆に飾る提灯の牡丹柄父の供養に姉夫婦より
早朝より調理続ける婦人部の団結力に圧倒される
茹で上がる蒟蒻2つ串に刺す味噌田楽は吾の好物
約束の時間はどんどん迫り来て手早く作業し箱に詰めゆく
配給所に鍋持ち運ぶその時に雨足強まりずぶ濡れとなる
妹と会いたい母と知りながら父の特養入居を優先したり
年明けに母を連れゆく日を決めてやれやれと一息したり
大晦日叔母はコロナに罹患して再び入院会いに行かれず
面会は家族のみ可と言われ続け会えずに過ぎる日々虚しかり
入院中体力落ちてゆく叔母を見守る事も出来ぬ歯痒さ

永光徳子（ながみつとくこ）☆　（東京都）

古いソファー

断捨離を始めましたと言いながら想い出重く決心鈍る
捨てられぬ古く大きな此のソファー猫の爪跡あちこち残る
在りし日は家族五人と猫五匹それぞれの歴史それぞれにあり
年を経てソファーを使うは吾一人空席埋める猫のクッション
久々に娘と過ごした三週間笑いも涙も熱き思い出
発つ前に娘の植えたるプリムラは初霜のなか鮮やかに咲く
雨戸繰りまず目に映る赤き花物言うごとく胸に染み入る
年々に落ち葉もたげて咲く水仙昔の場所に昔のままに
年とりて猫を飼うのも儘ならず時折現わる猫に癒さる
庭に来る耳に傷持つ野良猫は呼べば小声でニャーと答える
夕方に散歩に出ればどこからか不意に現われ吾が前歩く
公園のベンチに座り小休止小魚チップを分け合い食べる
帰り道猫はお寺の石段を一気にのぼり姿を消しぬ
梅の香に思い出すのは友の夫（ふ）の亡くなりし山の白梅の花
追悼の思いを込めて翌春に友と登れば春の雪舞う

その友も昨夏に逝きて吾一人咲き初むる梅に思い重ねる
独り居を踏み出すようにドライブに高尾梅郷めざして走る
梅郷は関所跡ある旧街道昭和の香り其処此処にあり
梅郷の開花は遅く三分咲き蕾の紅は青空に映ゆ
川岸の古木の梅は苔むして胴吹きの花可憐に咲かす
特売の紳士用品のカタログにあれこれ迷うもう居ないのに
遠き日に夫の植えた芍薬の芽吹きは彼の便りと思いぬ
姪からの宅急便は新タケノコ直ぐに使える下処理済みの
早速に煮物作れば部屋中に春の香りと優しさ満ちる
国道の銀杏並木は緑濃くゴールデンウィークの車列のみ込む
見上げればヤマボウシの木の葉隠れに小さな鳥の巣ひっそりと見ゆ
宅配の配達員の若者は庭に膝つき苔に見入りぬ
山沿いの薔薇園に吹く初夏の風カジカガエルの声を連れくる
薔薇園の手作り感の心地良く木陰のお喋り時間忘れる
久々に姉の墓前に詣でればこぼれ種より撫子群れ咲く

冬雷を毎月読みて年重ねいつしか作者の名前を覚ゆ
冬雷の誌上でまみえる喜びに活字の歌を丁寧に読む
住まう地の景色が浮かびその人の喜びが見え悲しみも知る
三十年通い続けたトリム体操猛暑に負けて二ヶ月休む
久々に体操教室に出てみたが体は固く脈拍あがる
中盤の片足立ちは三秒でよろけ「無理しないで」と先生の声
腹筋もスクワットも難儀して最後は嬉しい脱力タイム
栗林に「栗あります」の立て看板迷わず訪ね新栗を買う
栗色に輝く新栗ずっしりと娘に友にと心躍りぬ
茹で栗は圧力鍋を使わずに昔のように大鍋使う

二〇二三の年鑑合同歌集が刊行される事となり、そこに参加させて頂く事に深く感謝です。
書棚には、二〇一七の合同歌集から、年々の歌集が並んでいる。
時折読み返してみると、その年、その季節の自分に向き合う事が出来る。感慨深い。
短歌に出会えて、本当に良かった。人生百年と云われる昨今、これからの長い老後をきっと後押ししてくれると思う。拙い歌だが、ずっと、ずっと続けて行きたい。

亡き人の使い古した雑物はゴミ収集車に積まれ消え去る
葉隠れに山茶花の赤際立ちて苗木を植えし義母を想いぬ
シャラの木を切り倒したる廻りには石蕗の花競いて咲きぬ
机上には庭の南天影落とし流れる雲も時々映る
南天も千両の実も喰い尽くし野鳥の群れは姿を消しぬ
野鳥にも食の好みはあるらしく山ぼうしの実熟れて落下す
年越しを独り過ごせば家近き廣園寺（こうおんじ）の鐘胸に染み入る
初春の庭を歩めばザクザクと足に伝わる霜柱の音
寒入りの朝の空気は冷え込みて寒椿の赤冴えて美し
独り居の七草粥は庭隅のハコベとゴギョウにスズナで良しとす
すこやかに夫在りし日　川にセリを上手にナズナを摘みて作りき
小春日に花の手入れをしておれば少し離れて毛繕いしてる
立春を迎えた空は晴れ渡り飛行機雲を猫と眺める
早朝に花の水やりしておれば遠き森より鶯の声
自生したる水仙あちこち咲き立ちて自然の力に驚きて見ゆ
昨秋に除草剤撒きし裏庭にアミガサユリの咲きて嬉しき
朴の花咲き立つ山の懐で蕎麦食べおればウグイスの声
木陰にて本読む吾のサンダルにモンシロチョウは羽を休める
早朝の植え込みのなか歩くたび蜘蛛の巣払いぬためらいながら
年々に友より届く旬の味優しさ詰まる房総の枇杷
晴れ渡る空に一羽の迷い鳥行きつ戻りつ何を思うか
町内は高齢者多く朝夕はデイサービスの車行き交う
思い出を共有したる旧友の皆旅立ちて梅雨空仰ぐ
朝陽あび天を仰ぎて深呼吸空には白き残月浮かぶ

風にのり祭りばやしの太鼓の音三年ぶりの祭り近づく
華やかに咲きつづけたるサフィニアは種子を落として幾多芽吹きぬ
夕風に厳しき暑さ和らぎて野鳥の群れは塒に向かう
夕空に花火大会の音響きムクドリの群れ隊列くずす
災害の痛ましきニュース見る度に地球の怒りの深きを知りぬ
熱帯夜四年ぶりなる夜祭の名残の音が風に運ばる
クーラーを止めて静かに窓開ける上弦の月ポツンと浮かぶ
二ヶ月間クーラーの部屋に籠りいて怠けたつけは確実なりき
初期の頃共に励みし友五人既に故人となりし現実
先生も生徒も共に年重ね現状維持をひたすら願う
子供時代家に帰るとテーブルに人数に分けたる茹で栗並びき
百日草猛暑の夏を咲きつづけ秋風のなか色褪せず咲く
水やりは大儀になれど花も木もやれば喜び応えてくれる

中村哲也（なかむらてつや）　（宮城県）

歌は己の備忘録

テレワークせる人からの返信の着信履歴二十三時と
通勤の路に並べる唐楓今年も茶枯れて黄葉を見せじ
噺家のまくらの喋りにうんうんと頷く女性の声の可笑しき
日は落ちて辺りも暗く終業と思へば未だ午後の五時前
電車待つホームに見ゆる冬枯れに霙降る音パラパラ聞こゆ
雨やがて目にも確かな結晶に変はりて起こる冬の実感
印刷を依頼のつもりが真つ白の賀状届きて途方に暮れる
晴れ空の仙台出でて四時間後吹雪く故郷の駅に降り立つ
あと五年経てば還暦なる吾の顔の染みなぞ気にすな母よ
正月に食ぶる干し芋紅はるか大久保さんに教はりしもの
電気代月に十万越えたりと言ふ人ありて昼の話題に
目の痒み嘆く人ゐて仙台は梅も咲かぬに春の兆しか
1キロの干し芋届けば驚きの声上ぐをさなを想像したり
年配の男に女性の幼連れあれは親子か三代家族か
各々の選択尊重するといふマスクの着用けふも行ふ

春めきてくしやみ鼻水目の痒みどれも無きわれ肩身の狭し
風に乗りベンチに落ちたる花びらの上には座せず電車待ちたり
肌寒く思へる上野の公園を外つ国人等が半袖に行く
久に行く博物館はたまたまか外つ国人等の姿多きは
道端のソメイヨシノはなべて散り枝垂れ桜の華やぎを増す
ＭＲＩ検査装置に入れられておのれが調理をされるが気分
この一年食には気にも留めぬまま体重ウエスト去年（こぞ）と変はらず
その昔受領の印を押す作業今は画面にサインをしたり
一日は二十四時間それなのに配達業者は続けざま来る
外箱の型式記載の細かき字眼鏡を外してまじまじ見たり
若き頃心に上司の老眼を笑ひし我が今や苦労す
頼みたる白飯のみが先に来てラーメン待つまで暫く眺む
極太のメンマを噛めば冷やしたるままの冷たさ感じて悲し
東京の駅に降りれば案内の矢印頼りにまづは喫煙
喫煙所順番待ちに外に居て出る人あればすかさず入る

夜十時こんなに人がゐるものと感心したり東京駅で
土曜日の東京港区六本木外つ国人の姿の多し
立ち並ぶウェザーニュースのキャスターに山岸愛梨は意外に小柄
さやさやと音立てそよぐ木々の枝故郷の音とじつと聞きゐる
真夏日の熱さの続く外にある鉢の朝顔さすがに萎る
葉の萎れ心配するも朝顔は朝朝紫紺の花咲かせゐる
地下鉄は区民祭りに混み合ふにマスクする人ほとんど見えず
極力に人を避けつつ欠かさずにマスクする人コロナに罹る
暑さにはあへて豚骨ラーメンにニンニク入れて体力保つ
これはまあワクチン接種のお陰かな熱の上がりは八度に足らず

八月に腱の切れたる中指の固定外るも直ぐに戻らず
辛うじて網膜剥離は免るも視界に映る黒きは消えず
天気予報通りに明るき月見えて皆既月食楽しみに待つ
電車降り空見上ぐれば丸き月あらかた消えてはつかに残る
年初め連絡受くる会社より再び値上げの通知の来たり
シャンソンを聴きて帰りの道すがらスパゲティーなど食べたき気分
会場の椅子に座りて初に聴く噺に笑ふ真偽ともかく
噺家の町人商人侍を演ずる身振りをのめりて見入る
二種類の年賀ゴム印急きよ買ひ賀状作りぬ暮れの夜なべに
目の前の吹雪く様子の投稿がウェザーニュースに紹介される
秋田より戻り来たれる仙台の朝の出掛けの澄み渡る空
帰り道顔を上げれば目に映る赤く輝く星の点滅
幼より絵入り食器のお礼にとその祖母通してチョコレート呉る
チョコレート呉れたる幼の好物を聞けば干し芋干し柿と云ふ
干し芋が好物と云ふをさな子は洋菓子与へぬ家の習ひか
をさなへのホワイトデーには好物の干し芋1キロすぐに予約す
沖縄の緋寒桜の映像を真冬に暖房つけて眺める
値を告ぐる灯油の移動販売は十八ℓ二千円超ゆ
青空に陽差しの強き日の続きみちのく仙台梅の花咲く
お返しに干し芋一キロ送りたる幼の画像に「ありがたう」を聞く
六十を越えて花粉症となる人の話に不安を覚ゆ
初に乗る武蔵野線に向かひ合ふ人等のマスクに安堵を思ふ
上松戸駅に迎へる弟の少し太れりやや五年振り
展示せる物に添へらるる説明板見辛く思ふは眼鏡の故か
入社時にすでにありたるメーカーの東北支店はつひに閉ぢたり
種を水に浸すなかれの注意書き見落とし朝顔双葉の出でず
午後からの雨の予報に期待して朝の水遣りせずに家出る
脳腫瘍見つかる人の話聞き初に受けたり脳の検査を
ＭＲＩ検査装置に響く音不快に思ふもそのうち慣れる
ＭＲＩ検査装置に身動きの取れぬまにまにいつしか眠る
十数年振りに行ふ商品の荷受け業務は日々に戸惑ふ
新装のラーメン店に混雑を避けて日曜午後に出掛ける
品ごとに麺とスープを用意せるラーメン店のありし懐かし
金曜の二十時過ぎたる新幹線東京行きの乗客まばら
抹茶アイスにアイスコーヒー頼みみて千円超ゆるはさすが東京
東京で不意の雨にと折りたたみ持てど使ふは仙台の空
新幹線ホームのベンチに黒き傘一つ置かれて車両は行けり
全線の復旧なせる花輪線年末よりも乗客多し
我独り弟家族三人の去れば戻れり父母の二人に
待つ人も降りる人さへ無き駅は夜の車窓に眩しき灯り
無人駅発ちて暫く街灯り見えぬ車窓の暗闇続く
最終の仙台止まりの新幹線我が乗る車両は十人余り
一瞬に雨粒窓に叩き付け新幹線は先へと進む
街灯り数々見えてアナウンス仙台駅の近きを告げる
急な坂登りて帰る汗だくに氷菓子喰ひ体を冷やす
雷鳴の遠く轟きみるみるに黒雲覆ひザツと雨降る
休日の午睡ののちの目覚めより体の怠さ覚えて起きる

鼻水に悪寒と咳の重なりにこれはもしやと思案巡らす
早退の女性事務員次の日に新型コロナに罹りて休む
新型のコロナに罹る前の日の女性に託さる未処理の書類
近隣の知人にとにかく電話して抗体検査のキットを借りる
抗体の検査キットは鮮やかに新型コロナの感染示す
発熱の体に涼しと買ひ置きのアイスクリーム四個を食ぶる

中村晴美（なかむらはるみ）　（茨城県）

全員マスク

黄斑に軽きむくみを指摘さる新たな病気また増えたるか
左目を隠して見れば線歪む右目黄斑やはり異常か
白内障緑内障に黄斑もそれでも免許またも更新す
針金に固定されたる新しきテレビ地震に微かに揺るる
予定より早き納車の知らせあり十九年乗りたる車を磨く
安全のオプション多き新車なり来年われは還暦となる
スピードの出過ぎるわれに警告の小言の多き新車に戸惑ふ
高額な電気代に驚きぬ暖房無しの秋の筈なれど
寒さゆゑかカセットコンロの鍋旨し買ひ溜めしたるガスを消費す
雪止めを屋根に追加し冬迎ふ雪のあらぬは淋しくもあり
寄せ植ゑに兎の耳のパンジーを来年われは年女なり
保険証の紐付け予定に仕方なく申請決めしマイナンバーカード
スマホにて年金予定表示さる便利が怖しマイナンバーカード
夕刻に震へ伴ふ寒気して常備薬の葛根湯飲む
入浴後も震への止まず異常なり体温計は三十九度

綿棒を鼻奥入れられ嗚呼痛しコロナ陽性判定さるる
二日にて熱は下がるも味がせぬ匂ひも消えてコロナ後遺症か
味わかる喜び噛みしめカレー食ふコロナ後遺症ひとつ解消
節電のリビング寒き冬となりセーター三枚通販に求む
厚着ゆゑか寒さゆゑなのか血圧の高き日続くくつろぎ居ても
マスク無きわれに驚く人のあり人気少なき道を歩くに
肌を刺す冷たき風の冬の道ペンペン草の白花揺るる
マスク無し解禁さるる直売所スタッフも客も全員マスク
震災後原発事故の風評に食べ物にあらぬ花桃植ゑらる
あぶら菜の蕾を摘みて味噌汁へ自宅の庭の小さき畑より
浴室と洗面所をまづリフォームす設備が古き築二十年
退職金五年たらずで半減す人生設計雲行き怪し
浴槽のマイクロバブル心地よく風呂好きとなる還暦の年
浴室の明るくなりしリフォームは手摺りの三本老後も備ふ
徒歩圏に串焼き屋のオープンす新たな楽しみ向こうから来たり

垂れ咲けるコバノズイナの可憐さよ還暦間近も知らぬ花あり
真夜中の息苦しさに飛び起きて蜂蜜湯のむ喘息対策
ドックにて不整脈を指摘さるあの夜の苦しみは心臓発作か
胆石も結石もあり腹のなか時限爆弾かかふるごとし
三日間なぜか涼しき風の吹くチャンスとばかり草刈り機振る
西日受け百日草のうなだるる暑さに強き花と聞くも
嗚呼あつつ今日も酷暑と家籠るつひに手を出すネットスーパー
中国の輸入禁止に溢れたる国産ホタテ安価に期待
肉厚の大粒ホタテ高価なり生産者の抵抗ゆゑか
加工品好評ゆゑか薩摩芋の畑の増えて放棄地の減る

ミサイルの日本上空を通過せりスマホは鳴りぬ国民保護情報
アメリカの本土狙ふが目的か日本領土は通過点に見ゆ
原発の避難訓練通知ありミサイル着弾想定は無し
唐突に画面の消えて終了す十二年使ひしプラズマテレビ
大型の画面に戸惑ふ新しき液晶テレビはネットを繋ぐ
晩秋のフェンスに絡む昼顔の枯れたる先に丸く種下ぐ
歌人ゆゑか認知能力正常の事故運転手は九十七歳
大雪の渋滞ニュースは気の毒でも雪の景色は羨ましくあり
正月に市販の切餅雑煮に入れ意外と旨しリアルに近し
紐付けの口座は死蔵を登録す漏洩怖しマイナンバーカード
咳と痰なかなか抜けぬ苦しさよコロナ後遺症いつまで続く
雄らしき茶色の鳥のジョウビタキわれの畑にて高らかに鳴く
馬鈴薯を植ゑ付け予定の一角の枯れたる草を鎌にて削る
リビングの窓際に置く苗箱に三週間かけピーマン発芽
数日でトマトの種は発芽なり毎回ハラハラ室内育苗
花桃の薄紅色が覆ふ春ここ十年に増えたる風景
浴室の手摺りの数は適正か老後対策正解わからず
洗面台の高さがわれに合はされて腰の痛みの解消さるる
目の下の弛み消えたるはひとつきのマイクロバブルの効果ゆゑか
コンビニも大手チェーン店も未だ未だかマスク外すは浮く行為なり
新築時苗木植ゑたるモミの木の大木となり二階より見ゆ
大きめの地震の続く五月なり原発やはり日本に適さぬ
電気代値上げさるる六月なりエアコンしばしためらひ使ふ
原発は電気代安きと言はれても稼働反対の気持揺るがぬ
遠くある台風前線に繋がりて線状降水帯ひさびさに見ゆ
雲の動きスマホに流るる赤い帯わが上を行く土砂降りにして
先週も線状降水帯を見き高台の家幸運に思ふ
ネットにて落札したるポプシーは大型にして送料高し
この庭の初冬に植ゑむポプシーの鉢へ水やり毎日欠かさぬ
今月も線状降水帯湧き出でてニュースは伝ふ水害の光景
大雨に乾く事無きわが畑の雨の切れ間に馬鈴薯を掘る
紹介状持ちて行きたる大病院患者の多さに日を改める
台風の去りて再び発生か熱帯低気圧ひそかに育つ
台風の進路予報の定まらず一日早き墓参りとす
子供向け花火セットは大人のみの家族となりても夏は欠かせぬ
自力では無理と判断ダイエット腹の脂肪の厚さの増せり
半量の炭水化物とリベルサスたつた二キロがひと月に減る
登録に一手間かかるも後は楽スマホ操作で食糧届く
朝頼み午後に届く便利さよネットスーパー再び利用す
朝方に水やり済ますも滝の汗さぼれば枯るる鉢の草花
雨に濡るる鉢の草花ありがたし水やり休む今日の酷暑に
警報の通知うるさくスマホ鳴る線状降水帯わが上に湧く
谷樋に雨水落ちて流れゆく飽くることなく水を眺むる
処理水の安全性は本当か海産物の今後を憂ふ
揺れ無しに津波注意報発令さる原因分からず鳥島は遠し
薩摩芋の蔓刈るトラクターけたたまし収穫の秋に畑の賑はふ
春に植ゑ酷暑を越えたるフジバカマ白き花付けプランターに咲く

西村邦子（にしむらくにこ）　（兵庫県）

山桜

立ち上がる大筆小筆の筆蘭はそろひて傾く日差しに向きて
帰る時送りくれたる弟は角曲がる時小さく手を上ぐ
その歳にならねば分からぬ事のある二人の母に近づきたりて
病ゆゑ賀状本年もちまして友は添へたる「ごめんねお元気で」
新しき春のはじまり孫の声合格を聞くビデオ電話に
干支根付け寅年生まれの十二歳少し顔立ち似たるを選びぬ
試着する制服詰襟十二歳に残るあどけなさもう暫くは
勤めゐる娘の育児休暇のち男孫と共に流れたる時間
初めての写経に坐る男の孫の薄墨なぞる横顔を見つ
孫達の春のはじまりに意欲湧き申し込みたるシニアカレッジ
同期なる夫の山友同世代三組それぞれ夫婦のかたち
「病ゆゑ賀状本年もちまして」ノートに挟みぬ幼馴染みを
友ヶ島どこか懐かし風の吹く船着き場に近づきくれば
遠き日に揺れる小船ではるばると来たる友ヶ島海水浴場
要塞が今も残れる友ヶ島十二歳の記憶はおぼろ

アルバムの白黒写真に父の文字「夏の想い出友ヶ島にて」
戦争を知らぬ三世代友ヶ島の古き要塞探索をする
女孫たちはインスタ映えすと写しゐるレンガ作りの砲台跡を
里山の雑木林のミツバツツジ古里の色が続く道ゆく
芦屋川シルバーカレッジに入学す窓に春雨音なく降りぬ
受講者修了記念誌「蘆火」にはそれぞれの人のそれぞれの一年
山削られアスファルトの道路そば父の愛でたる山桜残る
いつの日か山桜の下で飲みたしと父の願ひは叶つたのだらうか
古里に山桜咲くころ酒持ちて父の好物幹に注ぎぬ
雛鳥の声が聞こえぬ朝の庭見上ぐる巣箱に風吹きぬける
植ゑ替へればシュートを伸ばし新芽見ゆ母の残せるイングリッシュローズ
大輪の薔薇の「ポルカ」はロゼット咲き重ぬる花びらゆつたり波打つ
グラジオラス朱赤は先まで咲きのぼり腰窓に見ゆ今朝のリビング
中一は肩幅広く背も伸びて夏の制服目映く見上ぐ
記念誌の「蘆火」制作工程を知りたく係決め第一希望す

カレッジの出席印の増しゆけば言葉交はせる人も増えゆく
芦屋川渡る風うけカレッジへ桜葉しげる木洩れ日の下
残りたる橋の名前や町名に古典文学ゆかりのわが街
男の孫は変はらぬ優しい目差しで問ひたることには短く答ふ
男の孫の夏服胸元ローマ字の小さな校名言はずに見をり
利尻山に夫と登頂したる夏北海道めぐりし旅の終はりに
影法師うごけば見つかるかくれんぼう百日紅の下で息ひそめたり
三年ぶり家族揃ひてバーベキュー大玉西瓜を舟形に分く
宿題はなけれど始まるカレッジが夏も終はりて日常もどる
週ひと日何かと刺激を受けながらシルバーカレッジ半ばとなりぬ

つなぐ手を優しくはらふ四年生いつの間にか育ちゆきたる
衣紋かけに両袖広ぐる祝着が風受け回る楓の木の下
この着物つぎに着るのは誰かなと五十年前の絞りの花柄
七五三着物を箪笥にたたみつつ写真の母に目差し向ける
バス停のそばの床屋のサインポール残る建屋も時が止まりぬ
暫くは本が読めぬと灯り消す白内障の手術の前夜
ポケットに母の戒名にぎりしめ眼見ひらき一点見つめる
緊張のとけないままに終はりたるふらつく片目に手を添へられて
日帰りの術後生活制約あり夫に任せる家事のあれこれ
生誕日癒えたる眼に空広くオリーブ植ゑる初冬の朝
成長のスピード早いと札にあり品種「ひなかぜ」オリーブ選ぶ
孫達のぬくもり残るドールハウス箱に目覚むる木製玩具
背の丸き嫗の手を引きゆつくりと中年男性歩道を渡る
ゆつくりと冬の温もりさがしつつ癒えたる眼の定期健診
闇の中の月食スポット裏道で友は大けが手足骨折
妹と師走恒例コンサート　イルミネーションの並木道ゆく
会場に余韻を残せる旋律はアンコール曲ニューシネマパラダイス
みどり子は凌悠と書きてりようと呼ぶ春まだ浅きお七夜命名
顔ひこめ植ゑたる若木の樅の木が広がる空に真つ直ぐ伸びゆく
壁紙に今も残れるテープあと野球少年のストライクゾーン
声変り二人の姉の背も越えて来つ孫は
産土の朝の社に細き雨お百度石を撫でつつ踏みゆく
須磨寺を孫と連れ立つ境内にほころび初むる紅梅白梅
なき義姉の残せる刺繍の女の子そのひ孫に作る小さな鞄

三年ぶり古里古民家ひな祭り瓦葺き屋根は昔のままに
小犬乗せベビーカーを押す人に引かれゆく犬足並そろへて
巣箱から雛の鳴き声聞こえ来る緑の風に耳を澄ませば
「夏は来ぬ」卯の花匂ふ並木道マスクはづして口遊みつつ
バスに揺られほんの束の間うたた寝し家路に向かふ足どり軽く
車内のアナウンスに聞く窓外の孫の予備校通り過ぎゆく
杏色の固き蕾は膨らめるアーチに伸びゆく昨年より今日
西窓に誘引をするアバシゴーヤ思ひのままの蔓の手をひく
ガラス越し施設の従姉は車椅子マスクをはづして小さく微笑む
生誕日九十六歳の母の友弾める会話に母を重ぬる
古里の土に育ちたる米野菜嫗のぬくもり箱いつぱいに
枕元のほど良い灯り冬雷誌に栞をはさみ一日終はりぬ
桐下駄を庭におろせばカラコロと音がころがる遠き日の夏
初生りの赤子のやうなるゴーヤの実蔓につかまり葉陰にゆるる
蝉の声広がるふる里境内に百日紅咲くあの日のままに
パラソルに注ぐ日差しはやはらぎて移ろふ季節の風渡りくる
男の孫の育てたる鈴虫鳴き声が元気に響く電話の向かう
旅先で夫と選びたる鳩時計再び時を刻むリビング
朝あさに松ぼつくり形の重りなる鎖を引きぬ振り子の時計
鳩時計専門店の入り口はどこか懐かし小さな丸太小屋
カレッジに紅茶クラブの募集あり少し知りたく応募してみる
友達と学校帰りの男の孫はすれ違ふ時小さく手を上ぐ
あしや部の市民活動プロジェクトに男の孫参加すビーチクリーン
釣り来たる鯵を六匹調理すとユーチューブ見つつ男の孫挑戦

野村灑子（のむられいこ）　（千葉県）

少々ボケてきました

高速道に八ヶ岳連峰見つつ行く土手に光りぬすすきの穂群が
修学旅行の体験として海なし県の娘ら湖をこぎわたりゆく
「おれが」で生きず「おかげ」で生きよ高僧の言葉を書きて心に置きぬ
会話するときの相槌の大切さ「さしすせそ」で言へと講師はのたまふ
「さすが！」「しらなかつたワ！」「すごーい」「センスある」「そーヨね！」相槌数々
大皿に盛られ出さるる「いなり寿司」含めば中より蕎麦のいでくる
一過性脳虚血発作と書かれある吾の診断書に亡父しのばる
吾を乗せ救急車はサイレンを鳴らしつつ暮れかかる病院に向ふ
老人を介護する若きの接し方皆慈愛に満ちゐて明るし
東京に向かふ特急の窓明かく長き光の紐通りゆく
沈みゆく陽の残り影くつきりと茜の空の果て富士山浮かぶ
暮れてゆく静岡にある富士山が湾をはさみて見する逆さ擂鉢
製鉄所よりふき出す炎今朝はなく林立する煙突静かに立てり
湾近き浜に立ちたる鋼材の首の長きは麒麟の如なり
きりんの如立ちゐる二本の鋼材の今朝は一頭が首倒しをり

暗黒に染まる鉄路に音させて長き列車は通りゆきたり
呼び水の如く口湿すひと口の水に大量の尿のいでくる
今時の若者のやうにブラウスの裾をさめず検査のあれば
猫じやらしたくさんの実をかかへゐて風に飛び出しゆくを待ちをり
逆転優勝野球の場面はいつもいつも鼻の奥がツンとしてくる
息荒く土俵をおりてゆく力士胸、背に汗の光りて流る
障害者の作りたるとふクッキーをまはり道して買ひ求めゆく
県警本部の窓にやあらむ午前二時赤々としてその階明るし
気づかれぬやうにひそかに房たらし庭の辺に咲く一人静は
老人を電車に坐らせありつたけの注意を言ひて若きは降りたり
博物館のビデオに見たり草木も虫も生命あるもの種をつなぎゆく
飛来する鴨のちがひを見分けむとくちばしの形色から選びぬ
長年を住みをれば家の立て付けも人間のやうな癖がいでくる
佃煮にされたる小蝮（いなご）香ばしく吾も跳ねて遠くへ飛べさう
庭木々に新芽のはえて騒がしく実のなる木には小さき実認む

小指程の太さの蚯蚓もこの頃は驚かなくなる病葉掃きゐて
恐竜の名残りの如き長き尾をくねらせトカゲは草むらに消ゆ
花より気が発生すると聞きおよび部屋隅に飾る庭のくちなし
牛乳パック二本分を胃に流し気分悪しきまま検診車に乗る
にはとりの鳴く声の如声高に用件のみ言ひ電話切れたり
二、三日雨の続きて踏みいだす足跡に即水たまりゆく
とぶらひの時しか会へぬ友ながら饒舌に過ぐを悲しと思ふ
餌をねだりをるらむ幼き燕の口菱形の黄の色いつぱいに開く
郷土カルタに鶴舞ふ姿と読まれゐる群馬県の形地図中に追ふ
ふるへゐて直なる線の書けぬこと嘆きつつ友は手をさすりゐる

毎日同じ事して始まる。アレしてこれ持ってと思い階段を下りるのに必ず上に置いたままの時がある。しっかり覚えていたのにすっかり頭から抜けていて用をなさない時がこの頃多い。いいや！上に行けばあるからとそれ程落ち込みはしないのだが、先日ハンチング　をかぶってでかけたのに、家の中どこをさがしてもない。どこかへ置いてきちゃったらしい。夜寝る時には指さし確認でコンセントからコードを抜き玄関の鍵上下を確かめ、ガスの元栓をしめるのに起きるとポットの電気はいつも入ったままだ。ボケてきたのかもしれない。

修学旅行の生徒ら満面の笑み持ちて湖にスワンの乗物を漕ぐ
湖に浮かぶスワンを漕ぎ進む修学旅行生の若き声ひびく
諏訪湖の水光りつつ山並みの上にうろこ雲広がりてゆく
天気予報の雨より晴に変はりゆき木々の間より靄立ちのぼる
草生ふるを避けむとしたる庭道の敷布の端に蟬のぬけがら
生まれ出づる蟬驚かむ土の上に布長々と敷かれありて
蕎麦詰めて卵オクラに紅生姜飾れば見た目は「おいなりさん」なり
救援の消防士を案内し浴室に入り来たりぬ介護の人は
夜になり患者らそれぞれ癖のあり寝言いふ人いびきかく人
一人一人の命あづかる職場にて若き看護師らはきびきび動く
カーテン越し食事の介助に接しゐる女性看護師の声のやさしき
物皆が騒がしく建つ西方のあかね色の中に浮かぶ富士山
極寒の日なれど昼間は太陽のぬくき光に湾はきらめく
沈みゆく太陽にあかね色の空塗り替へられて墨色となる
海囲む周りに位置する製鉄所絶ゆるなき炎天空に上ぐ
新しき屋根板の荷か傾斜ある屋根に置かれて冬陽あびゐる
空気中に種は舞ふらむ庭隅に咲きたる三時草午後には萎みぬ
駐車場出来たる頃は猫じゃらしこんなにたくさん生えてなかった
眠れずにをれば眠剤に頼らむとして一時間闇に目をむく
新年に入院したれば年賀状の住所確認未だ出来得ず
眠剤を今夜は飲まず眠れさう暗きへやにまなこ閉ぢたり
魚屋がさばく手元を見習ひて鰺を三枚におろしてみたり
シャカシャカとリズムよき音電車に隣る若き人の耳よりもれる
思ひつめ眠きに眠れぬ日の続きうつうつとして又朝がくる
年初め丈詰めを思ひたる服春過ぎて着る機会なく猛暑は目の前
駅前のパチンコ店は遅くまで中迄見ゆる程輝きてゐる
寒き日に三時間余り坐す車内腰下よりやはらかき暖房のぼり来
湯上がりのやはき足裏のひとところ固きかたまりにタコのできてをり
球場の乾ける土に撒く水に色変はりゆき試合を待てり
北海道の草原に風吹けばひとつひとつの葉表光りぬ
豆腐屋の揚場や槽もこはされて廃業したる土間広々とせり
八月の末に聞きゐし法師蟬の声早も聞く七月末に
ホシガラス枯れ木の穴に咲き初めたる花の蕾をつみきて隠しぬ
我が生家の財力乏しと非難せし姑の言葉に傷つきし日々
出張に生家の地へ行くといふ夫に姑へ電話かけさせき
多忙なるを言ひ訳とする夫に離り住む姑に電話うながしき

橋本文子（はしもとふみこ）　（鳥取県）

冬ならばスキー場なる大山に人々多く空澄み渡る
リフト等秋は動かず親子連れゆつくり静かに高原歩く
近年は登る人なき岩山は大山続きと思へぬ姿
紅葉と松の緑の美しく家族づれ多き十一月三日
孫たちがスキー習ひたる大山の秋空晴れてこどもらの笑む
大山から米子市への帰り振り向けば山の上に美しき月
帰り道米子の街のはるか西夕映えの空あそこは島根
安来の田に白鳥飛びきて餌食べる静かな冬を見に行く一日
あちこちの田ごとに白鳥群れなして静かに落穂ついばむ平和
頭まだ灰色の幼鳥小さくて親を見習ひ落穂ついばむ
年末の大仕事なりし餅搗きを卓上でする電動餅搗き機
室内に餅の香りの漂ひて機械の搗きたる餅にほほゑむ
ウクライナ助けられたる子供抱かれ親の安否も案じつつ見る
人間が人を害する事なかれ人々の願ひ届かぬ戦
戦争を語る友も今は減りこの先さびし昭和に育ち

帰省せる孫はすぐに我の名と猫の名を呼ぶひとつなぎにて
朝六時稜線の上あかね色ひと所高く大山見える
水仙が一輪二輪咲き始め菜の花連翹（れんげう）黄色が続く
春の花先づ黄色かと見る日々にチューリップの赤濃く淡く咲く
鮮やかな春の庭にはシヤガ白く静かな姿に今年も咲けり
カザグルマといふ花咲きて記事となり城跡に見入る学者の姿
カザグルマ紫の葉は五枚にて白く咲く花とても小さし
道々に市の花といふつつじ咲き米子市の春とても美し
米川の両岸につつじ咲き続きその先はるか夕日の沈む
母われに美しきもの見せたしと娘の車静かに進む
一人歩きこの頃はせぬ我の為景色よき道進む娘よ
わが庭に採れる苺の小さくて豆粒なれど喜ばれをり
「小粒だね」わが庭の苺を見る娘に拡大鏡を添へておく我
幼き日小学校から帰り来て庭の苺の楽しみなりき
坪庭の胡瓜の採れて初物を喜ぶ娘ら我も嬉しく

庭の野菜喜びを言ふ若者よその優しさも味はひの内
日中と夜の温度差大きくて信州の野菜おいしかりしよ
小夜更けて針仕事する母の歌明治生まれの母を思へり
この秋は小中高生合唱コンクール楽しめるかなあと心待ちする
どの国の人々であれ音楽を楽しめる世にあれよと願ふ
日野川の流れ豊かに日本海へ注ぐところにあまたのトンボ
自宅にて採れる野菜を語る時誰もが優しい笑顔にてきく
「いーよかんしかしない」といふ菓子頂きぬ松山名物笑顔に味はふ
倉吉市の静かな日々におんぶして散歩した孫嫁ぐ日となる
「評判のよいクリーム」言葉添へ置きみやげして孫嫁ぎゆく

東には低き山並び田は広く人の姿は稀に見るのみ
鳥たちは米子の水鳥公園に夜をすごし昼は安来の田にをり
旅の土産「博多通りもん」なる菓子貰ひ由緒の文字は小くて読めず
お父さんが揃いてお母さんが手返しの唱歌も昔の歌になるらん
高島屋にて花の鉢植ゑする機会に恵まれ美しきシクラメンパンジー
娘から三年日記帳贈られて「完記できるか」思ひつつ受く
三年日記帳渡され考へ込む我に「前回と同じ」と娘は元気
庭の鉢に作る小松菜折々に食卓に供する我の喜び
終戦後外地から帰れる軍人家族に冷たき親類ありしと聞きぬ
タクシーの止め場所わるく転倒し骨折せりと語る人あり
三月八日鉢に水仙あまた咲き娘は鉢ごと職場へ運ぶ
職場には係ごとの花畑ありてそれぞれ工夫楽しむ
戦争が民間侵すこと無き様定められても守られぬ今も
菜の花も小松菜の黄もやや濃くてちんげんさいはやや淡き黄
鉢植ゑの苺丸型の葉の中に丸く小さく実の見え始む(四月三日)
城跡に上りたる頃若かりきもう上れないと思ふとさびし
あぢさゐの淡き紫咲き揃ひ六月の庭日本の風情
風鈴草白き房花に雨たまり枝ごと折れたる悲しみ伝ふ
ミニトマト朝日を受けて光りをり僅かなれどもみんな喜ぶ
トマトなどあまた採れたる日は去りて九月の庭にトンボとび交ふ
鉢植ゑの野菜なれども若者の喜ぶ様に我も喜ぶ
婦人の大臣多くなりひな祭りの如和やかなれや
トマトはや枯葉の見えて葉を取れば又ポツポツと実の育つ十月
九十を過ぎたる我を案ずるか男孫の電話「お薬飲みましたか」
外出を一人ではせぬ秋の日に庭のキンカン生り始めたり
NHK合唱コンクール久しぶり若き歌声みな美しく

羽田孝輝（はだこうき）　（山形県）

入院前日

夕暮れに男結びの手を休め今年も来たる白鳥見上ぐ
小春日に大根五本結びをり脚立に上がる足震へつつ
亡き母を語りて姉と二人して朝露の畑に大根引きぬ
霜月の星散りばめる寒き空欠けゆく月に目を凝らし見る
初めての男結びで囲ひ終へしみじみ眺む夕の庭先
やうやくに雪を迎へる準備終へテレビは明日の大雪伝ふ
捥れずに数多残れる柿の実を熊にやりたし雪降る前に
毎月の文書配付と通院に追はれ気付けば年送りたり
この冬は雪にもゲリラあるを知り腰まで埋まり除雪に追はる
鶏は感染せずとも皆処分生ける命はみな同じもの
整然と連なる文字の行間に心探して賀状読みをり
大根を漬けたる水が上がらぬとやり直しせる妻の手赤し
青色と鉛の色を繰り返すげに忌々し冬空見上ぐ
除雪車の後退知らすピーピーで今朝も目覚むるまだ午前四時
日脚延び気持ち弾みて空見上ぐ光和らぐ春の始まり

桜咲き田起こし始むる穀雨前野に一面の雪景色あり
苔むして倒るる桑の老木に様と呼ばれし蚕思ひぬ
をちこちに雪まだ残る春の野に勢ひ流るる沢音寒し
春彼岸入りは一人で来たる母明けには朝に父を連れ行く
をちこちに水仙山茱萸連翹と黄色ばかりが溢るる四月
残雪と見紛うほどの芝桜そぼ降る雨にいよいよ寒し
猫たちの縁に身を伏せ固まりて見上ぐる先に四十雀ゐる
剪定する鋏の先に飛び来たる熊蜂の翅頬を掠める
落ち着かぬ明日の今頃手術台あれもこれもが手につかぬ午後
手術すればこれ以上悪くならぬと言はるるも署名に躊躇ふ三日前
入院の準備進まぬ雨の午後気持ちは重く雨より重く
亡き母にあげよと紫陽花持ちて来る姉はますます母に似てくる
赤紫蘇の揉み方姉に教へられ今年も杏甕に漬けたり
猫たちの土産にせむと車停め木天蓼の枝引つぱり手折る
病棟の暗き廊下を歩きゐて二十歳の頃の不寝の番思ふ

手術後の右腕は自分の腕にあらず痛みとともに自分に戻る
神棚に猫ら一緒に上がりをり左右に坐して狛猫となる
畑中を走る車は夕陽受け光となりて緑突き刺す
姉逝きて丸五年経つ命日に好みし固めの桃を供へる
昨日より今日なほ暑く今日よりも一層暑き予報に見入る
この暑さ何もせぬとてただ暑い何もなさずに今日も過ぎゆく
猫たちはこの暑き中それぞれに涼しき所探し腹這ふ
祭り終へ山の端白くなる頃は出稼ぎに行きし亡き父思ふ
学童は横断歩道渡り終へわれに向ひて頭下げをり
人間も熊猪もみな同じ何も違はぬ命の重さ

投稿締切に追われることが増えた。時間だけが過ぎる。残響集を毎月気にしている。選評を気にする。選評にもない月は少しがっかりする。残響集を、選評を意識する。気負う。詠むほどに思いから遠のく。どこか一人よがりの歌になる。気持ちのどこかに上手な歌を詠みたいという思いがあるのだろう。心を穏やかにと始めた歌が思うようにならない。何も考えず、思うままに伸び伸びと詠みたいものだ。自分の言葉で、自分だけの歌を詠みたいものだ。

山ほどに丹波栗を拾ひ来てただひたすらに鬼皮むきぬ
渋皮煮葡萄ジャムに芋柄とけふも忙しく追はれ暮れゆく
寒空に遠く聞こゆる白鳥の鳴く声闇に染み渡り行く
ラフランス今年も食べ頃逃がしたる来年こそはとごみ箱を見る
夜鍋して折角干したる芋柄に猫ら手伸ばしおもちやとなりぬ
ラジオから「第九」流るる日暮れ時冬の支度に追はるる師走
一ミリに執念見ゆる日本の逆転に沸くワールドカップ
蹴球のワールドカップ二週間眠さ忘れて何度も見入る
コロナ禍も物の値上げも寝不足も皆吹き飛ばす森保ジャパンは
何度でも繰り返し観る逆転劇終日冷めぬ大興奮は
そこら中捥れぬままに腐れ落つ柿の実あると獣よ知るか
「戦」が今年の漢字に選ばれたり来る年憂ひ年を送りぬ
いましがた吾が通りたる高速の雪に止まるといふラジオに聴き入る
戦時下に蝋燭灯し讃美歌を歌ふ人民あるを忘れじ
寝床から父を繋げるこの管は生を与ふる酸素を送る
わが娘分からぬ程に俄なる病ひ進みて父変はり行く
寒中に卵産みたる鶏よインフルエンザになるなと願ふ
年末は笑ひて孫と話したる病ひ俄に父を変へゆく
昨日まで酸素の管に繋がるる父は俄に歩けなくなる
学校で習ひし漢字すつ飛ばし何でもありのキラキラネーム
糖尿の一歩手前と告げられて薬は飲まぬと夜に歩ける
ネオナチはどこに居るかとプーチンに問うてやりたい二年目の春
世は移り絶滅危惧となりにけり大和撫子日本男児

梅桜辛夷も咲ける春の野は雪を纏ひて朝日眩しき
今日もまたニュース速報見入りをりミサイル発射にもう慣れた春
春浅き林に咲ける辛夷花残れる雪と白さ競へり
数多なる行政文書を受け取りて仕分け配布に追はるる四月
道の端に旅立ちを待つ蒲公英の綿毛に見入る清しき朝に
をちこちに候補者の名を連呼する艶を無くした鶯嬢の声
白鳥は一糸乱れぬV字なし空の青にも染まず飛びゆく
縁石の隙間を割りて咲く菫お前の力強さわれにも
子育てに大忙しの四十雀子ら鳴きて待つ竹垣の中
終りたる花摘む鋏のその先にもう少し待てと熊蜂飛べり
ひとつ事をやりだせば他みな忘る認めたくない惚けの始まり
昨日まで餌を運びゐし四十雀子らの巣立ちて静かなる朝
明日からは暫く右手が使へない今日のうちにと文書作りぬ
目に余るキラキラネームが世に溢れ昔習ひし漢字を忘る
右腕の神経移行手術受く痺れ消ゆるは半年先と
入院患者の腕に付けたるバーコード物の如くに管理されをり
点滴の管の向かうに見ゆる青まだ陽は高き十七時なり
手術中会話聞いてる勇気なく迷はず選ぶ中島みゆき
連日の猛暑続きて引き籠り何もやる気が出ない八月
長髪の球児の姿に些かの違和感覚ゆ甲子園の夏
父逝きて新たな夏を迎へをり子らは願ひを尺玉に乗す
十月になるや一気に冷え込みて猛暑よ少し戻つてこぬか
雨続き急に小寒い朝夕に我儘なれど猛暑を思ふ
足元に猫寄りきたり頬付けて頭も擦りて仰向けになる

終盤は時の流れに身を任せ気ままに行かむわれのこれから
雨上がり昨日の虹は高架橋今朝見る虹は沈下橋なり

浜田（はまだ）はるみ☆　（埼玉県）

ウクライナ被害続く

一ヶ月あと半月と日を数え四十年の仕事を終える
退職の祝花片付けスッキリと生活切り換え礼状を書く
各国の物価高騰がイスラエル支援低下を招くと懸念す
ロシアの戦争犯罪裁くのは何時になるのか虐殺の数々
旅行の制限低くなり急に開放感が伝わりてくる
昔なら描き終わったら絵は終わり今は何度も手を入れ仕上げる
シャンソンは聞くものでしかなかったが習い始めてその世界知る
習い事自分の唄を聞く度にへたっと言いてがっくりとする
人生の喜怒哀楽を唄うのにシャンソンでも演歌でも良し
念願の趣味を始めてその不出来悩む時間は贅沢なこと
大過なく過ぎたる仕事に感謝して難民支援に協力をする
ケンタッキー聖夜の予約に驚きぬ二週間前で既に一杯
友から何度も干し芋送られてこんなに好物食べた事なし
ロシアの傭兵集団ワグネルの実体徐々に明らかになる
ストレートな歌に出会えてスカッとす命を守れ戦争するな

原発や化石燃料は逆戻り戦争続けば温暖化進む
四十年振りのプールは水重く驚く程に浮かなくなりぬ
五年振りに逢う旧友は癌になり尚の事嬉し桜の下が
ウクライナ百年の歴史を知ったならプーチンが何をしても驚かぬ
知った以上黙っているのは罪という今起きている残虐なこと
苺狩りビニールハウスは暑すぎて凄い勢いで10分食べぬ
結婚をしない我が子より大谷翔平君の嫁が気になる
値上がりしない物でも量が減り子育て中の家庭を思う
美の壺で藤の花見て行きたいとすぐに近くの名所を探す
藤の幹大きくうねり広がりて池の上まで張り出しており
紫陽花はひと玉描くのもしんどくて省略したき心と戦う
気に入った夏のジャケットまたも無く予定外の服買いてしまいぬ
水害の警報去りたる翌日に向かいの人と長話する
十六年住みて初めて個人的な話ができて避難は一緒にと
ストレッチ体験教室に興味あり町内なので気軽に出掛けぬ

我の絵を希望していた友人に一年がかりでやっと手渡す
遺伝が一番出るのはスポーツと唄に納得進歩遅き唄
三十年振りに会いたる甥達との食事写真を何度も見ている
無口な兄から聞くこと少なくて好青年の甥の姿嬉し
なでしこはスウェーデンに敗れたが向日葵の如く活躍したる
夕立ちの音に目が覚めこんなにも明るい空に干し物濡らす
あどけなき子供連れ去りウクライナを憎む教育しているロシア
クーラーを昼夜使いしこの夏は外出減りて体力落ちる
彼岸花スケッチに備え写真見て複雑な形初めて知りぬ
クーラーをつけなかった日扇風機もいらぬ日がありやっと秋になる

ロシアのウクライナ侵略が簡単には終わらないと知った一年であった。二〇二三年ほど暑い夏は初めてで、コロナ禍なので真夏もマスクを手放せず、外出は極力避けて涼しくなるのを待っていた。コロナが下火になり旅行制限も無くなった時、思い切り秋の空気を吸った心地良さを思い出す。

また世界に目を向けるとウクライナだけでなく、パレスチナとイスラエルの争いも加わり、益々暗い年となった。

眼科探し仕事の後任探しにて落ち着かぬまま数ヶ月過ぐ
絵の生徒平均年齢若くなり我ら四人は古くなりたる
プーチンの威嚇狂気なり原子炉を爆破してまでねじ伏せたいのか
そろそろマスクはずして爽やかな秋を吸いたい最高の青空
数十年会っていない甥が出てスマホの声は大人の男
六人全員揃うは四年振り二人の退職祝いてもらう
十二月早くも寒波に見舞われて豪雪被害の日本海側
メディアの報道からは見えて来ぬウクライナ兵士の撮りたる映像
ロシアの猛攻撃があるという降参するまで終わらぬ戦争
表紙絵の可憐なオクラにはっとして花びらの薄さ伝わりてくる
材質が伝わるように描きたいと工夫をするがなかなか出来ぬ
やれば良い家事は有りてもやる気なく体力落ちるこの数ヶ月
玄関で刺されたる事件恐ろしく玄関チェーンを使わなくては
コロナ禍で実学志向高まりて情報理系の女子急伸す
「帰郷」読みあずささんの言う日本の良さ生ぬるさ伝わりて来る
齢とりて道路の端の傾きが歩きにくいと気付いたりする
不出来な絵眺めていると時間のかかった絵ほど愛しくなるらし
重い腰やっと上げたる運動を急にやりすぎ疲れ長引く
満開の梅の季節にもう桜咲きそうな明日は二十度という
アクティブな年下友に誘われて友の水着でプールに入る
リゾートもスパも興味無く初めてハワイアンズに行くことになる
沈黙は同罪なりと言う言葉肝に銘じて行動したき
冬のような寒さに戻りもう鍋の素が売っていないなんて
楽しんだWBC歌にせずきっと大勢詠んでくれると
新聞の五回シリーズ医学部の医療ルネサンス興味深く読む
驚きぬ桜もツツジも早く咲きこれも温暖化のせいと言う
この時期になると毎年思い出す母校の庭の小さな藤棚
急行で二駅隣りの越谷の久伊豆神社に藤あると知る
神社は平安末期の建立で藤の樹齢は二百年以上
張り出した藤の枝は支えられ多くの支柱がスケッチ邪魔する
二時間弱ではいくらも描けぬが疲れを考え終わりにしたる
読書も拡大鏡では疲れすぎ読みかけの本何冊もあり
俵万智のテレビ見てからアボカドの種の芽吹きをコップで試す
線状降水帯が恐ろしく早目に車だけ避難をさせる
体験と言いても殆ど経験者ストレッチ教室年齢低き
いつもなら鰻重は梅を食べるのに松おごられて味忘れられぬ
諦めよう唄は向かぬと思えどももっと努力とレッスン日増やす
ロシアの内乱すぐに鎮圧され束の間の歓喜失われたる
外国の会社の競争聞かせくれ出世するには日本より厳し
歯科眼科マーケットの他外に出ずクーラーと西瓜切らすこと無し
本土寺の歌を見つけて思い出す紫陽花スケッチしたる暑き日
玄関の植木が隣家に傾きて慌てて結び傾き返す
曇りの日駅までの徒歩三月振り外の空気は気持ち良き哉
子供でも使える銃のカラシニコフ持ちたる少女の写真思い出す

林（はやし）　美智子（みちこ）☆　（東京都）

生日のバラ

文化の日ひとり思い立ち上野毛の五島美術館に西行展を観る
西行の和歌懐紙なる筆跡の美しきを辿るまなこ凝らして
絵巻どれも美しけれど我が娘を縁より蹴落す図は心に染まず
庭園に出てひと息す珍しきキンギョツバキあり葉の先三裂
ウクライナと父の日記が重なりぬ戦禍の後の何もなき暮し
ようやくに葉を落し切り大柳の垂直に流るる枝の美し
葉の落ちた枝垂柳を透かし見る紅き山茶花咲き盛るなり
雄花持つ芽吹きの春が待ち遠し居間より眺む枝垂大柳
心臓にペースメーカー付けてより電気嫌いて湯湯婆（ゆたんぽ）使う
ストーブの上の薬缶にたぎる湯を注ぎて朝まで温き湯湯婆
湯湯婆を使いて暮しを顧みる電気止まれば動かぬあれこれ
二月十日予報通りの雪となる柳の幹の黒々として
雪解けて青空の下に立つ柳枝先はもう緑がかりて
用水に張り出し香り届かずも蝋梅初めて花を咲かせる
突然の雨に園児らの列乱れ伸び縮みしてかど曲がり消ゆ

大柳のしだれる枝に雄花出づ精緻なるレースのごとくたおやか
今日からはマスク着脱自由と言うもスーパーも医院も景色変わらず
亡き嫁の食べる仕草や表情を思い出すなり蕗の薹つむ
戸を繰れば爽やかな風が流れ込む温州蜜柑の蒼白々
草取りて茄子・ピーマンに支柱立て水遣りすればほとほと疲る
この疲れ年の所為かもウェブヨガのマットに座ればもう夢の中
文具店・本屋も消えて自転車で買いに行けない物が増え行く
バラ五本息子と孫が選び呉れ我が生日のテーブル彩る
真紅二本ピンク二本に白一本この白バラが気高く香る
若き日にバラの水揚げ教え呉れしひと思いつつ茎の皮剥ぐ
太く長い立派な茎持つバラなれば日に二センチを切りつつみずみずし
五日経ちふんわり広がる花びらと茎丈に合わせ花瓶を替える
テーブルにピンクの花びら散り敷いていよいよ来たるバラの終焉
白バラはふくふく太れど反り返らず生気失せつつも未だ香れる
ドライフラワーにするまでもなく咲き切りて我が七十九歳を祝いしバラたち

日の落ちる頃見計らい用水の水吸い上げて野菜に水遣る
十日程息子に留守を頼まるる畑の収穫大き犬の世話
米茄子が見事に成りてるいると厚き葉の陰に輝いており
少しでも草むしらねばと身仕度し夕暮れ前を鎌持ち出でぬ
隔月に整形外科にて薬もらう骨粗鬆症の改善進まず
草むしりは運動にはならずと医師の言う草をむしれば歩く暇なし
友よりの包み開ければ爽やかな香りまといてパッションフルーツ出づ
時計草の不思議な花を思いつつパッションフルーツに甦るなり
秋来ぬと金木犀が薫るなり令和五年は十日遅れて
水澄みて用水の辺をひとめぐり辛夷の赤き実青空に映ゆ

六十歳の時に冬雷に入会させて頂き、今年で二十年になります。いつまでも新人の気分が抜けずウロウロしております。入会の折の川又先生との「辞書を引くこと」「欠詠をしないこと」という大事なお約束を、身内が亡くなった時などどうしても守れない時もありましたが何とかこれからも細く長く続けさせて頂きたいと思っております。先生方はじめ冬雷誌上で長い長い時を共有してこられた方々の歌から、時に楽しく、そしてその底に深い生き方を学ばせて頂き、心から感謝しております。

もうこれが最後だからと小学校のクラス会あり出席十名
案内状の宛先不明多数なり小学卒業六十六年経て
三十歳の娘失い幼き孫三人育てたと語る友あり
ひと言のはずの近況報告が半生を語り語らるる会に
結局は又会いましょうと約束し心の洗濯をしたクラス会
夕暮の買物帰り見上げれば通勤電車の窓明々(あかあか)と
知合いの魚屋さんより鮫鰊を丸ごと買いて息子奮闘す
冬雷の表紙絵に咲くオクラの黄爽やかなれば度々見詰む
食卓の私の席の正面に農園はさみて大柳立つ
きっと言う「雪の明日(あした)は洗濯びより」母の笑顔が浮かぶ晴天
耕せるふかふかの土に植え替えたネギが並んで砂風呂のよう
孫はたち男の子と言えど突然に化粧品増え洗面台賑わう
玄関脇に艶々茂る月桂樹日毎手折りて料理に欠かせず
こぶしの花一夜明ければ満開に濃き雨空の下に白々
ひよどりが満開のこぶしにもぐり込み蜜を吸うらし花びら散らす
昨日雨今日暖かくスキー場のコンディション変わり孫迷いおり
亡き嫁の友より無農薬野菜が届くのらぼうあしたば紅菜花(べになばな)など
青空にカリンの花が可憐なり黄色の大きな実には似合わず
四月十日松ケムシ出て大騒ぎ三月中の手入れ怠り
刺されれば激痛ありて腫れ上がる松ケムシごと枝先を切る
松ケムシ松の小枝に似せており水張るバケツに葉ごと沈める
ベランダから身を乗り出してケムシ退治奮闘するも未だ半分
風強く黄砂も飛べば大柳ゆさゆさブンブン愉快そうなり
久々にオーブン手に入れケーキ焼く皆喜べば三日続けて
友よりの心尽しの小包はマヌカハニーに生姜ペースト
盲目のピアニストなる梯(かけはし)さんのCDを聞く生姜湯飲みつつ
姑の言葉思い出す五月五日「怠け者の節句働き」
物価高騰予定の食費を遥に越え今日は買物に行かぬと決める
疲れ出で節々痛むも愛らしきカーネーション届き心かろがろ
近頃の私はとても怒ってばかり新聞・テレビ・夫の行動
食材に「これ使います」の貼書きをせねば夜中に夫が調理
電車にて紙にメモるは私ばかりいずれもスマホで用足りるらし
初生りの茄子とピーマン艶艶を朝食に添え孫喜ばす
ルッコラにバジル・フェンネル雑草に負けずに育つ息子の畑
連日の酷暑に息子より電話来るプロヴァンスは涼し過ごし易しと
四年振り再会記念の写真見るコロナに閉ざさるる時間の長さ
ともかくも歩きなさいと言われれば用水沿いを朝ひとめぐり
パッションフルーツ二つに割れば種と実と更に香りて心洗わる
人知れず咲く白萩をこれ何と娘は知らず我が教えざりしか
南天の生い茂れるを息子見兼ね切りくれし様我が窓あらわに
我が庭の温州みかん黄み帯びて朝ひとつずつ香り立て食む
夏の疲れ引き摺りていてはもったいなし短かき秋を虫鳴き競う

藤田英輔(ふじたえいすけ)☆　（高知県）

卵の年に

天辺に鈍く朱色の木守り柿一つ残した古木と出会う
父の訃を受けたる夜の静けさや煌々と照る病室の窓
赤銅の望月見上げ電話代も無き頃のこと思いだしたり
夕焼けに染まり紅葉したらしく山粧いて季は移りゆく
ゴッホ・モネ・ルノワールから愛された梅花黄蓮吾が足元に
石垣や天守を彩るイベントに深き緑のスエコザサの色
自販機にＨＯＴが多くなる頃の散歩の犬は速足となり
「ふ」と打てば冬と並びて父の名が現れている予測変換
初空に浮かぶ綿雲変わりゆく時々刻々生まれ出づるも
カフェ開店小銭バッグを携えた一番客は卵のトシオトコ
叔母が縫い祖母の着付けたる振袖の新成人ははにかみて笑む
実家より病院に行けば会えたはず吾が名を呼びし父の笑顔に
土佐町に零下七度の朝となる吾も飼い犬も散歩の気失す
文旦の黄の実朝陽に光りおり墓地への細道曲がりたる時
艶光りする先端は棘となり侮り触れるを咎める蘇鉄

「今日からは個人判断。脱マスク」吾の誕生日の新聞トップに
スマホにて二人並んだ写真受く生受けて二時間の子とその母の
厚き雲去りて日射しは暖かく模様替えしたる空が広がる
面会は幾月振りか母の身は歩いているか覚えているか
春陽受けユキモチソウの如く見ゆ赤児抱き来る退院の娘
初めての陽光受くる乳児おり母に抱かれて眩しさを知る
ひと月に満たぬ赤児は全身で生きることのみ貫きている
母にまだ告げず日々過ぐことの在りあなたの夫と曾孫の死と生と
ドクダミの葉に弾丸のごと雨滴落つ平和の地ではそれだけのこと
歌うたい「あがた森魚」が紙魚となり残りたる夕六月のカフェ
乳飲み子は生後六十二日の今日四種の予防接種を受けたり
外出許可受けたる母と幾年ぶりのドライブをする歯科医院へと
ゆりかごは卯年卯月に生まれたる児を揺らし居て半夏咲きたり
コロナ禍後短歌の友と四年ぶり変わらぬ姿に雨気にならず
四時間の刻まばたきの間に過ぎて旧知の同人話しは尽きず

雨多く雪積もるこの庭なれどニオイシュロランは半世紀過ぐ
尖る葉を持ちて乾いた風を好くニオイシュロランは天と地を指し
太陽も豪雨も知らぬハウスにて土佐アマトウはぶら下がり居り
ズキズキと痛みてパンッと腫れたる手アシナガ蜂の怒りに触れて
四ヶ月となる乳児は初めての麦茶を小さじに三杯飲みたり
切っ先に花の名残をかさぶたの如く盛りあげアマトウ光る
藤の樹は伸びゆくつるを手足とし柵を掴みて陣地としたり
四国四県の早明浦（さめうら）ダムの取水率高知県には四パーセント
葉を掛けて枝をしとねとして実る土佐アマトウは隠れん坊する
右脚の古傷痛むか十三歳の犬は躊躇う低きジャンプも

ディケンズの本の中より現れた龍馬と書かれた栞手にする
傍らのブロック塀に猫まろび我関せずか側行く老犬
ガタついた全てのネジのひとつずつを締め治したき退職七年
殻割れば白き惑星真ん中にマグマを抱く手のゆで卵
機体より出づる排気は線となる黒板に引くチョークのような
嬉しきは朝の食卓蜂蜜のローズマリーを開けた元旦
駐車場を明るく照らす外灯の今宵も灯る葬儀所の前
二部屋に仕切りて永き壁を見て服脱ぎながら抜くと決めたり
九九算や方程式や絵を張った壁一息に剥がされてゆく
幼子の字で書かれたる手紙あり箱に並びて棚の奥の隅
朝陽受くキウイの弦の剪定は霜降りた日に五芽残しつつ
哀しみと安堵混ざりてコロナ禍を流そうとする「個人判断」
流されて行くことも吾の決断で言わずもがなの「個人判断」
処分すると決めて積み出す八年を受け留めくれたるソファー破れて
コーンの皮で作られたる人形は勇敢なカウボーイを待てり
あぁ今は五月の風が吹き渡りもの皆生命をうたう時なり
ぬばたまの夜空に向かいギター弾きはフライミーツゥザムーンと歌う
もうきっと触れられないまま終わり行くギターネックのフレットの在り
オリーブの葉に降り注ぐ六月の雨に旧車も濡れそぼちたり
海近く生まれ育ちし歌い手は吾が山間に恩師を歌う
半世紀超えて朽ちない歌を聴く天仰ぐ人うつむく人も
母連れて帰院の途中孫と会うマスク外して互いに笑みて
甘トウを入れたるコンテナ十箱となりて四時間の作業を終える
南風（はえ）受けて暫し会えずに居た友とグラスを合わす七夕の夜
送りたる駅入り口に雷雨来て「定点豪雨」という文字浮かぶ
一抱え出荷できないアマトウを貰いて帰る午前十一時
鉛筆で描かれているジーンズは絵ハガキと成るも壁に貼られて
このダムは四国の命満々と緑青色の水を湛えて
このダムの底に命の眠りけり朝陽受けても錆釘の色

藤田夏見（ふじたなつみ）☆　（広島県）

麦の穂

海のあお空の青さえミュージアムのアートの世界に紛れ込みおり
蕪若菜間引き日に干し糠に漬けご飯の上の青瑞みずし
日を追いて剥きたる柿の色かたち揃わず揺るる立冬の昼
しっかりと根を張る朝顔冬越しと鉢に植え替う夫の仕事
干しいたる蔓に残れる朝顔のひとつ開きぬ師走の庭に
掘り返す畑の土より冬眠の蛙一匹そろりと出づる
手を握り二人の温さわかち合い死ぬるということ孫に伝える
ワクチンを接種したる翌朝食後より筋肉痛に頭痛高熱
疲労感関節痛と高熱のコロナワクチン四度その都度
ワクチンの副反応は二日程食欲失せて二キロ痩せたり
説明書に十パーセント以下とあるワクチンの副反応わたしに当たる
「ワクチンは打たぬ五度目はもう良い」と家族 LINE につぶやいて見る
コンポストに堆肥つくらんと踏み込みぬ落ち葉草糠野菜の屑も
ひとつまみの草の根の土に十億の微生物働くコンポストの中
分解の進まぬ冬も二ヶ月後天地返しするコンポスト開けて

諳んずる歌の碑もある小倉山赤き椿と盛りの梅と
ミンチカツ団子甘酒は嵯峨野路を一万八千歩の心を満たす
レギュラーの百五十五円と点灯す旅の道中給油のチャンス
六十度急階段の彦根城天守の梁の削り粗あら
阿修羅像焦がれて来れば怒りおり悔しがりおり憂い隠さず
乾燥機手放す日となり惜しむ目の夫からかうわれも寂しく
クレーン車の宙に吊りあぐる乾燥機解体さるるも大きな形
籾摺り機性能良しと伝えたりトラックに乗り貰われてゆく
母の縫いし母の着物のリメイクの作務衣と巾着姉の手に為る
ポケットも袋も縫ってと姉に言う母の着物の端切れの模様で
零れ種芽吹く楽しみ庭を這い草取る春の巡り来たれり
満天星にタイムテーブルあるらしき熊蜂の時蜜蜂の時
百本の木に輝く甘夏柑のマーマレードはトーストの上
干からびる刈り笹除けん四年目の笹百合の苗来年咲けよ
肩に手をポーズの首脳等サミットをパフォーマンスとなすなヒロシマ

ひとつずつ軍手に拭う馬鈴薯を箱に収めて子の来るを待つ
生まれ日は花盛りとなれ丈を越し節ごとに花芽持つ琉球朝顔
麦の穂は六角形を積み重ね一粒ごとに髭を尖らす
茄子ピーマン玉葱人参ズッキーニ畑の五色の甘酢あんかけ
ラッキョウは時間が勝負と泥落とし座り込みたり瓶詰めまでを
踏み出した足を止めたる猫の目は庭に現るイタチを追えり
娘らの不協和音は孫達の顔を曇らすひとときなれど
ときくれば食べたき物のひとつにて金平とする薩摩芋の茎
軽やかに籾摺り機より出る玄米を手のひらに乗す粒の大きさ
闇に聞く太鼓と鉦はハネ踊り稽古の孫ら祭りの近し

十歳違いの中学生の姉との記憶は一反田の麦踏みから、「姉ちゃん寒いから帰ろう」「麦をこうしてどんどん踏んだら寒くないよ」。ひとりで帰ったのか、ぐずぐず言いながら姉に付き纏っていたのか、姉は覚えていないそうです。

幼い頃から甘えることを当然と振る舞い、なんでもお願い出来るありがたい存在の姉も八十代、今は、「世話にばかりなっている」という姉だが、本当にどれだけ姉を頼りに生きて来たかと思う。花壇に蒔いた麦が穂を抱いて膨らみかけています。

小春日の直島をゆくミュージアムにショートカットの山坂越えて
ドット柄の黄色のカボチャと孫を撮る晴れの特異日直島の旅
天窓の地中美術館に日向ぼこ異国の人らとジェスチャー交わし
南向きの光の形十字架の安藤忠雄コンクリートの模型
巡りゆく三つのギャラリーたっぷりの時を楽しむ孫とふたりで
霜月に霜のあらざり日ごと咲く琉球あさがお仕舞う末日
這いあがる朝顔の蔓屋根瓦に潜りておりぬそっと抜きやる
仕舞いたる琉球あさがお数多ある蕾を惜しみ手水に生ける
婀やかにネットに絡む朝顔の蔓はそのまま竿に干しおり
朝顔の蔓絡みたる網のまま竿に干しいるリースにせんと
年ごとにクリスマスケーキ持ち呉れし孫等のじいちゃんイブに
逝きたり
初めての棺に入れる花を置き抑えきれずに泣きじゃくる孫
玉の緒の絶えたる者になすべきを瞳を見つつ孫に聞かせる
しっかりと瞳を返しわが言葉を頷きもせず聞きいる孫は
その時はわたしの骨もと約束し骨揚げをなす孫と一緒に
雪降りてサンタクロースの来たる日の午後には祖父の骨拾う孫
春の風嵯峨野トロッコに裸木の桜ともみじのトンネル走る
自撮りする和服の人ら溢れおり嵯峨野竹林たか高伸びる
孫と見る道路標識は歌に書に知りたる地名琵琶湖一周
季節ごとの手前味噌なる保存食作らん広くなりたる納屋に
千日紅ビオラひまわり百日草コスモスの芽の庭に出できぬ
黒鯛は炭火に焼きて電気釜筍ご飯に香る山椒
陰干しの早生の玉葱根を落とし束に結わえて裏の軒下
笹百合の二つ蕾の二本あり山の中腹より手を振り知らす
四年前種を抱きし莢を見しあの笹百合の実生の群れる
連日の休暇となりて帰省子は広島離るるサミットの間
掘り立ての馬鈴薯畑にゴロゴロと昼まで乾かす梅雨の晴れ間に
花柄を取りつつ今宵古里に飛ぶ蛍思えり蛍袋に
梅五キロ塩と合わせてひたひたと水あがりくる二日目にして
塩を振り薄皮を剥きひとつずつ輝くラッキョウ瓶に微睡む
梅雨晴れの畑に茂る草を抜き起きあがる時頬撫でる風
朝顔の蔓生い茂り蜘蛛の巣は葉陰に小さき虫捕えおり
今し聞くトノサマガエルの声を待つ雨のあがれる雀鳴く庭
面会のわれらを見ずに義姉の手は袋の中の菓子をまさぐる
弟の記憶なきごとき義姉の目に夫の声のうわずりており
佇めば汗の吹き出るこの庭にブルーベリーは藍に熟れおり
鈴なりに熟れて色づくミニトマト小さき指の来たりて摘めよ
待ち侘びた従弟等来る日に熱出でて遊べぬ孫をなだめ抱きやる
従弟等にバナナケーキを作りいる高二の男子味見をせよと
一年生は蝉取りネットを振り回し幹を狙えり柿柚子枇杷の
白練の山紫陽花の微かなる花は途絶えず渓谷の道（三段峡）
この夏はサバナ気候か雨季乾季野菜作るも手探りとなる
赤き筋ばかりの芋を諦めて茂れる蔓にきんぴら作る
義姉の指す和やかな夫祭壇に幸せなりし一世を終える
ひたぶるに夫を支え「肩の荷の降りた気のする」義姉のささやく
ただただに反面教師と話しつつ父を見送る甥逞しき
重陽の節句の今日も朝顔のカーテン越しの真夏日の空

一階の天井抜きて乾燥機納められいる橋本家納屋に
乾燥機デジタル表示に籾摺りの時間決めたり四日の一時
籾摺り機の手順を橋本氏に伝え始動を確かむる夫と二人
九十歳のこの家の主二斗の米軽々運ぶお茶目な顔して
勇みゆく少女持つ撥若き日に夫の作りし樫の木削り
大根と卵里芋こんにゃくのおでんを煮たり牛すじの出汁
大鍋に練り物を足しことことおでん炊く朝婿の帰宅日

ブレイクあずさ☆（カナダ）

雁の翼

少しずつ同期してゆくかすかなるいびきの聞こゆ夫と猫の
道をゆく人みな隙なくマスクして多摩の夕陽の色は変わらず
三年ぶりに日本を歩く陽気なる父のもう居ぬ日本を歩く
亡き父のコンピュータは生きており画面に現わる得意げな父
空港に降り立ちて嗅ぐふるさとのほどよくぬるき晩秋の風
中央線に西へ西へと運ばれてゆっくり起き出す日本語のわれ
東京にあふれる機械の声声声人は行き交う素知らぬ顔に
駆けこむな釣銭をとれマスクせよ　過保護な親のようなる日本か
寒き夜に受けたる電話に柔らかく関西風の抑揚を聞く
留守番の夫を画面に呼び出せば猫の毛だらけでおかしな寝癖で
雪焼けの若き日の父笑いおり熊のようなる樺太犬と
亡き父は生涯語らず南極へ犬らと行く夢断たれし日のこと
繋がれて捨てられしタロの痛みさえ口当たりよき映画になりぬ
ポケットに胡桃を入れて雪の朝カラスの友を探して歩く
手を振ればブンと風切り舞い降りるわが友小さきフギンとムニン

そこいらの猫みな家へ放り込む向こう通りにコヨーテ来れば
国境の南の空よりぐんぐんと速度を上げて雁が音近づく
歩行器をつけたる犬が駆けぬける背中に春の光を乗せて
散る桜花ガーゼのように重なりぬウクライナ荘にロシア会館に
手作りのペロギー売りの女らの雲雀のようによく通る声
ランタンの底に花蜂死んでおり身を寄せ合いて冬長すぎて
ユダヤ人歌手のポスター破られる光の足らぬこの春この町
太陽の遠き四月の梨の花沈黙深し訪う蜂のなく
手に下げるじゃがいもずしりと重くなる遠くに流れるウクライナ国歌
寒き日に届く小包ふるさとの春も四角く収まっている
薄明の空をにぎわす雁の群カナダに春を連れて来る声
南よりノンストップの千マイル雁の翼よ冬吹き飛ばせ
庭隅に追い詰められたる鼠の子小さき背中をさらに縮めて
黒猫の頭すれすれ子鼠は跳びおおせたり野ばらの砦へ
延々と車を止めて交差点雁の一家がゆっくり渡る

かたち良き褐色の脚にリズム踏み駆ける少女よ夏は来たれり
遠吠えの声の次第に細くなる留守居の犬の夕暮れ長し
日本人移民の住みし証なり牛蒡の多く育ちたる土地
夜も昼も猛る炎の北の空一羽の鳥も姿を見せず
乾きたる熱き大地を打つ雨の力強さよ大気澄みゆく
木を植えむ緑を育てむ焼け跡の森に命は確かに宿る
屋根からの足音カラスの親子らしトトトと行けばトトトと追いぬ
親の背に子ガラスとんとんつきまとう夏を過ぎても甘えたがりて
輝きをとうに失くせるスカンクの瞳にひつじ雲の流れる
使われぬ先祖の言葉は消えてゆく移民三世日本語話さず

三月も終わりのある夜明け。ラッパの音を聞いて目が覚めた。夢ではない。ラッパのような、振り絞るようなあの声は雁だ。はるか南から雁が帰ってきたのだ。人間の決めた国境をあっさりと越えて。少し崩れかけているけれどV字形にはまだ勢いがある。仲間思いの雁だから、懐かしい湖が見えて来た、あれが生まれ育った野原だ、皆あと少しだ！そう声を掛け合っているのだろう。地上では呑気そうに歩いていても、飛翔する姿は力強く美しい。北国に春の喜びを運んでくるカナダ雁が大好きで、ずっと雁の歌を作っている。

雪空の我が家を発ちたる翌朝に実家の庭の菊を見ており
できたてのみたらし団子と大福を買える贅沢噛みしめ歩く
太陽の動きに逆らう旅の罰受けるがごとく今宵も眠れず
淋しきは君か楽器か振り絞る雁の声する今宵のバッハは
鼻の利く夫よ共にコヨーテにならぬかもしも来世のあるなら
ほどほどの距離にてわれらは眠りたり二人と一匹「に」の字の形に
器量よしには遠けれどやや好きになる亡き父と同じ太眉
がっちりとテーピングされてこの右手リストを弾きし日夢のようなり
鍵盤に跳べぬ右手をウクレレに沿えればさやかにAの音鳴る
氷片のようなる君のつま先にわがつま先の熱を移さん
メラトニンひとつぶ舌に溶かしつつ追いかけている霧笛の動き
頑固なる冬にいらだつ春嵐木々なぎ倒し青空連れ来る
テーピング解いて右手をまじまじと眺めるこんな形だったか
リハビリは四手連弾ブラームス怯む右手をぐいと押し出す
わが硬き右手のこぼす音拾いワルツを続ける友の左手
ロシア語もウクライナ語もＢｅＣＨａ（ベスナー）は春誰しもが焦がれ待つ春
春遅きカナダの港をゆっくりとSAKURAという名の貨物船行く
傷多き船体鈍く光らせてNM SAKURA港に休めり
小包の隅にちんまり削り節「これは猫へ」と母は記せり
病院に君を残して走る朝我が家へ続く角は曲がらず
検査終え君は饒舌夕飯におでんが食べたいなどとはしゃぎて
子鼠をとらえ損ねて黒猫はひときわ大きなあくびをしたり
億や兆の財務諸表を訳す午後半額セールのパン買いに行く
太陽は夜の十時に沈みゆく短き夏を補うごとく
森を焼き空を焦がして今もなお炎の消えぬ北国の夏
今日もまたねずみを土産に置いてゆく黒猫ボウは隣家の飼い猫
マメコガネ害虫なれど英名を知りたるのちは何か憎めず
「ジャパニーズビートル」すなわちマメコガネあんまり外で暴れてくれるな
黒と白と虎は仲良しキジは怖い猫には猫の近所づきあい
カラスらの怒号もひとつの勲章か黒猫ハンター優雅に通る
マスク消え青と黄の旗見なくなり消化不良のままに日暮れて
看板に日本語うっすら残りたり今はもう無きジャパンタウンに
われらには聞こえぬ歓喜の歌うたい野ばらの上に熊蜂集う
林学の授業に習いし山火事は生態系のリセットボタンと
再生も許さぬほどに焼き尽くす山火事（ワイルドファイヤ）は怪物と化し
制御不能―町を貪る怪物（やまかじ）を生み出したるは人間われらか
滅びへの道示すごと天気図を埋めゆく記号炎と煙の
真昼間の赤き太陽赤き空窓を閉ざして息をひそめる
怪物を怪物が喰う山火事の勢いを削ぐハリケーンの雨
道端に小さきスカンク死んでおり半円描いて人は行き過ぐ
コヨーテを負かす臭いも車には効かぬと知らずスカンクの子は
畑隅に狸を葬る伯母の歌思いて拾う死せるスカンク
庭に出る熊もそのうち去りますよ　のんびりしているカナダの役所

本郷歌子（ほんごううたこ）☆　（栃木県）

日々を彩る

秋の日に銀の鱗を煌めかせ竜頭の滝は山駈け下る
山道を曲りて視界開けたり紅葉せる山々のパノラマを見る
散り敷いた紅葉の紅に魅せられてその一枚を手帖に挟む
バスケットに老後の楽しみ見つけたり試合に一喜一憂する日々
ドライフラワーとなりたる吾亦紅なれど奥に残りたる僅かなる紅
イスラムのアラベスクの青日本の秋の澄みわたる青空の色
突っ込みどころ沢山あれど三時間を一気に見せるインドの映画
冷蔵庫の扉に張りつく緑の蜥蜴フィギュアと気付けば娘の悪戯
身辺の整理をすると友よりの葉書一枚繋がり断つと
寂しくはないのか顔を想いつつ友に最後の手紙「元気で」
音全てその身の内に吸い込んで雪は降りゆくただひたすらに
百本の梅の花咲く参道を大宮人の心地に歩く
ジップラインのハーネスを着け出番待つ鳥の気持ちになりたい我は
空中に在るは五秒かジップラインたった五秒に心満たされ
ほんの少し色褪せはじめた雛の衣娘は四十二歳となりぬ

鶯の声あちこちに聞こえきて補聴器付けた我が耳に春
ホバリングする蜜蜂はどの花にしようか迷う桜満開
花びらを蹴散らして行く自動車に桜吹雪の散り掛かりゆく
本棚の三段占めるアルバムの埃かむるも断捨離迷う
紅き実の撓わに生りて桜桃の細き枝葉は地面に着けり
桜桃の紅き一粒含むとき清しき甘さ口に転がす
桜桃の網に絡まる椋鳥の温き身ゆえに網を切り取る
森の中かとスマホに問われる吾が庭なり鳥数多来て囀り止まず
雲暗く雨降りつづくそんな日は紅い花柄の傘を選んで
雨降れば雨の匂いが庭に満ち晴るれば草の優しき香のする
幼子のふわっと吹いたしゃぼん玉虹色の玉優しき香の玉
しゃぼん玉追う幼子の指先にパッと弾ける笑顔のはじける
蜜蜂の重みにラベンダーの花揺れる梅雨の晴れ間の庭は賑わう
雨に倦み待ち望みいし青空はイカロスの翼の酷暑となりぬ
冷房の風心地良き車中より道路工事の人に会釈す

ひとつ目の妖精なるや大輪の向日葵ゆらりと青空に立つ
帽子被り日傘を差して尚日陰拾いて歩く八月の午後
デパートに入りて大きため息す炎天下の道五分歩きて
起き抜けの鏡の我に笑いかけ昨日の自分をリセットする朝
人間ドック終りて一気に水を飲む甘露甘露と喉を過ぎゆく
青青と畑に茂る荒草を暑さに負けた我は唯見る
髪染めを止めて半年桃色や黄色の服を好きになりたり
露草を荒草という人あれど青き花愛でて庭より追わず
コスモスの群れ咲く中に赤まんま我ここに在りと花芽を伸ばす
芒原に風は形を成して行く囁きながら背を撫でながら

判で押したような日々の中に、目の行く所がいつも同じで歌を作るにも四苦八苦しています。その中で近年娘に誘われてバスケットボール観戦をするようになりました。手足を使い大声を挙げ、ひたすら勝利を目指してチームとファンと一体になって応援する楽しさ、勝った時の爆発的な嬉しさなどこれまでの生活にはなかったものです。バスケットボール観戦で気分一新することが歌を作るにも生かしていけたらいいな、と思っています。

見渡せば背高泡立草の黄に染まる曽て田んぼで在りし所よ
枝ばかりとなりたる庭の姫りんご紅き実風に音無く揺れる
高田さんの訃報に思わず声挙げる『死と足る』を賜りし人なり
大会にていつも声を掛けくるる高田光さんを思い起こせり
一面に桃の枯葉の散り敷いて溜息の出る風の明くる日
紅葉せる山々の頂き目の前に展望台は秋の只中
山門に続く山道紅葉を目指す車は途切れることなし
「応援は拍手」のルールに力込める手首に痛みの出てくる明くる日
バスケットの延長試合を征したるチームを称えるファンの喚声
着膨れて日の出待つ山の境内に生足に短パンのランナー走り来る
大平山神社に日の出を待つ人ら白み始める筑波嶺を見つめる
娘の病平癒願いて神前に手を合わせ深々と頭を垂れる
肩震わせ声を抑えた笑い続く娘はインドの映画デビュー
床の間に『梅に鶯』の帯を掛け一足早き春を楽しむ
数値など只の数字と思えども人間ドックの結果に惑う
きっぱりと齢相応です加齢です治療法無き我が脳萎縮
思うまま残りの時間を過ごしたい交際断つと古希過ぎた友
もやもやと得体の知れない寂しさを振り払うごと声あげ歌う
雪降るなか飛びゆく鳥よ塒へと急げよ翼の濡れないうちに
四度目に満開となった梅を観る朝日森天満宮の参道に春
年齢の上限は無しジップライン望み叶うと胸はどきどき
子の病夫への不満揺るぎ無き信頼寄せる友へぶつける
桃の枝日向に活けて花を待つ雛の節句にあと十日ほど
身を屈め身動ぎもせず窓の外見詰める猫よ何を恋する
高く響く鳴き声のあり鶯に上手下手ありや大平山の
満開の花を散らして鶯の飛び移りゆく真青なる空
桜桃の木を包まんと網掛ける青空の下風の和ぎ待つ
桜桃を少し残して網外すお待ちどお様椋鳥たちよ
初めての白き小さき花咲かす蜜柑にわくわく毎日確かむ
交番の明かりの見えて心緩む夜更けて一人家路を急げば
庭からの恵みに作るジャム愛し桜桃苺ジューンベリ杏
引き抜けば泥に塗れた皮の下真珠の艶持つ新玉葱よ
紫陽花の白き花毬庭隅を明るく見せて梅雨に入りゆく
梅仕事まずは梅とり葉蔭には数多の実あり話のはずむ
鶯の鳴き声響く梅雨の空恋の相手はまだ見つからず
三時間梅取り終えて翌朝に我が身の老いを思い知らさる
昨年の母の日の鉢紫陽花の花咲かせおり青の色濃し
参道に提灯点り紫陽花のほの浮かびくる夕闇の中
濃き淡き紫陽花の青に包まれて佇みおれば青き風吹く
首筋にポツンと雨が落ちて来てポッポッポと雨紫陽花踊る
孔雀の青の目映き光に魅せられて神は在ますと思う瞬間
どうせなら一番がいいとニュース見る今日は全国三位の暑さ
首に巻く濡れ手拭いの涼しさよ重き足あげ山道を行く
洗濯の乾きの早さ体温を越えた真夏に良きことひとつ
一日を立ち働いた足の裏抗議するごとフツフツと疼く
えのころ草にくすぐったいと燥ぎだす明日はニューヨークへ帰る幼子

朝一番ポストをあける習慣は恋文もらいし若き日の記憶
端と端離れて座る居間のソファ心の距離でテレビ見ている
一雨に木香薔薇は枝伸ばす暑さに負けぬと天を目指して
アメリカシロヒトリの跋扈せる跡桜木は裸となりて夏空に立つ
一群れの韮の花咲く畦道に夏の終わりの風の吹き来る
城山の崖より涼風吹き下りてざんわざんわと木の葉を揺らす

本間志津子（ほんましづこ）　（山形県）

河口賑はし

少子化の進み県立高校は統合されて更地となりぬ
こんなにも広かつたのか校舎跡眺望開け山並み近し
時雨きてシルバーカーに手をとられ傘もさせずに家路を辿る
時雨るるやコートを伝ふ雨雫蓑着て歩みし芭蕉の気分
日のひかり求めどこまで伸び立つかわが家の南天二階へ届く
西側に防雪柵は設置され七号線は備へ整ふ
屋根屋根と野面に道にうつすらと雪を刷きたる集落を過ぐ
木枯らしの吹き荒ぶ野は枯れ色にモノクロ写真のごとく単色
沢庵を噛めばかりかりかの秋の日向の香り口に広ごる
朝の雪昼には横に降る吹雪最強寒波の始まりなるは
蛇行する偏西風に乗り来たる北極の寒気列島を襲ふ
水道は出し置きしたる三つ生き凍結したるは動かざるまま
四日目の昼過ぎ突如雲は切れ最強寒波抜けたると聞く
音立てて水道水の迸るほんの一時寒気ゆるめば
ふところに入り来る北風肌を刺すゴミ出しに行く朝の道々

たたまるる花の解れてゆくやうにクリスマスローズ地に顔を出す
紅梅は上へ上へと昇りゆき濃き色に咲く冷気の中に
燦燦とわが家の紅梅日差し浴び窓に迫りて部屋明るます
風寒き田圃に出てゐる耕運機農作業今し始まるらしき
最上川の淀みに生ふる水没林柳芽吹きて水面より伸ぶ
浮島のやうなる遠き鳥海山空と稜線青く融け合ふ
蛇行して淀む街川上流へ流れゆくなり汐満つるらし
ポスターは人住まぬ家へ差し込まれ選挙の終る今もそのまま
この季節孟宗と独活は外せない香りを求め風の街へと
産直の野菜を求め遠まはり新緑清しき春風のなか
砂丘（すなをか）に夏雲かかり見晴るかすメロン畑に摘果手伝ふ
砂畑に風の道ありせなに受け作業の合間汗乾きゆく
刻刻と五色に変る雲乱れ河口賑はし日の沈むまで
今日夏至の暮れなづむ空白白と異界彷徨ふごとくにわれは
夜九時の暮れない街の人通りロンドンの夏遠く思へり

体温と変はらぬ気温続く日日梅雨明け宣言なされて十日
しゆるしゆると上り一気に花ひらく夜空に色と形を変へて
ズドーンと腹まで響く爆発音恐怖いかばかりウクライナ思ふ
打ち上げは最上川中州の河川敷ここより僅か一キロの距離
椅子を出し桟敷となして家前にしばしを過ごす花火と夜気と
白濁と亀裂もたらす高温と聞くもすべなしそよぐ稲穂に
どこへ行く早朝の路地うねりつつ黒きまだらの太き毛虫は
雲多き行合ひの空に雨が欲し大気の熱をさます風欲し
木々の葉も路も濡らして雨が降る彼岸入りなる朝早くより
雲間より時折覗く名月を友とし過ぐさむ秋の夜長を

ゆったりと日本海へ注ぐ最上川は、わが家からは僅か一キロ程の距離、河川敷は花火の打ち上げのみならず、ドッグラン、白鳥を観賞するための広場、老人クラブ用の畑地等々、色々利用されている。
その畑地の一区画を借り受ける機会に恵まれて、ほぼ十年程家庭菜園程度の畑作りを楽しんだ。食べる喜びもあったが、長雨のため洪水となったりなど、思出は尽きない。吾妻山系の一雫の水から発し山形県を北上し、途中から西へと流れを変えて海を目指した最上川を人の一生のように、しきりに思うこの頃である。

人口の減少の波ひたひたとデパート「清水屋」閉ぢて二年目
花街に昭和の夜を彩りしキャバレー「白ばら」閉店となる
稜線はくきやかに藍中腹はほのかな紅鳥海山は
うつすらと冠雪かかる鳥海山霜降の朝たちまちに消ゆ
孫たちへ秋の香りを届けむか柿にりんごにラフランスなど
歌会の窓に迫れる千歳山黄に朱に緑と色付きをりぬ
紅葉は終つたあとが好きと言ふ歌友に敢へて何故とは問はず
かかりつけ医は発熱外来へ行けと言ふ抗原検査陰性の子に
コロナなる感染力の強きもの人の繋がり危ふくもする
込み上ぐる熱きものあり内科医の診療受くる発熱外来に
物言へば唇寒く大臣の更迭またも秋深みゆく
恒例の荘内神社の雪吊りは終つたらうか冬がまた来る
空被ふ雲の薄るる一ところお天道様の覗く時あり
道端にバス賃乞はれ学生に二百円渡すも釈然とせず
年の瀬の街は忙しく物悲し正月飾り雑踏に買ふ
北極の寒気の威力半端なしたちまち水道凍結したり
次に来る冬型の気圧寒気をば引き継ぎそのまま居据る気配
ウクライナへ最新戦車次々と供与の表明なすナトー加盟国
いつになく今朝のスーパー込み合へり午後の予報は風雪ゆゑか
部屋の角をピンポン玉の大きさの黒きが動く寒波の後に
黒き物よく見れば長き尾を持てり騒ぐ人らを尻目に隠る
結末は意外と早し渾身にもがく鼠が粘着板に
子供会の資源回収再開と朝のアナウンス春の始動か
一冬の新聞雑誌段ボール一括りして家前に出す

もややもやと三月の街に漂ふは黄砂か花粉か薄日に烟る
掃き寄する枯葉に混じる紅梅の花びらいくつ雨に落つるか
雨上り塀を越え立つ白木蓮今にも咲きさう蕾膨らむ
彼岸過ぎ風暖かき真昼間に土埃あげ車過ぎゆく
紅椿咲く傍らに連翹の黄色の清し通りすがりに
長らくをコロナに籠りやうやくに授かる仕事に孫出勤す
雪残る山路を渡り来る風の霧と変りて視界遮る
東京に住む娘の電話母の日に白きフリルのブラウス送ると
早苗田を渡る風あり空の青若葉のみどり祭りの近し
大通りを花魁道中やつて来る四百年の時空を越えて
コロナ禍に中止と自粛の三年経て酒田祭りの制限解かる
四年ぶり制限なしのお祭りに町が賑はふ五月の二十日
神事あり山車行列あり出店あり老若男女溢るるばかり
担ふ人楽しむ人のある限り継がれゆくべし山王祭りは
校門を脱兎のごとく下校する問へば五年と屈託もなし
五年生男子四名遠ざかる追ひつ追はれつ若葉の道を
メロンにはなれなかつた実漬けられて朝の一品食卓にのる
白き雲千切つて投げたやうな空梅雨の休みの一日の晴
冬至過ぎ寒さに向かふ半球を発ちて来たるか夏至なる国へ
梅雨晴れに入道雲の湧き出でて遠き山脈隠してしまふ
隠沼（こもりぬ）に咲く黄菖蒲に降り注ぐ雨の吟行記憶に遠く
止み間なく降り続く雨一週間梅雨前線動くともなし
人出なきわが町に降り続く雨このまま止まぬ雨となるのか
梅雨明けは突然にして容赦なく体温に近き猛暑が続く
梅雨明けと共に大きなニュースありわが市はホテルの誘致をなすと
デパートの跡地の街の中心に十階建てのホテルが建つと
二年後の九月が開業予定とか地元雇用は七・八十名と
無着氏の訃を知る日より読み耽る「遠い山びこ」辿る思ひに
奄美の海迷走しつつ十日間台風六号半島に消ゆ
紫の小さき朝顔八つ咲く八月の尽今朝の涼しさ
継ぐ人のなく散骨か樹木葬彼岸の特集人ごとならず
登校の児童生徒ら通り過ぐ話すことばは方言ならず
あくせくと下ばかり見て歩むなと己戒む秋空高し

益坂順子（ますさかよりこ）　（福岡県）

青い山脈

大根の双葉に止まるバッタ二匹秋に溶け合ふ色になりたり
高岳の直登コースに誘はるる緊張続く阿蘇の溶岩山（らばやま）
窓の辺に寄りて東の空を見る双眼鏡の中の月食
低山と言へども二座の紅葉がり秋の終はりのほどよき疲れ
大池に映る逆さの御船山けふ紅葉に彩られをり
トビハゼと蟹の活動めまぐるし干潮の間の時を惜しみて
降る如く南京櫨は葉を落とし秋の名残りの地上絵描く
早朝の散歩の人に引かれゆく犬は電飾首輪をつけて
賜はりし十年前の「歌壇」誌に師の御歌あり付箋の付きて（井上生二先生）
師の御歌テーマ別なる「病」一首優しき笑みの内なることば
二十歳になりたる孫の訪ふを待つ二つの部屋にあかりをつけて
能を観るのみには非ず柳川の鰻処に向かふ楽しみ
如月の尾根を歩けば吹く風の春を告げゐるやうなぬくもり（小岱山）
まなかひの海は春の陽反しをり望雲台に憩ふひととき
天草の海を眺むる頂に春の兆しの風を受けをり

ラインにて「好きな色は？」と問ひきたる翌日届きぬ花束となりて
地に届く程に倒れて咲く花の冷たき雨に耐へる水仙
庭畑に数株残る春野菜あつまりて咲く小き黄の花
ゼッケンに歩く目的書き込みて挑む久留米の躑躅マーチに
登頂の記念スタンプ目指したる笑顔の仲間のみの城山
銅山の在りしといふ地に苔のむす石垣並ぶ森のあちこち
しまなみの海峡の美し大島の亀老山展望旅の寄り道
十薬のはびこる土手にその花の薬作りし友を思へり
風のきて時鳥鳴く尾根歩き三つ葉躑躅は盛り過ぎたり
この年も山法師咲く九千部山（くせんぶ）の光眩しき頂に立つ
山裾の木洩れ日受くる雲切草うつかり見過ごすやうな色合ひ
明日挑む幌尻岳の全容の輝きて見ゆ遥かかなたに
二時起床始発のバスに乗り込みぬ覚悟決めたる幌尻（ぽろしり）岳登山
急登の後に拡がる花の尾根こころの躍る黄の兎菊
下山後に一気飲みする炭酸水からだ潤ふいのちの水の

十時間歩行決めたる鳥海山雪渓歩きに魅せられてをり
月山に兎の年に詣でたるこの先十二年を生きむと
遠征の最後に選ぶ蔵王山お釜の緑に吸はれゆくがに
ジグザグの急登続き八時間雷鳥の声に励まされをり
早朝に発つこと慣れてヘッドランプ手離さずをりけふ雨飾山
庭先のとろけさうなる暑さにも強く咲きゐる狐の剃刀
食堂におかはりどうぞと言ふごとく腕組みて立つ小屋の兄ちやん
塩見岳の切り立つ岩と鎖場の難所も楽し頂まさか
見え隠れする富士山に見守られ塩見岳山頂青を眩しむ
懐かしの青い山脈旋律の頭に浮かぶ尾根歩きつつ

短歌は縁のないものと思っていた。退職後先輩に誘われて公民館の短歌教室に行ったのを機に二十三年、紆余曲折を経て現在に至っている。「日記のつもりで」の言葉を戴いたこともあり、三十一文字の日記を未だに続けている。一字一句に思考を廻らせて一首を作る作業は本当に難しい。日々の生活の中で感動ばかりもしていられないので月例提出後の安堵と喜びは一入である。冬雷の皆様の感性に刺激を受けつつ続けたいと思う。

どの山に行きても山の先輩と自覚してをり若さ眩しむ
この年も零れる如く花の咲く金木犀の香り控へめ
庭すみの日射し少なきひとところ秋明菊の白清々し
竹林に沿ひて延びたる登山道放置されたる竹を避けつつ
人間の心の奥の貧しさを裏金に見る五輪のあとの
かつてこの地を訪ねしは探鳥会ゆたかに光る有明の海
くれなゐの七面草の拡がりて整備されたる干潟を歩む
銀杏の畑は黄の絨毯を敷きつつ迎へくれたる如し
季を待ちて葉を伸ばしたる立金花庭すみに美し艶ある緑
五年日記つけて四冊終る月つぎの五年を思案してをり
本棚の整理を始むる年の暮れ一冊のみの「歌壇」に見入る
一冊の「歌壇」捲りてときめきぬ冬雷編集長の御歌に
元旦に孫子の集ふ十一人個性持ちたる大人の顔の
この春の挨拶を最後といふ賀状多くなりたる齢重ねて
久久の能鑑賞に夫と行く数年ぶりの電車に乗りて
久びさの能の舞台の若返り世代交代なりたる声音
喜多流と金春流交ざる能舞台けふ晴晴とコロナ禍越ゆる
雪山の期待ふくらむ鶴見岳幸か不幸か真青の空
浮き浮きと木立の中を歩きつつ声の聞こゆる四十雀の
阿蘇五岳、九重の峰と祖母山の青空に映ゆ鞍岳山頂
宿を発ち旅行支援金まづ使ふ午前八時の開店待ちて
「寒くない?」問へば「寒いよ」と返す孫を優しく包むウエディングドレス
留袖に二十年振り袖通し念を押さるる小股歩きを
朝より流れ作業の如く過ぎ疲れ果てたる孫の婚礼
るすばんの機能あるとふ電灯の役に立ちたる夜中の帰宅
軽やかなタッチの絵手紙いただきぬ「傘寿祝」の言葉を添へて
「九十分並んで買つた」とキャラメルのクッキー卒業旅行の土産
ふるさとの筍は旬 竹林に足踏み入るる鍬を担ぎて
多良岳といへば先づ咲く万作を見むと意気込む春待ちわびて
不規則な石段続く中腹に身体の求むアミノバイタル
二十キロのザック持ちたる高校の山岳部といふ子等に越さるる
配属は山岳救助隊といふ研修終へたる孫の仕事の
躑躅咲く久留米の街のウォーキング大会参加を決めたる四月
六ツ門の橋より眺むる池町川しづかに流るるさくら色して
生憎の黄砂飛来し展望の叶はぬ尾根に三つ葉の躑躅
額より流るる汗に体内の塩分濃きか目の染みてをり
矢部村の八名山の全制覇まづ連休のひと日に二峰
夫笑みてテニス仲間と飲み会す宴会場はビニールハウス
赤石山の東から西への縦走の誘ひ受けをり年甲斐もなく
十五年前の経験忘却となりて青息吐息の登り
鹿狸瓜坊はしり筏津の登山口まで続く緊張
三万歩超ゆる歩きの下山口東洋のミニマチュピチュの見ゆ
石鎚山の見ゆる伊予鉄会館に名物タルト競ひて求む
山肌を白く染めたる山ぼふし色付く花の少し混ざりて
ジャカランダ見むと訪ひたる雲仙の街路樹なべてむらさきの房
中岳と稲星山を目指す日の飲み水多しザックの中の
中岳に向かふ御池に映りたる絵画のごとき深山霧島

短冊と笹はビニール製品の七夕飾り体育館の
大雨の豫報に一喜一憂しひと日を無駄に過ごしてをりぬ
雨故に登頂断ちし幌尻岳に再び行くと決むる遠征
前を行く登山者急に足止めぬヒグマ親子の横切りたると
山容に憧れてゐし笠ヶ岳けふ笠新道コースに挑む
尾根らしき視界の中に山頂の遠くに見ゆる長き道のり
濃淡の青の連なるアルプスの山並み望み至福の時間
焼岳に秋の気配感じつつ整備されたる道の明るむ
火打山妙高山の行程に身体の悲鳴聞こゆる如し
この度の五峰踏破のなぐさみに善光寺への参拝に発つ
日本一高い峠と言はれたる三伏峠小屋に辿り着きたり
快晴の丹沢山の頂に際立ちて見ゆ富士山よ鳴呼
老若男女ひとつの部屋に寝ねてをり疲れ果てたる山小屋の夜
中秋の名月見むと外に出れば雲あつまりて山小屋被ふ
空木岳下山中の事故を知り緊張はしる池山尾根に

松居光子（三重県）

令和五年の歌

鮮けきオクラの花の表紙絵の歌誌届きたり励みてゆかむ
災ひを引きずりながら迎へたる新しき年に佳きことあらな
「元気です」筆で書きたる九十歳の叔母の賀状に兎の跳ねて
年賀状を書くは至福とふ川柳を添へたる媼は九十四歳
松葉杖をつきて歩みしと書かれゐて友の賀状を幾たびも読む
本年で最後にしたいと書き添へたる友からの賀状一葉のあり
来ぬ賀状に障りでもあるかと案じつつ七草粥を炊く日となりぬ
年賀状を賜ひたる人それぞれに嬉しきもあり寂しきもあり
十年に一度といふ寒波らし六センチほどの積雪のあり
降る雪の様子を見つつ迷ひをり受けるか止すか今日の検診
足跡と轍のなき道選びつつこはごは雪を踏みて歩めり
雪は止み傘を杖にして帰途につく無事に終へたる乳がん検診
スポショウとは何のことかと訝しむ若き人との会話の中に
スポショウはスポーツ少年団のこと初めて知りぬ新しい略語
定着したる就活婚活終活に今ではパパ活離活ポイ活

接尾語のごとく「活」つけ造りたる訳のわからぬ略語のあまた
軽々しき略語についていけぬ我大切にしたし正しい日本語
合格の通知を載せたるタブレット画面を孫はラインで送り来
掲示板に受験番号を探したる悲喜こもごもの光景はるけし
春休みに訪ひ来る女孫らに見せたしとひと月遅れにお雛さま飾る
ひな壇の前に孫らと嫁とわれ四人並びてカメラに対ひぬ
新型コロナは五類感染症となり明るさ少しく戻りてきたり
大方の人がマスクを付けてゐる国民性の著けき車内
朝朝のドラマ「らんまん」見る日ごろ道端の草にも心惹かるる
調ぶれど明らかならぬ紫の小花すずしげ名も知らぬ花
「雑草といふ草はない」とふ名言をかみしめ見入る可愛い野の花
軽量で使ひ勝手の良ささうなトートバッグを買ひ求めたり
ポケットの多きバッグに持ち物を入れたり出したり御ニューはうれし
新しきバッグを提げて外出す梅雨の晴れ間に心はづみて
梅雨明けの頃より暫し喧しき蝉の鳴き声聞かずなりたり

蚊にさされ痒みに悩まされゐしがこの夏ムヒの減りも少なし
温暖化は虫の世界にも及ぶのか虫たちも身を潜めゐるらん
デパートの扇子売り場に並べある商品少なく気に入るものなし
ハンディファンより軽量で趣のある扇子を我は好めり
洗剤の泡のやうなる雲の峰盛り上がりたり九月半ばに
さはやかに鰯雲ひろごる秋空を仰げる時し待ち焦がれをり
いつまでもエアコンに頼るこの猛暑ことしの秋は短かくあらむ
神無月朔日のけふ降る雨は夏の終はりをもたらしくるるか
酷暑から急に気温の下がりたり羽織るもの出す十月に入りて
三月ぶりに足を伸ばして湯浴みせりシャワーでは味はへぬ寛ぎ

商社マンであった父が単身赴任先のニューヨークから送ってくれた絵葉書が五枚残っている。旧仮名遣いの細かい文字で書かれた文は当時五、六歳だった私には読みづらく母が読み聞かせてくれていたのだと思う。六十年余の歳月が流れ五年程ヒューストンに駐在していた息子の家族との遣り取りは専らラインとスカイプであった。科学技術の進歩と共に用件や近況を瞬時に伝えられるようになったが何か大切なものが失われたように思えてならない。太平洋を越えてきた古い葉書は掛け替えのない父の遺品である。

好きな歌まづは七首をチェックする冬雷大会詠草読みて
感想を書きやすき歌に絞り込み大会詠草二首を選びぬ
感想文を削りけづりて五十字に纏めて葉書に清書をしたり
音楽の好きな女孫にト音記号と音符の模様の服を選りたり
スカイプにばあばとセンスが合ふと言ひて誕生祝を喜びくれぬ
天候にも時間帯にも恵まれて皆既月食居間よりのぞむ
欠けてゆく月の光の弱まりてあかがね色に暗むを見てゐつ
六年振りにうから集ひて義父母の三十三回忌を修す
東京と大阪三重と三か所より京都の寺に七人寄りて
コロナ禍に式は為せずと甥の婚の報告を受け会食たのし
甥の祝ひに祝儀袋を買ひ求め墨を濃く磨り表書きをす
郵便局に書留託し帰るさに石蕗咲ける道のべ明るし
わが予想したる「戦」に決まりたり令和四年の「今年の漢字」
来年は明るい漢字の選ばるること願ひつつニュースを見たり
今晩のメニューに悩まなくていいただそれのみに恵方巻を買ふ
バラエティー豊かな具材を用ひたる寿司を楽しむ節分の夕餉
LED の色鮮やかで幻想的な光の世界に吸ひ込まれゆく
異国からの観光客と行き交ひつつ電飾のトンネルくぐりぬけたり
キラキラと光る木を背に写真撮るコロナのことも今宵忘れて
これよりは飾ることなど無いかもと言ひつつ夫とひな壇片付く
ネモフィラは今を盛りと咲き誇り瑠璃色の絨毯敷き詰めたやう
空の色をそのまま映したる如き澄んだブルーのネモフィラの花
和名では瑠璃唐草といふらしき愛らしく涼やかなネモフィラ
晴れ渡る空と新緑眺めつつ鯉のぼり泳ぎし景なつかしむ
家家の屋根より高く鯉のぼりの靡くは初夏の風物詩なりき
鯉のぼりの絵の描かれたるランチョンマットに心の和む和風レストラン
カフェーのストロー紙に変はりゐて途中でふやけ飲みづらくなる
仕方なくグラスに口つけ残りたるアイスコーヒー飲みつくしたり
怠けつつ足早に時の過ぎゆきてけふ見る空に雲の嶺立つ
わが町の最高気温三十九度全国一とぞ骨身に沁みる
明け方の林より響く蝉しぐれひと日の暑さを報せるごとし
書道展の当番終へてデパートに立ち寄り食品売り場をめぐる
物価高をものともせずに高級な食品求むる人らに交じる
高くとも偶にはいいかと贅沢な弁当ふたつ買ひ求めたり
ケーキひとつ九百円の値段見て菓子は買はずにデパ地下を出づ
残暑厳しき道を歩めば仄かなる風の肌(はだ)へに触れてゆくなり
少しづつ日暮れの早くなりてきて暑き中にも季は移ろふ

松﨑(まつざき)みき子(こ)　（岩手県）

水平線の見ゆる海

平泉中尊寺の紅葉は万葉の息吹き思はせて散る
石段を手摺掴まり上り行く老婆の肩に真つ赤なもみぢ落つ
制服の修学旅行の団体の乙女はしやげばもみぢちらちら
父母と旅行もせずに過ぎし日を悔いつつ歩く木漏れ日の径
鍋料理にわが育てたる春菊を入れれば香りと湯気と広がる
次々と膨らむ税に呆れつつ肩揉みながらニュース聞きをり
早起きの眼(まなこ)に当たる風冷えて屋根のアンテナ残月に光る
神社より水平線の見ゆる海に戦争の無き人の世祈る
白鳥の可愛らしさを飽かず見て目に焼き付けて夫に伝ふ
コンビニのシリア災害募金箱他人事でなくあの日の寒さ
なつかしき父のやうに待つてゐる入り江の小船陽にゆらゆらと
山風の冷たさ背に当たり来る目の前の海にあの日を思ふ
黙祷のサイレン響く高田松原に途方に暮れた日々思ひ出づ
二時四十六分の防潮堤に立つ人々十二年目にもわれ涙あふるる
隣りに立ちすすり泣きする若者は花持つたまま涙拭けずに

震災より十二年の間に弟と母逝きてわが白髪増えたり
一本松の空高く登りくる月の光はゆらぐ子守歌のやうに
大木の桜満開青空が山脈越えて近づいてくる
三月も小屋のストーブに薪燃やす漁師の手より湯気上りゆく
舵をきり港へ帰る船一艘天候を読む漁師の目角
木の枝が芽吹き出したら三陸の海にサクラマス群れ来るさうな
窓越しに夕日を背に当ててゐて首の捻りも柔らかになる
春シラス釜揚げすれば天日干ししたる風景見かけず淋し
七十三回全国植樹祭の会場の陸前高田市活気溢るる
沿道は人で賑はひ一目でも両陛下見ようとわれも並びをり
警察の警備厳しく街の人口より多い気がする植樹祭の日
待つことも並ぶことも大嫌ひな夫が笑顔で人混みに待つ
テレビにて陸前高田の植樹祭見たと明るき娘の電話
復興の進む岩手の植樹祭百年経つたら豊かな森に
梅の木に実が付き始め嬉しかり梅干し作りに意気込むわれは

気遣ひが足りぬことあれば嫁たるは動き早くと言ひ張りし義母
待ち居ても誰も来ないと縁側でぼんやり見てゐる百日紅の花
汗出でてスイカ食べては種を出すこんな酷暑に走る人もゐる
亜熱帯のジャングルの中で戦つた義父は南方の月と星を見た
今日より暑き日はないと麦茶飲み夏バテぎみの九月過ぎ行く
子等暮らす都会の暑さ気になりて朝採り野菜急いで送る
ピーマンの一本に生る実のあまた毎日採りて百以上あり
若き日の失恋に似たる夕暮れの風なき暑さに蜩が鳴く
亡くなりし人を突然思ひ出す上がる花火の消えゆくときに
幼き日弟と二人庭に居て線香花火チカチカ点しき

今年は元日から北陸能登半島地震が起き、東日本大震災を思い出し心が痛みました。今も被災地に住んでいる方々はご苦労が多々あるだろうと思います。
私も岩手の陸前高田と言う所で震災を経験してしまいました。二〇一九年の春から始めた短歌ですが、ご縁があって短歌誌「冬雷」に入会しました。先生の指導のお蔭様で休まずに投稿しています。そのことは喜びだとも思っています。これからも皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

約束の紅葉狩りには早起きし旅の気分でカメラ二つ持つ
おみくじを引きて開けば大吉の大当り出て口角上がる
観光は夫の段取り四季通し神社仏閣の御朱印帳手に
草抜きに無心になれるわれが居る瓦礫の海を見すぎた所為か
北風と初雪に手がかじかんでけふの予定の窓拭き出来ず
寒くなり畑終ひに大根を二十本抜き友に分けたり
足腰が丈夫であれば鍬を持ち畝立てたいと心底思ふ
川エビと玉ねぎ合はせかき揚げにすれば食卓にうすき桃色
咳出でて風邪かコロナかと夫言ふ風邪と決まれば互ひに安堵す
餅つきて子らに送りぬ年末に風邪ひかぬやう一筆添へて
神様と夫の分と二切れ買ふ大晦日膳のナメタガレイを
新年の昼どきに祝ひ餅焼きてをり膨れるほどに良い事あれと
正月の玄関飾り外す日は感謝忘れず平穏願ふ
雑念の多きを捨てると元旦に新酒飲みたる父思ひ出づ
草餅をおやつに出され腰かける土間のストーブ温かきかな
内戦の続くシリアの大地震災害酷く津波と重なる
山間の里のしばれの緩む昼つどふ広場に池の鯉見ゆ
北風に海面荒れて船出せず網を繕ふ叔父の背まるく
夫婦船は養殖ワカメ収穫し岸壁に着けば妻より降りくる
祖母とわれと猫追ひ払ひし晴れの日ありシラスの匂ふのどかなる春
じやが芋と乾しシラス煮る母の味湯気立つ鍋の香りなつかし
三年ぶりに帰省出来たる子の家族初めましてと一歳の孫抱く
宅配で野菜送ると電話すれば息子の嫁は嬉しさうなり

ほととぎす畑近くの雑木林に幸せさうな声に鳴きをり
梅干しの作り方言ふ叔母たちにそれぞれ違ひありて頷く
目を閉ぢて梅と会話をすると言ふ天日干しまで毎日拝みて
梅干しも作れずに歳だけ重ねきて落第生のやうな気がする
顎の線に酸つぱい小言沁みついて梅の木の高き実を見上げをり
鬱蒼としたる前山の木々に鳴くミンミンゼミは幼き声で
イカを釣り喜ぶ夫を褒めるわれ港の夜釣りはまるで夕涼み
八月は終戦の月亡き義父の部隊は南方より帰還せり
雨の盆長靴履いて墓参り行き交ふ人は安堵の笑顔
朝早く畑に出でて大根の種を静かに撒きて汗拭く
夏服のノースリーブから出る二の腕の太さとたるみ酷暑に締まる
ひまはりもうなだれる昼に親子鹿ひよつこり現る30度超えの庭
祭りの夜商店街は賑はひて震災前元気だつた友思ひ出す
軒下の風鈴鳴りて夏祭りクリーニング屋の店主懐かし
あの友も津波の犠牲に3・11を逃げ切れてゐたら何歳だらう
街ひとつ壊滅状態の大津波ルート違へばわれも海の中

松中賀代（まつなかかよ）☆　（高知県）

五千歩を目指す

後々のことを思えば吾が務め隠居の片づけ年内に終う
屋根瓦落とす朝には念入りに怪我や過ち無き事祈る
秋晴れの日和つづきて解体の無事片づいたこと祖に報告
蟷螂が吾れの背中にくっつきてポトンと落ちて廊下に座る
朝日さしそろそろ外へ出そうかと近づく吾れに鎌を持ち上ぐ
水が涸れダム湖の底に現れる昔のままの田畑石垣
七草は田の畦道や石垣に芹は少なめ大事に洗う
霜柱もち上げている蕗の薹春一ばんに枯葉かけやる
明けきらぬ朝一番の雪を踏み今日の新聞配られて来る
新しき杉の小枝を山道に落として去りぬ春の大風
デイケアの迎えの車待つ朝の日差し柔らぎ頬が緩みぬ
「元気かい」忘れた頃に電話くる彼女は独り一軒家に住む
ダム湖より砂利を運べるダンプカー十八台も連なり走る
カーブから数分おきに現れる大型ダンプに恐怖おぼえる
小父さんが植えた桜に今年も元気な花がいっぱい咲いたよ

押し車にすがりて歩く友人を二人で見守り桜見に行く
五株のパンジー増えて大株に郵便屋さんも花を見て行く
連休に遠くより来る従兄たち筍の寿司とくに喜ぶ
明日にも咲き出しそうな月見草二つの莟ふくらみを持つ
帰省した姪達一家を見送れば再びわが家はひとりの暮し
日曜は朝から静か砂利運ぶダンプも人も休養する日
荒風が根付かぬ苗を吹き回し台風二号は早苗を痛める
大雨で早苗は見えず畦を越す田の水見るは初めてのこと
月見草ことしは凄いもう既に百個は咲いたと写メにて寄越す
戦時中くわで耕し荒畑に芋の蔓植えたね四年生の時
芋掘りは四年生から行いき先生方は食の助けに
担任が話してくれしを思い出す山羊が食う草ぜんぶ食ったと
山間の木漏れ日やさし囀りは耳に優しく涼風も吹く
森しんと日差しとどかぬ杉の中汚れず清く藪茗荷の花
送迎の車待つまを南天の下に立ちおり稲を見ながら

花時に台風は逸れ被害なく今年の稲穂ゆたかに実る
夕べよりの土砂降りも止み清すがし全てのものが浄化されたり
法師蝉早くも鳴きいる家近く雨も上がりて朝の涼しさ
木漏れ日の射さぬ谷間の深みより夏うぐいすの囀りひびく
予定には無かった花の苗も買い早速植えてストレス解消
在りし日の母の嘆きを今知りぬ杖を離せぬ身となりてより
山道に入れば木を切る音がしてこころ丈夫に五千歩を目指す
つまべには垣根に沿って咲いていたふる里の家幼ともだち
一日ごと表情豊かに育ちいる今日は寝返りメールで届く
柔らかな髪そよそよと幼子はシャンプーのあと微睡みはじむ

私は二〇〇八年に入会させて頂きました。
最初にご指導頂いた事は、
一、　欠詠しない。一、締切を守る。
一、辞書を良く引く。
一、毎号の冬雷は編集後記から全部を読む。
　少なくとも、これだけはお守り下さい。
川又先生のお言葉でした。現在に至るまで固く守って来られた事は先生方先輩の皆さまのご指導お励ましがあればこそと深く感謝申し上げます。

刈り後の田にカラス来る鳩も来る落ち穂を拾う人影はなし
甘くなれ甘くなれとて小春日に渋柿あつめ渋抜き始む
今回でコロナワクチン四回目椅子に無言で順番を待つ
義父が逝き歳月すぎて五十年義母を見送り二十年が過ぐ
今年は柿の成り年たわわなり捥ぐも大変運ぶも大変
五時をすぎ夕餉の支度を思うとき木犀の香が漂ってくる
整然と尖りて芽吹く菠薐草ことしの冬は青菜が豊富
隣から生姜里芋いただきて次の隣へお裾分けする
秋じゃがに霜除けを掛け見守りぬ葉色変れば掘り込む目安
薄皮で丸くころころ太る芋ポテトサラダを作る楽しみ
順調に家の解体おわりたり肩の荷下ろして年神まつる
青竹のさ揺らぎも無く静かなり令和五年の初日を拝む
三が日出動つづく救急車となりに来れば胸さわぎする
干し柿を吊るし明るむ窓際に西日の差して黄昏せまる
家跡の万両の木に赤い実があるを知らぬか山の鳥達
柊の苗木を鉢に植えてみる棘を持つ葉がかすかに匂う
新雪を踏みバス停に着くまでを滑らぬように確かめている
寒風に吹き曝されてしわしわに干大根は白く乾きぬ
春菊を青く茹であげ夕支度車の音は娘と思う
種ぶくろ畝の端っこに埋め置く品種忘れぬ手助けとせん
次からは声かけしようこの人も同じ仲間よ似た者同士
デイケアの中では若い組の吾それでも杖は手放せなくて
荒れ畑にぱっと明かりを灯すごと蒲公英は咲く間隔を保ち
やっとこさ冬草退け耕した後に恵みの雨が降り出す

珍しく友にも会えて立ち話孫の事など大声に言う
秋分に夏の暑さがまだ残る繁茂の草を処理せぬままに
僅かづつ日暮れ早まり各家に灯りたしかめ無事を確かむ
バスの中大声で言う猪や鹿に荒らされ収穫は無しと
いつも来る目白の二羽は白梅の蜜を吸うては枝移りする
まだ咲かぬ桜の下に菜の花が一面に咲き蜜蜂も飛ぶ
三椏が咲けば暖こうなるという祖母達の声が聞こえるようだ
春やさい飽くことも無く三食にお浸しサラダと新鮮な味
雨止みて霧が流れる北山は黄砂もまじり山並見えず
うすぐもる御在所山の頂は朝もやのなか石楠花咲くか
藤の花湖面に触れる程に咲く薄むらさきの艶やかな色
山の端に陽の傾けば植えつけた茄子やトマトにたっぷりの水
中学の部活は柔道たべっぷり誠によろし女の孫は
ほろほろと水恋鳥は深夜まで母に許しを乞うて鳴くのか
稲妻があたれば実入り助けると初めて聞きたる娘の話
「今日は」元気な声はケアマネさん訪問の日は鍵開けておく
朝夕に通る車道に梅雨葵たくさん咲いて色も鮮やか
初生りの茄子を刻めば指先は茄子色に染む朝の支度に
こんな時もってて良かった綿の服はたけ仕事で汗びっしょりに
声かけをすれば友等は即賛成いつもの我が家で米寿の集い
集まれる友は互いに名告り合い浦島太郎の顔を見合わす
今日だけは遠慮はなしで話そうね　あの事この事話は尽きず
ウィルスの収束いまだ落ち着かずデイの仲間は全員マスク
道端の小さな花を「まあ綺麗」仕ぐさ可愛い高齢婦人
この道を登れば谷の小流れにトンボ休める枯れ枝がある
南天の木蔭に立てばポトポトと首の後ろに雫おちくる
雨音が又強くなる台風は大風おこし大樹は揺らぐ
取り立てのトマトに胡瓜パプリカと良心市の棚は賑わう

松本英夫（まつもとひでお）（東京都）

花は咲きつぐ

笑みをもて巧みな司会の高田氏に笑顔あふれし冬雷大会
「目いっぱいがんばりましょう」と呼びかけて逝きたる高田氏安らけくあれ
「梅園を見に行つたね」と語る間に湘南電車は湯河原を過ぐ
一すぢの雲のよぎれる青空を十月桜の花のむかうに
ゆりかもめ三羽の低く海を飛び五艘の釣り舟港にゆれをり
若き日の妻の笑まひのやさしさの時折のぞく老いたる今も
夕餉すみ二人で静かに語りをり子らの寝つきし若き日のごと
二人していつもの暮らし送らばやいつしか永遠の過客となるまで
ウクライナの「花はどこへ行つた」の悲しみは繰りかへされて兵士は墓へ
果つる日の予測のつかず引き算の終活プランは棚に上げたり
花曇り坂を上りて掃き清むいまだ洞ろな吾らの墓を
移り住み二十年経たりエレベーターの女性の声のつやの変はらず
行き先を語らぬままに乗せくるる息子夫婦のミステリー旅
山裾に雲わきおこり垂れ籠むる雲へゆらりと溶け込みてゆく
孫たちはロック、クラシックそれぞれを聞きつつ笑まふ未来がきらり

焼きたての梅が枝餅の餡うまし一会と思ひつつ参道歩む
根結ひせる老女はひとり山門にまじろぎもせず伽藍見つむる
かぐはしき青春の日々あるべきを閉ぢこめてゐし受験勉強に
文法の Tense を聞きて浮かびくる大学めざす友垣の顔
妻迎へ住みにし家の煉瓦の門赤く残れり家は変はれど
あをによし奈良の仏の大屋根の彼方に見えし小き我が家
ハナズハウ、ハナカイダウは薄紅にハナミヅキは白に花は咲きつぐ
ジャスミンの花がら多くなりたれど香りは高く路地にただよふ
雨の間のゆるき光にあさがほは小き双葉を広げゆきたり
花びらをくるりと反らし鬼百合は夏の日差しに挑むがごとし
一陣の風を受けたるさるすべり散りたる花々まろびつつゆく
花びらを一枚いちまい落としゆき小きさざん花夕暮れに立つ
高高と花を掲げて冬空に皇帝ダリアはゆらりゆれをり
廉太郎の「花」商店街に流れきて寒さの中にこころやはらぐ
「春の小川」砂町銀座を流れゐてなばなとふき手に老女歩めり

風さむく四角の鍋より湯気あがりおでんを買う列長く続けり
友達とたい焼きえらぶ女子高生知らないだらうな「泳ぐたいやきくん」
けんめいに小銭さぐればたい焼きのレジにキャッシュレスマークがずらり
立て札の「卒業式」に子を立たせ父はスマホのアングル探る
胸に花手には証書を校庭は語らひ尽きず名残のつきず
夏を吹く南の風に朝の訓示ちぎれちぎれて吾がベランダへ
小き火花シヤカシヤカシヤカと輝きて残れる火玉のシヤカと散り果つ
ぱりぱりと油はねさせ秋刀魚焼く今宵の酒は八海山なり
キッチンよりかすかにむせび聞こえくるラジオの奏するチゴイネルワイゼン
火吹竹ひゆうひゆうひゆうと吹きゆけばかまどの薪もえさかりけり

百人一首が好き、という理由だけで歌を詠み初め十二年、今は木深いいくつかの分かれ道をさまよっているが、いつか行くべき道を探し当て新しい景色を見てみたい。また、歌人やその道の先人たちの名言を見つつ自らの歌を作りたい。芭蕉が去来に言った「いひおほせてなにかある」も旨としつつ、ストレートに言わずやんわり包まれた中に味わい深い歌を作れたら言うことはない。そんな未熟な私に根気よくアドバイスを下さった先生方、皆様および皆様のお歌に感謝、多謝いたします。

高田氏のあとかたのなき十月号メール送るも更に返らず
ゆつくりと歩む川又先生を見守る高田氏江東短歌会終へて
強引に誘はれ共に編みたりき『江東短歌』は最後の年刊
歌会の帰りに乗りしバスの中ガイドの話あれこれ尽きず
オリンピックのボランティアせむとなんとまあ英語を習ふ八十近きに
高田氏よ　体力気力で山登りガイドに人の世話までなして
小春日和床に落ちたる吾が影をゆらしつつ十五輛のゆけり
家並みに見え隠れする富士山はしかと見ぬ間に山にしづみぬ
根府川にたなびく雲を見てをれば音かろやかに特急の過ぐ
真鶴の山を潜れば白光のびゆうびゆう尾を引き鉄路はすすむ
籐椅子に昭和の湯治の客思ふせせらぎ聞こゆる東海館に
「ゆりの木よ」妻はよろこび警官の思はず笑まふ東京タワー前
大寒にちらり咲く梅さがしつつ妻と路地ゆくエコバッグ提げ
霜柱高く立つあさ妻は湯に手を浸しては洗ひもの干しき
先を急き「何を」「何が」の抜けおちて会話にならぬ妻との会話
騎馬に乗り力を合はせしコサックはミサイル飛ばす覇権と自由へ
どなるごと「兵士は墓場へ入つたみんな」ディートリッヒは今
you tube で
握手する奇跡は起きずミサイルはキーウを狙ふクリスマスにも
湧きおこる自由の歌に巻かれたる事実を知るやロシアの兵は
ボブ・ディラン cannon ball と嘆けるもロシアの地より missile
絶えず
レーガンとゴルバチョフ合意の核軍縮思ひ起こせよ西と東は
てんぷらを買ひて戻ればごはんなし備蓄の飯に湯をかけ戻す
起きいでて活動量計を腰につけ明日へつづくけふの始まる
録画せしクイズの難度にゆきづまり風呂に入りたり明日あれば
明日
三十分タイマー鳴らし立つとよい野村氏の言葉いまかみしむる
床を拭くモップすべらず窓暗し降りしく雨に春遠ざかる
オンライン搭乗券は wallet へ ANA の省力吾の労力
撮る間なく白き辛夷の後へ去る掴める春のこぼるるやうに
運転の嫁と息子の楽しげな会話の進みはや門司港へ
富山より薬を背負ひ来たるとふ暗き土蔵の妻住みし家
「死者の書」の謎解く記事に思ひ出づ夕陽に浮かびしふたかみやまを
丘を降り平地に新築かまへにき遠くにかはづの声の賑はふ
この年に至りて父母の思ひ知る写真見る吾あ　に夜明けのひかり
つやつやの赤き若葉のやはらかに陽の透きとほるしやこばさぼてん
「らつしやい」と八百屋のこゑ掛くる商店街「早春賦」流れ客の増えゆく
カリキュラム英語で書かるる保育園砂町銀座にバイリンガルだ
ウィンドウ自動のドアもガラス張り眼鏡の光る隣は揚げ物屋
スーパーの閉店告ぐる張り紙の夕日に晒さる砂町銀座
白菜とシクラメン並ぶみかん箱砂町銀座に年暮れんとす
駅前に行列長しなんとまあ蕎麦屋の跡にたい焼き屋台
腹よぎる緑のずんだに抗へず延延つづく列にならべり

まねくごとずんだが背より洩れ出づるたい焼き三つ買ふを決めたり
差し迫るバスの発車にえいままよ「ずんだ三つ」と急ぎて告げつ
熱熱のたい焼き入れる袋もち発車まぎはのバスへ走りぬ
ぱつくりとたい焼き食めばいま旬のずんだの餡の洩れ出でにけり
朝朝のグリーグの「朝」かろやかに寒風をつき子ら登校す
霜の朝なはとびかつ飛び「はいはいはい」跳びゆく生徒に手拍子とれり
春風に日の丸の旗ひるがへり「旅立ちの日に」校庭に沸く
花冷えに桜の春は遅遅として入学式は花に満ちたり
聞きなれぬギエーギエーに見あぐれば桂のこずゑに尾長のつがひ
みんみんの朝より鳴きて夏の行く愉悦に豪雨さまざまもたらし
ヨーヨー・マの奏づるバッハのチェロ曲に野村氏の歌思ふ「読経のバリトン」
釣堀に石の敷かれておとなへる人も鵜もなく風の吹きゆく

町田勝男（まちだかつお）　（埼玉県）

失はれた時をもとめず

また明日と気軽に云へぬ年齢となる老いの命のはかなくもあるか
歌を読み歌を詠めるは老いの日日の生きる証しか悔いなき日日を
秋そばの野分にふせて大花野果ての没り月白くかがよふ
玄そばを五六袋積む軒先の手打ちそばやに蕎麦の香ただよふ
切断の脚の痛みを詠む君の幻肢痛とや脳のたくみさ
腹いつぱい食べたかと問ひキャベツの葉ひつくり返して青虫抛る
風流の美学ぢや済まぬ落ち葉なり屋根の雨樋腐葉土つまる
庭菊に生花も添へて香を薫くわれを残してみんな逝つたね
年の瀬に下仁田葱を持ち呉るる亡父が喜ぶと自転車の娘は
妹の電話にこそ聞くふるさとの幼なじみの逝きたるニュース
免許返し車庫の自転車我が物顔行動半径奪ひ取りたり
熱燗は体に悪ろし気には良し血糖値など気にかけつつも
やうやうにして代表を抜け出すも広報紙歌壇の無き日は淋し
啓蟄を待たず出でたる蜥蜴の背春日にきらり一瞬のひかり
何言ふも翔平と聡太に及ばざり必要度まさる貴重な人材

旅立ちの季節になれば思ふことポーランドの夏ウクライナを知らず
カトヴィツェ、アウシュウビッツもクラコフもわが足跡の遥かになりぬ
雛罌粟が鉄路の終点に咲いてゐきアウシュウビッツに今も咲けるか
芝刈りも殆どやらずネギバナとヤマユリの茎我が物顔に
あれもこれも過ぎたることは悔やまねど歌詠むことにすぎたるはなし
ウクライナいくさ終はらずなかなかに戦はいつも政治の延長
毛の数は細くなりしも減つてないと三面鏡見せマスター褒める
山ざくら黒く小さき実をおとし散歩の道をくろく染めたり
朝霧の大観音はおぼろ顔さんぽの広場正面にして
プーチンはGPU（ゲーペーウー）の末裔政敵を討つは必然ロシヤの歴史
十余年安倍を騙したプーチンに然程のことではなかりしことか
小綬鶏のつがひはわれの直前を六羽の子連れ横切りてゆく
落ちた実の芽吹く夏そば刈り跡に啄むきぎす影のかぎろふ
広壮な庭も植木も邸宅も荒れて親友の一代の夢
息子の母校タイブレークで勝ち上がる施餓鬼会の直会ほつと一息

優勝を目指して励んだ百余年家族ともどもエールを送る
後輩よ勝ち取つた栄光は努力なり誇れる成果をこえて生きゆけ
買ひ物の帰路に転倒しキャベツ苗スイカもとびだし強かに打つ
蟀谷の傷口ふかくくちびるも二か所切れたり血を拭き帰る
秋彼岸卒寿のわれに乾杯の地元の歌会祝ぎてくれたり
朝ぼらけ白と緑をこきまぜて目路のかぎりの秋そばの花
宝冠よりのザイル数本に人すがり大観音は御色なほしか（仙台　大観音）
ダビィンチのモナリザ十六層塗りか大観音は何層塗るや
息子の遭難お世話になつた寿都町放射性廃棄物のニュースに出でき
一万円を持たせ函館本線に乗せくれし署長に狭山茶送りぬ

それぞれによき事悪しきことありて老いの詠めるは良き事のひとつ
勝手口の複雑なドアのベルト切れ営業呼べどスペア無しとか
緑から朱になるコキアのグラデーション帚木の名の失せて久しも
花水木の小さき赤き実地に落ちて鵯(ひよ)は街路樹に秋風をよぶ
明けの道どんぐりころころ地に満ちて転ぶを避けて踏み場に迷ふ
町長への手紙の返事ありし日に公園樹伐る業者と語る
町長に直訴の公園樹伐採は本数不足あと五六本
山茶花の墻に散りぼふ花びらの打ち重なりて時雨にひかる
新聞を右手に手摺りをなぞりつつ九十二段わが家への道
仙台が始発の東京行き新幹線ゆるり右側雪山を見つ
遠つ嶺の山肌に白く幾筋のスキー場らし蔵王仰げば
寛解の白血球数値をメールしたガラケーに残る最後の言葉
かの時の思ひ出ひとつに絞られて幼なじみの一人のみ残る
後屈の闇夜の星の変らねどわが生きる星人が変へるか
青岩荘の庭の観音日本海(うみ)を向き津軽の旅は孤独なりしよ
人と人のかけがへの無き邂逅も本も然なりき書肆は川越
例祭の太鼓模様の勾玉は胎児のかたちわれらも一つ
同級の集ひはやはり池袋「椿山荘」も「クラブ京」はも
総理殿うつろひやすき政策は世論にも似て危ふさをもつ
真つ先に庭を彩るクロッカス鴨の啄み避けて網張る
鶴飼橋わたり好摩を目指した日長き松陰嚢拾ひ帰りぬ
リスキング学び直しは自づから意欲湧かずば老いの敗残
北風のしばし緩む日葱苗とはうれん草の圃場耕起す

角スコは耕運機がはり堆肥撒き腰を宥めつつそろり耕起す
八つ裂きにされたる悲鳴か耳鳴りはそれとも老いの生き変はる声
ザりザりと砂かむ心地クレメジン飲まずば後は透析となる
ワルシャワの条約機構軍空港に百円ライターに喜びし兵
スーパーの鮪の解体にホヤも並ぶ月に一週の仙台生活
庭隅に植ゑた白木蓮(もくれん)径百ミリ満開の花見たこともなく
柿の木は棚状仕立て採るときも脚立は要らず徒長枝を伐る
真ん中のブルーベリーは今年採る鳥除け網のドームを被せる
モノグサの我を見下ろす大観音朝なさな見上げ健康感謝
居間の前にくつつけて建てたサンルームあの頃の若さ今に懐かし
目の前のジャスコに妻は暇潰し日日一回の買物行きは
妹はやつと売る気になつたのか寡婦で二人の子育てた家
イオンモールの照明塔に育雛の烏の羽ばたき巣立ち間近かに
遠回りして見にゆきし金蘭も銀蘭もなし余蘖の荒れ野
榊伐る妻に小言を言ひつつもなほ切る妻に手を振り上げず
三月経て無沙汰の庭に鳥除けのブルーベリーは程よく熟す
朝霧の大観音はおぼろ顔ジャスコの広場正面にして
カロチノイド野菜の成分いち日に３００グラムを妻に求めぬ
ウクライナいくさ終らずなかなかに戦はいつも政治の延長
プーチンに反旗かかげるプリゴジンいつか消さるる運命とぞみる
居間よりも天国にちかき書斎なり冷房ガンガンパソコンを打つ
今日もまた焼香にゆきぬ後輩の遺影はわれより老いて円熟
われもまた藜の杖のなる日まで迎合もせず忖度もせず
朝散歩に補聴器着ければ蝉の声歩幅ゆるめて蟻んこ踏むな

朝散歩にカブト虫とセミ裏返るすがるいのちを草むらに寄す
玉音をききしこの耳蝉が棲む欅の大木ミンミン蝉が
立ち上がり蜱谷痛むを抑へればタオルとハンカチ血に染まりたり
ハンドルで打つた左手の二指四指腫れて黒ずみ物を掴めず
決まりゐる道なら探さずもよしゆつくりのんびり行く老いの道
うすべにの下塗り重ね初化粧三十二年前の我が家は未だし

三村幸男（みむらゆきお）☆　（埼玉県）

現実

咲き誇る大きな向日葵は庭の主蟻が連なり上り下りする
蜜吸いに花の周りを飛び交いて小さき蝶が目の前よぎる
白菊を買い求め来て命日の兄の墓碑対の花立て満たす
菊は皆くねくね曲がり塀外に飛び出すありて白菊咲かす
夕暮れの空を横切るカラス二羽南の林を目指して去りぬ
黄に枯れてふわり舞い散るケヤキの葉塀の片隅山とつもりぬ
臨時休校の子供の声が響く路地朝早くより蜥蜴を探す
北風に背中丸めて歩く兄惣菜買いに夕日のなかを
雨降らぬ校庭に広く砂が舞いサッカーボール蹴る音響く
地鎮祭の神主の祝詞よく聞こえ爽やかな風建主に吹く
建売の建築急ぎ街灯を頼りに杭を打つ夜風冷たく
保育園に迎えに来たる婦人らは自転車下りて夕食談義
向かい風ビニール袋を舞い上げて信号見えず急停車しぬ
鉢植えは枯れ枝となり土乾き今日も水やる春の近しと
しんしんと冷える朝には温野菜ホットコーヒーに目覚むる躰
献立は妻の要望聞き入れてオロシハンバーグ電子レンジで
リハビリで手足をほぐし仰向けに筋力低下の身体よ動け
ハナミズキの膨らむ蕾窓に見え育てたる花を見ずに逝く妻か

今年は現実を直視し表現に気持を入れた時期が多く、うまく表わすのに苦しい文章になりがちでした。

三好規子（みよしのりこ）　（神奈川県）

ウクライナ

朝あさに家のめぐりに囀るはイソヒヨドリらし姿みえずに
幸せの鳥といはるる青き鳥イソヒヨドリの声のみ聞こゆ
青と茶の二段のTシャツ好む孫イソヒヨドリと同じと言ひて
スターリンプーチンと続く理不尽さシベリアに四年抑留されき叔父は
リトアニアの留学生は顔しかめ言ひき「ロシアにどこの家族も苦しめられた」
茶と黄色の糸にひまはりのコップ敷を編むウクライナフェスティバルバザーに
日曜ごとの牧師の祈りプーチンに届け悪より目覚めるやうに
福岡の子より飛行機の往復のチケット届く歩けるうち来よと
空を行く二時間ほどの一人旅子らの送迎してくるる幸
我がために借りたる車椅子のあり三年ぶりの子の玄関に
横浜の家まで付き添ひ送り呉るるコロナ癒えたる福岡の子は
機の窓に子と雪かづく富士山を見下ろす二度とはなしと思ひつつ
冬休みに孫は発ちたりフロリダへ語学研修とクリスマス体験に
ホストにはTシャツとミニカー夫人には羽子板を孫は土産に持ちゆく
クリスマスにマフラーと帽子を贈られて笑まふ女孫の写メール届く

二十六度のフロリダに孫はプールにて泳ぎたりとふ正月三日
ジュエルさんの書きくれしチキンロールズのレシピを訳しつつ料理する娘
カップ一杯は２４０cc計算をしつつ子は料理すアメリカのレシピ
下校時に「霧笛楼」に寄り孫娘われに買ひくるるバースデイケーキ
銀杏のにほひを厭ふ婿の留守に娘と食ぶる十粒炒つて
三度目の三位の孫のアーチェリー次は二位をと口には出さず
買ひ換ふる孫のベッドをウクライナ避難の少年に使つて貰ふ
ウクライナの親と離れてその姉と避難の少年「帰りたし」と泣くとふ
日本語の分からぬ少年は寂しからむ母はウクライナの警察署長とぞ
ウクライナのカトリーナと孫もケアプラザのチャリティバザーの売場に立ちぬ
Tシャツには水の輪ゑがかれその中をロシアのミサイル突き刺されゐる
ウクライナの避難者に子は震災を案じて配る防災用品
濃淡の緑に白き山ざくら芽吹きの紅が山を彩る
ウクライナのイースターに焼くといふケーキ作り呉れたる避難者ヤナさん
十時間かけ菓子作りしたるヤナさんの心に余裕うまれたるらし

関西へ数年ぶりに帰りたり娘夫婦の付き添ひくれて
三年半ぶりに大阪の夫に会ふじつと我を見て「規子！」と呼び呉る
介護士に嚥下障害あると聞き夫の好きなにぎり鮨もち帰る
父母の墓に詣で帰りの電車まつ月見山駅は昔のままに
故里の駅舎に坐れば甦る制服姿の女学生のわれ
須磨寺まへの商店街に馴染みゐし菓子店文具店鮨屋が残る
オカッパに切つて貰ひゐし散髪屋さん同じところに変らずありぬ
三人の子の卒業式に着し絹のベルベットの服解きクッション作る
久久の夫との電話に今なにが欲しいか聞けば「ポポ」と言ひたり
丹波産ポポーのジャムのあるを知り娘は取り寄せ夫に持ち行く

毎月締切り日があるので「冬雷」に出詠し、ぶり返したり熱まで続き、寝た切りの生活と内科の検査に追われる日を過ごしました。当初は歌を考える余裕がなく回復するにつれ合同歌集を開いたり、歌を考えることで痛みを忘れ気持が前向きになりました。ずっと歌を続けて来て本当に良かったです。なければと何とか歌を続けています。通院や通所ケア以外出掛けることの少く、感動する機会も無く、「下手な歌でも良いので自分の歌を」の言葉に押されて詠んでいます。昨十二月から二箇月余を椎体の七度目の骨折を

病院のホールのグランドピアノ上の大きく手の込むレース編みに見惚る
竹林や樹木の多きなだらかな石段百米ほどを歩みぬ
きざはしの細く小暗き道ゆけば深山のごとき心地してたのし
とりどりの熱帯魚に髭を振りながら動きまはる海老はあるじの如く
無くしたるカードを寝床に想起してゐれば何時しか眠りてしまふ
再発行したるすぐのち押し入れの古きバッグよりカード出で来ぬ
皺ふかく静脈あをく浮くわが手の甲を抓みて遊ぶことあり
たまさかのフランス料理に坐りをり中三の男孫に初のフルコース
信長の時代以来とふ皆既月蝕と惑星蝕を家族で見上ぐ
インフルエンザとコロナ五回目のワクチンを受けて子の待つ福岡へ行く
宅配便に荷物を送りショルダーバッグに杖のみ持ちて飛行機に乗る
百万本の黒松つらなる晩秋の「虹の松原」を走りぬけたり
一面に枯れ尾花なびく高原を縫ひ阿蘇山のぞむ大観峰に着く
三歳振りに会ひたる長男が第二歌集を作れと勧む生き甲斐にならむと
十年に一度の寒波とふあした白梅五輪わらひ初めたり
幼どき日本に三年住みしとふ孫のステイ先の夫人ジュエルさん
立春の暗き朝の水の面ただよふ鷗よ冷たからうに
弓爾乎波（てにをは）の合はない台詞プーチンのウクライナ侵攻一年の演説
三月の初め見頃の鎌倉のソメイヨシノ似の玉縄桜
来春もこの桜花みらるるやう散歩かかさず元気に居らな
鶯や磯鵯の鳴き声と木木の若葉がわれを慰む
雲丹よりも旨き「ビヨンドとうふ」とふ豆腐たべをりうにの色して
人住まず荒れたる家の草の中ゆるる藤房に暫し足止む
突然にホームの夫を訪ねれば娘や婿の名前出でこず
寝た切りの夫は血色もよく何処も痛まず穏やか握手して別る
六甲の山並み見れば懐しさ募り来て背の痛みを忘る
コロナ禍に幾年ぶりの父母の墓下辺に苔の青く生えをり
故郷の御寺の写経に通ふ友の写メールに誘はれ行く六十年ぶりに
父とよく水を汲みにし湧水の「霊泉」施設の小きに驚く
「志らはま」の母の好物の巻き鮨と穴子鮨たべて母を思ひぬ
旅のあと何時までも疲労取れずをり年の所為とは思ひたくなけれど
鶯の声を聞きつつ鮮らけき青白赤のあぢさゐの横にひつそり沙羅の白花
長男を五十八年まへ出産したる須磨の産院まだ残りをり
婿の父の緊急手術の無事を祈る白き紙にて鶴を折りつつ
幾度か共に旅せし孫の祖父の心臓バイパス手術を思ふ
白妙の泰山木のすぐ傍に凌霄花の橙の色
川沿ひの道に山桃の実のあまた転がり踏まれ朱く染まりつつ
山桃のいくつ拾ひて持ち帰り娘がジャムを作り呉れたり
朝刊を配るバイクの音に覚め夢に会ひたる亡き友を思ふ
香辛料を種種そろへて専門店のやうなカレーの香が部屋に満つ

小野小町紫式部清少納言のうた諳ずる眠られぬ真夜に
丁度よき湿り具合を見計らひ炉の湿し灰つくりし遠き日
留守番に干し物の出し入れやそを畳むぐらゐの仕事がわが役目なり
早川師の万葉仮名の「伊呂波耳保…」の字を手本にし五十音表つくる
週一度ベビーサークルに孫と共に遊びし和(なぎ)ちやんが乃木坂46に入る
週刊誌の表紙やグラビアに載る和ちやんを孫より娘が応援しをり
雷を伴ふ昨夜の強き雨にひまはりすべて頭たれをり
「ポポ」といふ言葉いぶかりスマホにて調べてみれば果物と知る
気配して顔をあぐれば栗鼠二匹われと目の合ひすぐに茂みへ
見下ろして打ち上げ花火見物は今宵はじめて山の上の保養所に
伊豆山に熱海の花火に合はせ来ぬ後半みえず霧に覆はれて
いつまでも真夏の気温つづく道に彼岸花さく時たがへずに

村上美江(むらかみよしえ)　（岩手県）

冬雷叢書に加へて戴いて

法事の日空晴れ渡り温かし心の中まで光の差して
水晶の亡夫の念珠を胸に置き形見のスーツを着たる息子よ
両の手を吾に委ねて重かりし九十五歳義母の足取り
気に掛けてをりつつ過ぎたるこの月日やつと叶へる区切り目法要
体力も気力も奪ひコロナウイルス家族四人を家に籠らす
この町にグループホームを建てたいと若き二人は東京よりもどる
親の思ひどれほど若きに伝はるか思ひの丈をぶつけてみよう
心まで洗つていつて下さいと大海原の大谷(おほや)海岸
キラキラと川面に映る冬の空薄い水色少し濃くして
書き出せば去年の良いこと百以上スラスラと出て幸せなりき
「果報持ち」どちらに似ても嬉しかり父似のわたし母似の弟
亡き夫に似てゐる娘指先の爪の形も指の長さも
ねこやなぎ思ひのままと花言葉銀の毛布は雨を弾くよ
早緑の早採りわかめのかをり立ちシヤキシヤキやはらか口中に春
この道は吾の選びし道なれど選ばずにして定められしか

ふくよかに握り返して菊の花祖母の手に似てやはらかきかな
「振り向くな」「前だけを見よ」ダブルスの友と歩まむ再び吾は
初デートのデコボコ道さへ嬉しくてあなたと歩きし碁石海岸
打ち寄せて砕けて戻る波幾たび碁石海岸に虹の伸びゆく
懐より遺品の免許証取り出して若き日の亡夫と共に散歩す
紅梅の咲く氏神を拝みて今日の契約の事無きを祈る
私たち親子三人だけの海貸し切りテラスの五月の風と
「下手で良い」自分の歌をとの教へありいつも心にこの手の中に
五日ごと賑はひ響く市の立つ蓬ねり込む餅を求めむ
何気なく真夜の窓辺に近付けば月光トロトロ萱縁取る
道といふ亡夫の一文字然りげ無く歌に盛り込み何首か綴る
たつた一首満足のする歌うかび自分史に書くそんな年であれ
目に映るみどり全てを突き抜けて車走らす山々の道
気仙川五月の空を反射させみどりの滴を集めて豊けし
白内障母なる吾を通り越し気付くが遅れ息子に詫びる

障害を持ちたる息子は見づらしと訴へもなく物に近づく
手術室息子の片手を握りしむ麻酔効くまでの僅かな時間
三人で小さな車に乗り込みてドライブ気分で検査に向かふ
縁ありて親子となりし息子にはいかほどの理解吾にありしか
感情を「ことば」に出来ずイライラする息子の心解らうもつと
約束は制約なりと気付く今制約だらけの吾の子育てか
手術後に「遠くの山がきれいに見える」思ひがけない息子のことば
白内障全身麻酔の手術終へ息子はひとつ大人になりしか
被災より十二年目の過ぎ壊れしを今やつとにて修繕終へる
暑過ぎた夏に朝ドラ「らんまん」の「おまんは誰じゃ」を庭草に言ふ

二〇二三年待望の「冬雷叢書」に加えて戴きとても忘れられない一年となりました。第一〇一篇は奇しくも東日本大震災より後七十日で十三年目を迎えようとしておりました。楽しいはずの一月一日今度は能登半島地震が起き大震災と化しました。あの時の事が再び思い起こされ、何が出来るだろうかと恩返しの気持ちが湧き上がりました。人生何時何が起こるかわかりません。一つでも若い内に刊行できた事、又、その後の冬雷会員の方々との交流。今まで見たことのない素晴らしい景色が待っておりました。ありがとうございます。感謝で一杯です。

喪服着たる孫の姿を前にして「息子にすつかり似てる」と義母は
義母は未だ「自分で出来る」と手を払ふ見兼ねて手を貸す住職
の妻
五人分の卒塔婆説明する義母の手をひきてをり読経流るる
河口湖ステラシアターの舞台にて玉置浩二はアカペラ響かす
四十年歌を続けて初めての幸せ感と舞台に語る
軽い人重い人等の症状はどこで差がつくコロナの感染
会社にも出勤できずこの月は休みの方が多いと娘は
誰の所為と突き詰めたとて罹る吾家族ともどもコロナ禍の最中(さなか)
ともかくもウイルスの恐さ思ひ知る味覚障害身体のだるさよ
純白と漆黒二色のコントラスト雪上の求愛タンチヤウヅルよ
想ひ合ひいたはり合つてタンチヤウヅルつがひになれば一生寄
り添ふ
鳴き声は力強くも激しかり命を繋ぐ厳しい姿
羽広げ胸合はせればシンメトリーくちばし空につがひのタンチ
ヤウ
寄り添ひてマイナス十度の日の出ごろ餌を啄む仲良しタンチヤウ
丁寧な保護活動に個体数増えてたくましく美しく飛ぶ
新たなる豊かな命希望へと続け飛翔のタンチヤウヅルよ
海を背にカメラを向ける熟年の夫婦だきつとわたしは一人
マスクして化粧をせずに出掛けるを娘に注意されて戻りぬ
マンネリ化してゐるやうな吾が歌を変へてみたくて海岸に行く
立春を過ぎれば日差し温かく日本の天気図暖色を増す
指編みの太い毛糸を編み直し何度も指先リハビリ進む
満開の桜見上げずひたすらにタイヤ交換つぎつぎ続ける
歌の友遠く離れてゐるけれどどうしてゐるかと草引きおもふ
「あまちゃん」の再放送のはじまりて「じぇじぇじぇ」の声に
楽しみの増す
箱型に一つ一つに区切られてB型作業所のコロナ対策
上がつたり下がつたりして春の気はさくらに息かけ開花を促す
晴天の祭りの続く一日目踊り手不足の二十三人
曲想の変はるタイミング吾の行くみちのり変はる時になるかも
さういへばあの時見えにくさうだつた息子の様子いまに解るも
朝食のコンビニの品迷ひつつ手づくりおむすび懐かしくなる
紫の花を見る度浮かび来る凛たる姿のほほゑみの友
手に負へず言葉も顔も荒荒しくなりて息子はすぐ別室へ
戸惑ひを覚えて模索する日日に障害の本を見比べ選ぶ
慟哭の水島和夫の歌に触れ顔を覆ひて声あげて泣く
落ち着かぬ息子の心イライラ度パニック責めず笑つて笑つて
「おはやう」で始まる手紙友からのホタル袋は軽やかなベルと
甘き粒ラベンダーシュガーの爽やかさヨーグルトに振りかをり
残りぬ
パンフレット「食はいのち」のメッセージ旨し旨しの無添加無
農薬
家の庭直して良かつた毎日の片付け残らぬ土地さつぱりと
暑過ぎた夏に工事をする人に大き日傘を覆ひてやりたし
暑過ぎた夏に柴犬コタローを玄関に入れ冷房分ける
暑過ぎた夏は仏前の生花さへひととき休ませ枯れない花を

暑過ぎた夏は食材ドギドギと大きく切つて調理器へ投入
暑過ぎた夏は今年だけのことといえいえこの先も地球温暖化
暑過ぎた夏に朝食昼食と夕食準備す水に手を入れ

森藤（もりとう）ふみ　（東京都）

神輿

高枝に赤き房の実いまだ揺る飯桐の葉の黄に変はりゆく
町内をひと回りして橋に立つ今宵の月蝕始まりてゐる
例会の会場取りは高田さんに頼りてをりしが急逝されたり
会議室の予約はそこのパソコンに入力してと受付の人
専用のパソコンに二月の例会日入力してゆく教はりながら
例会の会場二月三月分予約出来たりコロナよ鎮まれ
生ひ茂る枝払はれてすつきりと冬の日のさす空き地現る
桜木の下にカメラを持つ人に聞けばエナガの巣作りしてゐる
精巧な巣を作るので有名と辞書に出てゐるエナガの特性
エナガの巣の材料はクモの巣木の幹の苔百日紅の枝と聞く
見た目にはフェルトのやうな小さな巣白黒頭のちよこつと覗く
応援の太鼓高鳴りランナーは折り返し地点を通過してゆく
数人の男子に混じり疾走の女子ランナーの表情かたし
折り返し地点に見たる女子ランナーゴールの姿テレビに映る
弁当の販売車に寄る人の列オカメザクラの並木の下に

誰も皆顔みて話がしたかつた雨降る中を十二名の友
澄む水の流れを埋め自生するクレソンの葉の色濃きみどり
好きなだけどうぞと言はれ手折りたるクレソンの茎意外に柔し
七つほど花開きたる駿河台匂ひ桜のわが背丈越ゆ
栴檀の緑かがやく葉をおほふ薄むらさきの花ゆたかなり
をがたまの木に寄りをればハンカチの木がありますと声かけられる
ハンカチの木まで案内してくれて私も娘に聞きたると言ふ
我の背を少し超えたるハンカチの木に揺れてゐる苞二三枚
祭壇の友の遺影の優しさに心落ち着き焼香をなす
テレビ体操の画面に突如鳴り響くJアラートの緊迫の音
画面にはJアラートの鳴りやまず北朝鮮のミサイル発射
海紅豆の落花広がる樹の下を道路工事の人の掃きをり
バス停に着くと同時にバスのきて行きも帰りも今日は運よし
町内の子供神輿のわつしよいの掛け声さなか驟雨の襲ふ
六年振りの八幡宮の本祭り神輿の渡御に心のはづむ

育ちたる町の神輿は四十七番やうやく橋の上に現る
弟も兄も担げる神輿なり取り巻く人の多さ変はらず
給油所に消防団員太きホースに放水すれば担ぎ手勢ふ
神酒所前囃子に合はせ担ぎ手の神輿を掲げ回しはじめる
橋に向かふ神輿進まず人波の上に出でたる鳳凰揺れる
永代橋渡る神輿を見てみたしと母の言ひしは何時の祭りか
五十五番最後の神輿見送りて六年ぶりの祭りの終はる
娘二人揃ひて会ふは稀なこと我が生日をランチ共にす
口数の少なき次女のよく喋る長女も混じる三人のランチ
秋彼岸近づきくれば墓参りいつにするかと弟に聞く

ハンカチの木を初めて見たのは新聞の写真でした。何年か後、新宿御苑の入り口近くの大木から大きな白い花びらが散っていました。ハンカチの木でした。傷の無い真っ白な花びらを探し押し花にしました。去年木場公園にも若木が植えられました。がっちりした枝に秋にはピンポン玉のような実が六個出来ました。

一月には無くなっていました。春に花の咲くのを心待ちにしています。

子供らとゲーム始まるところらし着ぐるみ姿ののらくろのゐる
しやがみこみ子供達待つジャグリング大道芸人手馴らし終へる
鉢に挿すマリーゴールドの茎一本根づきたるらし少し伸びたり
豊洲にて放送中のチラシ貼り木場のサテライトは空になる
特売の籠に大きなカリフラワー白くはあれど瑞々しさなし
原つぱに園児ら跳ねて駆け回り砂埃立ち横に流れる
丈高き皇帝ダリアの花ひとつ空向き開くを風の揺らせり
インフルエンザとコロナの五回目接種終へるも遠出はしない
会議室一月分をキャンセルし三月分の支払ひをする
どんよりと朝から寒き公園の広場に園児ら一人も見えず
つはぶきの葉にぴつたりと張り付いて雨に濡れたるもみぢ葉一枚
クロモジの名札に変はり新しき札に書かれるムクロジの名
本当はムクロジなのかこの木の名長き年月誰も気づかず
年末の青空高くゆく機影間隔みじかくつぎがあらはる
ベランダの前の楢の木ひと本に残る葉わづかともに年越す
元日の今朝はわたしの洗濯日ベランダに差す光眩しむ
初詣の八幡宮と不動尊人と露店に参道埋まる
新年の日差し明るき川の面ひとつクラゲのただよひ行けり
ムクロジの幹より横に長く伸び地に付く程の枝切られたり
ここは餌が少なくエナガは食事に行つてるとカメラマンの言ふ
植込みのサツキの上に茎のばし水仙四五本はなのゆれをり
冷蔵庫の使ひ忘れの玉ねぎを切れば緑の芽の育ちをり
八幡宮の祭太鼓の鳴り渡る東京マラソン折り返し地点
折り返し地点のカーブ小回りにまた大回りにランナー駆ける
カメラ据ゑ手持無沙汰の人の差す猫柳の枝にカハセミ居ると
人数の増えたる体操教室にマットを敷けば窮屈感あり
新緑の中に桜の見えかくれ雨降り頻るに花びら散らず
道隔てナンヂヤモンヂヤと海紅豆の白と紅とが共に咲き出す
枇杷の実を啄へる鴉芝に降りすぐに樹上に飛び立ち行けり
友と最後に会へたのは去年の東御苑のウォーキングなり
通夜の席にアルバム繰ればいつの日も微笑み顔の友のいます
黄の蕾上から順に咲いてくるリュウゼツランの細き茎より
四つ角の海紅豆の樹繁り合ふ葉と赤き花程よく混じる
内科医も整形外科の医師も言ふ水分こまめに摂つてください
思ひがけずウォーキングの友に会ふ整形外科の待合室に
階段を上り二階の美容院ドアを開くれば広きフロア
開店の準備未だ途中らしフロアに椅子の多く置かれて
雑然としゐるフロアの隅に置く椅子に腰かけカットされたり
新しき店が出来たと弟の買ひきたる鯛焼きまだ温かし
温かさ残る鯛焼き手に取れば思ひのほかに厚き皮なり
ボリュウムはあるが皮の焼き加減餡の煮詰めも今一つなり
鳥の声聞かれぬ日暮れの公園に蟬の声ひびく今年初めて
地下駅の狭き階段上りゆく出口近づき空気のぬるし
スーパーの京都物産展終はり夏服セールに時経ず変る
年年に空き家の屋根に咲く花のノウゼンカヅラ勢ひのなし
朝刊を取りにとドアを開けたればゴキブリひとつ通路に転がる
大き西瓜八つに切られ並びをり去年は買はずに終はりたる夏
初物の西瓜食べつつ思ひだす母の好物食はず嫌ひの父

剪定の済みて平らになる垣に小枝一本飛び出し伸びる
八十の祝ひに貰ふブーケなり向日葵三本ぺたりと開く
コンクリの地の水たまり産卵を試みてゐるアキアカネの群れ
コンクリの地での産卵あきらめてアキアカネのむれ飛び立ちゆけり
手の平に収まるコードレスマウス時々スイッチ切るのを忘る
エンジンを止めずに大型コンテナ車ベランダ前に停車の長し
週二日体操講座に当選し半年間の予定の埋まる

安川敏子（やすかわとしこ）☆　（埼玉県）

天然の日々

立冬に水上公園散策す人影まばらマスクを外す
紅葉とメタセコイアの木漏れ日に秋を感じてひととき楽しむ
貯蓄の日手編みのくつ下頂いてカラフルな色に心暖まる
暑い夏に丈だけ長く伸びていた菊にわあっとつぼみ出揃う
笹竹のすき間より見る南天の実が小春日に揃って光る
生垣の山茶花咲いて思い出す幼い頃の隣のきみちゃん
師走来て去年と同じにくりかえす足腰重く手抜きの掃除
コロナ禍に太極拳のメンバーも半数になりさびしい稽古
門松を飾り大晦日を実感す平和な新年に祈りを込める
おめでとう賀状書きつつウクライナの戦い思い心は晴れぬ
ほろ酔いのばあばが二人掘炬燵おもちに気をつけぜんざいを食ぶ
年毎に「身体のどこかが痛むのよ」母の繰り言今身に沁みる
雲動き空全体が真っ白に洗濯物を急ぎ取り込む
バースディ髪型かえてリフレッシュ祝の花束春の香に酔う
スルスルとオイルマッサージを体験す冷えた足指暖かくなる

予約して今日も検査にでかけ行く結果を思い悩みはつづく
懐かしの曲名パンフに満載で思い出手繰りコンサートに行く
カルテットピアノが踊りたちまちに五感に染み入るテノールの声
目の検査三日続いてヘトヘトに眼圧高く緑内障と
手術日の決断せよとせまられて寝不足の朝両足がつる
大輪のばら玄関に置きてあり出入りの度に香に癒される
念願のハワイでフラを踊る旅思いが実り夢の中のアラ・モアナ・ビーチ
人は皆無いものねだりで悩むもの桜は花散り青葉の季節
思い出のアガパンサスがつぼみ付け十年振りに期待ふくらむ
緑内障「失明する」と言われ決心す外科手術してレンズを両眼に
三十年一度もころばず生きて来て何故か「転倒する」原因不明
白妙菊にポチッと赤いてんとう虫思わずサンバの歌口ずさむ
カレンダー赤丸印は通院日緑の丸はデイサービス日
ありがたくでも不服あり「眼の手術」眼圧下らず点眼つづく
バス停に涼やかな風鈴の音聞こゆ熱風なれどひととき楽し

デイサービス残りの時間に童謡を皆で歌って半日終る
ご自慢の赤い外車も汚れ気味猛暑の故か娘も多忙か
西の方は水害つづき東は猛暑土は乾いて鉢花枯れる
新しい冬雷届きまっ先に百歳の方の歌と編集後記読む
冬雷の歌に知る詠み人の生活と悩み覚えのありて心にのこる
朝夕に多種の薬を飲む事と点眼忘れずチェックする日々
晴れた日にざわつく校庭運動会父兄の熱気道路にあふれる
更紗染の美しき作品のトートバッグ予期せぬ到来に心弾む日
夕暮れに川の上のみ群れ遊ぶ透けてキラキラ赤とんぼの羽
「梅の花」の豆腐料理を味わいて敬老のお祝いと笑顔の娘

いつ迄も続くコロナ禍に旅行も行けず私も70代から80代になり、身体の故障はどんどん進み歩ける内に行動せねばと、近くでも素敵な場所を訪ねたり「ノルディック・ウォーク」を買い求め「運動療法」を始めました。幸いバス10分でデパートや大小のホールでイベントがあり、病院通いの合間にせっせと音楽会や展覧会等に出かけます。「冬雷」に入会させて頂き良き師と歌友に恵まれ、101歳の方、卒寿の方米寿の方と大先輩の方が多くその人生を歌に表現されていて、それを想像し感動し納得し学び毎日楽しく拝読しております。

広い池鴨の親子がスイスイと左右に動き波紋広がる
空あおき小春日和に公園の大樹の下を小犬が走る
霜月は計画通りに予約取り今日歯科医明日はインフルエンザの接種
干し柿の甘くやわらか食べながらいつかの老舗の和菓子を思う
寒くても一人暮らしは缶ビールこたつに鍋の夕餉を楽しむ
冬の陽が葉先に宿る水滴をポトリと落とす落葉の上に
うらやまし伊香保温泉へ友は行き気分転換してきたと言う
冬の朝あと十分を惜しむ床つぎの段取り考えながら
「おめでとう」誕生祝うメール便花束の絵で来る「サプリ」のパンフ
甘いもの嫌いじゃないが糖尿病予備軍と言われ少し控える
栄光の時は短い競走馬喝采の後は二世を残す
茨城の干しいも届く好物の姉に菓子添え小包送る
今日だけは血糖値無視好きなもの飲んだり食べたり楽しく過ごす
ストーブにたよらない日は嬉しくて鼻歌まじりに水仕事する
散歩する相手についていけぬかと声かけられても遠慮する今日
花韮が一斉に咲きその側にクリスマスローズ二輪ひっそり
見上げればむくげの新芽いっせいに朝の光を浴びて輝く
じゃがいもにあちこち芽が出ておもしろく鉢に植えたら見事な葉が出た
また雨ね洗濯止めて電話する声だけ元気で皆不調なり
行きたいな「別海の森」広大な自然の神秘降りそそぐ星
橋の下の澱む川面に亀がいて鯉は見えずに白蝶が飛ぶ
年重ねお世話になります順番に眼内レンズに「義歯」補聴器と
この頃は古木の凄みや生きものの小さな命が何故か気になる
鬱々と雨の空見上げ滅入る朝アガパンサスの開花に感動す
一週間寝ても覚めてもゴーグルを目薬さす時解放される
一日に目薬四回忘れずに四種を次々タイマーセットして
早朝の病院通いを懸命に助けてくれた娘に感謝す
もう猛暑七夕の今日早すぎる西は大雨災害またも
今日も又散歩休むとだめになる歩く速度も股関節痛も
クーラーを効かせていながらホットパックを腰にあてたりお腹に巻いたり
あの服もこちらのシャツも興味なし外出予定なく買う気もなくて
決勝戦関取二人睨み合いぶつかり合った勝者の涙
結果良く大関昇進決定に大きな身体にあふれる喜び
ブラジルの「不思議発見」驚きのサーファーの技「ボロロッカ」制す
クーラーの部屋で終日過ごす日々明日は外出通院予約日
早朝に急ぎコンビニで振り込みすパンとコーヒー買う人の後
鈴の音でドアの開閉気づかせるデイサービスの楽しいトイレ
漁師さん魚礁を作ると牡蠣の殻活魚を集める真剣勝負
味まつり会場に銘店出揃って色とりどりの品物並ぶ
医師が言う「世界を見よう日本程ワクチン多く打つ国はない」と
長電話に言葉がスラスラ出てこない空行く雲の流れ美し
亡き人に想いの届くマンドリン切ないまでにやさしい音色

山口　嵩（やまぐち　たかし）　（福島県）

水をひとくち

風にふれ風に吹かれて登る道ひかうき雲はうすれ拡がる
石またぎ根をまたぎきて枝くぐり苔に手をつき水をひとくち
山道に落ち葉日増しに積りきて木々の合間に夕陽のびゆく
葉が落ちて黄のあざやかに花梨の実あをき空背に映えてきらきら
泳ぎてはときに眺むるアクアビクス男性一人華やぐ中に
年ごとに正月行事も簡略化キッチンのみに飾る「輪どほし」
「なるほど」とその一言が言ひいでず変なプライド男のよわさ
ブーム時に好きになれずのビートルズその歌ひびけロシアの空へ
林塘をうつすら覆ふ茜色つめたき風をしばし和める
風きたり雪の粉まける竹林のざわめき去りて冷えよぶ静けさ
祭壇にほほゑむ友は「北帰行」しみじみ歌ひし十日前の夜
「もう一軒」袖引く友に「すまない」と別れしときは悔いるも戻らず
戦争の悲惨さ知りしか論議なき防衛予算は誰がためなるぞ
白酒に替へてワインの雛まつり子らの声なく寂しき夕げ
「これから」がまあまあならば良しとせむあなたの歌集よみて枕辺

カレー粉の量多すぎと「指摘」されこれが「本場」と水をひとくち
父たてる姿みざりし厨房に吾入る機会しらぬ間に増す
会話なくスマホ見せ合ふ生徒らはときに笑顔でアイコンタクト
「お疲れか」ドライブレコーダー問ひてくる「疲れてない」と思はず声に
手をあげて黄色い帽子の波がゆく見守り隊を見守るやうに
バーボンとジャズのビートに誘はれ気持は二十歳（はたち）恋愛論に
アガペでもエロスでもない愛ありか君の後から登る岩場よ
吹く風にただただ任せ消えゆかむ薄き雲ゆく青空ふかし
三本の曲線ゑがく飛行機雲　戦なき空に在りてこそよし
挽く豆のかをりに何故かほつとして眺める空に雲はぽつかり
同胞の権利の庇護を口実に市井に向けたる「Zの弾道」
キャタピラに荒らされつづく穀倉地まづは弱者にむかふ苦の風
「新しい戦前」なのか議論なく専守防衛過去の頁へ
月下美人一輪咲きて薫りたるその香残れる朝の廊下に
百合の香が紫陽花つつむ雨あがり長閑な初夏のだるきひととき

まだ暑き夕日のおほふ公園にぽつりさびしきモニタリングポスト
さざなみも集りくれば波濤へと防弾チョッキもやがて戦車か
米国に意も異も何もなきごとく重石然なる地位協定は
低山をぶらぶら登る醍醐味か「ツルリンドウ」は図鑑なかほど
川音を消したる雨も去りて射す和む光に嬉々とナデシコ
雨乞ふか傘全開のヤブレガサ傘のあちこち葉枯れの兆し
とほり雨期待したるもパラパラと葉も濡らさずに青空に消ゆ
為政者の声高まればそのたびに弱者に降りく恐怖と悲惨
猛暑日の午後にぼうつと聞く「田園」ぼんやり浮かびくモールなきころ
人間の都合の付けか果樹園を荒らすも元は熊の住める地

十七首までは、何とか〇を付けることが出来たが、それ以上となると全く行き詰まり、一年間を行ったり来たり。四十首到達まで一週間程かかってしまった。

勉強不足はさておき、歌を読み返してみると、その殆どが「改作」の対象となり、三十首選が精一杯であった。歌の主題や描写に悩みながら、結局は同じパターンに終始してしまった感がある。

毎月「九首」を並べ作ることが半ば目的となり、推敲もせず締め切り当日の投稿。大山先生には、ご迷惑をおかけ続けている。

かさかさと音なす道はガサガサと落ち葉の厚み秋の旋律
枝先をしなひてたわわに花梨の実雨後の日ざしに色あたたかし
手作りの花梨のジャムをパンにぬり一昨年の花梨酒つぎぬ
百ごとにちよつと休みつ今日五百最後の百は平と背泳ぎ
上がりには一泳法二十五づつ暫しの休みバタフライのあとは
泳ぎ終へぼうつとサウナの三十分過去は来れどあすは浮かばず
ときとして寂しきことのみ泛びきて首筋すぐる吾妻颪が
散策にともする影は左より前に移りてちちと伸びゆく
紅白に歳を感ずる出演表おほかた漢字しりたる歌手は
珈琲の加減に一言わざはひか今日の昼食トースト一枚
「反撃」も閣議で済ます民主主義野党の存在いまだ朦朧
政治とは民がありてと言ふ人ら見つめる先は我とわが党
内裏雛のみを飾りて仰ぐ空はしやぎし子らはバーチャルのなか
聖路加に川又先生見舞ひし日あなたはきらら隅田の面に
準急・零戦・サマータイム等あり歌集にぽつぽつ昭和のいぶき
「冬雷」に誘ひし人は今なにを故郷の山に歌を詠まぬか
寒暖差十度以上の日が続き花の開花は八日早きと
いつよりか洗ひ物する吾ありて今日はひさびさキャベツ刻みつ
旨しとも不味しともなき此のところ料理について語ることなし
趣味なるか料理自慢の友の言「まづ始めたら」に材料買ひ出す
坂道にかかりここぞとトラックを追ひ越し下ぐるサンバイザーを
渡るのか渡らないのか迷ふ影スロー左折にクラクションなる
免許証更新これが最後かもいや次回もと脳トレパズル
雲の間を過り線なす飛行機雲「専守防衛固持す」雲なれ
「モルダウ」と珈琲の香の流るる午後ｗｅｂで視るカホウカ・ダムを
人権を人絹のやうに扱ひて好みの色に染むるが保守や
選択のかなはぬ戦時の生き様を望む議員に遠き「人権」
マイナスの多くを弱者に澱ませて後の始末もまた弱者へと
隣人を愛せぬまでも肩を組む度量持たざる政治家おほき
朝なさな涼しきけふにと願へるも寒暖計は二十九度に
バス停は「柳通り」の名なれどもつづく街路樹ハナミヅキのみ
反撃を抑止効果といふ政府軍備に流るる税のむなしき
草木（くさき）に絡み空へとツルリンダウ宙にゆらゆら柔き先端
ときをりに草木（くさき）かき分け入る森ルーペに覗く雄しべ雌しべを
砲弾に怯ゆる赤子抱きしめる母を包めよ向日葵の群
宗教をアヘンと言ひし人の言やや納得すガザの瓦礫に
猛暑日の続けるゆゑか何となく穂波の揺れももろく見えつつ
このところ温度差激しき日日となり長袖、セーター邪魔でも必需

山崎（やまざき）　猛（たけし）☆　（埼玉県）

今を感謝

ウサギどしのカレンダー早くも届きたり月日の速さ歳ごとに増す
インフルエンザの予防接種に今日来れば同年齢の患者の顔ぶれ
落ち込みたる自分を慰むすべはなく心身共に疲れ果てたり
悲しみの重なりたる時浮かぶのは故郷で暮らしし母のおもかげ
寂聴の日めくり暦も少なくて一年無事に過ぐるを祈る
かけがえなきたった一度の人生に「路傍の石」を思い出すなり
陽が落ちて冷たき風に立ち向かい犬と散歩の出来る日想う
旧友と銀山温泉訪い来れば思い出数多ときを忘れる
冬至湯につかりて柚子を揉み出せば香りとともに肌にしみたる
膝痛が再発したり歩行にも時間がかかりて犬を叱りぬ
高齢にて足腰衰えままならず上って来れず尾を振るのみなり
十年ぶり友の自宅に立ち寄れば余命三月の癌と聞かさる
春彼岸近づきおれば故郷の墓前に花を供えに行きたし
アナログからデジタルの世の便利さに逆らえずとも抵抗ありき
春の土手餅草つみて振り返る紺碧の空支える大地

絵画展に数十年ぶり会う友は杖を持ちたる白髪のひと
「ただいまー」とランドセル放り友のもとへ飛び出す孫は我と重なる
白子川の青空映す川面には花筏浮き鴨らのよぎる
久々の牛久大仏雨の中緑の丘にすっくと立ちぬ
逝きしわが娘も同じ年頃に一心に本ばかり読みいき
うららかな桜咲く日に逝きし娘の制服かばん箱入りのまま
卒業の季節になりて懐かしき「仰げば尊し」「蛍の光」
原発で仕事をやりし我は思う戦争も原発も決めるは人間
古き友に近況報告言う吾にベッドに臥せる友涙ぐむ
三ケ月と余命宣告受けし友涙先立ち言葉にならず
遠き日に共に歩みし荒草道古き写真に思い出数多
スマホより地震警報鳴る夜明けテレビを点けて朝餉に至る
デジタル化を信じ過ぎては危険だと思い次第にわが確信す
父宛の古き手紙を整理中出で来て召集令状手にす
三年ぶりの法要の寺風清し読経の声が境内に響く

十六年共に散歩の老犬は朝に夕べに吾より先立つ
月光が梅雨の雲間より差し込みて竹林照らし笹の葉揺れる
早世の友と二人で写りたる写真にいつも吾は幼く
短命の友はいつでも吾が心見抜きていしかかばいくれたり
台風の季節になりて思い出す家潰されしキティ台風
通学の路傍に咲きしコスモスの花に励まされ八十年生く
墓掃除に草をむしれば石塔の裏に大きな蜂の巣のあり
鷹の爪気付かず噛んでその辛さスマホ投げ出し声にもならず
同窓の友訪ね来て死を知りぬ去年の晩夏暑き日なりと
碧空に花開きたるハイビスカス深紅の花は一日で散る

師の評に赤彦の「信濃路はいつ春に……」の一首を示されていて嬉しかったのと、ふと学生時代の想い出が蘇って来た。自習時間の時であった。校外では街祭りで商店会の花火の音に乗せて景品券付きの落下傘を打ち上げていた。一等は温泉旅行券等豪華景品だ。先生の外出を見計らい友達二人で郊外へ、落下傘の目的物を拾い帰ると待ち構えていた先生に、「落下傘を頭に乗せて校庭を十周しなさい」と命ぜられ友人と二人で広いグラウンドを廻った。全校生徒達に見られながらの思春期の恥ずかしい想い出である。

昨日まで走り回りたる孫娘今日は熱だし病院へ行く
耳鳴りの高きこの夜もパソコンに年賀欠礼が友より届く
ままならぬ哀歓生み出すわが心移ろい易く捕らえおき難し
早朝の就職列車の見送りをしてくれし友の訃報届きぬ
恩師より賜びたる祝の鍋は今日もわれの朝餉に食を促す
甘酒の麹の香りなつかしく年の門出に二人で祝う
東北の震災の映像テレビより流れてくれば目がしら潤む
花粉症目の痒きことおさまらずスマホ見ながら目頭押さう
わが家の上空が飛行航路となり日に幾たびも航空機飛ぶ
原発も反対賛成言いながら都合の良いとき再稼働せり
若き頃ともに起業へ漕ぎ出しし友は廃業すると言うなり
七回忌吾と兄との出生の秘密を明かす義姉の眼に涙
震災の倒壊家屋見るたびに怖さのまたもよみがえりたり
マイナンバーカード作れと国民に金まで与えて実施を急ぐ
デジタルを信じさせたい政府とて紙を使わぬメリットが怖い
重大な個人情報漏洩し他人のひもを付けられている
現実に大量の情報間違って登録をされている現実を知る
谷川の瀬音聞こゆる吊り橋の上に真白き雲ひとつ浮く
幼き日過ごしし山河道などはすべて大きな景色なりけり
終戦後の暮らし苦しきわが父母は潰れし家に呆然とせり
八月の吾が誕生日に続きたる広島長崎の原爆終戦記念日
エアコンの無い生活は無理だよと友の電話に修理に向かう
物価高の嘆きの中に鶏卵の一個十円代は本当に安し
ひとづてに名医がいると都心まで予約の時間遅れずに行く

気象庁過去最高の気温だと発表せるを浴衣にて聞く
亡き父の齢に迫り難題を父にぶつけしわれに気づきぬ

山﨑英子（やまざきひでこ）　（東京都）

百年を生きて

百歳を祝ひ下さる東京都知事の祝状希望の江戸切子のカップひとつ
墨跡の鮮やかに吾が名前都知事のサインの何よりうれし
しつかりと梱包されたる都よりの荷物総理の賞状銀杯もあり
医院への道の楽しみ大きレモン拳大に色づき始む今年は八個
衰へを心に重しと娘に言へば百年使へば当り前と吾も納得
サッカーの優勝四度といふドイツ対ふ日本にハラハラドキドキ
残り時間七分間の長きこと点取られるな只祈りつつ
深夜便心はづみて聞きゐたりベッドのなかに喜びゐる吾
ブラボーと叫ぶ長友たのもしと日本サッカー世界に誇る
土を踏み歩ける日々を幸せと思ひ見る程吾も老いたり
何も彼も衰へ果てたる吾なれど運動神経未だ残りゐる
私にはピッタリ感の運動量体も弾む心も弾む
心地良く体動かし前向きにとひと手ひと足大切に
送迎の道の並木は未だ冬の色いえいえ木の芽は赤らみてゐる
互ひに老いてゆく身を感じつつ池亀様と励ましあひき

ボケないで下手でも短歌続けようういつも電話に話し合ひたり
耳遠くなりしと時に嘆かれてはがきにそつと励ましたりき
電話の声はいつも明るく少女なり互に隙なれば長電話
会ふ事の絶えて無きコロナ禍に電話のみ楽しみなりき
いま一度楽しき食事と待ちゐしに望み叶はず逝きてしまへり
明るき声に満面の笑顔いついつ迄も忘れられません
久々に園の花壇を巡りたり春は溢れて花も溢るる
ＷＢＣ侍ジャパン強かつたいつ迄も続く吾の興奮
園庭のさくら若葉は風ふくみ真鯉緋鯉が大空泳ぐ
鯉のぼり追ふ児等の声弾むオレンヂ色の帽子が走る
音もなく蕾に触れて降る雨を木の芽おこしと佇み見上ぐ
息苦しさに医院に行けば即入院と女子医大に送らる
処置により呼吸は楽に落着いて心穏やかに夜を過せり
無気力になりゆく自分を見つめゐる弱気はならじと言ひきかせつつ
シャンプーしシャワーを浴びてさつぱりとしても心は少しも晴れぬ

草の露たつぷり含む草の上健康になると裸足に歩みき
くちなしの香り好みて大事に育て楽しみゐたりき遠き日の祖母
くちなしを数多咲かせる道ありて祖母思ひつつゆつたり歩む
ビルの間に揚がる隅田の遠花火父思ひつつ吾が部屋に見る
年々に花火楽しみ上京し昼の花火の色美しと語りくれたり
百一歳と書かれケーキに祝はれて娘と孫との楽しき食事
梅干しを今年も漬けたり二キロ程紫蘇入りとし赤く仕上がる
干し上げし梅に熱湯かけ終り今年の梅と瓶に書きたり
思ひがけなく今宵仲秋の名月なり澄みたる空に唯々見てをり
三日後の退院控へリハビリと廊下百メートル歩く練習

百年も生きるなんて思つてをりませんでした。皆様との温かい交はりがありました
から感謝を致してをります。
た。未だ本が読める事字を書く事が出来る事
が唯一の幸せと思つてをります。川又様に誘
はれ入会していつの間にやら五十余年が過ぎ

こんなにも永らへ元気な生活（くらし）出来るのも皆に守られゐる故と感謝

サクマドロップカリカリと噛むを好みし父思ふ傍にいつも缶ありき

紫のひときは鮮らけき野ぼたんが小さき庭に守らるる如し

クロアチア戦一対一に力ありＰＫ戦では負けとは思はず

み社の鳥居に列ぶ大公孫樹けやきゆりの樹黄葉眩し

黄葉の並みて鮮やかさ極まりて周辺明るく心も軽し

道隔てみ寺の門前に提灯数多並びて立てり今年も平和

門前に灯り点れば華やぎて何か浮きたつ心ひそかに

年々に畳つきポックリ送りくるる伯母ありて楽しみ待ちにき

枕辺にポックリ晴着並べ置き妹と共に楽しみなりき

押し絵羽子板楽しみに友とつきたり疲れるほどに

人の手を借りる事なくいまあるを幸を思はむ除夜の鐘きく

朝々を「いつてらつしやい気をつけて」娘を送る私の仕事

送迎の電話に休むと断りて心うつうつ一日悔やむ

怠け心益々つのり休みがちこれではならずと自分に言ひて

過ぐる道垣の山茶花咲き揃ひ紅鮮やかに光の春に

朝より雪降り来れば珍しと窓に吹き付ける風を見てをり

時折にゴルフのお供か熱海まで出かけられては菓子賜ひたり

突然に「母が亡くなりました」との報せに唯々呆然残念悲しみ

送迎のクルマに見惚るる神田川さくらは満ちて水辺にふはり

赤や黄の帽子かむりて遊ぶ子等大樹のさくら散るを追ひつつ

園庭のさくらは風に舞ひ上り吾がベランダに花びら散らす

街路樹の新芽は忽ちみどりなし吾が街並は勢ひづきて

街路樹に混りて花桃海棠が咲き揃ひたり賑はひみせて

チェコチーム全員職持つ人といふ堅実に戦ふ心根思ふ

神田川さくら吹雪の川面には離れまた寄る花筏あり

香港より帰り来りて母の日の食事賜はる優しき心

強風に雨に濡れたる吹き流し捩れる儘に乾くは淋し

入院の一人の部屋に気力なく優しく物言ふ看護師うれし

入院をしてゐるだけで鬱になるしばしの眠りに悪夢次つぎ

遠く住む孫より母の日プレゼントティファニー香水オードパルファム

けやき若葉あたり明るく萌えいでて並ぶ公孫樹の新葉愛らし

道隔てみ寺の大樹松若葉僅かながらも濃さを増しゆく

殊更に松の若葉の萌ゆる様変らぬと見え変り行く萌

何ごとも娘に任せ何すること無く心苦しと日々過しをり

洗濯物さつぱり洗ひ乾す喜びも畳む幸せ全て無くなる

遠き日の祖母の思ひ出花が好き似てゐます私も花が一番

幼き日花火の帰りのお土産を待ちてゐたり吾等妹弟

通ひゆく医院の庭の凌霄花棚にオレンヂ色の花あまた並ぶ

年々の梅干し作り最後の仕上げ三日三晩を干し上げたり

香港に住む人吾の誕生日に山形のさくらんぼ送り下さる

宝石の如くに並び扱はれ生産者より届く何より新鮮

柿若葉に元気を貰ふ青き小き実赤く実るを待つ間の楽しみ

長続きの猛暑にうんざりされど秋は静かに近づきてをり

ベランダに小く聞ゆるすず虫の声にしばしを耳すましをり

眠られぬ儘にベッドに見ゆる空人工衛星輝き増して

自分では左程と思はぬ体調に検査の結果入院となる

入院を告げられ覚悟せるものの又も一人の夜が始まる

コロナ禍より面会一切断たれたり娘と会へぬ淋しさ思ふ

病院の食事は全て薄味に何を食しても味付け不満

入院の五階の窓に見出でたり百日紅の白花揺るる

咲きかけの百日紅の白き花日毎に花の数が増しゆく

ベッドより人工衛星くつきりと輝く空を眺めてゐたり

山本述子（やまもとのりこ）（神奈川県）

古代蓮

晩秋の南禅寺訪ひしはいつの日か夕日に映ゆる紅葉蘇る
久久に活動仲間の忘年会深き繋がりのブランク埋める
澄む池に松葉も混ざる枯葉浮き鴨も模様の一部となりぬ（神社境内）
賀状にてまた会ひたしと言ひ呉るる貴重なる友幾人かあり
山仲間山の写真を送り呉れ登山の気分を楽しめとあり
初雪のあたり一面覆ひゐてメルヘンチックな街となりたり
雪降れど電気・ガス代値上れどぬくぬく過ごすかたじけなくも
蝋梅の花を透かして見ゆる空澄みて広がる真昼間の青
裸木の立ち並びたる公園に一際目立つ白木蓮の花
ひたひたと垂るる流れの滝の音と梅の香のする朝の寺庭（長谷寺）
水ぬるむ池に緋鯉のすいすいと朱の太鼓橋潜りてゆけり
産直の菜花のおひたし春の味やはり今年もはづせなきもの
シャンシャンの仕草は少少茶目つぽく上野で心を捕へられたり
中国に帰りたる後も忘れられず吾が携帯に永久に残しおく
折角の手術にも予後の優れずに無力な親に何無し得るや

冷えきつた心の底まで香りくる少し熱めにしたる菖蒲湯
鶯の高き囀り奥の谷脇の梢にまた一声と
山躑躅の淡き紅色に黒揚羽ペアで寄り来て舞ひ上がりをり
風薫る緑地公園の足元に金蘭ぽつぽつ銀蘭ぽつり（八国山緑地）
丁寧に収められたる標本に植物の命思ひつつ見る（牧野富太郎展）
温かき観音様の笑みに触れ心解るる紫陽花寺に
この夏も紀州の梅を手に入れて美酒となれよと念じて仕込む
灯りなき谷戸に蛍の数百匹光の舞を惜しげなく見す
八の字に茅の輪潜りぬこの夏も暑さ乗り切り安らかなれと
早朝に咲き揃ひたる古代蓮遥か昔に呼ばるるごとし
広ごれる稲田眺めつふる里の総出の田植ゑ思ひ起こして
閑散としたる期日前投票所独りの吾に愛想よろしく（知事選）
百日紅のピンクの並木車窓より見え隠れしてしばし楽しむ
花火とは華やかにして儚くてやがてすつきり活力呉るる
蘇る各地の祭り盆踊り日本の夏は斯うでなくては

涼しき朝茶店のサービス「モーニング」コーヒーの香にしばし寛ぐ
夕散歩草むらからの虫の音に背筋伸ばしてリズム調ふ
夏バテに救急車にて運ばるる近隣の友の機転に感謝
数日の避暑とも思へる入院に三食戴く申し訳なし
妹の送りくれたるピオーネを一粒口にす涙の出さう
伝へたり彼岸の入りの墓前にて夏の猛暑を耐へ抜きたりと
境内に七五三詣でちらほらと晴着の稚児のはにかみつつも
盆栽のあまたあれども黒松の貫禄に敵ふものなし（盆栽展）
盆栽の真柏は樹齢八百年吾の十倍も永らへてをり
雲流れ中秋の月くつきりと大きく照りぬ神神しくも

年年感性も鈍り表現力も乏しくはなってきましたが、そんな会員にも記載の頁を与えて頂き有難く思っています。下手なりに作ったり推敲するうち気持の整理が出来、しばしの時間乍ら、集中出来ることは歌を詠むことの有難い一面です。又このように年間の作を一挙に見る時、思い出すことも多く改めて嬉しくなってきます。感謝致して居ります。

秋深き武蔵の国の一宮本殿、門宮、御嶽神社も
二千年経たる社のをちこちに七五三詣での子等微笑まし
秋晴れに綿雲ふはつと教会の塔の先はるか彼方に懸かる
妹は庭木剪定中に落下して骨折あれど命助かる
久久の長谷寺詣での階段は少し辛いと思ふわが足
御堂の観音像は凛として慈愛溢るる変はらぬお姿
それぞれに問題あれど前向きに来年に向けパワー全開
終盤はわれらの第九大合唱替へ歌よろしく伴奏もつく
紫の菊真ん丸く大輪の一本仕立て隣家の庭に
自転車で小春日和に寺巡り薬師如来に観音様に
豊かなり緑の松の枝振りと強き竹林と垂れる梅と（寺庭）
写真には記憶確かな山も見ゆ仲間の姿もぽつぽつ浮かぶ
登山靴とつくに捨ててきつぱりと諦めたるは誰なのかとも
冬スキー親戚揃って北国で楽しみたるは一昔前
画廊にて名画鑑賞したる後一杯のコーヒー飲みつつ憩ふ
ＷＢＣ侍ジャパン初戦から見応へありて四勝したり
チェコチーム職業持ちつつ野球せり試合の後に勝者を讃美す
電話にて連絡もらふ同期会「出席希望」と叫ぶ如く言ふ
あらためて生まれてこれて有難く丈夫に育ち亡母に深謝す（母の日に）
採集地に馴染みの地名記さるるしみじみ見入る懐かしみつつ（牧野富太郎展）
寺の山庭のをちこち紫陽花の幾千株の花盛りなり
年毎に淋しくなりくる同期会ひとしほ親し老いを忘れて
改修後の色濃き朱色瑞瑞し三の鳥居は神社入口
岩槻の観光案内申込み廻り初むるも酷暑で切り上げ
日光の東照宮の宮大工ら岩槻にては人形作りす
夕立はほとんどなくて雨降るはにわか雨のみ所所に
合歓の花散歩の道に仰ぎ見るうすき紅色ふさふさとして
部屋にある健康器具を生かすべく朝夕欠かさずまづは磨いて
暁のスーパームーン薄雲に覆はれつつも貫禄のあり
猛暑ゆゑテレビ視聴の多くなり戦争記録震災画像
十月の林の中にまだ蝉のシャーンシャーンと鳴く声を聞く
大安の氷川神社の参拝に心静もる青空の下
植木屋の花畑には折折の花絶えずして楽しかりけり

吉田綾子（よしだあやこ）☆　（茨城県）

零れ種

小春日に湧き立つごとき大群の雪虫庭の空間を埋む
小春日の陽光浴びつつ舞い上がる雪虫きらきら棟より高し
夜の遅く塾より帰る孫むすめ熱々鍋に「グー！」の合図
立冬なる今朝の冷気に葉を落す巨木の欅と暫しの戦い
猛暑ゆえ一時萎えたる皇帝ダリア彼岸間際に生気帯びくる
成長の遅れに施す一振りの肥料に勢う皇帝ダリアは
昨夜の雨に一気に散りたる紅葉のあやなす庭に暫し和みぬ
小振りなる鉢に植えたる山もみじ師走に早も赤き芽の吹く
コロナ禍に籠りていたる身を正し県会議員の選挙に出むく
穏やかに日和のつづく大晦日山の神前に注連縄かざる
老いの身に難儀となりたる門松づくり嫁御の手助け心底うれし
霞ケ浦の湖畔に崇める初日の出戦禍無き世をひたすら祈る
簡便にパック詰めせる七草を求めきて炊く七草粥を
寒き野に七草粥の草摘みし里の思い出はるかとなりぬ
「見送りはここでいいよ」と孫娘は寒き朝々我を労わる

「慌てるな、転ぶじゃないぞ」と声かける医師なる息子老い行く我に
三月の気温の上昇まれにして屋敷樹木の騒めきを識る
「霜道」と謂れの里にも逸早く暖気に狂い冬の草しげる
枝広ぐる河津桜の花の下ハコベ・ゴギョウの花盛るなり
高温に椿の花のどっと落ち庭はさながら花の絨毯
乱れいる世に心の痛むなり老いの身に重なるPET-CTの検査
すさまじき花粉の量に濯ぎ物部屋干ししつつ二ヵ月が過ぐ
「あと二分！」ニュースを横目に食事して孫は六時三十分に家を出る
孫娘に「御飯よ」「お茶よ」と祖母われは世話のしすぎかママ冷ややかなり
こころを込めて義母の植えたる庭の木々四季折々に和ませ呉れる
妹の一周忌に招かれて老いの身正し供物を捧ぐ
集いたるうからの年長伯母我に甥姪たちの気遣いうれし
みどり濃き田にかこまるる奥つ城に焼香のけむり淡くたちゆく
次々に零れ種より育ちたる木槿の花の爽やかに見ゆ
三本の実生の木槿それぞれに色の異なる花を咲かせる

梅雨の間の猛暑に咲ける純白の木槿の花はひたすら静か
庭芝に次々立てる銀盃草かかる威力は我の恋うもの
猛暑日の記録更新つづきいて支障を来す日々の生活
「お元気で」と声かけ呉るる宅配員「有り難うね」と缶ジュース渡す
盆棚に並ぶ先祖の位牌等この世の熱暑を如何に思うや
御先祖に供える膳の香の物、煮物、和え物こころの持て成し
増えてきたるコロナに気遣う住職は玄関口で棚経済ます
猛暑日のひと日の終わり漸くに風呂に浸かれば明日を懸念す
曲がりたる腰を伸ばして濯ぎ物竿に吊るすは甚だきつし
其方此方に群れて咲きたる彼岸花真っ赤に盛るもなぜか寂しむ

昨年に続き今年も『冬雷二〇二三　作品年鑑・合同歌集』の刊行に当りお骨折りをいただきました大山先生はじめ諸先生方、編集委員の皆様方に深く感謝いたすと共に心よりお礼を申し上げます。昨年の合同歌集を恩師や幼馴染、知人の方々に差し上げましたところ「充実した内容に御努力のあとがひしひしと迫りくる尊い歌集」であるとの御言葉を頂戴いたしました。私も老いの身に押し寄せる下向きな心に希望という明かりを灯していただきました。大切な大切な歌集です。継続刊行をお祈りいたします。

小春日の贈り物なる雪虫の生命力に心惹かれる
剪定の終えたる庭の植込みに去年より赤く南天極む
夜の風に吹き寄せられたる黄葉（もみじば）に箒を持つ手の痺れ疼きぬ
我が家の氏神祭りは「文化の日」未だ雨の降りたる記憶なし
晩秋の小春日和に咲き継ぎて皇帝ダリアは花数ふやす
皇帝ダリアの散りたる大き花弁を避けて行き交う郵便屋さん
冷感の静かなる庭にしかと咲く真紅の椿に妹の顕つ
恐る恐る雨戸を繰れば愛したる皇帝ダリアは霜に萎えおり
昨日まで五十余個の花を付け仰ぎ眺めし皇帝ダリアよ
ただ一夜の霜に萎えたる皇帝ダリア自然の威力に敗北哀し
惨めなる皇帝ダリアを片付けて根方を落葉で被うてやりぬ
門松の解体我の仕事なれど重たきものは夫に任す
神前に供えたる花は麗しく二十日経ちても萎えることなし
春立ちて晴天にひかる白木蓮の銀色のつぼみどれも勢う
暗澹たる暗きニュースを振り払い明るい陽射し早く差し来よ
植込み時季ずれて植えたるチューリップ芽の立ち競いて不安を弾く
日に幾度仰ぐ大樹の白木蓮つぼみいずれも天向きて差す
急激な寒の戻りに籠りいて国会中継を訝りて見る
春陽気の急上昇に台畑の河津桜は思い切り咲く
菜花つみ笊いっぱいに持ち呉れる友の気立ての良さを思いぬ
三月の夏日に乾くサボテンの鉢にどっぷり井戸水を遣る
色彩のさまざまに咲くチューリップ庭の静穏日々に広がる
強風に散りたる樹々の落葉が広き芝生に白くあやなす

PET-CT の検査の結果異常なく「苦しみましたね」と主治医はやさし
夏の日をおもわす五月の陽光に洗濯物を思い切り干す
命日を待てずに散りたる牡丹あわれ義母の好みいし古木の牡丹
体調の悪さに機敏さ鈍りくる「躓き注意」と己に声掛く
飾られて子供や孫との写真にはいつも笑顔の妹がいる
むんむんと溢れる熱気にベゴニアの葉先はちぢむ灼けて茶色に
梅雨のまま続く猛暑に為す術のなければただに心苛立つ
花弁を散らすことなくふんわりと萎む木槿の花がら優し
神仏の在す座敷の清掃を業者に託す盆月なれば
作業する業者も喘ぐ熱暑なり滴る汗に目を赤くして
天井や欄間・鴨居の高き処腰痛のわれには難儀をしたり
早々と「新米できた」と持ち呉るる請負人の日焼けの笑顔
台風の豪雨の被害類のなく一日中の放映むなし
濯ぎもの息子のジーパン丈長し肩まで上げても尚裾のひく
神仏にお願いしたき事あまた朝な朝なにひたすら祈る
週置きに電話を掛け呉るる姉夫婦老いて尚更我を気遣う
異常なる大風ひと日吹きまくり庭一面に枯れ葉敷き詰む
十五夜に飾る薄の当てにせしいつもの処に今年は皆無
彼岸前に屋敷の掃除を委託して薄も一緒に刈り払われき
ひさびさにエアコン頼らずひと日過ぐ秋の到来ことさら嬉し

吉村昌子（よしむらまさこ）　（千葉県）

われのこの頃

長男の夫婦がたこ焼食べようと用具全てを準備して来る
掘りたてを蒸したら甘いと友言ひてまだまだ熱いさつまいもくれつ
午前中保育園児の来る広場どんぐり残し掃除してをり
毎月のほがらかサロンに杖の人おくりむかへてみんなの笑顔
友が来て今年最後の満月と火星が見ゆと教へてくれつ
友の家の前の広場に二人して満月と火星しばらく見をり
この年も長野の友より届きたる蜜入りリンゴまづは仏に
黄の小菊初めて咲くを仏にと花好きの母に話して供ふ
明太子は福岡の友うどんは香川われピーナツのそれぞれの礼
自治会の餅つき大会コロナにて子等の集まり少なき事よ
あんこ餅のり餅きなこ餅にして一人住ひの人に持ち行く
元旦のわが青空を白き雲ウサギの二匹の形でゆるり
事始め青ひと色の今朝のそら正月用の漆器をしまふ
今年より孫四人からの年玉を両の手で受け深く礼する
孫よりの初めてもらふ年玉を仏に供へ色いろ話す

わが頭上みなみへ行く機見上げつつ一人行きたるロンドン思ふ
友達が今夜の月はスノームーンで一番遠い満月といふ
コロナにて逢へない日日に娘より曾孫の写真けい帯にくる
携帯に曽孫の写真泣き声も入りてゐるを娘に教はる
今日のそら青ひと色に宇宙まで広がりてゆくわれも包まれ
友と来て桜見てゐる土手のみち桜の色に包まれてをり
ひな祭りピンクの幟ならぶ道九十九里浜潮風匂ふ
大滝城あれは本田忠高と言ひつつ友と立ち止まりたり
九十九里の浜に打ち寄するひとすぢの白波続く空の下まで
家前を朝あさ通るもこもこの茶色の小犬待ちて撫でやる
もこもこの茶色の小犬かわいくて雑誌で見つけおもちやを買へり
紫のいちはつ今年多く咲き水色好きな隣へつみゆく
二十個の玉子を焼くは常に夫で近所と友に持ち行くはわれ
風の無く木の葉を夕べの日が包む今日は八十八夜と夫が
早く起き箱根駅伝応援す孫の学校それぞれ二校を

畑にと誘ひくれたる友が言ふ好きな野菜を好きな程どうぞ
烏には見えない様に物置きのかげにパン置く雀のために
嫁が来て今日はぢいぢの誕生日とケーキとカボチャのスープと煮物
甲子園野球を父と見てゐしを思ひ出しをり夫と見つつ
玄関の横に植ゑたるひまはりがいつの間にやら我の背を越す
抹茶うめ伊予柑ゆずの五色なる伊予のさうめん弟より来る
暑さ負けして会合に欠席のわれに倉ちやん畑よりスイカ
ぼんやりとテレビ見てゐるわが窓に揚げ羽に続き今日よりトンボ
朝と夜仏壇に手を合はす時ぢぢとばばとの笑顔うかび来
「国境無き医師団」の話聞きながら思ひやる心に国境無きと

百合のたね散るまで置きてをりたるにと切りたるわれに夫ひと言
チューリップ売り出し百個買ひたるを夫耕しわれ土に置く
北陸で一米の雪といふテレビ見ながら芝生の庭みる
リビングの南の大きなガラス戸に太陽まぶしく背にし本読む
四ヶ月の曾孫の誠太まはり見て口を「へ」の字に大声で泣く
新聞にテレビにコロナの事ばかり雀も知りて外出せぬか
この朝は庭に雀がよく来ると思ひああさう昨夜(ゆうべ)の豆まき
掘りたてと言ひてくれたるさつまいも輪切りに焼きておやつとしたり
今日ひと日窓辺に過ごしゐる空に鯨の親子の白雲が浮く
夕ぐれの空にたれこむ淡き雲いく重にもなる茜の色が
公園のブランコ揺れるいつまでも子等帰りたる後も風乗せ
紋白が門よりもつれつつ入りチューリップ咲く窓辺へと来る
七時半中学生の三人の自転車が行く今日より白シャツ
あら今朝は自転車四人楽しげに会話しながら中学生行く
四ヶ月ひ孫の誠太まはり見て口をへの字に泣き始めたり
杖の人誘ひサロンに行く車中一人居暮らしの話とぎれず
曽孫とはこんなに可愛いものなのか赤ちやんボランティアにけふも出でゆく
電線の二羽の烏のかた方が横に離れてゆくに寄り行く
スーパーでうば車の子を見るとすぐ可愛いねえと曽孫重ねる
家前の公園溝に落ちる木の葉今日は大きなごみ袋三個
朝あさの庭に置きたる仏飯に猫が来てをり見馴れぬ三毛が
東京より娘が孫を連れて来て二階かたづく要るものまでも

日本がドイツに同点サッカーの画面に両手上げて拍手す
サッカーの横浜神戸の試合にて一人声出し横浜応援
紋白が風に乗りつつふんはりと垣根を越えてわが窓のぞく
銅鐸にとんぼかまきり亀の絵か弥生時代の絵の話きく
東京の娘が孫と曽孫つれ休みがとれたと久方振りに
娘抱く曽孫が夫とわれの顔順番に見て口許へ字
口許がへの字の曽孫が部屋のめぐり見まはしてから大声で泣く
行儀良き紋白蝶が雨の今日も門より入り門より出で行く
揚羽来て百日草へ順番に几帳面に止まりてゆけり
友よりのひまはりの種われの背を越えて大きな花を三輪
うちに来る雀は垣根越えないで門より入り門より出て行く
紋白と入れ代りに今日黒揚羽ことし初めて庭まはりをり
われ蒔きし百日草と向日葵が三十度超す今日も元気に
夏祭りフレンチドッグ売るかかり焼きながら客呼びこみてをり
浴衣着る子供ほめつつ手さげより代金出すをゆつくりと待つ
西日本颱風といふにわが街は朝より三十三度の空気
四街道駅よりわれの靴の上にバッタのり来て電車に乗り来
家前の公園に置きやる蟋蟀がまた網戸へと帰り来てをり
ごみ箱をつつく烏に注意した我の頭をつつき飛び行く
揚羽蝶午前と午後にわが窓をのぞき暑さに負けるなと言ふ
黄の蝶が庭の花ばなめぐりつつ最後は黄色に長く止まりぬ
この夜のわが空低く飛行機の北向き行く音常よりひびく
公園のブランコいつまで揺れてゐる子等帰りても日ざしを乗せて

冬雷 2023　　特別作品・今月の 30 首

■特別作品

社寺巡拝抄

天野　克彦



千八百年の歴史を秘めるこの社あそび場なりき幼きわれの
（住吉大社）

「住吉さん」と呼び習はしてゐし事も想ひ出されてちちはは恋し
太鼓橋を這ひ上りゆき恐々と丹塗りの欄干に掴まりゐしよ
四つ五つの頃の記憶を呼び醒まし斎庭をあゆむ玉砂利の庭
七五三の親子の姿なつかしや曲がりなりにも平和な日本
焼夷弾に焼け出されたる記憶あり万代池へ逃れし記憶
「白波の千重に来寄する」と詠まれたるこの住吉にわれは生まれき
住吉区帝塚山に生を受くにほひなつかし七十年経ても
万葉集繙きあそびて二十余年あまたの歌が住吉にあり
青空のひろがる斎庭に顕れてわれを励ませいにしへの大神
千年の樹齢と伝へる神体の楠を巡れり手をあてがひて（楠珺社）
静かなる時が流れて小半日過去回想の中に遊びつ
粉浜なる「しじみ」の歌碑を見んと来つ犬養博士の住みゐしところ（揮毫・犬養孝）
歌人なる河野裕子の墓どころ人影あらずこの法然院に
有名人文人学者の眠る墓所質素な墓石が立ち並びをり
鹿ヶ谷御所ノ段町の法然院法被を着たる草刈り人ひとり
さくら紅葉の葉を落としたる疎水沿ひ一人わがゆく哲学の道
いつ来ても東寺の塔の広前は弘法市に賑はひてゐる
（縁日二十一日）
骨董品食料品に衣料品食べ歩きもある弘法市は
わが宗旨真言宗の宗祖なる弘法大師を祀りてきたり
朝夕に父が唱へる南無大師遍照のこゑ聴きて育ちぬ
わが死後に想ひで話すわがむすめその運転で行く奈良東大寺
一面の朝霧の中にうごく影親子の鹿が餌あさるらし
餌不足の公募に答へあづまなる「青梅」の木の実を贈りし事も
人に馴れ人を恐れぬ奈良の鹿頭下げ下げ餌をねだり来
近づきて鹿の背中を撫でやれば剛毛の背は露に濡れをり
大仏殿の裏こそ良けれ人の来ぬ公孫樹黄葉のこの輝きよ
二月堂の高きに上りみさくれば生駒の山に雲かかる見ゆ
生駒山越えたる向かうはわが住める香里丘陵終の棲家ぞ
年を経て春日の社にまみえたり嘗ての妻と祈りしところ
（春日大社）
四殿の比売神様に詫びをする夫婦の契り違へしことを
追憶は哀しきものよ身を責める事のみ多くかなしかりけり
「ようお参り」とこゑをかけられ涙ぐむ神に仕へる巫女のやさしさ

春日山原生林に入り来たり満山もみぢの手入らずの森
高円の山に見おろす奈良盆地身すぎ世すぎの生活が見ゆ
一休寺道なる通りのできをりて驚きをらん一休さんも
五十年を隔ててくれば一休寺観光寺となりて賑はふ
とりどりの色に染まりて土に降るかへで紅葉の華やぎの庭
楓紅葉の下照る床几に茶を喫し時の移りを惜しみてゐたり
渡月橋を髪白くなり渡り行くわれが少女子と渡りし橋を
（法輪寺・十三詣）
桂川の中州の店の京料理祝ひの膳を設けしことも
大悲閣への上りの道も忘れけり渡船で行きし草深の道
四条大橋に屑パン持ちて立ちをれば肩に頭にカモメ降り来る
（越冬ユリカモメ）
鴨川の真澄の空のユリカモメ天使のやうにかろやかに飛ぶ
南座に「まねき」看板あがりをりいよよ顔見世始まるらしも
先斗町・花見小路もモダンなる店の増えをり今来てみれば
（三十年ぶり）
得意先でありにし「茶屋」は今はなく洒落たるカフェになりゐて淋し
鴨長明のなげきかくやと思ふまで祇園界隈変はりてゐたる
除夜の鐘聴かんと年々訪れし八坂の仏は変はらず坐す
祇園社の八坂の神の白朮火を火縄に移し持ち帰りしよ
（元旦・神棚の火種）

■今月の三十首

（四月号掲載）

鄙のあけくれ

本間志津子



年の瀬の忙しき夕べ大河ドラマ「鎌倉殿」は遂に終れり
紙芝居の次の続きを待つやうに週末を待つ一年なりき
御家人らの武力蜂起かとも見えてロシアの侵略ウクライナへとプーチンの狙ひは何かその言葉偽り多く理解及ばず
数多なる人命奪ひ街と家破壊し尽くすに大義はありや
頼朝と御家人ら住みし鎌倉はわれに親しきものとなりゆく
思ひ立ち孫らと訪ひしはコロナ前三月末の鎌倉寒き
都心より直通電車一時間駅へと人らどつと下り立つ
それぞれに食べつつ歩む人の列いづくへ続くゆつくり歩む
人の列に従ひゆけば高徳院鎌倉大仏に辿り着きたり
大仏を氷雨の中に仰ぎ見る発案なすは頼朝と聞く
鎌倉を千年かけて人知れず見守り来たるや大仏さまは
焼き餅と春の七草刻み入れ粥を食べをり正月七日
松飾り食べ残しなど要らぬものゴミ袋に詰め正月終る
正月の忙しさ終り子と二人もとの倹しき暮らしに戻る

「娘さん、家事をするの」と尋ねられ「いいえ、体が不自由なので」
六十代後遺症ある子とわれの八十代との老々介護
子もわれも素直ならざる性ゆゑに美談のやうにはゆかぬ日日
運転と力仕事はわが息子いつも短歌が心を支ふ
週三日デイケアに行く子を送りその後自分の時間始まる
海見ゆる丘の斜りに育ちしかスーパーに買ふ日本水仙
東の空に朝焼け赤赤と凶凶しきまで空を染めなす
手袋を脱ぎ太陽に手を翳す信号を待つ僅かな時間に
冬晴れの稀なる陽気空青く子にも優しき思ひ湧きくる
神仏に親しからぬが祈らまし未来乏しき子に幸あるを
プーチンがウラーと言へばその言葉呪文のごとく皆に広ごる
ウクライナに平和を願ふ人の声叶はぬままに一年となる
世界中の子らに平和と幸せをウクライナには平和よ戻れ
フロンガス生産と消費禁止されオゾン層回復のニュース明るし
あすよりは大寒に入る今日の晴春はまだ先もうひと仕事

（五月号掲載）

雨の帰山

石渡静夫☆



十三年振りに乗車の予讃線讃岐の山々雨に隠さる
多度津駅のホームと改札変わらねど待合室に売店は無く
土曜日の朝の通りは寂しかり男一人が自転車に乗る
一時間練習したいと窓口で問えば職員奥に消えたり
禅林の四階ならば使えると上司の言葉を吾に伝える
練習の前に洗面歯磨きを夜行の体目覚めさせよう
道場は多度津の町を見下ろして心澄みたり時を忘れる
一時間の練習終えて山を下り民家のようなうどん屋に入る
立ち止まり友と見上げる大雁塔ライトアップに一層白く
雲一つ無き青空が嬉しくて庭に出でたれば猫柳の咲く
猫柳の花穂は日ごとに膨らみて朝の楽しみひとつ加わる
北風の無くあたたかな梅林にこのまま居たい囀りを聞き
牧水の歌集に傍線引きながら読み進めるも半年過ぎる
文庫本携行するも一首さえ読まぬ日のあり牛歩のように
来年度の会長決める役員会立候補無く皆下を向く
半切の手漉きの和紙を使い切り止む無く手持ちの画仙紙を出す
作品にならぬ覚悟で書き進むこれも実力紙ではないと
見た目には違いの分からぬ紙なれど筆を入れれば滑って滲む
お雛様今年は早く飾ります良き日調べる暦開いて
来客の無くて雛壇寂しいか気遣い無用と答えてくれる
侵略を受けて戦うウクライナ戦闘激しもう一年か
プーチンの後ろに並ぶ兵士達蝋人形のように冷たく
数人の女性兵士も列の中目付き鋭く笑いを浮かべ
たのしみは不意に息子の帰省して旨い旨いと食うを見る時

不規則な勤務で体調乱したとぼつりと話すうなだれがながら
子の眠る布団の上で猫も寝る吾に振り向き文句あるかと
警戒を解かずに猫は前足の上に顔置き眠る素振りを
吹き荒れる突風どこからどこへ行く春一番はまだ来ぬという
二月のみ二十八日調べればローマ暦で年末らしき
お茶をする二人の媼笑い合う畑の真ん中遠慮はいらぬ

（六月号掲載）

東日本大震災

岩渕綾子



3・11のち十二年夢の如し盛岡の眼科に入院中に家は全壊流失す
川又先生の温かき言葉に励まされ気丈に生きる手立てを知りぬ
大地震の一週間後の大船渡瓦礫の山に愕然としぬ
大津波に残りし物は零し一つわが手作りせしに感慨ふかし
盛岡より高速バスで子と二人西新宿で長子と待ち合せしぬ
マンションの避難生活は八ヶ月一人住ひに悩みは尽きず
避難中冬雷大会に出席す川又先生大山先生小林先生皆優しく
大会参加は初にして最後の出会ひ東陽町のホテル・ルートイン
十一月末念願叶ひ故郷に吾迎へらる四季桜小さき花咲く
地震後にわが住みし浜町は住宅禁止で商店街となり面影のなし
大津波に流されしバッグ避難せし千葉にまで警察より届け来ぬ
仮設ぐらしは三年十ヶ月あまたの支援に明るく生きぬ
千葉の人手作りの六地蔵ぬひぐるみの鶏の親子犬の親子われに
呉れたり
原発事故のをさまらぬ地に手術受く優秀なるスタッフに感謝は
尽きぬ
松原を朝なあさなに散歩せしうから偲べば声がきこゆる
孫夫婦を活魚店「すごう」に招待し三陸御膳に祝杯上ぐる
生れ出でて夫婦となりて人生を睦みあふこそ孝の始めぞ
ショルダーバッグ物には非ず心なり誠ある友の繋ぎ行きけり
あかときの温泉につかり大船渡湾海にトンボロ飛行機雲見ゆ
生島ヒロシの実感溢るる言の葉よ生き残りしは生きるが務め
アナウンサーの「生きるが務め」身に染みて再度の病に教訓と
なる
奥津城に子らと集ひて拝みぬさぞかし亡夫も嬉しかるらむ
西和賀町の無病息災願ふ「人形送り」人の心のゆたかさ思ふ
デイケアの送り迎へに背の君が妻の手を取りきざはし歩む
髪カットにも送迎うけてありがたし高齢社会の変化なるらし
貰ひたる早採りわかめ味のよし吾を案じて茹で来て呉れぬ
「船上回向」十三回忌の大船渡湾にまみゆる泉大津市と盛の住
職ら
家に近きサンアンドレス公園前の折鶴流し十三回忌法要行けぬ

が悲し
「下手でもよい自分の歌を詠め」に励まされ二十年余を続け来たりぬ
3・11に生きのこりし吾に息子言ふ父の分まで長生きせよと

（七月号掲載）

温め酒

佐藤幸子



故郷の地名地番のなき地図に幼き日々の暮しを探す
幼き日みんみん蟬に起こされし真夏の朝のあの夏休み
髪の寝癖取れず気になり登校せず土手にあをぞら眺めし日あり
湧き水を引き入るる厨の水船に米研ぐ母の背中丸かり
時折に道行く人は吾が家の水にのみどを潤し行けり
柄杓より零るる水を手でぬぐひ「ああ生き返つた」と翁笑ひき
父母と過ごしし番地の〈ストリートビュー〉鬱蒼たる杉林見ゆ
カーペンターズの〈イエスタディ・ワンス・モア〉が流れきて心いつきに青春の日々へ
同僚のくりちやんの彼氏は溶接工でハートの指輪は彼の手作り
ガードレール渡れぬ私をお姫様抱つこした人は友達の彼氏
超高度を音なく進む飛行機の伸ばす白線空を二分す
予報通り春の雪降る彼岸入り厨に蕨干しなど戻す
雪解けの山の畑にのぼり来て獣にほひの風の吹かれる
西の山東の空も曇らせて黄砂か花粉か梅花かをるに
病葉を持ち挙げて咲く野水仙妬ましきほどの黄の鮮やかさ
粉雪のやうに舞ひ散る梅の花をさなひとりを地に遊ばせて
お母さんあなたと植ゑた姫辛夷今日桃色の花吹雪です
夫婦にて居酒屋営む末娘は声優を目指しはげみし日あり
ハッピーバースデーとメール送ればもう歳は数へ切れぬと娘は言へり
貴女を生まむとハンドル握りあの日暮れひたに走りし病院への道
華やかな振袖姿の写メールは化けた狐か女孫のふたり
朝刊を拡げ声出し拾ひ読む夫の手元にぬるめの茶置く
重粒子線の治療を聞きて案ずるより心安くと夫と話す
医師の言ふ十年保証におまけ付け丸儲け人生と夫は笑ふ
夫には人肌ほどに温め酒われもほのぼのホットワインで
「右に曲がります」救急車の音に目が覚めて知る年寄りの二三人浮かぶ
年に一度の胃カメラ検査を終へくれば安堵と不安交差して坐す
空欄で提出もよからむ七十五過ぎの問診票の出産回数とか
薄味の若布の味噌汁啜るとき「ああ今日も頑張れる」と思ふ
刺さりたる刺をやうやく抜きたれば小さきちひさく光れる木屑

（八月号掲載）

岳切（たつきり）渓谷

戸部田とくえ



岳切といふ名の渓谷幼きころ日毎したしむ友らとともに
鳥のこゑせせらぎの音につつまれて思へば懐かし岳切渓谷
石南花の木立に咲ける花の色われのひと世の忘れ得ぬいろ
咲き初むる桜の下のつくし摘み自然の恵み静かにいとしむ
山椿みつつ心にしまひゐる幼き頃の古里の紅（べに）
あまたの花みごろとなれる山椿ひと巡りせり胸ときめかせ
思ひ出すたびに宝とせまりくる古里の山の片栗の花
野の道の日差しに瞬く可憐さに立ちつくしたりいぬのふぐりに
帰省せる子に見せたくてひと畝のチューリップ期待の開花
川の瀬に青鷺佇むひとときをわれも無となりみとれてをり
古木となる柿と柚と夏椿ともの年月われまた老いて
ふともらす野に咲く花の尊さを夫しみじみ茶を飲みながら
朝鳴きの矮鶏（チャボ）に起こされ〝鳴きやめよ〟言ひて餌（エサ）まく遠き日のあり
矮鶏の雛かへるその日を子供らと共に観察母も元気なころ
八十二歳それでも母を思ふたび幼さ戻る委ねてみたく
茶の花をこよなく親しむゆゑなるは母と茶摘みの忘れ得ぬもの
茶摘みのころ野苺そばに気をとられ母は笑顔に見守りくれし
蝶もまた神の使ひと思ひつつ見れば崇めていとしみやまず
口遊む「七つの子」の童謡を時には母に子となるわれは
一人住む大学生の子に送る育てし玉葱だれより先に
紅葉苗山の麓のものなるの根付きくれたりこころの友
朝あさの散歩の折りに習ひとし探す四つ葉叶へてをらず
母の日の近づく街の華やかさ実感しをり二人の子の母
鳩のそば寄りゆくわれに逃げもせず信じてくるる嬉しさ募る
るり色の鳩の輝きまぶしみて愛しさ増せりなぜか寂しく
幾度か根気とつぶやきこの年もどくだみぬきて陰干しにせり
年齢にしては残る歯ほめくるる医師に思はず礼を言ひたり
どんたくのお囃おもはずうかれつつ集ふ祭りの人はれはれと
掘り立ての竹の子ニラ苗この度もこまごま友の荷しばし抱きぬ
公園の落葉ふみつつ子の言葉〝ポジティブにあれ〟のひびきあり

（九月号掲載）

介護の日々

乾　義江☆



「ご主人が入院されたので下着が欲しい」と病院からの電話あり
（平成六年流山市）
院内のエレベーターに降下して脳梗塞に夫はしゃがみ込む

両眼の左半分失明する夫の視野は如何にと打ち拉がれる
夕つ方意識無く安楽椅子に夫は居り心急きつつ救急車呼ぶ
（平成八年流山市）
幸運にも半身不随を免れき酸素ボンベの効力確か
辛うじて役職辞して安堵する何はさておき終の住処へ
（平成九年鉾田市）
浴室より居間に移動し生あくび意識うすれゆき再度の救急車
何ゆえに次々病が襲うのか際限なき感にわが怖じ気付く
透視して助かりたるは海馬のみ大脳左右に乏しい明かり
夫を責める失語症と半身不随に車椅子の生活となる
喉越しの良き料理なれど新たなる嚥下の兆候現れはじむ
食むことの誰よりも好きな夫なれどあわれ手を振りもうよいと
言う
嚥下する怖さのありて鼻からの栄養食にと偏りてゆく
退院して臥所に眠る夫を前に先行き思えば心挫ける
主治医から胃瘻の手術を勧められ延命措置ではと二の足を踏む
介護には胃瘻の方が楽かとも息子の助言に手術を諾う
日に三回ほぼ一時間を点滴のごとく胃瘻から入れる栄養食
鉾田市よりひたちなか市に転居してケアマネージャーに計画依
頼す
（平成十五年）
頷きて逆らうことなく従いくれし夫の人となり斯く有難し
介護士に便摘出の認可無く支えて貰い我が取り出す
湯を持ち来て寝台の横に作る浴槽慣れた手付きの介護士三人
痰吸引の回数増してたびたびの深夜の吸引辛きものあり
身の落ちつき医師の営むケアセンターに送迎受けて通いはじめる
肺炎を患い一月入院しＩＣＵに置いてくれにき
（平成二十一年尚仁会）
車椅子と防止用具に助けられ何より褥瘡を作らず済みたり
突然に浮き立つごとき表情に眼球が瞼に吸い込まれゆく
（平成二十二年早朝五時）
長き間会話など成り立たずして夫の過ぎゆく命見定めき
倒産に家屋敷田畑売り払い長患いのすえ不帰の客となる
（平成二十二年三月一日午前六時八十歳）
「何はともあれおかしな人生でしたね」言いそびれし我が独り
言つ
死を伝える電話に息子から言葉を受け途端に我が身の力抜けゆく
（十一月号掲載）

沸騰列島

植松千恵子



アレルギーの夫の咳込み背をさする花粉の時季は過ぐると思ふに
土砂降りは線状降水帯あつといふ間に水路はあふれ道路が川に
災害の恐ろしさ知る異常降雨人も車も飲み込むやうに

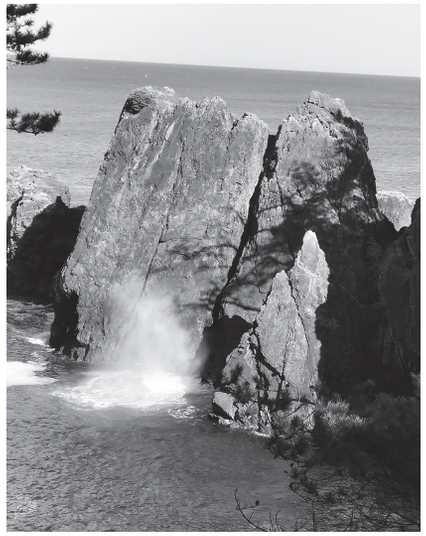
夏つばめ古巣に戻りゑさもなくあちこちつつきすぐ飛び去りぬ
よく動くどこへ行つたか眠る児の足で蹴られぬやう元の位置へと
海に来て浅瀬に遊ぶ孫二人磯に子守す目を離さずに
西瓜一つ上がり框に置きてあり誰が持ち来たるかわからぬままに
亡き義母と暮らしし歳月不平多く在りしが今は教へかみしむ
この夏は北半球を熱波が襲ふ便利な暮らしも酷暑を招く
南米は冬なのに四十度軽く越え危険な暑さいつ収まるか
山崎英子様我らの手本であつて欲し短歌を愛し前向きに生く
サルスベリ花房重く白と紅青空に映え見事な大木
丑の日にウナギは高く肉にせむかと店見回せどやはりウナギとす
高価でも暑さに勝つにはウナギかと心を決めてウナギを求む
百日紅百日草は夏の花暑き日頑張り名前に負けじと
これからも将棋を極めて精進すと新名人の慎み深き
今年も無病息災祈らむと茅の輪くぐりに犬も8の字描く
検診結果気になる数値肉は避け野菜魚を食せとありぬ
検査など昔の人はしなくとも長寿全うしたる例多し
手話サークル聾唖の方と交流をせねばならねど上達まだまだ
手話講習終へて三年目検定に挑戦せよと仲間の励まし
音のない聾者の暮らし知るほどに社会生活の苦労を思ふ
一羽づつ小さき枝に止まるやう朝の七時のカフェのモーニング
眠れぬ夜車が雨を轢く音とガッタンと段差を越ゆる音聞く
桃むけばキッチンいつぱい香の溢る葡萄も添へて我への褒美
盆が来た迎への馬牛用意して幼なも手伝ふ飾りの準備
曾婆は天国のはずなぜ盆に地獄のふた開く説明難し
少年は急な雷雨に立ちこぎしてリュックをゆらし家路を急ぐ
日帰りの弾丸登山禁止され富士の山小屋九千円也
盆過ぎりや涼しくなると言ひし義母昨今当たらず列島沸騰

■スマホの写真一葉・短歌二首



高尾山巨木息づく参道に冬陽射し込み身のひきしまる
夕暮れて観光客の姿無く天狗伝説頭をよぎる

永光　徳子☆



碁石海岸　　村上　美江

虹色に碁石海岸波砕けデートせし日の亡き夫思ふ
虹色に砕けてけぶる荒波を恋する吾は少しも恐れず



齋鹿ミヤコ

連れ出して行くは富士の見ゆる橋前ゆくひとを見守りながら
散歩する犬に出会へば犬とじやれ声高くなるわが連れ人等



平磯の白亜紀層

飯嶋　久子☆

平磯の白亜紀層の岩礁に砕け散る波高く白し
悠久の年の流れを思いつつ見はるかす海も空も群青



国道195号線

松中　賀代☆

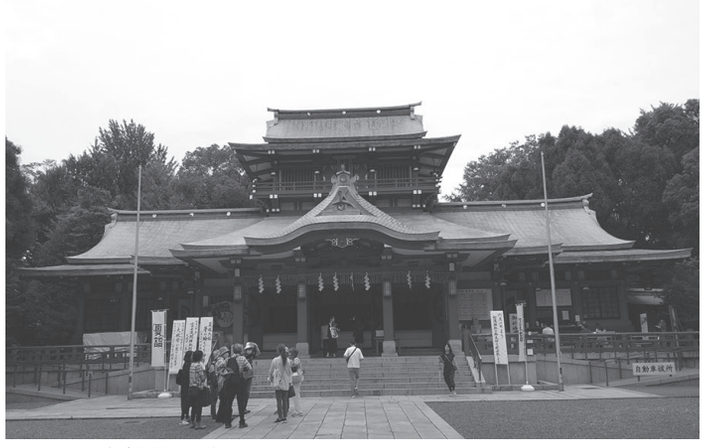
緑の葉繁れる中の国道を大型ダンプの轟音つづく
轟音のあいま合間にうぐいすの声もとびこみ又も消される



児童公園

櫻井　一江

走る児もブランコ乗る児も譲り合ふルールさながら公園の賑ひ
歓声はビルの谷間にこだまして戯るる児らの天下の公園



富賀岡八幡　　大塚　亮子

宮参りに姑に抱かれ眠る子の五十を過ぎてわが八十となる
祢宜の打つ太鼓に身の内正されて今あることを謝して拝む

〈今後の為に参加された皆様のご意見を、このアンケートに〉

■この一冊を読まれて、強く印象に残った作者・作品はございましたか？　ありましたら、その作者名・そしてその作品を一首あげて下さい。スペースの事情もありますので、作者名お二人まで。また、作品の後の余白に感想も短くお書き下さい。＊但し「選者」は除外願います。

●作　者　名【　　】
【作　品】

●作　者　名【　　】
【作品】

（ここで切り取って下さい）

■この一冊の中に「今月の30首」の一年分が掲載されていますが、この特別作品をご覧になり、最も印象に残った作者を教えて下さい。その作品一首をあげて、感想などお書き下さい。

●作　者　名【　　】

【作　品】　　【　　】

■アンケートにお応え戴いた貴方様のお名前を下にお願いします。　【　　】

＊このアンケートの締切りは九月十日。左記へ

〒235-0022　横浜市磯子区汐見台二-二-二-六〇八　桜井美保子　宛

有難うございました。〈作品年鑑　刊行委員会〉

あとがき

会員の皆様の全作品を年ごとに整理して纏め、簡易保存するのも目的の一つだったが、作者自選も含め、その全作品掲載の合同歌集を制作したことは、さらに大きな成果であると考えている。今年はその七冊目、ほぼ集大成の感となろう。

参加者が一〇三名となり、百名を下回ったときにこの企画を終了させようという申し合わせがあり、この参加者数は来年八冊目の継続刊行への可能性を残したが、現段階での編集室は、本年をもって企画終了と考えている。自選作品数を四〇首として、短いエッセイを付けるというのは新しい試みとなった。

今年もまた初めて参加してくださった方もあれば、入れ替わりに見合わせる方もある。この一巻に寄せる思いはそれぞれであるが、月々約一三〇名の出詠者の中の一〇三名の参加を得て、会員の皆様のご理解、ご協力にひたすら感謝である。

どうにか予定通りの七月刊行にこぎつけたことを喜びたい。例年を大きく上回り総ページ数は五〇〇に達しそうである。「作品年鑑」の意味にもこだわり、参加者全員の一年を総括する「作品展望」を設けた。いつも通り、冬雷誌上に掲載の全作品を対象にして、不参加の方については割愛させて頂いた。

今年も小林芳枝、桜井美保子両氏と綿密に連携して制作に当った。主の役割分担は事務・会計全体を小林。校正関係を桜井。企画・テキスト制作・組版関係を大山が担当し、若い編集委員の方の知恵もお借りした。

来年はどんな姿になっているだろうか。日日年年激動の「冬雷」である。

〈大山敏夫〉

冬雷 二〇二三　作品年鑑・合同歌集

2024年7月23日 印刷発行

編集発行人　大山　敏夫

データ制作　冬雷編集室

印刷・製本　㈱ローヤル企画

発行所　**冬雷短歌会**

350-1142 川越市藤間 540-2-207

事務局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409

電話　03-3604-3655

振替　00140-8-92027

ホームページ　http://www.tourai.jp

頒価　1000円